

# 水上瀧太郎全集

五卷



明治生命本店總務主事助役時代

# 小說

# 五

## 目次

勤人

# 一

「えゝと、なほ引續いて用度係では飯田三吉が月給七拾八圓也の勤續年數が九年と十一箇月。お次が同用度係では下村音彦が月給四拾五圓也、勤續二年八箇月……」

「一寸待つて下さい。下村君は月給五拾圓ではありませんか。」

「いゝえ、十二月一日から五圓昇給で月給五拾圓ですが、十一月末日現在とすれば四拾五圓です。」

「あゝ左樣か。わかりました。社員はそれでおしまひで、次は小使給仕ですね。それは明日の仕事にしませう。もう、そろそろ重役會も終る頃だし、外の仕事も見て置かなければならないから。」

人事係の柏節三は、壁にかゝつてゐる大時計を見ながら、部厚な社員名簿を閉ぢた。向ひ合つて、長い間甲高い聲を出して讀み續けて居た下役の山東は、輕く頭を下げて、咽喉がからからに

なつたと見えて、二三度咳拂ひしながら、少し離れた自席に歸つた。

節三は、今迄讀合せをしてゐた賞與金調書を手に取つて見た。その或頁に、人事係主任柏節三、勤續十三年六箇月と、下役の書いた癖字を見て居ると、何となく胸騷ぎさへするのだつた。普通の年と違つて、會社創立二十周年記念の爲めに、株主に特別配當のあるのは勿論の事、使用人にも特別賞與が出ると云ふ噂は二三年前からあつて、此の春頃から愈々切迫した事實となつて居たが、今別室で開かれて居る重役會で、分配方法も確定的にきまる事になつてゐるのだつた。その賞與金を貰つたら如何しようと云ふ先の事迄、社員はみんな考へてゐた。節三も其の例に漏れなかつた。一昨年もねだられ、去年もねだられ、今年は殊に夏の頃から執拗く妻にせびられたコオトもこしらへてやらう。子供の洋服もこしらへてやらう。自分も外套を新調しようかしら……

「おい。」

不意に後から肩を叩かれて、節三は吾にかへつた。色の褪めた、流行らない型の外套を着て歸支度をしてしまつた古手の社員が、目尻や口元に意味のある微笑を浮かべて立つて居た。

「愈々きまつたぜ。」

いちはやく祕密を知つた嬉しさは、酒さびの出た皺だらけの顔に、かくし切れなかつた。

「もう重役會は濟んだんですか。」

「濟んだとも。門倉さんも野澤さんも今歸つた。」

洋袴のかくしに兩手を突込んで、自分丈が知つて居て他人は知らない事柄を樂しむ心持で、得意さうににやにや笑つて居る。

「それで、如何きまつたんです。」

節三にも相手の得意な心持はわかつた。多少面憎くも思はれたが、さりとて、聞いてやるもんかと云ふ態度には出られなかつた。一刻も早く、自分の懷に入る金高を知り度かつた。

「君なんざあ、お職掌柄一番先に知らなくちやあならない人なんだがなあ。」

明かに相手をじらす面白さを意識しながら、高々と笑つた後で、節三の机の上に上半身をもたせかけ、さも一大事のやうに、一段と聲を低くした。

「へえゝ、矢張り勤續年數に應じて呉れるんですか。」

「さうさ。普通賞與は例年の通り六箇月で、特別の方は勤續一年が月給の一箇月分、勤續五年が五箇月、十年が十箇月、二十年なら二十箇月さ。」

どうだ驚いたらうと云ひ度いやうな顏をして、

「まあ其處いらだらうぢやないか。上半期の景氣ならそんな事ぢやあ濟まないんだが、下半期はよくなかつたからね。しかし惡かあないぜ。一杯飲めらあ。」

酒くらひの男は相好を崩して笑ひながら、心持左の肩をあげて、昂然として室の外に出て行つた。

「柏さん。きまつたんですつて。」

先刻から、二人の話を竊み聞いてゐた下役は、帳簿のかげから首を出して訊いた。

「なあに未だわかりやあしない。支配人から話がある迄はあてになるもんか。」

「けれども田崎さんは誰に聞いたんでせう。支配人に聞いたんぢやあないでせうか。」

「如何だか。あの先生もよく一人ぎめをやるからね。」

下役は一生懸命で聞き度がつたが、節三は相手になり度くなかつた。その癖自分は、十三年六箇月の勤續に對して、月給の十三箇月分貰ふ事は間違ひ無いのだが、あとの六箇月は一年と勘定するか、月割計算になるか、或は全く切捨てになるか、如何なるだらう、如何したら一番合理的だらうなどゝ考へて居た。

「柏さん、支配人さんがお呼びです。」

給仕が呼びに來たので、節三は胸をどきどきさせながら机を離れた。隣の室の澤山の人の目も、一齊に彼の背中に集中された。節三は顔が赤くなつた。

「柏君。」

人に用事をいひつける時は、面と向合つて居る時でも、必ず其の人の名前を呼びかけるのが癖で、支配人室に入つて行つた節三を見ると、支配人は待兼た様子で迎へた。

「何か御用で。」

「まあ、ずうつと、此方へ來給へ。」

多年の習慣で、上役の前に出ると足の進まなくなる節三は、戸口に直立して命令を待つたが、支配人は何時にない愛想のいゝ笑顔で、近々と誘ひ寄せた。

「此間お願ひした賞與金調の下書は出來ましたか。まだゞらうとは思ふけれど。」

「いゝえ、お急ぎといふ事でしたから五六日居殘を續けて、社員の分丈は丁度今出來上つたところです。小使給仕の方は明日中には仕上る豫定ですが……」

「それは非常な勉強でしたなあ。まだ三日四日はかゝつても爲方が無いと思つて居たんだが。」

支配人の幅の廣い顔面には、底の方から自然と笑が湧上るやうな長閑な表情が浮んだ。

「實はまだ一般には發表し度くないんだが、我社も創立二十年、幸に社長其他各重役の指揮宜しきを得た事は勿論として、平素諸君の一方ならぬ御勉強によつて社業日に增し盛大となり、資產狀態も倍々良好であるから、此の際二十周年を祝ふ意味で、今年は例年の年末賞與金の外に、特別賞與金を社員一同に交附する事になりました。」

內心の興奮をかくし切れない樣子で、油光のするあから顏に電氣の光を浴びながら、演說口調で云ふのだつた。

つまり、十日程前に支配人が節三を呼んで、成る可く早く調成するやうに命じた賞與金調書で想像出來た通り、今日の重役會に提出した原案は、勤續年數と月給額を標準としたもので、誰しも異存無く通過したのだつた。

「先づ勤續一年が十一月末日現在の月給一箇月分、勤續二年が二箇月、三年が三箇月、五年が五箇月、十年が十箇月、十五年が十五箇月、二十年が二十箇月――よろしいか。その上にだね、十年以上の勤續者及び役名のある者、卽ち支配人、支店長、支店長心得、各係主任並に次席には、社長から特に包金が出る。さう云ふ事にきまつたのです。其處で過日御賴みした賞與金調書の各人交附金欄に、今お話した割合で金額を書入れて、私の手元迄提出して頂き度いのです。」

十年以上の勤續者及び役名のある者には、特別の包金が出ると云ふところで、支配人は一層聲に力を籠めて、意味深い目差で節三を見た。彼は會社創立以來の勤續者で、社員中の最古參者だつた。

「もう殆んど書上げてあると云ふのだから、別段居殘つて迄やつて頂くには及ばんが、しかし早い方がいゝですね。御苦勞ついでにもう一奮發して頂くんですな。」

「承知しました。早速仕上る事に致します。」

重大な責任があるやうな氣持がして、節三は堅くなつて答へた。

「ところで、一年未滿の者は如何いふ計算になりますでせう。たとへば今年入社の者とか、又は一年三箇月とか二年十一箇月とか云ふやうな端數のある者ですが……」

節三の頭腦の中には、十三年六箇月と云ふ自分の場合が、明瞭な數字になつて現れて居た。

「あゝ、それは月割にするのが一番合理的だとは思ふけれど、計算の煩を避ける爲めに、六箇月未滿切捨て、六箇月以上は一年と勘定する事にきめました。」

支配人は何の苦も無く答へたが、節三は腹の中を見透かされたやうな氣がして赤面した。あんまり自分の願つて居た事に、ぴつたりとはまり過ぎて居た。

「さうしますと、五箇月二十九日でも切捨て……」

一種のてれかくしで、わかり切つた事をもう一度訊いて見た。

「さう、さう。六箇月に達しさへすれば一年と見るんだ。たつた一日の違ひで損得にあるが爲方が無いさ。事務は簡便第一だからねえ、はつはつはつ。」

上機嫌のはけ口を見つけて、支配人は子供のやうに無邪氣に笑つた。節三も勤人に特有の、調子を合せた輕い笑を以て酬いた。

「それでは、忙しい處を連日の居殘は御氣の毒たが、惡い話では無いんたから、ひとつ至急にやつて下さい。」

支配人は、それで用事は濟んだと云ふしらせに、肥つた腹の上に光る金鎖をたぐつて、胴衣のかくしから時計を取出して見た。

「せいぜい勉強致します。」

叮嚀に頭をさげて立去らうとした。

「柏君。」

戸口のところで呼止められて振返ると、

「君は會社に來て何年になるね。」
もう歸支度を始めて、壁にかゝつて居る外套を下しながら、支配人は訊いた。
「十三年六箇月で御座います。」
「はゝあ、際どいところで一箇月分儲けられたなあ、はつはつはつはつ。」
節三は愈々赤くなつて、もう一度頭を下げると、逃げるやうに自分の席に歸つた。
「柏さん、いゝ話でせう。」
「いよいよきまつたんですか。」
もう退出時間は夙に過ぎてしまつたのに、同じ室の者ばかりで無く、他の係の者も多勢集つて居て、心配さうな顔色さへ見せて訊くのだつた。
「なあに何でも無いんですよ。」
自分の口から會社内部の事を喋つては、後日何かの祟りがありさうに思はれて、多年臆病になり切つてゐる節三は、苦い顔をして手を振つた。
「かくさなくたつていゝぢやないか。どうせお互に貰ふもんだ。」
「矢張り田崎さんの云つた通りですか。」

若い連中は、どうでも訊き糺さなくては承知しないと云つた調子で詰寄るのだつた。
「まあそんなところと思へば間違ひないよ。」
取合つては居られない様子で、節三は椅子に腰を下すと、まぎらかしに算盤を取つて弾いた。
彼は自分の貰ふ特別賞與金額を當つて見たのだつた。
「なあんだい。かくしたつて始まらないぢやあないか。」
「別段かくしもしないけれど、支配人がいやがるからね。」
節三自身も、何もかくす必要の無い事は承知して居るのだが、さう云ふ事を餘り早く發表するのは、社長や支配人の喜ばないところなので、それをはゞかつて居る丈の話だつた。自分が口をつぶつて居るのは支配人のいひつけなんだと皆に思はれ度い——なるたけ自分では責任を負はない算段をする使用人根性を、自分自身充分感づいて居た。それが、みんなの不機嫌な様子を見ると、默つて居る勇氣もなくなつてしまつた。
「まだ祕密なんだが、勤續一年を一箇月と見ればいゝんだ。但し六箇月未滿切捨ての、六箇月以上は一年と見做す——、其處いらで後はめいめいで勘定して見給へ。」
わいわい云つて居た人數が、ぴたりと默つて耳を傾けたので、節三はひどく得意だつた。次の

室との境界のところには、三四人女の事務員も集つて様子をうかゞつて居た。
「ふうん、それつきりか。二十年のお祝にしちやあけち臭いぢやあないか。」
「しかし財界不況の折柄だからなあ。まあ我慢するさ。」
「悪くは無いよ。普通賞與が六箇月、其の外に、僕は五年八箇月半だから六箇月として、しめて一年分だ。」
「ちえつ、俺は二年五箇月二十幾日かになるんだぜ。あと四五日で六箇月になるんだがなあ。」
口々に何か云ひながら、口では不平を云ふ者も、顔にはいき／＼した表情を見せて、めいめい我家をおもひながら歸つて行つた。
節三はもう一度、叮嚀に賞與金調書の社員の姓名と勤續年數と月給額の記入に誤がありはしないかを檢査してから、人に遲れて其の日の仕事を終つた。四五日續いた居殘に疲れてしまつたので、今日は眞直ぐに歸つて我家の食膳にむかひ度かつた。

## 二

十二月の夕方はすつかり暮れ切つて、品川から上野迄貫く大通は、燈火のまたゝきと、往來の

人數に、地の底から動いてゐるやうな景色だつた。

節三は京橋の角で電車を待つたが、どの電車もどの電車も滿員なので、思ひ切つて歩き出した。店を並べたばかりの露店の前にも、早くいつぱいの人だかりで、銀座は歩き惱む混雜だつた。

何時もあきあきする程歩く道で、何の爲めに斯う迄人が出さかるのかと、ふだんは忌々しい氣もするのが、今日は決してさうでは無かつた。自分自身も人波の一員として、すべての人と同じ心持を分け合つて居る氣持だつた。節三の腦裡には、近く手に入る賞與金の事ばかりが渦巻いて居た。月給と、例年通の普通賞與と、二十年記念の特別賞與と、その外に自分は十年以上の勤續者で且係の主任だから、社長の手から包金を貰ふ――曾て持つた事のない金高が、暮の二十五日の給料日に、一時に入つて來る事を想ふと、つひぞ知らない緊張した心持で、一歩々々にも力が籠つてゐる感じがした。多年机にばかり噛りついて居たおかげで、少し背中の曲つた姿勢にも、だらけた肉體にも、何となく活氣が溢れて來て、行違ふ人に突當れば、先方がけし飛んでしまひさうな根柢の無い力こぶさへ入れて歩いた。長い間、ねだられ通しにねだられて、しかも思ひ決し兼ねて居た妻の欲しがるコオトと、子供の洋服をこしらへてやる事も、今は單に時日の問題に過ぎなくなつた。その爲めには、屢々家庭の平和を亂したが、何の苦もなく解決したのは何より

も嬉しかつた。彼の目の前には、妻子の顔にまじつて、一本も毛の無い迄つるつるに禿げた社長の頭も浮き上つて來た。多年人間の世の中に對して畏縮して居た節三の心も寛濶になつた。つひぞ土産などは買つた事もなかつたのに、人だかりのして居る露店で、硝子管の中の水に、セルロイドの人形の、浮かんだり沈んだりするおもちやを、子供の爲めに買つた。多勢の人が、買物をする自分を見て居ると云ふ事さへ得意だつた。

澁谷に歸る節三は尾張町の角で電車に乘らなければならなかつた。遠く菊川橋や兩國から來るのは殆んどすべて滿員で、彼は暫時電信柱のかげに佇んで居たが、ふと向ふ側の菓子屋の繁昌を見ると、甘い物好きの妻の喜ぶ顔が目に浮んで來て、如何しても買はないでは居られなくなつた。

「何を差上げます。」

書生つぽのやうな店の者に聲をかけられたが、見馴れない菓子ばかり並んで居て、見當がつかなかつた。

「ばんぢゆうを少し、それからどつちやだんねつていふのは何んです。」

「へい、どつちやをおいくら。」

質問には答へないで、忙しさうに紙袋をふくらませると、いきなりその菓子ぱんを手づかみに

した。

片手にぱんぢゆうとどつちやだんねの紙袋を持ち、片手におもちやを抱へて、節三は又電車を待たなければならなかつた。故障でもあると見えて、刻々に人は殖えながら、電車はちつとも來なかつた。身に沁みて寒い風に吹かれながら、彼は新聞賣の其の日の出來事を誇大に書いた貼紙をぼんやり見て佇んでゐた。

やうやく電車が來たと思ふと、二臺とも新宿行だつた。其處いらに待ちあぐんで居た人の大半は、押合つて割込んで、やがて發車した後は、又しても寒さが加はつたやうに、風は白く吹き過る。節三は築地の方から來る電車を延上つて待つて居た。

「なあんだ、又新宿か。」

直ぐうしろで忌々しさうに呟いたのが、自分の思つて居た事を代表して呉れた氣がして、彼はふと誘はれて振返つた。

「おや。」

「おや。」

兩方が脣の際(きは)迄同じ驚きの聲を浮ばせた。

「相君ぢやありませんか。」
「沼尻君ですね。」
黒い外套の大男は、なつかしさうに近寄つて顔をのぞき込んだ。
「如何も見たやうな人だとは思つたが、久しぶりですなあ。こんな處でお目にかゝらうとは思はなかつた。」
「さう、五六年になりますかしら。」
口ではうけこたへしながら、折柄來かゝる電車の方に、節三の心は向いて居た。
「どちらです。私は近頃澁谷に住んでゐるんですが。」
「私も青山です。しかし滿員でとても乘れませんなあ。」
無理に乘れば乘れさうだつたが、沼尻は寧ろ乘る事を欲しないやうな態度だつた。節三も爲方無く、多くの人を吐き出し、一層多くの人を呑込んで出て行く電車を見送つた。
次のは又新宿行だつた。
「おやおや、先刻のに乘ればよかつた。」
節三は相手を非難する氣持でつぶやいた。

「しかし、あゝこんで居ちや堪りませんよ。」

沼尻も非難されたと感じたらしく、自分を辯護するやうに答へた。

「如何です。其處いらでお茶でも飲みませんか。久しぶりですからなあ。それに貴方にはお詫びしなければならん事もあるし、又是非ともお願ひせんければならん事もあるのです。どうでせう、一寸腰かけませんか。」

「左樣ですねえ、私は今日は一寸用事があつて、ゆつくり出來ないんですが。」

相手は人なつつこさうな樣子で勸めたけれど、節三は氣が進まなかつた。片方の手で大事に抱へて居る出來たてのぱんぢゆうの、未だ生温いのが、我家の情趣を想はせるので、早く別れて歸り度かつた。

「いや、ほんの暫く休んで居るうちに、電車も空きます。今が丁度退出時間でいけない時です。」

昔から、物事を手早く斷定的に云ふのが、此の男の癖だつた。

「此の角のカフェなら、立つて待つて居るよりも便利ですぜ。さうしませう。」

「さうですなあ。しかしうちに用事もあるし……」

「はゝは、奥さんが待つてゐますか。」

「そんな事ぢやあないけれど……」

「だからほんとの一寸ですよ。いゝぢやありませんか。相變らずの柏君ですなあ。はははは……」

沼尻は遮つて居る相手の肩を叩いて哄笑した。節三はひどく不愉快だつたが、さう迄云はれると、もう斷り切れなくなつた。向ふから來る電車に未練を殘して振返りながら、沼尻の後について歩き出した。

「おい。」

自分を呼んだのかと思つて、節三が目をみはつた直ぐ一間ばかり前に、佇んで居る女があつた。はゝあ連があつたのかと始めて氣がついた。女はおづおづ後について來た。

「一寸此の家でひとやすみして行かう。」

顎でさしづしながら、

「厄介者がゐましてね、はははは……」

とつてつけた笑ひにまぎらして、連の女に挨拶しさうな節三の手を取ると、四つ角のカフヱに引張つて行つた。

寒い戸外とはうつて變つて、たつた一枚の硝子扉の内部は、のぼせる程暑く感じられた。煖爐の烟筒が赤く焼け爛れてゐるのを圍んで、不秩序に多人數が飲食し、談笑して居た。誰の顏にも度を過して醉つた色が現れてゐた。三人は、片隅の常盤木の植木鉢の蔭に空席を見つけて腰かけた。

「麥酒。」

誰に相談もしずに、沼尻は遠くにゐる女給に三本の指を見せて註文した。

「麥酒でいゝでせう。それに何か喰べますか。腹も減つて來たが。」

「いや、僕は今晩はどうしてもうちに歸らなくてはならないんです。」

沼尻の方に答へながら、節三は連の女の樣子をうかゞつて居た。

「奥さんですか。」

何時迄も默つて居るのは變だと思つて、挨拶をしようと半分腰を浮かした。

「いや。」

沼尻は狼狽てて手を擧げて止めた。

「まあそんなもんですが、いづれ後日ゆつくり説明します。」

てれかくしに笑つて、不精つたらしく草履を引擦つて居る女給の持つて來た麥酒に口をつけた。

連の女は肩をすぼめて、恥入つたやうなおじぎをした。節三もてれかくしにこつぷを取上げた。

女の、薄い地毛に大きなあんこを入れて、無理にふくらませた束髮は、風に吹かれて廂が割れて、中のあんこが見え透いてゐた。目鼻だちは左程惡くは無いのだが、そばかすの多い目のふちに、黒い隈のある平顏で、生際がまあるく抜上つて居るのと、ひどいみそつ齒が、甚だ貧相に見えた。年齡には若過るあらい飛白の粗末な銘仙の着物も羽織も、借着のやうにうつらなかつた。

「おい、おかはり。」

自分丈飲干してしまつた沼尻は、近所の人が振返る程大きな聲で女給を呼んだ。

「お前も飲んだらいゝぢやないか。飲める口なんだ。猫をかぶつたつて爲方が無いや。」

二杯目のこつぷも空にして、彼はそろそろいゝ機嫌になつた。

「しかし、柏君にはお詫びしなければならない。何時かはほんとに申譯の無い事をしました。」

あらたまつた態度で頭を下げた。節三は何と答へていゝかわからないで、ごまかしに麥酒を口にふくんだ。

沼尻が節三に對して申譯が無いと云ふのは、數年前、彼が未だ或る個人商店に勤めて羽振を利

かせて居た頃、相場に手を出して失敗して、其の商店にも迷惑をかけ、あつちからも此方からも融通を受けた時、節三の苦しい懷から、百圓近くの金を借りた事だつた。彼は其の金を懷にして、節三にも知らさずに、朝鮮へ渡つてしまつた。節三には、たつた一ぺん、申譯ばかり並べた手紙が來たばかりで、その後は年賀狀さへ受取らなかつた。乏しい月給取の生活を續けて居る節三には、沼尻との友達づきあひの終りを告げたのは別段苦にならなかつたが、百圓の金は忘れ難いものであつた。あの百圓があればと思ふ事も度々あつた。話か其の金の事に及んだので、傷口に觸られたやうな氣持がして、彼は額に皺を寄せた。

「濟まん濟まんと思ひながら、いたづらに滿洲朝鮮に六年の歳月を費して、遂にいゝ目が出んもんだから、ははは……」

笑にまぎらかして、隣に坐つて居る女の手をつけない麥酒を引寄せて滿を引いた。

それから、朝鮮に行つてからの事を、醉の發した顏に興奮の色を帶びて話した。方々流浪したあげくに、或る商事會社に入つた。歐羅巴の戰爭の影響を受けた好況時代には、會社の營業も素晴しく、自分も大に手腕を振つて、副支配人に迄拔擢されたが、不況時代が來ると、それ迄のやり口が身上不相應に大がかりだつた丈、ひとたまりもなく落目になつて、費途のわからない多額

の金もあり、手形僞造の疑もかゝつたので、社長は短銃自殺をはかつた。命丈は取止めたが、會社は勿論つぶれてしまつた。沼尻は、他の社員同樣、退職手當も貰へ無いで、再び職に離れてしまつた。會社では働手として、同僚を拔いて出世したには違ひ無いが、未だ別段の貯蓄もない身の上だから、直ぐに新しい奉公口を見つけなければならないのだつた。しかし、殖民地の不景氣は又格別で、職を失ふ者は數知れずあつて、求む可き職業は何も無い有樣だつた。愚圖々々してゐれば旅費もなくなりさうなところ迄、もがきながらも踏みとゞまつたが、結局何の見込もなく、最後の見切をつけて内地に引上る事にした。沼尻は久しぶりの東京に來て間も無かつた。

「どうでせう、何處かうまい口は無いもんでせうか。」

窮狀を訴へたあとで、ちよつとあたりを憚るそぶりを見せて、彼は節三の顏をのぞき込んだ。酒には弱い節三は、二杯の麥酒に眞赤になり、顏から目のふち、首筋から耳朶迄蒸されるやうに火照り、胸の動悸は高くなつて、相手の話は聞きながら、屢々うつかりして聞きもらした。

「自分で云つてはをかしいけれど、昔とは違つて仕事は人一倍眞面目にやる。朝鮮では模範社員でした。一意專心會社の爲めに粉骨碎身盡力したが、解散の止む無きに立到つたので、如何とも爲方が無かつた。」

節三の知らない數年間の働きぶり――如何に會社を儲けさしたかと云ふやうな事を執拗くきかせたが、結局は現在の窮狀を訴へて、奉公口を探して貰はうと云ふのだつた。今は靑山の墓地の近くの下宿屋に居るのだが、それも長くは續かない程の金しか持つて居ないのだつた。

「何分此方を夜逃同樣にしたおかげで、何處にも顏出しの出來ない事になつてゐるので、君の外には賴む手蔓が無い。其の君にだつて、合せる顏は無いのだが、昔の友情に訴へて、一切綺麗に勘辨して貰ひ、今後の僕の一身が、浮かぶとも沈むとも、よろしくお任せする外に途が無いと、彼地を立つ時から考へてゐたんです。僕なんかと違つて、君は學校を出てから、ずうつと一つ會社に辛棒したんだから、今ではいゝ位地に居るんでせう。實際、誠意を以つて勤めると云ふ事が、勤人の處世の第一義だからなあ。」

何時の間にか、彼の前には空のこつぷが澤山並んで居た。節三も二杯の麥酒にすつかり醉つて、醉へば眠くなる癖で、一切の物の形がぼんやりと目に映り、相手の言葉も遠くの誰かの話のやうに賴り無く聞えるのであつた。彼は時々居睡をして、首ががくんとする度に氣を取直し、さも傾聽して居るやうに見せかけて居た。

「もう、そろそろ支配人か、支店長といつたところぢやあないのですか。」

はきはき返事をしないのをもどかしさうに、沼尻はたゝみかけてきいた。全くの上機嫌で、その言葉には別段おだてるやうな惡い意味は無かつた。

「さうはいきませんよ。」

節三も冷かされて居る氣などは毛頭なく、寧ろさう云はれるのが嬉しかつた。

「へえ、それぢやあどの方面の受持です。」

「人事課です。その主任と云つたやうなものなんですが……」

「すると人の任免を司るわけですか。」

「まあそんなものですよ。」

節三は多少得意の心持で答へたが、實は任免は一切支配人の考へ一つで、自分は其の命令を受けて辭令を書く位の役目に過ぎない事を想ひ起して、ひやりとした。

「はゝあ、それは好都合ですなあ。どうです、柏君。君の會社に採用して貰へないでせうか。君の麾下に馳參じて、多年の交誼に報いる事か出來れば幸ですがなあ。」

「さあ、それが如何も此の景氣で、何處でも人間を減らす事は考へて居るけれど、採る方の話はまるつきりないからねえ。」

「そいつは困つたなあ。此處で何とかならなくては、遠からず路頭に迷はなければならない。まさか盜人にもなれないし。」

何と思つたのか、拳骨で卓を叩いて、椅子の背にそつくりかへつて哄笑する拍子に、からになつた麥酒のこつぷを、あやまつて床に落した。石だゝみの上に硝子の碎ける音が冴えて響いた。あたりでがやがや騷いで居た連中も、ぴつたりと音をひそめて、一齊に床に散亂したこつぷの破片を見た。

「はつはつはつはつはつは。」

沼尻は、些細な事にはめげないぞと云つた態度で、佛頂面をして未練らしくかけらを拾つて居る女給とボオイの背中を見下しながら、腹をゆすつて笑つた。

「さあ、そろそろ歸りませうか。」

節三は、一時に醉がさめた氣持で、沼尻の連の女の方に目くばせした。

「はあ――貴方。」

人の視線を避けるやうに、始終うつむき勝の女は、低い聲で沼尻に、節三の心持を傳へようとした。

「え、歸る。またいゝ、またいゝ。久しぶりで愉快に話さうぢやあないか。」
「しかし今日は用事があるから……」
「矢張り奥さんが戀しいかなあ。荻江さんも御丈夫ですか。」
「丈夫は丈夫だが、もう二人の子供にかまけて、すつかり婆さんになつちやつた。」
「さうかなあ。昔は僕も柏君と競爭でラブしたものだつたが、ははは……」
一層大きな聲で笑はれたので、節三は愈々ゐたゝまれなくなつて、椅子から腰を浮かせた。
「おい勘定ッ。」
沼尻も存外おとなしく承知して、蟇口から汚ない札をつまみ出した。
少し足下のふらふらするのを、女は心配さうに引添つて、三人は戸外に出た。年の暮の銀座は益々人足が繁くなつて、空いた電車はなかなか來なかつたが、やうやくの事で割込んだ。車内でも沼尻は、しきりに奉公口の世話を求めて止まなかつたが、近いうちに訪問すると繰返して約束して、青山一丁目の停留場で、連の女に促されて降りた。
節三は冷くなつたぱんぢゆうとどつちやだんねの紙袋と、おもちやを兩手にかゝへて、居睡りしながら終點迄運ばれた。

三

日曜の朝の事、青山墓地の近くの下宿の裏二階の六疊に、寢穢く眠つて居た沼尻は、女があけた雨戸の音と、その隙間から吹込む風の冷さに目が覺めた。

「もう起きるのか。」

何となく寢足り無い氣持がして、吹込む風が忌々しかつた。

「何云つてんの、もう九時半だわ。今日は柏さんて人の所に行くんだから、寢坊したいやうに起して呉れつて、昨夜あんなに頼んでたぢやないの。」

窓の雨戸をすつかりあけて、隣の石屋の仕事場の亞鉛屋根の向に見える墓地を見下しながら、振向きもしないで答へた。寢衣の上に羽織を引かけた脊の低い後姿で、亂れた束髮に櫛を入れてゐるのを、沼尻は枕に頭をつけたまゝ見てゐた。だらしの無い樣子が小憎らしく、こんな女が居る爲めに自分の運は開けないのだと云ふやうな考さへ起した。

「おい、しめろよ。寒くてしかたが無いぢやないか。」

「そんな事云つてるひまにお起きなさいよ。愚圖々々してるとお晝と一緒になつちやふわ。」

障子をしめて、ぴつたりと並べて敷いてある自分の寢床を手早くあげて、女は片隅の手荷物などの積んである陰から、楊子や齒磨粉を取出して、さつさと廊下に出て行つた。梯子段を一段一段、上草履の尻をぺたんぺたん鳴らしながら階下の洗面場に下りて行くのを、沼尻は矢張り床の中で聞いてゐた。

暫時たつて、女が戻つて來た時、男は頭から夜具をすつぽりかぶつて、又深々と眠つてゐた。

「あんた起きなきや駄目よ。」

女は忌々しさうに舌うちしたが、いきなり夜具に手をかけて引めくつた。頰髯のまばらに、不精つたらしく延びた黃色い顏が、常にも增して大きく見えた。

「よせよ。折角人がいゝ氣持で寢てるのに。」

ぶつぶつ云ひながら、意地になつて又夜具を引かぶらうとする男の手を、女は平手で引ぱたいた。

「こん畜生。」

太い腕がぬつと出て、逃げようとした女の手首をつかんで、力任せにぐつと引いた。

「何すんのよう。」

他愛の無いふざけつこなんかしてる時では無いと思つて、女は小じれつたかつたが、膝を崩して倒れかゝつた。
「こん畜生。」
男は矢張り仰向に寢たまゝで兩手で女の首を抱へて、にやにや笑つて居た。
「およしなさいよう。」
無理にも澁い顏をしてやらうと思ひながら、女もつい笑顏になつて、僅かに肱で支へてゐた體の重みをすつかり投出して、膝子のはみ出してゐるのも知らずに、男の顏の上に顏を伏せた。
「馬鹿な人。」
やうやく男の手をすり拔けた女は、怒つたやうな顏をしながら、今度は裾の方からひと思ひに夜具をめくつてしまつた。長い毛脛が二本、あからさまに蒲團の上に並んで居た。
「亂暴しやがるなあ。」
男もわざと怒つたやうな顏をして、のそのそ起上つた。
「さ、さつさと顏を洗つといでなさい。あんたが歸つて來る迄に、きれいに掃除しとくから。」
大きな欠伸をしながら、男は上草履を引摺つて出て行つた。

うがひをして、顔を洗つて部屋にかへるとすつかり掃除は出來てゐて、女は火鉢の中の乏しい火種に粉炭をつぎながら、頰をふくらまして、ふうふう吹いて居た。
「あんた、洋服でせう。」
「何云つてるんだい。まだ飯も喰やあしないぢやあないか。」
「御飯はもう直に持つて來るのよ。早くして下さいつて女中さんに賴んどいたから。」
火鉢の傍を離れると、押入から一張羅の洋服を出して、男の方に押してやつた。
「愚圖々々してゐて、柏さんがお出かけになつちまつちやあ困るぢやないの。直ぐに洋服に着替へといた方がいゝわ。」
自分はまだ寢衣のまゝなのに、男にはせき立てゝ、しやつや下袴迄手から手に渡してやつた。
男は默つて受取つて着始めた。
「こいつは非道いなあ。もう外に滿足なやつは無いかしら。」
茶色の靴下の踵と親指の二ケ所の破れてゐるところから、手の指を出してひよこひよこ動かしながら、男はあはあは笑つた。
「それつきりありやしないわ。それでもいゝ方なのよ。外のと來たひにやあ、目もあてられやし

ない。」
　女も笑ひながら答へた。
「奉公口を賴みに行くのには、かへつて哀れつぽくていゝかもしれん。」
　それを穿いて、すつくり立上つた時、女中がお膳を運んで來た。
「憚りさま。どうぞ其處に置いといて下さい。」
　脫ぎ捨てた男の寢衣を疊んでゐた女は、手早くそれを押入に突込んで、女中の手からお膳とおはちを受取つた。
「この襟飾も悲慘だなあ。」
　しんのはみ出した、不釣合に派手な色氣のを結び終つて、上着を着た。
「なんだい、さうせき立てる事はないぢやあないか。烟草の一本位は飲まして呉れよ。」
　火鉢の橫の紙袋から一本拔いて火をつけようとした。
「いけませんよ。早く喰べておしまひなさいよう。」
　山盛につけた茶碗を無理に手に持たせて、自分も直ぐに箸を取つた。
「自分が腹がへつてがつがつしてやがるもんだから。」

そんな事を云ひながら、男も烟草を膳の端にのつけて、なまぬるくさめた味噌汁に口をつけた。
「ちえつ、まづいなあ。」
さつま芋の二きればかり入つてゐるのを箸の先で突ついて、不平らしく呟いたが、その癖小皿の煮豆も、澤庵も殘らず喰べて、飯は四度も替へた。女もこくめいに箸を働かして負けず劣らず喰べた。
「よく喰ふなあ。」
先に濟んだ男は、烟草をふかしながら、ながしめに女の平べつたい顏を見てゐた。口では氣の輕い事をいひながら、存外心持は暗かつた。どうにかして、一日も早く此の女と別れてしまはなければならないと、此の頃始終考へる事を又しても想ひ浮べて居た。先刻、女の首玉に兩手を廻して、顏と顏とをくつつけた自分のしぐささへ不愉快に思はれた。
「あんた。」
つま楊子でみそつ齒をせゝりながら、まだお茶を飲んでゐる女は、たしなめるやうな調子で呼びかけた。その調子で、何を云はうとして居るのか、男には直ぐにわかつた。
「早く行かなきや駄目よ。何時だと思つてるの。」

「わかつてるよ。飯を喰つたばかりぢやないか。」
「そんな事云つて愚圖々々してるからいけないんだわ。叔父さんの方の口だつて、あんたさへしつかりしてれば屹度よかつたんだわ。」
女は漸く茶碗を下に置いて、二つの膳を遠くに押しやると、火鉢にすり寄つて抱へ込むやうな恰好で手をかざしながら、男の顔をのぞき込んだ。
「わかつた、わかつた。お談義は聽きあきた。」
男はその横面を張飛ばし度いやうな氣持もしたが、いきなり吸ひつくした烟草の殼を灰につきさして立上つた。
壁にかゝつてゐる外套を取つて、不機嫌な顔をしながら廊下に出た。
「怒つたの。」
女はゆつくりとお尻を持上げて、からかふやうな口をききながら、後からついて來た。勿論怒つてゐるとは思はなかつた。
梯子段を下りて、始終便所の臭ひのする暗い廊下をみしみし云はせながら玄關に出た。
「お出かけですか。」

帳場でおかみさんと話をしてゐた女中が、聲をかけながら出て來た時は、沼尻は自分で下駄箱から靴を出して穿いてゐた。

「おひるは。」

「御馳走になつて來るかもしれない。」

一寸振向いて答へたが、直ぐに格子をあけて往來に出た。寒い風が埃をあげて吹いてゐた。

電車道へ出て、電車に乘つて、澁谷の終點迄行くみちみちも、沼尻は女と別れる事ばかり考へてゐた。就職口を探すよりも、その方が急務のやうに思はれた。

女の名はおせいと云つて、沼尻が窮迫して滿洲をうろついて居た時代に、料理屋の女中をしてゐたのが腐れ合つたのだつた。東京近在の機場（はたば）の生れで、十九の年に男と駈落して朝鮮に渡つたのが、二人口は過（すご）せなくて、間も無く男に逃げられてから、爲方無しに宿屋や料理屋に奉公してゐるうち、男の事では度々しくじつて、段々滿洲迄流れて行つたのだつた。別段永い間熱情を持ち續けてはゐられないのだが、惚つぽい質（たち）で、沼尻にも最初は女の方から持ちかけたのだつた。滿洲で出る新聞の通信記者のやうな事をして僅かばかりの手當を貰つてゐた沼尻は、小遣錢にも差支へてゐた。おせいはいくらもない貯への中から、烟草錢をみついでゐたが、しまひには着物

から持物迄捲上げられてしまつた。そのかはりに、何處迄もくつついて離れまいと腹を極められて、或人の口きゝで、沼尻が京城の商事會社に勤める事になつた時、矢張り駈落のやうなていたらくでしよひ込んでしまつたのだつた。

兎に角まとまつた收入にありつくと、早くも女が足手まとひになつて來た。商賣柄相當につきあひが廣くなり、會社も好景氣に乘じて勢がよくなると、沼尻も手腕を認められて同僚を追越して用ゐられるやうになつた。元來頭腦の働きは速い方で、おまけに臆面の無い押の強さが商品の賣買には持つて來いだつた。商人を相手にしてゐると、他所目にはわからない收入もあつて、茶屋小屋への出入も自然と繁くなれば、もともとやきもち燒のおせいは、殖民地の狹い世間の噂に上るはしたない樣子を大つぴらに見せる事が多かつた。それればかりで無く、おせいさへ居なければ、立派な嫁を世話しようと、面と向つて沼尻に忠告した人もあつて、その嫁入口を探してゐるといふのが土地切つての有力家の娘だと知つた時は、つまらない女にかゝりあつた事をどれ程後悔したかわからなかつた。

女にとつては、沼尻が敏腕家として認められるのが何よりも嬉しかつた。さういふ男に惚れた自分は、ひとかどの眼識家らしく思はれるのだつた。どんな事があつたつて別れるものかと思つ

て居た。時々は男の方で、別れ話を持出したい素振を見せる事もあつたが、さう云ふ時には、女は筋道の立つた話には耳もかさずに、ヒステリイ性の狂暴で、泣いたり喰ひついたりして相手をてこずらせた。

愈々會社が沒落して、直ぐに暮しむきも不自由になり、遂には內地に逃げ還らなければならなくなつたが、おせいは充分男の値うちを信用してゐた。平生自分の腕を誇大に吹聽して聞かせてゐた沼尻の言葉を、無智な女は疑はなかつた。東京にさへ行けば、昔の友達で、今は立派になつてゐるのが、先方から寄集つて來て、いゝ位置に据ゑて吳れるものと思つてゐた。

ところが來て見ると、いきなり薄汚ない下宿屋の二階にくすぶつて、奉公口を探すにもいゝ手蔓さへ無いらしい樣子なので、隨分意外にも感じたが、それでも遠からず奥さんらしい身の上になれる事は疑つてゐなかつた。此の暮の宿料は、どうにか拂へる丈のものもあるのだが、來月分の支拂になると到底も駄目な事はわかつてゐるので、沼尻の叔父に當るせんみつやが、或る會社組織の足袋屋の販賣係に世話しようと云ふのを、煮え切らない返事をして愚圖々々取逃してしまつた時は、おせいは男の意氣地なさを口を極めて罵つたが、足袋屋風情になるものかと、沼尻が強氣を見せると、忽ちそれに引込まれて、寧ろ男の抱負の大きいのを、賴母しく思ふのだつた。

それで、此間の晩銀座のカフヱで一緒になつた柏の、人のよささうな様子を見ると、此の男こそ眞面目に相談に乘つて、いゝ勤口を周旋して呉れるに違ひ無いと思つた。

沼尻にしても、節三を頼みにする外さしあたつていゝ手蔓も無かつた。以前の先輩や友達にも、大概は迷惑のかけつ放しなので、止むを得ない場合に立至れば面をかぶつて行かない事も無いが、出來る事なら氣まづい思ひはし度くなかつた。昔から氣の弱い節三に對して、沼尻は何時も先手に出て彼を利用する立場にゐた。少し執拗く押して行けば、どんな事でもいやとは云ふまいと、幾分たかをくくつてゐる傾が無くもなかつた。

青山澁谷行の電車の終點で降りた沼尻は、學校時代に節三の間借をしてゐた家の娘の荻江に、心を動した記憶をおもひ起しながら、それが今節三の妻になつて、子供をかゝへてゐる姿を想像して、ひどく先方は幸福な身の上に思はれ、それにひきかへて自分のみすぼらしさが、腹立たしく考へられた。彼の頭の中には、未だ見ない節三と荻江の家の様子と、便所の臭ひの部屋の中にも侵入して來る下宿の二階に、いぢけて火鉢にしがみついてゐるおせいのありさまが、かたみがはりに浮んだり消えたりして居た。

## 四

暮の二十五日には月給と例年の年末賞與金の外に、多分の臨時賞與が出るといふ事は、節三の心を樂しくしたばかりで無く、一家の中を明るくした。沼尻と銀座で逢つて、思はず歸宅が遲くなつた爲め、不機嫌にふくれかへつてゐる妻の歡心を得る爲めにも、節三はその喜びをしまつて置く事は出來なかつた。冷くなつた煮魚で飯を喰ひながら、その話をして聞かせると、妻は忽ち笑顏になつて、其晩の御馳走の少い事を詫びたり、此の頃の忙しさをねぎらつたりした。ぱんぢゆうとどつちやだんねの袋を開いてお茶を飲みながら、夫婦が大枚の金の中のいくらかを如何に樂しく使はうかと話合つてゐる傍で、小學校に通つて居る女の子と、四才になる男の子は、これもぱんぢゆうを頰張りながら、水管の中で浮いたり沈んだりする人形のおもちやをはやしたてゝ騷いだ。

節三の機嫌がよくなると、妻の機嫌もよくなつた。新婚當時を想ひ出すやうな情愛の籠つた所作を、二人は多少羞らひながらも繰返した。子供達も自然と小言をきかされる事が少いので、勝手氣儘に家の内を飛廻つた。

夫婦は毎日暮の買物の話をした。時にはすねたり恨んだりして夫を惱ました妻も、愈々本望を達して、此の頃流行る羅紗のコオトをこしらへて貰ふ事で最初は充分滿足してゐたが、段々いろんな慾が出て、あれもこれもと買物の豫算は殖えるばかりだつた。節三も氣が大きくなつて、妻の要求する豫約を拒まなかつた。二十五日が待ちきれないで、此の日曜に三越に行かうと云ひ出したのも荻江で、節三も何の異存も無くお伴する事を承知した。

節三に沼尻の事などは殆んど忘れてゐた。幾年ぶりかで偶然街上で出會した事も、左程の感興を殘さなかつた。歸宅の遲れた理由として、一部始終を話しはしたが、臨時賞與の方に夢中になつてしまつた妻は、連の女の樣子を訊きたゞす事に多少の好奇心を動かしたばかりで、別段しつつこく訊き度がりもしなかつた。其の態度は節三を滿足させた。

節三と沼尻は同じ私立の大學に通つてゐる時代の友達だつた。その頃節三は荻江の家の一室を間借りして通學してゐた。大藏省の役人をしてゐた父親が死んで、裁縫の師匠をしてゐた母親と荻江とその弟の三人暮しだつたから、まだ若い學生の節三さへ一家にとつては賴母しい人物に見えた。生來てきぱき切れる質ではない節三は、隨分眞面目に勉強したけれど、成績は中位で、決して上の部には入らなかつた。それに引かへて沼尻は、其時代から酒も飮み、洲崎や品川の遊び

も知つてゐて、試驗間際に節三のノオトを借りて間に合せるといふ遣方だつたが、席順は五番と下つた事が無かつた。節三のところには足繁く遊びに來たが、それは荻江のゐる爲めだつたと云つてもいゝ。ひたむきに一人の女に戀するやうな性質では無かつたけれど、心を動かされた事は確かだつた。さうして、しんねりむつつりした節三が、口には出しもしなかつたけれど、密かに荻江に戀してゐる事は、沼尻だけが見拔いてゐた。彼は見事女を手に入れて、此方面でも友達に自己の優越を示し度かつた。

女學校に通つて居た荻江は、毎晩節三に英語と數學を敎へて貰つてゐたが、沼尻が遊びに來ると、彼は節三の役目を奪つて、氣取つた發音で英語讀本を高々と讀みあげたり、適切な例題をいくらも並べて、難解の數學も平易に呑込み易く說明した。ぶつきら棒な節三に習ふよりも、面白くて、樂で、わかりよかつた。そんな事からも、荻江は節三よりも沼尻を賴母しくも思ひ、偉い人だとも考へてゐた。折に觸れてはそれとなく沼尻の匂はせる言葉の端々をあだには聞かないで、後々其の廣い懷に額を押つける景色をさへ密かに想像してゐたのであつた。

母親も勿論同じおもひだつた。眞面目な節三に信賴する心も深かつたが、沼尻こそは將來立身出世する人物だと思つてゐた。早く夫に別れた女が、その娘の良人として、氣に入つた若者を擇

ばうとする心ざしは強かつた。殆んどしつつこい程、母親は沼尻を可愛がつた。時には若い二人を一層離れ難いものにする機會さへ、意識してこしらへようとした位であつた。おとなしい節三は、人の知らない苦痛に惱みながら、うはべは冷靜な態度を持して、こつこつ勉強をつゞけてゐたのだつた。

ところが恰度二人が學校を卒業する間際になつて、沼尻と下宿の女房さんとの間に、面白くない噂が立つた。巡査上りで、釣と將棋に凝つて懷手で暮らしてゐた下宿の主人は、沼尻の友達として節三のところにも事情を訴へにやつて來た。調子外れの東北辯で小一時間も喋り立てるのを、荻江親子は洩れ無く聞いてしまつた。其の時から、殊に母親は、警戒の色をあからさまに見せるやうになつた。同時に間違の無い節三の評價は反比例に高くなつたのである。

學校を出ると世間馴れた沼尻は、自由の利く個人商店でめきめきと腕を見せたが、節三は融通の利かない會社員として、引つゞいて荻江の家から通勤してゐた。花柳界の女の面白さに夢中になつてしまつた沼尻にとつては、子供らしい荻江は左迄の魅力を持たなくなつた。おのづから足が遠ざかる結果になつて、何時の間にか節三は、競爭者の無い地位に安んじる事になつた。

二人が一緒になつてからの十年は、單調な色彩の無い生活だつた。節三の出世はもどかしい程

遲く、荻江にはそれが一生取返しのつかない自分の不幸に思はれた。それでも沼尻か東京にはゐられないやうになつて、朝鮮迄も落て行つた事件の起つた時は、沼尻に一生を託さなかつたしあはせを感じて、節三に不滿をいだいては申譯の無い氣持もした。さうして何時の間にか二人の母になつて、此の頃では人生のどうにもならないといふ事の見極めさへついて、存外平和な小家庭に、同じやうな朝夕を、毎日々々繰返すのであつた。

さういふ勤人の家に特有の、餘裕の無い生活に昵んでゐる者にとつて、たまの外出は何よりの樂しみだつた。年に多くて三度か四度、子供の手を兩方から引張つて、上野や淺草へ出かける外には、ぜいたくらしい事は何一つ許されなかつた。それが今度は曾て無い收入にありつく事になつたので、今迄我慢に我慢をしてゐた買物も出來るのだから、今日の日曜程樂しい事を、荻江は曾て知らなかつた。昨夜は胸が高く波打つて、充分眠る事も出來なかつた位である。

荻江は早くから起きて、小婢を相手に甲斐々々しく働いた。日曜といへば、正午近く迄寢るのを樂しみにしてゐる節三も、今日はせき立てられて起きてしまつた。朝の食事が濟むと、子供達は直ぐに他所行に着換へさせられた。女の子は學校の式の時に穿く袴を穿き、男の子はだぶだぶした茶色の洋服を着て、すつかり他所行の氣分になり切つてしまつた。叱られても、叱られても、

家中を駈廻つて騒いだ。
「さ、父さんもそろそろお支度をなさらないといけませんよ。」
鏡臺に向つて、念入りに束髪を結つてゐた荻江は、縁際の日の當る障子の側で、火鉢を抱へて新聞を讀んでゐる節三に聲をかけた。
「まだ早いぢやないか。そんなに早く出かけたつて爲様が無いぜ。」
日曜附録の漫畫を丹念に見てゐる節三は、振向きもしないで答へた。
「まあ、何時だと思つてらつしやるの。もう十時になるんですよ。」
おしろいを鼻の頭に塗りながら、額に皺を寄せた。どんな事でも、さつさと取運ばない夫が日頃から小じれつたいのであつた。
「電車が一時間はたつぷりかゝるし、三越だつて一時間や二時間は直きとたつちまふでしよ。折角子供達は淺草に行くのを樂しみにしてゐるんぢやありませんか。」
久しぶりで叮嚀にお化粧をして見ると、自分ながら若々しい氣持になつて、荻江は鏡に映る自分の顔に滿足した。愚圖々々してゐる夫になんか構つてはゐられないやうにいそいそして、他所行の着物に手を通した。

節三も爲方無く新聞を思ひ切つて、妻が揃へて置いてくれた洋服を身につける事にした。毎日々々襟首を突上るやうな堅い襟や、肩の張る洋袴つりの窮屈に閉口してゐる彼は、終日和服の着流しで寢轉んでゐられる日曜が何よりの安息だつた。しかし外出の着物を持つてゐないので、洋服といへば總て他所行ときめてあつた。彼は、自分が如何に不愉快を忍んで洋服を着るか、少しの察しもない妻に對して不平を感じながら、いつもよりも一層手間取つて身支度をした。

「あら、お髯が隨分延びてゐますわ。」

すつかり用意の出來た荻江は、多少媚るやうな態度で、襟飾を結んでゐる夫に寄添つて云つた。

「さうでもないさ。まだ三日目だもの。」

四五日目位にしか剃刀を當てない顎を突出して節三は答へた。

「だつて、ふだんとは違ふわ。」

荻江は浮々した心持で、その突出された夫の顎をからかふやうに指の尖で突ついた。

その時格子につけた鈴の音がリリリリリ……と後を引いて聞えた。

「沼尻さんて方がお出でになりました。」

前かけで手を拭きながら、十四五の小婢が取次いだ。

「沼尻さんですつて。」
荻江は折角の出先の客を喜ばないで、額の皺を深くして夫を見た。節三も不愉快な顔付で頷いた。あわてて上着を着て、彼は自分で出て行つた。
「やあ。」
「やあ。お出かけですか。」
洋服を着た姿を見て、沼尻はうはべ丈の遠慮を見せた。
「まあお上んなさい。」
節三もうはべ丈お愛想を云つて、もつさりと其處に立つてゐた。
「では一寸お邪魔させて貰ひませう。」
暫時躊躇したやうな恰好だつたが、沼尻は直ぐに靴の紐を解き始めた。同時に、襖の向ふでは、あわてて物を取片づける荻江の氣配があからさまに聞えて來た。
「さあ、どうぞ。」
玄關の二疊と女中のゐる四疊の外には、二室しかない家の事で、床つきの八疊の方に沼尻は通されたが、次の室で鐵瓶をことことさせてゐるのは荻江に違ひ無いと思つた。流石に彼も、靴下

の破れてゐるのを氣にして、妙にきちんと改まつた形で坐つた。
「先夜は失禮しました。」
「いや私こそ。」
言葉迄も變に他人行儀なのが、二人とも氣になつてしかたが無かつた。節三は自分の出かけようとする所に來られたのを不快に思つてゐるのだと取られはしまいかと思ひ、沼尻はこんな他人行儀を續けては、奉公口を頼む本筋に入りにくくて困ると思つてゐた。
荻江がお茶を運んで來た。
「やあ、荻江さんですね。」
それをいゝ機會にして、沼尻は馴々しい態度を取る事にした。
「どうも面目ありません。あなた方を訪問する時は、必ず自動車で乘りつける積りだつたんだが。」
大仰に頭をかいて高笑ひをした。
「あなたはちつとも變りませんなあ。柏君は流石に課長さんらしくなられたが、荻江さんは昔の荻ちやんですぜ。二人のお母さんとは見えませんよ。」

とつときの着物に着かへて、薄化粧をした荻江は、元來子供々々したまる顔で、年よりは若く見える方だつた。沼尻のお世辭とは知りながら、節三も身綺麗になつた妻の姿に滿足してゐた。

「貴方は隨分お變りになりましたねえ。」

荻江は顔を紅くしながら、身なりの惡い沼尻の頭から足の先迄、一種の輕侮に多分の感慨をまじへて見守つた。

「そりやあ爲方がありませんよ。轗軻落魄十年ですからなあ。はは丶丶丶。」

沼尻は體をゆすつて笑つた。

「柏君からお聽きでせうが、目下浪々の身でして、明白に申せば其の日の食にも差支へてゐるのです。」

「御冗談を。」

「冗談なもんですか。實は其の窮迫を救つて貰はうと思つておたづねした譯なんです。」

外出の矢先に長々と邪魔をしては、自然本筋の方にも響くと思つて、彼は思ひ切つてずばずば切出した。繰返して自分の朝鮮時代に、いかに會社の發展を助けたか、しかも財界の不況のあふりを喰つた不運に壓倒されて、現在如何に困つてゐるかを、かなり雄辯に喋つた。彼は自分の辯

舌にも充分自信を持つてゐて、聽手は必ず感動するものときめてゐた。思はず知らず話の締めくゝりが無くなつて、何時迄も身の上話が續くので、節三は苦り切つて火鉢の灰を火箸で突つき、荻江は爲方無しに相槌はうちながら、心の中では此の大切な一日を臺なしにされたやうな腹立たしさを感じてゐた。

其處に、往來で遊んでゐた子供が、何時迄たつても親達はいゝ所へ連れて行つてくれないので、我慢し切れなくなつて駈込んで來た。

「母さん、まだ行かないの。」

先を爭つて襖をあけて飛込んで來た女の子は、いきなり母親の肩につかまつて、うらみがましく搖振つた。

「なんですねえ喜久ちやん、お客樣に御挨拶もしないで。」

たしなめてゐるところに、男の子も飛びついて、

「母さん、まだ?」

姉の眞似をして、後から頰擦りしながら、全身の重みを母の背中にもたせかけた。

「今日は。喜久ちやんは小父さんを知らない? 小父さんは喜久ちやんがこんなちひさな赤ちや

んの時に抱つこして、おしつこをかけられた事がありますよ。」
沼尻はおあいそを云つて女の子の手を取つて引寄せようとしたが、
「いや、いや。」
子供はおさげの髪を振つて、愈々しつかりと母に縋りついた。
「はゝはゝ嫌はれちやつた。」
沼尻は頭をかいて笑つた。
「馬鹿やあい。」
男の子は母の背にかくれて、沼尻の方に顎を突き出した。
「何いふんです、健ちやん。」
荻江は面喰らつて子供の手をつかみながら、
「どうも行儀が悪くて爲方が無いんで御座いますよ。」
と沼尻の方に紅らめた顔を傾けて云つた。
「無理もありません。子供に好かれる柄ではありませんからなあ。」
其處で又彼は豪傑笑をして頭を掻いた。その笑をきつかけに、荻江は子供の手を引張つて、次

の室に引退(ひきさが)つてしまつた。

差向ひになつて、沼尻は又節三に身の窮迫をしきりに訴へた。

「ところが御承知の通りの不景氣で、何處でも人べらしの時代だからね。これが今年の春頃だとまだしもよかつたんだが。」

節三は妻の不機嫌を第一に恐れて、なるべく早く話を打切りにして、三越のお伴をしなければならないと思つてゐた。

「それはよく承知してるよ。だから月給なんか望みはしない。兎に角使つて見て、間に合つたら雇つてくれるといふのでもいゝ。僕だつて無駄に朝鮮滿洲をうろついてゐたわけぢやあないからなあ。此の落魄時代も後日の爲めのいゝ經驗だと思つてゐるんだ。」

彼はしまひには節三を壓迫するやうな口もきいて、是非とも就職口を探してくれと執拗く頼み込んだ。

「しかし僕は世間が狹いからね。」

節三はどうかしてうまい口實を見付けて逃れ度いと思ひながら、只管當惑するばかりだつた。

「たからさ、外の所は望まないんだ。君の配下として働かしてくれ給へ。」

節三のつとめてゐる會社に入れて貰ふ外には途の無い事を、沼尻もよく承知してゐた。

「けれども僕の方でも……」

相手の押が强くなればなる程口のきけなくなる節三は、へどもどして火鉢の上にうつむきながら灰の上に圓を描いたり棒を引いたりしてゐた。

「貴方、一寸。」

襖をあけて荻江が顏を出した。なかなか歸りさうもない沼尻の樣子に苛々して、いつそ自分と子供丈で、先に三越に行つてしまはうと思つたのであつた。

「お邪魔して濟みませんなあ。お出かけのところを。」

節三が立上らうとするより先に、氣配を見て取つて沼尻が云つた。

「いゝえ、どう致しまして。」

「いや、もう退散します。」

沼尻は此處いらで一先づ見切りをつけなくてはいけないと考へて、いきなり座蒲團から滑り下りた。

「では今の事は是非お願ひします。」

力のある聲で、否應いはせないやうな強い調子で云ふと、節三は相手をせき立てた妻の態度を稍羞ぢながら、
「兎に角支配人に相談して見ませう。」
と思はず引うけたやうな返事をしてしまつた。
「では又うかゞひます。荻江さん、どうもお邪魔しました。」
「折角いらつしやいましたのに、失禮致しました。」
荻江はほつとしながら、流石にこれも自分の態度が悪かつたかなと思つて、顔を紅くして叮嚀に頭をさげた。
「左様なら。」
「失禮しました。」
すつくり立上つた沼尻の靴下のかゞとは、兩方とも大きな穴があいてゐた。節三も荻江も思はず其處に視線を引かれた。
それから十分後に、夫婦は何となく豫定の全部を覆へされたやうな心持を持ちながら、はしやぎ切つた子供の手を引いて家を出た。

「母さん、私鯛めしよ。」
「母さん僕も。」
三越に行つたらおいしい鯛めしを御馳走すると、昨夜云つて聞かせたのを子供達は忘れないで、兩親の顏を見上げながら、勇み立つて電車へ急いだ。

五

翌日、節三は珍しく會社の出勤時間に遲刻した。久振の遊樂と、めいめい欲い物を買つて貰つたので、妻も子供達も興奮して、晩に宅に歸つても、はしやぎ續けて爲方が無かつた。二度も三度も促し、しまひには叱るやうにして子供達を床の中に追ひ込むと、流石に晝間の疲で、見て居るうちに眠つてしまつた。それから暫時、夫婦は差向ひでお茶を飲んで居た。荻江は今更夫に對する情愛を新しくしたやうなそはそはした心持で、一日の樂しかつた事を繰返して感謝した。いかにも夫は甲斐性のある人のやうに思はれた。節三も常になくいきいきした家庭の有樣を嬉しくは思つたが、三越から淺草に廻り、花屋敷や活動寫眞を見る丈でもくたびれるのに、澤山の人出と樂隊の浮々した調子に夢中になつてしまつた子供が、一寸でも目を放すとあらぬ方角に駈出す

ので、其の監督の氣づかれも加はつて、すつかり參つてしまつた。歸りの電車の中では、子供を膝に乘せたまゝ、親子とも居睡をした位である。その疲勞が今朝迄持越したのであつた。

「柏さんの遲刻は珍しいぢやありませんか。停電ですか。」

下役はほんとに珍しさうに節三の顏を見上げて訊いた。

「いや、一寸出がけに客が來たものだから。」

わけも無く顏が赤くなつて、どぎまぎしながら、つかないでもいゝ嘘をついてしまつた。今朝、妻と共々寝坊して居た處を、女中に襖をあけられて驚いた不愉快な記憶が、下役の何でも無い挨拶にさへ想ひ出されたのであつた。

愈々給料支拂日も明日に迫つたので、社内の空氣は著しく活氣づいて居た。就中人事係は、もう一度給料と、賞與と臨時賞與の金額を決算して、一錢一厘も間違ひの無いやうにした上で、最後に支拂傳票を支配人の手許に出して認印を貰ふ重要事を控へて居るから、節三と二人の下役の外に、臨時に文書係から應援を求めて、傍目もふらずに事務を執つて居た。

その仕事も正午迄にはすつかり片づいて、主任の節三は、一切關係書類をひとまとめにして、晝食後直に支配人のところに持つて行かうと思つて居た。

「どうも皆さん御苦勞でした。おかげで萬事手順よく行つて、私も安心しました。」
改まつた態度で下役をねぎらつて、金庫の内部に書類をしまつてから、つれ立つて地下室の食堂に下りて行つた。
食堂はふたつに別れて居て、近所の仕出屋へそれぞれ注文して取寄せる連中と、自宅から辨當を持つて來る連中とが別々になつて居た。別段會社の定めでは無いのだが、多年の習慣でさうなつて居た。支配人をはじめとして、主任役の者や、學校出の贅澤のきく連中は狹い方の室で、和洋辨當、鰻丼、天丼、鮨などを好み好みで喰べて居た。もう一つの廣い方は、妻君のこしらへた辨當の冷くなつたのをつつく者や、途中で買つて來た食麵麭を燒いて喰ふ獨身者が群つて居た。麵麭を燒く者の爲めには、大きな火鉢が一隅に据ゑてあつて、鐵網がかゝつて居た。儉約と、胃弱の爲めに、節三も此の火鉢を取卷いて麵麭を嚙る仲間の一人だつた。
「柏さんなんか、ブル食堂の方に行つてもいいぢやありませんか。」
毎度さう云つてからかふ若い者があつた。其の連中は薄給で、如何しても仕出屋の物を喰べる事は出來ない身の上なので、否でも應でも麵麭を燒かなければならないのであつた。誰が云ふとも無く、一方をブル食堂と云ひ、片方をプロ食堂と呼んだ。そんな種類の下らない新聞語を無闇

に使ひ度がるのも勤人の間の流行で、且又それ丈の事でも、何となく口にするのが新知識らしく思はれて得意なのであつた。

「私は胃が弱いものだから、麵麭一枚が丁度ですよ。晝飯に何か喰べると、どうしても體の具合が惡い。」

今日も亦節三は、同じからかひ面の社員に對して、何時に變らぬ眞面目な辯解を試みながら、うつかりすると焦げつきさうな麵麭を引くりかへしひつくりかへし、忙しく手を動かして居た。

「それに今度の臨時賞與だつて、柏さんどころは大したもんでせう。」

又別の一人が羨しさうな、その癖少なからず嘲笑的な態度で口を出した。節三は面白くなくなつて、牛酪を塗つた麵麭の熱いやつを口に入れて、ふうふう云ひながら喰べて居た。口の中に何かゞある間は、こんなてあひにかかはつてゐないでも濟むと思ふのであつた。

「兎に角明日は僕達の方の係だけでも忘年會をやるんだな。」

「やらう、やらう。何時ものやうなしみつたれなんでなく、寧ろ小人數で徹底的にやる方がいいぜ。」

誰も彼も目の前に現金が積まれた程の喜びをあらはして、忽ち一座の話題は臨時賞與に集中し

てしまつた。節三は一人默々として、一枚の麵麭の最後の一片を丹念に嚙んで、呑込んで、番茶を啜つて居た。
「柏さん、柏さん。」
廊下の遠くから呼びながら來た給仕が、食堂の入口で、又一際高く呼んだ。
振返つた節三の姿を見ると、
「面會です。」
と云ひ捨てたまゝ、無雜作に引返して行く。節三はあたふた其後を追つた。
「おい、おい。面會つて誰だい。又新聞屋ぢやあないのか。新聞屋なら斷らなくてはいかんぜ。第一名刺を貰はなくては困るぢやあないか。」
階段を上らうとする所で追ひついて云ふと、
「名刺は無いつて云ふんです。」
年中、社員から貰ひ集めた雜誌を讀んだり、少年雜誌や少女雜誌に名前をかくして——時には女らしい名前も使つて、投書したりして居る生意氣盛の給仕は、故意に佛頂面をして答へた。
「名刺が無ければ名前を聞くんだ。あれ程ふだん云つてあるぢやあないか。」

節三は段々の中途で追ひ越しながらたしなめてやつた。給仕は背後で舌を出して、活動寫眞で覺えた型で一寸肩をつぼめたが、何を云つてやがるんだと云ひ度さうなふてくされた態度で、リゴレツトオの一節を輕く口笛で吹いて居た。

受附のところに行つて見ると、其處に立つてゐたのは沼尻だつた。

「やあ、昨日は失禮しました。恰度お出かけの所だつたのに長座して濟みませんでした。」

今日は綺麗に顏をあたつて、風采を整へたのが、つかつか寄つて頭を下げた。

「まあ此方にお出でなさい。」

節三は相手の來意を推測して、早くも當惑してしまつたが、立話も出來ないので、出入商人などの通る狹い應接室に案內した。

察した通り沼尻は、節三に賴み込んだ奉公口について、飽迄も振捨てられまいと思つて來たのであつた。今日も亦繰返して自分の窮狀を訴へて、是非とも此の會社に勤めさせて吳れと、思ひ込んだ樣子を見せて賴んだあげく、

「支配人には話してくれましたか。」

と、昨日の節三の言葉をつかまへて放さないと云つた調子で訊くのであつた。

「いや、まだ話しはしませんがね。今朝は馬鹿に忙しかつたものだから。」

「どうでせう、實は履歴書も書いて持つて來たのですが、直接支配人に逢つて頂くといふわけには行かんでせうか。」

洋服の内がくしから、彼が自慢の達筆で認めたのを取出した。節三はそれを手に取上げてひろげて見た。本籍地、現住所、姓名、生年月日と型通りに書いてあるのだが、學校卒業後の職業については、極めて曖昧にしか記して無かつた。其の點がひどく不愉快に思はれたので、節三の廣い額に皺が寄つた。

「其處のところは一々詳しく書いてもいゝのですが、餘りひつたゝない履歴だから略しました。質問があつたら口頭で答へた方がよからうと思つて。」

最初から支配人に逢ふ積りらしく、ずばずば口をきく相手の厚かましさに壓倒されて、節三はどうでも立上らなければならなくなつた。

「では支配人に相談して見ませう。しかし度々云ふ通り、此頃の事だから、増員はむづかしいかも知れない。」

履歴書を手にして應接室を出たが、二階へ上る一段々々の氣の進まない足取は重かつた。

廊下で又も躊躇したが、思ひ切つて支配人室の戸を叩いた。
「おう、柏君か。今君を探しに給仕をやつたところだつた。」
先方が待構へてゐて口を切つた。
「一寸面會人がありましたので。」
「いや、外の用では無いのだが、今日は午後からおもてに出かけなければならないので、其の前に明日の支拂の傳票にも目を通して置かうと思つてね。なあにどうせ盲判なんだけれど。」
矢張り賞與金の影響か、ひどく御機嫌らしく、目尻に幾條も小皺を浮かべてゐた。
「すつかり準備をして、お食事が濟んだらお目にかけようと思つて居りました。」
節三は自分の方の用事は云ひ出し惡くなつて、急いで自席に戻ると、金庫から書類を取出して來た。
物馴れた樣子で支配人は、給料支拂調書や年末賞與金調書をぱらぱらめくつて見て、一々傳票に判を押し、最後に、自分を筆頭に社員の名前と勤續年數と、現在給料額と交付金額の記してある最も部厚な一冊を、叮嚀に一枚々々めくつて、其處に記された臨時賞與金額を樂しむもの丶やうに見た。

「先づこれでめいめい洋服の一着も出來るし、細君や子供を喜ばせる事も出來るといふものだ。」
すつかり滿足した態度で、最後の捺印をした。
「どうも柏君にはいろいろ御苦勞でした。」
支配人はさう云つて、書類を節三の方に押して寄越した。
「おかげさまで私共迄たぶんの賞與を頂く事になりまして……」
顏の赤くなるのを感じながら、節三は叮嚀に頭を下げた。
それで用事は打切りと思つたので、支配人は机の上にたまつて居る他の書類を引寄せて、節三の方には横顏を向けて讀み始めた。節三は取附場の無いやうな氣もしたが、此の機嫌のいゝ時を利用しなくては駄目だとも思つた。其處でおづおづ口を切つた。
「つかん事を伺ふやうですが、こちらでは只今社員は絕對に御採用になりませんでせうか。」
「といふと。」
支配人の幅の廣い顏が向直つた。
「實は私の古い友達で、是非ともこちらに雇つて頂き度いと云ふ者がありますので……」
彼は沼尻の履歷書を取出して、自分と同窓の關係から、最近朝鮮で勤めてゐた會社の悲運に遭

遇して職に離れて困つて居る事を、相手のけしきを心配しながら話した。

「絶對に採用しないと云ふ事もないが、御承知の通り現在の財界の狀況では先づ人間は要らないのが通例だが、しかしいゝ人物なら取らない事もない。」

節三が氣を兼てはらはらしてゐるのとは反對に、一人の人間が喰へないで困つて居ると云ふ事などは別段大した問題とも思はないので、支配人は面倒臭さうな口をきいた。

「實はね。君だから話をするが。」

支配人は節三の恐縮して居る樣子を見て、物柔かに聲をひそめた。

「人間の頭數は現在でも多過る位だから、今度の臨時賞與が渡つたら、これを機會に多少陶汰しようかとも考へて居る。會社にも隨分古手で役に立たないのが居なくもないのだから。其處で間に合ふ人間なら、かはりに入れてもいゝと思ふ。これからは能率第一主義で行かなければいかんよ。」

いかにも自分の大方針らしく云つて、

「どうだね、その人物は。」

一寸履歴書の上に目を走らせたが、矢張り身に沁みて讀みはしなかつた。

「實は本人か只今來て居りますのですが。」

あまり押つけがましくはあるまいかと思つて、節三は怖る怖る云つてみた。

「よろしい。逢ひませう。かまはないから此處へ連れて來給へ。柏君の推薦する人物なら間違は無いだらう。」

意外に簡單に云つてのけて、又別の書類に忙しさうに目をさらした。自分は忙しいのだ、奉公口を探す人間の一人や二人はどうでもいい、手早く片づけて吳れと云ふ樣子がありあり見えた。節三はすつかり恐縮した態度を示して一禮して其の室を出た。

もとの應接室に待つて居る沼尻のところに、使命を果した安心を持つて歸つた。

「兎に角支配人が逢はうと云つてゐるから二階に來て吳れ給へ。」

「それはどうも御骨折でした。」

沼尻は立上つて、一寸襟飾の結目に手を當てて形を整へ、毛の擦り切れた洋服の上着を引張つて、取すました顏をして節三の後について來た。其の一生懸命な樣子を見ると、節三は思はず微笑が浮んだ。

しかし、自分の推薦する人物なら間違ひはあるまいと云はれる程信賴されてみると、何となく

ぶきみな感じがした。勿論支配人に信頼されてゐるのは嬉しかつたが、若し面談の上落第したら、沼尻に對して氣の毒なばかりでなく、支配人に對しても、自分の眼識の無い事をさらけ出したのと同様で申譯が無い。然りとて又及第して採用されてから、萬一何か間違ひでも起されては堪らないと思ふと、いつそ一時の氣まづさを忍んでも、落第した方が無事かとも考へられる。彼は同じやうな懸念から、曾ていろんな人から紹介を頼まれても、何だ彼だと云つて逃げてゐたのであつた。その心配が支配人室の戸口に近づいた時、一番強く胸にわだかまつてゐた。

戸を叩くと殆んど同時に、支配人の聲が答へた。節三は沼尻を従へて入つて行つた。

「えゝ、只今お願ひしました沼尻君で御座います。」

さう云つて紹介したが、わざと重味をつける積りか、支配人は讀みかけの書類から、暫くは目を離さなかつた。やがて徐ろに幅の廣い顔を振向けると、妙ににこにこした笑を目尻に浮かべて、

「沼尻さんですか。私は戸田です。」

とはつきり名告つて、縁無しの眼鏡の下から、心の中迄も見透すと云ふ自信を持つてゐるやうな目差を、沼尻の方に眞當面に向けた。

「委細は柏君から聴きましたが、うちの會社で働いて見度いと云ふ御希望ださうですな。」

「はあ、是非とも使つて頂き度いと思ひまして……」
沼尻も油斷なく支配人の態度から顏色迄も密かに注視しながら、存外くみし易さうに思はれたので、もう一度頭を下げて、願の條を述べた。
「はゝあ、左樣ですか。內地もひどい不景氣で、手痛い打擊を蒙つたところも多いが、殖民地は又格別でせうからな、それはお困りでしたらう。」
力のある聲で明晳な物の言ひ方をする沼尻の樣子にぢつと目をつけてゐた支配人は、机の上の履歷書と本人とを、かたみがはりに見比べて云つた。
「ところで其の商事會社に入る前には如何いふ方面に御活動でした。たしか學校は柏君と同期ときゝましたが。」
「はあ、學校を出ると直ぐ、暫時の間或個人商店に勤めた事も御座いましたが、少々大きい野心を起して朝鮮へ出かけましたのです。それからはあらゆる經驗を致しました。つまり私の暗黑時代で御座います。」
「暗黑時代か。ははは……」
支配人は肥つた腹に波を打たせて笑つた。

「よろしい、よろしい。海外で爲事をする人には免れない運命ですよ。」

平生下役から無闇にいんぎんな挨拶ばかりされつけてゐる支配人は、目見榮に來たばかりで、ざつくばらんに物の言へる人間をひどく頼母しく感じたらしかつた。

「ところで給料はどの位欲いと云ふやうな希望でもありますか。」

「それは下宿にひつそくして居ります位で、明日の事も心配になる身の上で御座いますから、頂けるだけ頂き度いのは山々で御座いますが、しかし會社の立場として見れば、間に合はない人間に給料をお出しになるのは御損ですから、此の際給料は別問題として、兎に角使つて見て頂き度う御座います。その上で間に合ひませんでしたら、直ぐにもお暇を出して頂きます。萬一何かしらお役に立つやうでしたら、其の時になつて働き相當の給料をきめて頂き度う御座います。」

沼尻はすつかり相手の氣分を呑込んで、愈々力強い調子で口をきいた。傍に立つてゐる節三は、平生自分がびくびくして物を云つてゐる支配人に對して、初對面から馴々しく喋り立てる友人を羨しくも思ひ、危つかしくも思つた。あんまり喋り過ぎてしくじらなければいゝがと心配してゐるのであつた。

「ふむ、その覺悟ならよろしい。外ならぬ柏君の口添もある事だから、別段目下手不足と云ふわ

けでもないが、ひとつ働いて貰ふ事にしませうか。しかし今年ももう四五日の事だから、先づ來年の正月から出てお出でなさい。私は今日はこれから一寸外出しなければならないから失敬します。給料其他の事は柏君と相談してきめる事にするから其の積りで居て下さい。」

支配人は金鎖を引張つて、胴衣のかくしからするする時計を引出して見ながら、早くも椅子から腰をうかした。

「難有う御座います。ついでに私からお願ひ致しますが、おもて向の出勤は來年からと致しまして、一日も早く事務の様子も見覺え、社內の規律にも馴れ度いと思ひますので、今日からでも、明日からでも、見習として社內の出入をお許し下さるわけには參りますまいか。」

沼尻は、いかにも熱誠をこめた心持をおもてにあらはして頼んだ。

「面白い。勤人はその精神でなければいかん。」

支配人は頗る滿足した面持ちで、大きくうなづいた。

「柏君。萬事は君のはからひに任せるから、よろしく指導してあげて呉れ給へ。私はもう時間だから失敬します。」

もう一度時計を見て、あわたゞしく外套を着た。

「まことに難有う御座いました。」

節三も支配人の滿足した樣子を見ると、自分がほめられたやうな氣になつて、少からず感激し、沼尻と並んで叮嚀に頭を下げた。その時旣に支配人は、戸をあけてさつさと室外に出て行つた。

「柏君。君の御恩は一生涯忘れません。」

芝居がかつた誇張した態度で、沼尻は吃驚してゐる節三の手を取つて固く握りしめ、大仰な感謝の言葉を繰返した。

六

二十五日の給料日には、社員は仕事に手がつかなかつた。人事係の節三と、二人の下役は年末賞與の辭令を、みんなの机の上に配つて廻つた。

「御苦勞さま。」

「難有う。」

受取る者は押殺さうとしても浮び上つて來る微笑を滿面に湛へて、わざと冗談らしく頭をさげ

たり、額を叩いたりした。

午後になると、手に手に認印を持つて、會計のところへ行つて、封筒に入つてゐる嵩高な金額を受取つた。誰の顔にも、善良な安心の相好が現れて居た。

地下室には出入商人が詰めかけて、かけ賣の代金を取立ててゐた。洋服屋、靴屋、西洋小間物屋などにまじつて、竊かに麵麭や煙草を賣る小使の爺さんまで、大きな財布を首にかけて、かけ賣の相手を探してゐた。

「おい、僕の勘定はいくらだい。」

いつもは二十五日になると、決して地下室には下りて行かないで、どうかして支拂を逃れようとたくらむ連中迄、自分の方から商人の姿を求めて、財布の口を開くのであつた。

たつた一人浮かない顔をして、節三の机の傍にぼんやり腰かけて居るのは沼尻だつた。彼は漸く衣食の費用にありついた安心と、勉強振を見せようとする緊張した心持で、いきかへつた氣持がした。支配人は年があけた仕事始の日から出勤しろと云つたが、不愉快な下宿の一室に無智でしつつこい女と差向ひで、火鉢の火にも乏しいおもひをして暮らして居るよりは、暖房裝置の完備してゐる會社の暖い事務室の方がましだつた。おまけに、どうかすれば日割の給料も貰へるか

もしれないので、事務を見習ひ度いと云つて出かけたのだつた。

「何かお手傳しませう。」

と幾度も云つて見たけれど、今日はとりわけ忙しく、他事を顧る暇も無い節三は、ろくに返事もしずに立働いて居た。

午後から、社員は社長と支配人の室に、めいめい御禮を述べに行つた。中でも主任次席級の者は、一人々々社長の室に呼ばれて、包金を貰つた。

「平素の御勤勞に對する微意に過ぎません。」

七十近い年齢(とし)をして、未だに女好(をんなずき)の噂の消えない禿頭の社長は、平生は狂歌や地口(ちぐち)を得意にして、洒脱を自慢にして居るのだが、此の日は怖しく眞面目な切口上で、奉書に包んだ一封を、興奮して固くなつて居る社員の手に渡した。

人事係の主任として、且十年以上の勤續者として、節三も社長に呼ばれた一人だつた。うやうやしく兩手を差延ばして受けた紙包の、豫想したよりも遙かに手ごたへのある重味に、息の詰るおもひをして、幾度も頭をさげてお禮を述べて廊下に出ると、おもはず額の汗を拭いた。直ぐにも紙包を開いて中を改めて見なければ安心出來なかつた。外には人目を避けるいゝ場所も無いの

で、便所に入つて金額を調べた。半年分の給料に相當する眞新しい札が一枚々々こゝろよく指頭に觸れた。ふだんは持たない大型の紙入を用意してゐたが、月給と年末賞與と、他の社員並の臨時賞與と、更に此の社長の手から直接うけとつた包金を一緒にして納めると、縫目の糸が切れはしないかとあやぶまれる程ふくれ上つてしまつた。それを内衣嚢にしまつて、一切の仕事の一段落ついた安心で、疲れ切つて自席に腰を据ゑたのは、その日も退出時間近い頃であつた。

會社では毎年の例になつてゐて、正月の十日頃に新年會をやる事になつてゐるが、それは大概築地の精養軒ときまつてゐて、西洋料理ではくつろげ無い社員には、何の滿足も與へないのであつた。極々お手輕な獻立にしても一人前七八圓はかゝるので、御馳走になる側から、いつそ酒肴料として金で貰ひ度いと云ひ出した事もあつた。そのかはりに、年末の賞與が手に渡ると、どの係でも小人數の忘年會をやるのがおきまりだつた。わけて今年は誰の懷も充實してゐるので、時計が四時をうつと一齊に仕事をしまつて、それぞれの目的を樂しみながら、連立つて事務室を後に出て行つた。

人事係丈は、人數が少いのと、主任の節三が酒を飮む事を好まないので、別段の計畫も無かつたが、外の係の者がはなばなしいもくろみを話してゐるのを聞くと、二人の下役は何とかしなけ

れば外の社員に對して顏が立たないやうな氣持になつた。
「柏さん、吾々の方も愉快に飲まうぢやありませんか。」
「是非贊成して頂き度いんですが。」
山東（さんとう）と猪股（いのまた）は、いつそ節三をぬかして二人きりで遊びに行かうかと云ふ相談もしたのだが、結局月給額を標準にして割出す會費の關係から、節三をも誘ひ出す事にした。
「飲むと云つても僕は飲めないからなあ。」
節三はちつとも氣が進まないので、歸支度をしながら迷惑さうに云つた。
「飲めなければ喰べればいゝでせう。」
「それも胃弱で人並以下だからねえ。」
「そんな事は云はないでおつきあひなさいよ。吾々の方だけですぜ、何の計畫もないのは。ただ愉快に遊べばいゝぢやありませんか。」
猪股はいきり立つて、小じれつたさうに舌うちした。
「遊ぶつていふと、何ですか、何か特別の計畫でもあるんですか。」
節三は遊ぶといふ言葉が喚起（よびおこ）す聯想から甚敷（はなはだし）く不安を感じた。

「ハハハハ……遊びは遊びでさあ。」

今迄默つて手持無沙汰を極めてゐた沼尻が、突然言葉を挾んで笑つた。

「柏君、私も御一緒に數に加へて頂いて、今夜は飲まうぢやありませんか。諸君のやうに莫大もないボオナスを貰つた方にあやかり度いですね。羨望に堪へませんからなあ。」

彼は高々と笑つて、全く馴染の無い二人にもへだて無く口のきける態度を示した。

「それでは牛肉でも喰べようか。」

節三は矢張り遊びといふ言葉の怖しさが忘れられないので、銀座の松喜で食事をすると云ふ條件つきで澁々同意した。

「牛鍋ぢやあとてもつまらないなあ。」

「いゝさ、いゝさ。二次會は別だからね。」

生若い二人はひそかに不平を云ひながら、平生まるつきりつきあひの惡い節三を、口說き落した事で滿足して、すぐさま出かける支度をした。

大枚の金を懷に持つて居る節三は、不安心で堪らなかつた。上衣の鈕をかけても、胸のところだけ盛上つてゐるので、幾度となく手で押へては、乳のあたりにこたへる重味に安心した。人出

の多い往來に出ると、一層不安は強くなつて、殆んど絶間なく、彼の手は自然と胸を押へるのであつた。落したり掏られたりする場合ばかりが、繰返し繰返し想像に浮んで爲方が無かつた。若い二人が先に立つて、肩と肩に手を置き合つて歩いて行く後から、節三と沼尻はめいめい違ふ心持でくつついて行つた。

「柏君、今晩の會費は立替へといてくれませんか。何れ月給を貰つたら返しますから。」

前の二人に聞えないやうに、沼尻はさゝやいた。節三は默つて頷いたが、實は面白くなかつた。彼の性分としては、無一文の癖に飲喰ひの會合に顔を出す人間の心持が了解出來なかつた。

松喜の二階の奥座敷で、外に一組矢張り月給取らしい三人連があつたが、そんな事には頓着なく、若い二人は直ぐさま沼尻と盃の交換をしていゝ機嫌になつてしまつた。

「柏さんもう一杯お飲みなさいな。」

至極く酒量は無いくせに、飲んで醉ふ事の好きな山東は、度々徳利を持つて勸めた。

「駄目々々。僕はシトロンだ。」

節三は一巡盃を受けた丈で眞赤になつて胸の動悸が高くなり、泡立つて煮えてゐる肉にさへ箸を持つてゆく氣になれなかつた。

「意氣地が無いなあ、柏さんは。それに比べちや此の人は豪傑だね。豪傑もう一杯如何です。」
「飮むとも。かう見えても滿洲朝鮮を縱横に踏破した男です。柏君とは違ふからねえ。」
「こいつは話せら。」
若い二人は左右から沼尻に盃をさした。
最初のうちこそかなり執拗く盃を押つけもしたけれど、片方も頑強に拒むので、しまひには節三は、居ても居なくてもいゝ人間になつてしまつた。彼はなかなかさめない醉をもてあまして、窓際の壁に背中をつけて、あくびの出さうな心持に惱んでゐた。その癖矢張り懷の金が氣がかりで、それ丈はまめに手で探つてはひそかに樂しんでゐた。早く歸つて妻に見せ度くもあつた。かと思ふと、又何かねだられさうな氣がして、いつそ半分位はかくして銀行に預けるか、それでなければ確な株でも買はうかとも考へた。
「あゝ醉つた、醉つた。」
さゝれゝばさゝれる丈、滅茶飮みに飮んでゐた山東は、何時の間にか全身に酒が廻つて、體を支へてゐるのも苦しさうな樣子になつた。
「もう參つたのか。口程にもなく弱いなあ。」

これも流石に赤くなつた沼尻は相手を勵ますやうな調子で云つた。
「猪股君は未だいけさうだね。酒は僕が負擔するから大に飲み給へ。沼尻入社祝賀會だ。」
彼はすつかり氣が大きくなつて、苦い顏をしてゐる節三の方を、見て見ないふりをして、しきりに飲み且喰つた。
「しかし牛屋で醉拂つても始まらないからなあ。」
猪股は臺の上に肱をついて、重たくなつた顎を支へながら、口丈は一人前の事を云つてゐた。
「さう馬鹿にしたものでもないさ、僕がひとつ本場仕込の鴨綠江節でも聽かせようか。」
沼尻はもつたいぶつて體を立て直して、ちつともあたりを憚らない聲で歌ひ出した。

朝鮮と支那の境の
あの鴨綠江
流す筏はアリヤよけれども
雪や氷にヨツコリヤ閉されてヨー
……………………

向ふの一隅で飯を喰べ始めた三人連も、驚いて振向いて箸を止めた。節三は全く居たゝまれな

くなつてしまつた。

「よう、よう。其處々々。」

山東はふらふらして、なかなかかち合はない手を叩いてはやし立てた。

「今度はサノサをひとつ行かうか。」

沼尻は冷くなつた盃を口に持つて行つて、厚ぼつたい脣をなめながら姿勢を正した。節三はそれを見るとすつかり不愉快になつて、總身に冷汗を感じ、居たゝまれない氣持に襲はれた。

「僕は一足お先きに失敬します。何だか風邪を引きさうな氣持がして爲方がない。」

さう云つて頭を下げると、側に置いてあつた外套を取つて立上つた。

「柏君、まあいゝぢやありませんか。」

沼尻は狼狽てて追ひ縋つたが、節三はさつさと廊下に出て、大金のはいつてゐる懐を押へながら油光(あぶらびかり)に光つてゐる梯子段を下りた。

「まあ君はゆつくりして行つて呉れ給へ。」

一緒に歸らうとするのでもなく、見送りの形でついて來た沼尻に言葉を殘して、彼は素早く大通に出てしまつた。冬の夜のつめたい風が、胸にもたれる牛肉の臭を吹き消すやうに顏にあたつ

た。

若い二人は上役に對する平生の禮儀も忘れ、身を動す氣力も無く酒の醉に心身を任せ切つてゐた。

「なんでえ、面白くもねえ。柏さん程面白みのない人間もないもんだなあ。俺あこれから飲むよ。おい、吉原に行かうぢやあないか。」

給仕上りの猪股は、意氣地のない主任の後姿を罵るやうな調子で云つて、昂然としたが、矢張り頭はふらふらした。

「えゝ、吉原へ行かうぢやないか。」

「うむ、何處でもいゝから連れてつてくれ。」

山東は胸にこみあげて來る苦い胃液を嚙むやうな口つきをして、食臺の上に突伏してゐた。

「どうした、どうした。もう諸君は飲まないのか。」

節三を見送つて來た沼尻は、一番自分が確かなのに滿足して、まだ大丈夫だといふところを見せる爲めに、誰かゞ飲み殘した盃を取つて、底に殘つてゐる酒を音をさせて吸つた。

「うゝむ、俺はもう駄目だ。」

突然山東は立上ると、こみあげて來た吐氣を堪へながら廊下に出たが、便所迄行く餘裕は無く、緣側の欄干につかまつて、亞鉛葺の屋根の上に、すさまじい勢で吐いた。

「どうした、どうした。」

「苦しいか。しつかりしろ。」

左右から背中を抱へられて、いろんな言葉をかけられた事はたしかだつたが、當人はもう頭の中に酒が渦を巻いて、何が何だかわからなくなつてしまつた。

「爲樣がないなあ。暫く寢かして置くか。」

猪股がさう云ふと、

「うゝむ、歸る。歸るよ。」

山東はぐつたりと全身の重味を託してゐた欄干から無理に身體をはなして、室の中に戻ると、外套を取つて着ようとしたが、足下がきまらないので、危くつんのめりさうになつた。

「危ない、危ない。」

沼尻は大きな兩手を擴げて、小男のからだを抱きかゝへた。

「ちえつ、厄介なお荷物だなあ。」

猪股は酔眼を見張つて舌うちしたが、どうしても外に出る外には途が無いので、手を叩いて勘定をいひつけた。

其の間に沼尻は、山東の後から外套を着せかけてやつた。さういふ所作をしてゐる間は、勘定の問題に觸れないで濟むといふやうな、卑怯な根性も働いてゐた。

「難有う。難有う。」

うはの空の禮をいひながら、横つちよに帽子をかぶつて、歩き出した山東は、外套のかくしから毛糸の襟巻と毛糸の手袋を取出す拍子に、桃色の西洋封筒を疊の上に落した。

何氣なく沼尻はそれを拾ひあげたが、艶かしい紫のインキの色を見ると、深い祕密の鍵を握つたやうな心持で、密かに自分の洋服の胸にしまつてしまつた。

勘定を濟ませた猪股と、沼尻とに兩方から抱かれながら、山東は危ない梯子段を下りて、長い間かゝつて編上の靴の紐を結んだ。

戸外に出ると賑かな歳晩の銀座の人出と、夜店のあかりに、目がくらむ程強い刺戟をうけたが、山東はもう方角もわからなかつた。

氣のついた時は、何處かお堀のそばを、車から半身はみ出したまゝ搖られて通つてゐた。途中

で往來に帽子を落してしまつたので、醉つて吐いたあげくの青ざめた額に亂れかゝる長い髮を、氷のやうに鋭い風が、容赦なく弄んでゐた。

七

「お寢坊のお寢坊の山東さん」

ぐつすり寢込んでゐる耳もとで、甲高い聲でよばれて目が覺めた。目脂がかたくまつげにこびりついてゐて、開かうと思つても開けなかつた。

「もう起きないと遲くなりますよ。」

枕頭に輕く片膝突いて、小婢のおさきが笑つてゐた。

「あゝ眠い眠い。」

山東は頭から夜着をかぶつて、くるりと寢がへりを打つた。昨夜の深酒が殘つてゐて、頭から足の先迄、全身燃えるやうに熱かつた。

何時からついた癖なのか、殊に時々酒を飲むやうになつてから、何時の間にか寢坊になつてしまつた。國から出て來た頃は、下宿屋でも一番の早起で、人のいゝかみさんのほめものだつたし、

誰よりも先きに顔を洗つて、熱い飯をふうふう吹いて喰べたものだつたが……山東はそんな事を考へながら、自分自身の臭ひのする蒲團の中で海老になつてゐた。

チョツと小生意氣に舌うちして廊下に出て行つた小婢の足音は、梯子段をひとつひとつ、ふてくされに踏みながら、遠く階下の方に消えて行つた。山東は又一寢入り寢込んでしまつた。

二度目に目のさめた時は、もう出勤時間には間に合はない頃だつた。あわてゝ飛起きはしたが、宿醉の不確かな足は思はないところを踏んで、彼は自分の枕につまづいて倒れた。

顔を洗つて、洋服を着るには着たが、頭がぼんやりしてゐて、一切の事が億劫だつた。いつもはかぶりつくやうにして、四杯も五杯も喰べるのだが、今日は飯の臭ひさへ胸が悪かつた。それでもお給仕の小婢に弱味を見せない爲め箸は取つたが、方々の部屋でつゝき荒されたおはちの中の飯粒は、寧ろ忌々しいものに思はれた。

「おや、もうおしまひ。」

お盆を持つてかしこまつて居た小婢は、わざと驚いた顔をしてきいた。

「ゆんべ飲み過ぎたんでしよ。」

からかひ面で云つたけれど、山東は返事もしなかつた。

「おい僕の帽子は如何したらう。」

立上つて壁にかけてある外套をはづしながら、それと一緒にある筈の帽子の見えないのにうろうろして、其處いらを見廻した。

「あたし知りませんよ。あんたゆうべいゝ所に忘れて來たんでしよ。」

云ひ捨てゝ、小婢はおはちを抱へて逃げて行つた。

帽子は買つてから間の無いものだつた。此間迄は鳥打ですまして居たのだが、暮の賞與をあてにして、その時懐にあつた金をはたいて流行の薄色のやつを求めたのであつた。銀座の松喜に置忘れたとは考へられない。確かにかぶつて出た記憶がある。もしかして往來に落したのかしらと思ふと、彼はすつかり不愉快になつてしまつた。止むを得ずに、押入にはふり込んで置いた古びた鳥打を出してかぶつたが、たつたそれ丈の事でも、ひどく身柄が悪くなつたやうで、下宿の者にも往來の人にも、殊に會社の連中にも、あはせる顔が無い氣持だつた。

會社の連中の事に考へ及ぶと、彼のぼんやりした頭腦にも、重大な事を忘れてゐたのに氣が付いた。あわてゝ外套のかくしを探して見たが、毛糸の手袋と電車の回數券の外には何も無かつた。内がくしにも、洋服の上衣のかくしにも、胴衣のかくしにも、彼の心配の絡みついてゐる桃色の

封書は見出す事が出來なかつた。山東の胸はどきんどきん動悸を打つた。

どう考へても、それを郵便函に入れたおぼえは無い。矢張り往來で落したのかしら――山東は非常な悪事を犯したやうな後悔に責められた。若しも他人の手に開かれたら如何しよう。その他人が會社の人間だつたら如何しよう。さう思ふと、拾つたのが支配人のやうな氣もするし、係の主任の節三のやうな氣もする。幾度となく書いては破り、書いては破りしたあげくに、封筒に入れて切手迄貼つたが、それでも未だ出さうか出すまいかと迷つてゐた手紙だつた。山東はすつかり悄氣てしまつた。

どんよりと曇つた空は、未だふらふらする山東の頭の上に、重苦しくはびこつてゐた。下宿の格子戸を開けて往來に出るには出たのだが、今日は全く會社へ行くのがいやだつた。古びた三階建築の煉瓦造の會社のかたち迄呪はしくなる。つゞいては、何時も几帳面を看板にして居る主任の節三の黄色い顔が、不愉快に想ひ浮んで來た。

毎朝、突飛ばされたり、足を踏まれたり、時には人間の乘るべきところで無い車臺の外の窓の金棒にぶら下つたりして、一生懸命で乘る電車も、時間が遅いので、空席が多かつた。楽々と腰をかけて、窓硝子に後腦を押當てゝ目をつぶつたが、體はぐつたり疲れてゐても、心配はいきい

きと胸を刺すのであつた。平生はもどかしく思ふ電車の速力も、今日は早過ぎてしかたがなかつた。

いつもの停留場で下りると、目の前に並んでゐる大通の商店の屋根の上に、會社の煉瓦造が嚴然と聳えてゐる。その二階の、暗い北向の一室で、毎日々々取るにも足りない下仕事をさせられてゐる自分の姿が客觀的に目に浮ぶ。勘定して見る迄も無く、此の一生の最も多くの時間を費すのは、其の一室に違ひ無かつた。薄汚れた白い壁、墨とインキの滲み込んだ、小刀傷の夥しい机、うづ高い書類のかげにかくれるやうに背中を曲げて、せつせと働く若者――それが自分なんだと思ふと山東は足が進まなかつた。彼は入口の石段の下に立つて、ためらひながら吐息をついた。

今にも其の大きく開いた魔物の口のやうな玄關から、何時も快活に、子供のやうに驅足で廊下を飛廻り、晝休の時などは、少し鼻にかゝる聲で歌をうたつたりして居る廣川の小柄な姿が、飛出して來さうに思はれた。ふだんは絕間なく自分の視線をひきつけるその姿が、今日に限つて怖しく押迫つて來るものとして想像された。

誰も彼も、受附のよぼよぼのぢいさん迄も、自分が廣川に手紙をやつた事を知つてゐさうで爲方が無かつた。

「お早う。」
いきなり後から肩を叩かれて、山東はおびやかされたやうにどぎまぎした。
「馬鹿にゆつくりぢやあないか。どうしたんだい。」
庶務係の下村といふ若いのは、元氣のいゝ聲で云つて、促すやうに肩に手をかけたまゝ、一緒に石段を上つた。
「あゝ、一寸急用が出來たもんだから……」
「急用？　僕は朝つぱらから役所に使ひにやられちやつた。」
何も知らないらしい相手の樣子に、山東はほつとしたが、胸の動悸は靜まらなかつた。廊下であふ誰も彼も、常になく遲く出勤したのをいぶかしがつたが、當人にして見ると、手紙の一件がばれたのだと思はれて、不安心で堪らなかつた。
下村と別れて梯子段を二階へ上ると、上り切つた廊下の一隅に三四人女事務員が顏を集めて立話をして居る。ぎよつとして、誰と誰とが話しをしてゐるのか見定める勇氣も無く、眞赤になつて通り拔けた。
自分の係の室に入ると、みんな忙しさうに働いて居た。足音を聞いて、正面の机に坐つて居る

節三は、上目でぢつと見守る樣子だつた。何も彼もお前のした事は、一から十迄知り拔いてゐるぞと云ひさうな、底氣味の惡い白眼だつた。

「どうも遲くなりまして相濟みません。」

山東は無闇にぴよこぴよこ頭を下げて、一隅の自席に逃込むやうに引下つた。隣席の猪股は意地の惡い横目をつかつて、口もとだけで笑ひかけたが、彼は相手にならずに、俄に忙しさうに書類を取擴げた。

機械的に、毎日の生活の殆んど全部に等しい仕事に取りかゝつたが、ちつともはかどらなかつた。今にも手紙の事で節三に呼ばれて、詰問されはしないかと、そればかりが心配だつた。往來に落して、そのまゝ人に踏まれて、泥にまみれてしまつた場合も想像されるにはされるのだが、そんな幸運は惠まれさうも無かつた。

何にしても、手紙の末尾に自分の名前を明かに書いたのは失敗だつた。隨分長い間、匿名にしようか、如何しようかと迷つたあげくの事だつたが、匿名では相手の心を知る事が出來ないので、思ひ切つて本名を記した。尤も封書には女らしい字で江川よりと認めた。江川は今の下宿の前を流れる江戸川にちなむだ洒落であつた。

なあに、存外手輕に成功するだらうと、ひどくたかをくゝつたのも、つひぞない多額の賞與金が懐に入る事になつて、浮調子になつた結果だつたかもしれない。手紙を受取つた女は、小首をかしげるふだんの癖を出して、不思議がるに違ひ無い。中を開けて讀めば、あの柔かさうな頬邊に、紅く血がのぼるに違ひ無い。昨日の夕方迄、彼はさういふ種類の想像をたくましくしてゐたのだつたが、今になつては一切が、醜い破滅へ導く段階だつたとしか考へられなくなつてしまつた。身に迫る不安に仕事はまるきり手につかなかつた。

一體其の會社で女の事務員を採用したのは、つい去年からの事だつた。いゝ年をして、いまだに浮氣の止まない老社長は、自分の事は棚にあげて、若い男と女とが一つ所で仕事をするのは、風紀上面白くないと云つて中々許さなかつたが、世上の物價の高騰に連れて、人間の値打も怖しく高くなつたので、給料ばかり高くて仕事の出來ない學校出を雇ふのは不經濟でもあるし、他の會社では夙に女を使つて居るので、安い日給で事が濟むと云ふ點を支配人は力說し、三年越懇々と利害を說かれた末に、社長も遂々承認したのだつた。女は安いと云ふ事が、彼のうなづいた唯一の理由だつた。

間も無く二十人ばかりの若い女が入つて來た。人事係の節三が、新聞の廣告を見て、採用人員

の二倍位集つて來た應募者の中から、一々面接して撰び出したのだつた。學歴と、父兄の職業と、應對を撰擇の標準にした。

薄暗い會社の中に、俄にけばけばしい色彩が強くなつた。若い社員は何れも緊張した顏付で、心密かに目星いのを物色し、やがては男同志の無遠慮の話は、新來の女の品定めに限るやうになつた。さうして何時の間にか、目に立つて男の社員の服裝が綺麗になつた。

けれども社長には氣に入らなかつた。どれもこれも白粉の濃いのが第一に目についていけなかつた。着物にしても、一圓足らずの日給を貰つてゐる者の物とは思はれなかつた。毎日抱車(かゝへぐるま)で學校に通ふ自分の娘にも劣らないのさへゐた。殊に或日、廊下で四五人の男の立話をして居る側を通る一人の女に、其の男達が馴々しく冗談を云つて、高聲で笑つて居るのを偶然目撃した時は、社長は女なんか雇入れる事を承認した自分の輕率が腹立たしかつた位だ。いつそ質素な制服を着せようかとも考へたが、そんな事では安心出事ないので、結局女達の監督を一人採用する事にきめた。

幸ひ此の頃邸へ出入する腹式呼吸の先生の親類に、遊んで居る男があると云ふので、一も二も無く雇入れた。女子事務員並に小使給仕の監督で、兼て用度の手助もさせようと云ふのであつた。

五十近い監督が巡査のやうに社内を見廻つて歩く事になつた。

彼は私立大學の文科の出身だつた。若い頃は今様風（いまやうふう）の新體詩も作つて、學生仲間では詩人として通り、當時の文學雜誌の投書欄では何時も賞金を貰つた位だつたが、腦病をわづらつてからは、全く見違へる程ぼんやりした人間になつてしまつた。同窓の仲間は、文壇に名を成したり、專門學校の教授になつたりしたのに、彼は二十有餘年間、舊藩主のたてた寄宿舍の舍監として、空しく半生を過してしまつた。しかも學生達の意地の惡い排斥にあつて、食を離れて間も無い時だつた。

「なんだい、今度來た先生は。一日中廊下をうろうろしてゐるぢやあないか。」

若い社員は監督の本堂さんを見ると、直（すぐ）に馬鹿にしてかゝつた。

「へえ、あいつが女の監督だつて。一體何の爲めに監督が必要なんだ。馬鹿にしてやがるなあ。」

女の事務員に監督がついたと云ふ事は、若者の心には手痛く觸れた。自分達が怪しからず疑はれて居るのだと感じないわけには行かなかつた。自然と本堂さんは人々に憎まれる事になるのだつた。ひどい近眼で、物を見る時には藪睨（やぶにらみ）のやうな目つきになるのや、他人と違つて歩く時に、右足が出る時同じく右の手が前に出て、左足の時には左の手がふら／＼前に出る變な歩きつきな

ぞが、殊更物笑の種になつた。
「とても低能だね。」
と、一番口の悪いのが五六遍繰返していふうちに、忽ち低能さんといふあだ名がついてしまつた。誰が云ふとも無く、彼も昔は秀才であつたが、失戀の結果腦を惡くしてしまつたのだと云ふ噂がひろまつた。
「その相手の人は其の後どうしました。」
などゝ、意地の惡い質問をする者さへあつたが、本人はにやりともしないのであつた。監督される女の方でも、監督されると云ふ事は面白く無かつた。男の方の事は何でも聞覺えてしまふので、この連中も低能さんと呼ぶやうになつた。
「あの低能さん失戀したんですつてね。失戀するのが當りまへだわよ。」
「あら、あの方もとはよくお出來になつたんですつて。詩人だつたんですつてさ。」
そんな事を云ひ合つて、あげくには笑ひものにするのがおきまりだつた。
一年半の間、殆んど誰とも口をきく事も無く、終日二階に上つたり三階に上つたりして、廊下をうろ〳〵見廻つてゐたが、みんなが此の暮の賞與金の話で夢中になつてゐる十二月の初旬に、

本堂さんは突然辭表を出して退職した。

眞淸水のあまり淸きは魚すまず

うたてき世ぞとおもひ初めてき

退職願書のかはりに、かういふ歌が認めてあつた。

それ以來女の方の監督も、人事係の主任柏節三の役目になつた。山東は腹の中では常日頃馬鹿にしてゐる相手ではあるが、兎に角係の主任で、且又女の方の監督だから、此の際矢張り節三の顏色が、一番氣になつてしかたが無かつた。算盤を彈くふりをしたり、何か忙しさうに書類をひつくりかへすふりをしながら、絶間なく氣色をうかゞつてゐたが、やがて晝の食事の時間になつたので、何事もなかつた事を喜びながら席を離れてほつとした。

「おい大將、昨夜はどうした。」

直ぐ後から猪股が追ひすがつて、いやといふ程背中を叩いた。

「どうしたんだか、ちつとも覺えてゐないんだ。とても醉拂つちやつたからなあ。」

山東もいゝ機嫌になつて、一緒に食堂に下りて行つた。手紙は屹度、溝の中にでも落つこちて、誰の手にも渡らなかつたに違ひないと思つた。

食事が済んで、裏の空地を見下す窓に寄かゝつてゐると、目の下では女の連中が、きやあきやあ云ひながら羽子(はね)をついて居た。誰よりも小柄な廣川が、一番活潑に動いてゐた。山東は誰も知らないのに、顔が赤く火照(ほて)るのを感じた。

別に美人と云ふ方では無かつたが、色の白い上に、思ひ切つた厚化粧で、襟も帯も、身につけろ一切が紅の色の勝つたものなので、それ丈でも、人目を引き易いのに、おまけに身のこなしが輕くて、兎のやうに仲間の間を飛廻り、時には聲を震はせて流行唄も歌ふといふ風だつた。電車の中などで見ると、まるで淺草の歌劇にでも出さうな娘だつた。ペラさんと云ふあだ名で男の社員は内々呼んでゐた。オペラのオの字を省いたのである。

山東は、最初はペラさんよりも、女連の中で一番おとなしく、一番目鼻立の整つた上品な顔付の、三杉(みすぎ)と云ふのに心を引かれたのだつた。それは敢て山東に限らず、外の社員も第一の美人として許して居たのだが、元來内氣な質(たち)と見えて、何時も人のかげにかくれて、追羽子(おひよご)も側で見てゐるといふ風だつた。たまに冗談を云ひかける男があつても、外の女のやうに口返答はしないで、心持顔を赤くしてうつむいて通り過ぎてしまふのだつた。そのひかへ目な態度が、何時しか男達の興味の埒外にさせてしまつた。三杉は第一の美人だとは誰しも思ひながら、此の頃は男達の下

馬評にも上らなくなつた。山東も同じ心理から、三杉には近づき難く感じ、それにひきかへて廣川には、わけなく近寄れさうに思つたのだつた。

「山東さん。」

うつかり羽子をついてゐる廣川に見とれてゐる後から聲をかけられて振かへると、にやにや笑ひながら近寄つて來たのは沼尻だつた。

「僕も今日から庶務の方の仕事をさせて貰ふ事になりました。何分よろしく。」

改まつて頭を下げたが、

「昨夜は大分御酩酊だつたが、無事に歸りましたか。」

とからかひ面で、又にやりにやり笑つてゐる。

「えゝ無事は無事でしたが帽子をおつことしてしまひました。」

山東は何となく赤面して答へた。

「へえ、帽子を。帽子は車に乘せてあげる時ちやんとかぶつてゐたがなあ。」

「さうですか。車に乘せてくれたんですか。」

さう云はれると、お堀のそばを、風に吹かれて通つたおぼえが微かにあつた。彼は閉口して頭

を掻いた。

「それから、手紙を落しはしないですか。」

沼尻は一層笑を顔中に浮べて云つたが、山東は忽ち胸騒ぎがひどくなつて、相手の顔を見る事も出來なかつた。

「どうです、落としたでせう。しかし大丈夫ですよ。誰にも見せずに郵便函に入れてあげましたから。」

親しさうに山東の肩を叩いて、からからと高笑をしたが、折柄節三の姿が見えると、そのまま其方に行つてしまつた。沼尻は拾つた手紙の宛名の廣川珠子が誰であるかを知らなかつた。勿論會社の女事務員だとは思はなかつた。何處かの女に、山東が送るたゞならぬ手紙と思つたばかりだ。從つて多分の好奇心を持つて、開封して見度い衝動もあつたには違ひ無いが、別段そんないたづらもしずに、郵便函に入れてしまつた。若い者をからかふいゝ材料だ位にしか考へてゐなかつた。

山東は沼尻の後姿を見送つてぼんやり佇んでゐた。相手は何も知らずにした事だらうとは思つても、腹の立つやうな氣持もあつた。或はまだ廣川は見てはゐないかもしれないが、しかし遲く

とも今晩は見るに違ひ無い。さう思ふと、うぬぼれはすつかり消失せて、身の上の一大事が起つたとばかり考へられる。俺もこれで此の會社もくびになるのかと最後の事迄一時に考へて、呼吸も出來ない淚ぐましい氣持になつた。何故馬鹿な事をしたんだらうと、裏の空地に目をやると、廣川はまだ派手な袂をひるがへして、はしやぎ切つて羽子をついてゐるのであつた。

## 八

よそ見には、せつせと仕事を爲て居るやうに見せてはゐるが、山東は絕間のない不安に胸を壓されて、殆んど何も手につかないのだつた。今にも廣川の紫矢飛白の着物の色が、目の前に現れさうで、帳簿面の細かい數字などは目に入らない。何時にも增して愛想氣の無いむつつりした顏つきで、部厚な書類に目を通して居る節三の樣子にも、自分に對して平かならぬ心持をいだいて居るやうな景色が想像された。誰も彼も、給仕の子供迄が、自分を輕蔑してゐるやうだつた。彼は目に觸れる人間のすべてに恐怖を感じ、且つ憎んだ。

就中一番忌々しかつたのは沼尻である。廣川へ宛てた手紙を書いたのは自分で、醉拂つて落したのも自分に違ひ無いのだが、若し沼尻さへゐなかつたら、事の破滅は來なかつたのだと思はれ

た。今になつて見ると、人を威壓するやうな沼尻の體格も、押つけがましく力のある其の音聲も不愉快だ。入社したばかりなのに、誰にでも馴々しく振舞ふのも面憎くかつた。きれぎれにしか覺えて居ないけれど、昨夜も牛肉屋の二階で、さも得意さうに流行唄なんか歌やあがつた……一々勘定するやうに考へて、愈々鼻持ちならぬ人間だと思はれた。

「おい、昨夜の會費を貰ふよ。」

猪股に呼びかけられて氣が付くと、何時の間にか節三の姿は室の中に見えなかつた。上役が居なくなると、二人は何時でも無駄話をするのがおきまりだつた。

「いくらだい。」

「四等分すれば一人前四圓二十三錢だが、此の前のやうに月給割で出して貰はうぢやないか。」

「どうでもいゝや。いゝやうにして呉れ給へ。」

月給額を標準にして會費を割當てようと云ふのは、元々山東が云ひ出したものだが、今日はそんな事位如何でもよかつた。彼は蟇口から五圓札を一枚出して、はふり出すやうに猪股の方へ投げた。

「外の係ぢやあ主任が酒位は負擔してゐるんだが、うちの大將では爲方が無いや。」

猪股はその札を手にとつて指尖で彈きながら、話相手にならうとしない山東の横顔に話しつゞけた。

「牛屋も馬鹿にやあ出來ないねえ。」

「だつて隨分飲んだもの。」

「しかし牛屋ぢやあ餘りけち臭いなあ。營業の方なんか白山で徹底的にやつたさうだぜ。」

そんな話をしてゐると、又節三が戻つて來たので、猪股も口をつぐつて、何かしきりに書いたり消したりしてゐた。

暫時すると立上つて、節三の前に進んで行つた。

「昨晩の會費を頂き度いんですが。」

「いくらですか。」

「先例に從つて月給割にし度いと思ひますが、沼尻つて人の給料がわからないんです。」

「月給割はひどいなあ。」

節三は笑ひながら紙入から十圓札を出した。

「これで二人分として置いて呉れ給へ。足りない事は無いでせう。」

「えゝ、充分です。」

ちえつ、けち臭いなあと思ひながらも、猪股はそれを受取つて引さがつた。

日が暮れると、まだ懐の温い連中は、一刻を争ふやうな勢で仕事をしまつて歸り始めた。山東も昨夜の今日ですつかり疲れて、今晩は下宿でゆつくり寢ようと、そればかりが樂みだつた。隨分心配したけれど、兎に角今日の一日は無事に濟んだのだ。

「一寸用事がありますからお先きに失禮します。」

と叮嚀に節三の前で頭を下げて事務室の外に出た。

一段々々階段を下りるのにも、足の踏度を間違へさうな氣がする程疲れてゐた。睡眠不足の爲めか、深酒の爲めか、何れにしても山東は長々と手足を延ばして休息し度かつた。

往來に出ると、歳晩の町の雜沓を照して、兩側の商店の燈火が、ふだんよりも強く輝いて居た。その光さへ、疲れた神經には堪へ難く思はれて、山東は些か氣の咎める鳥打帽子の古い奴を目深にかぶつて、わき目もふらず歩き出した。

「山東さんぢやないの。」

誰かゞ誰かにさゝやく聲がしたと思つた時、

「山東さん。」
と女の聲で呼びかけられた。振向くと、たつた今通り過ぎた電柱のかげに三四人會社の女事務員が額を集めてゐて、薄暗がりに眞白な厚白粉の笑顔で呼んだのは、まぎれも無い廣川だつた。
山東はぎよつとして立どまつた。
「今お歸り？」
別段用があつて呼び止めたのでは無く、通りすがりの姿を見付けて聲をかけたに過ぎないのだつた。それでも山東は眞赤になつて、たゞならず胸が騷いで爲方が無かつた。帽子を取つておじぎをして、目の前の電車の停留場へ急がうとした。
「あたし達これから活動へ行くのよ。」
もう一度廣川の無邪氣らしい聲が聞えた。
「山東さんもいらつしやらない？」
外の一人がからかつて、みんなで一齊に笑つた。山東はもう一度頭を下げて、逃げるやうに足を早めた。
電車に乘つても動悸は止まなかつた。たしかに廣川は、未だ手紙を見て居ないに違ひ無い。ふ

だん、會社の裏の空地で顏を合せたり、廊下で擦れ違ふ時などに、輕い冗談を云ふ事があるが、その態度とちつとも變らなかつた。此方も平氣で、呼びかけられたら近寄つて行き、たとへ冗談にしろ活動寫眞に一緒に行かうと云ふ者があつたら、えゝ行きませうと答へてやつてもよかつたのだと、只管身を羞ぢて逃げ出した自分の腑甲斐なさを悔みもした。しかし、何と思つて見ても、やがては免れない自分の運命に、面白くない考へは落ちて行くのであつた。

活動寫眞館の内部の景色が先づ第一に目に浮ぶ。おない年位の女事務員が、キヤラメルか何かを口の中に入れながら、亞米利加物の戀愛悲劇に同情してゐる樣子が、忌々しくも明瞭に想像される。就中廣川の一際白粉の濃い顏が、山東の目の底にこびりついてゐた。最後の喜劇で涙の出る程笑つて、やがてちりぢりに別れて家に歸るであらう。その次には、高輪(たかなわ)に住んで居る廣川の家内の樣子を想像しようとしたが、山東にはまるつきり見當がつかなかつた。たゞ彼(あ)の手紙——桃色の封筒に、紫インキで、女らしい字を眞似して書いたやつが、あまりはつきりと目に見えた。

# 九

電車の中には彼の知つた人はゐないのだが、山東はおびえた顏色をして、周圍を見廻した。

眞夜中から降り出して積つた上に、まだ降り止まない雪の朝、山東は又遲刻した。今朝は別段寢坊をしたわけでは無かつたが、廣川へやつた手紙の事が胸につかへて、氣輕に出かける事は出來なかつた。底の破れた覆靴(オーバシウス)の中に雪が入つて重たくなつた足を、いやいや引擦りながら會社の玄關をくぐつた。

仕事の出來不出來よりも、遲刻のやうな目に見える怠慢をいやがる節三の前に、彼は二度三度頭をさげて、

「電車が停電したものですから……」

いゝ加減な申譯を云つた。

「何處で停電しました。」

珍しく意地の惡い質問をして、節三は白い眼を見せた。

「神田です。神保町の少しさきで……」

山東はすつかり度を失つて、又二三べんおじぎをした。

「あまり遲れないやうにして下さい。」

不機嫌な主任の聲に頭を掻きながら、漸く自席に着くと、隣の猪股は帳簿のかげに顏をかくし

て、長い舌を出して忍び笑をしてゐた。

てれかくしにやりかけの仕事に取りかゝつては見たものゝ、山東はきびしい胸騒ぎに、何もはかどりはしなかつた。平生、氣ぶつせいには違ひ無いが、おとなしい方の節三として、今の言葉はたしかに普通で無い。自分の爲出かした事に對して、心の底から怒つてゐるのに違ひない。あゝいふ意氣地の無い人間だから、一人でとりしきつて裁く事は出來ないだらう。屹度支配人に訴へたにちがひ無い。それからそれと考へて、山東はもう助かる途は無いやうに思つた。

今朝自分が出勤する前に、廣川は節三に訴へ出たにちがひ無い。やがて自分は別室に呼ばれて、支配人から解職命令を宣告されるのか——彼は呼吸が苦しくなつて、しきりに空咳をつゞけた。群馬縣の片田舍の役場に勤めてゐる年とつたおやぢの家に歸る外には行きどころの無い自分の一身が、涙ぐましい程なさけなかつた。彼は幾度となく、ひそかに上目をつかつて節三の樣子をぬすみ見た。一生の出世も破滅も、一切主任の手に握られてゐるやうな氣がした。節三の不機嫌の原因が、此の朝沼尻に、洋服新調費を貸してくれと申込まれた事に在るのだとは知るよしも無かつたのである。

びくびくしながら、やがて正午になつた。山東は、濕つぽく響いた其の日の午砲程嬉しく思つ

たものは無かつた。救はれた氣持で立上つて、誰よりも先に食堂に下りて行つた。賞與金が渡つてから、俄にみんなの喰物が贅澤になつたが、山東は別段註文もしてなかつたので、小使の賣る食麵麭を燒いて喰べた。

何時の間にか雪は止んで、裏の空地には薄日がさしてゐた。裏二階の窓に倚りかゝつて、山東は一人で外を見下してゐた。眞白に光る雪の色か、一瞬間わづらはしい心持を忘れさせた。

その時、聞覺えのある廣川の聲と、外に二三人で唱歌を合唱してゐるのが聞えた。女達は、社內だからと云ふ遠慮で、餘程聲を低めてはゐるのだが、時々調子づいて天井に響く聲を張上る事もあるのであつた。

「ちえつ、氣取つてやあがら。」

その歌の聲を罵りながら、猪股と下村がやつて來た。

「おい、山東君。今朝はひどくきめつけられたぢやあないか。」

「やられたよ。柏さん御機嫌が悪いなあ。」

爲方無しに頭を搔きながら苦笑した。

唱歌の聲は段々近づくので、山東は一人ならば逃げ出すところだが、相手がわるいので、もじ

もじしながら目のやり場にも困つてゐた。女の方も、若い社員がかたまつてゐるのを見ると、誰からともなく歌ひ止んで、愛想笑を浮べながら通り過ぎて、階段を下りて行つた。一寸視線が合つたゞけだが、廣川の目の中には、輕侮の色が充分漲つてゐるやうに山東は感じた。

「あの右の端の奴は誰だい。」

下村は、肩をくつつけ合つて並んで行く女の後姿を顎でさして山東に向つて訊いた。

「ありやあ新入だ。」

猪股が引とつて答へた。

「いゝぢやないか。」

「よかあねえや。裏シヤンだあ。脊が高いから後姿はごまかしてるが、前に廻つて見ろ、目と目の間が離れ過ぎてて、まるで變だぜ。」

「さうかしら、俺はいゝと思つたがなあ。」

下村は矢張り目を放さず、何時迄も見送つてゐた。

「矢張り會社ぢやあ三杉だねえ。あれなら何處に出したつて差しくないよ。」

「然し僕はあゝいふタイプは嫌だ。あんまり整ひ過ぎてゐて窮屈な氣がする。寧ろ肉感的な廣川

を取るよ。」
「そりやあ比べものにならないや。三杉は兎に角トテシヤン級だからな。」
「なんだい、トテシヤンていふのは。」
「とてもシヤンだつていふんだよ。」
猪股と下村が、憚り氣も無く女事務員の品定めをしてゐるのを、山東は苦々しく聞いてゐた。何時もは自分も面白がつて、無責任な口をきかない方でもないのだが、今日はそんな仲間と一緒にゐるのさへ不愉快だつた。
「どうだい、山東君は。三杉と廣川とどつちを擇ぶ。」
猪股はにやにや笑ひながら話を向けたが、山東はどうしても思ふやうに聲が出なかつた。
「矢張り三杉が一番だらう。」
辛うじて答へたものゝ、かくし切れない程顔が赤くなるのを感じた。
「なんだい、染めてやあがら。」
いちはやく猪股は見付けて、容赦なく指摘した。二人の友達の笑ひ聲を聞きながら、山東は愈々赤面した。

一時になると、一同はあわてゝ席に着いて、又それぞれの仕事の手を動かし始めた。頭の上の大時計の針の進むのばかり氣にしながら、山東は只管無事を念じて居た。二時になつても、三時になつても、別段何の沙汰も無い。今日も無事に濟むかしらと思ふと、病氣のなほつた時のやうな、さつぱりした氣持になつた。

若しかすると、廣川は會社に訴へ出るどころでは無く、善意を以てあの手紙を讀んで呉れたかもしれない。或は自分に對して、存外好意を持つて居るのかもしれない。最初から、彼の女なら、手紙のやりとりや、日曜の散歩位は、容易に承知しさうに思はれたが、矢張り狙ははづれなかつたか。つひぞ今迄思ひ浮べなかつた樂々とした考が、油のやうに湧きひろがつた。

下宿に歸ると、机の上に廣川の返事が來てゐるかもしれない――其處迄望のある想像をたくましくしながら又しても時計を仰ぎ見た時、突然入口の戸があいて、顏だけ半分出してのぞいたのは廣川だつた。山東は机の上に突伏すやうな形で、書類の中に顏を埋めてしまつた。目の中が熱くなり、咽喉は乾き、耳鳴りがするのを感じた。

廣川は、暫時戸のところで躊躇してゐたが、いかにも思ひ切つたと云ふ風に姿勢を正しく、節三の方に進んで行つた。

「あのう、あたくし一寸お話し申上げ度い事が御座いますが……」

外の者の耳を憚る樣子であつた。

「如何いふ御用ですか。」

節三は、女に口をきかれるのが一番苦手なので、不機嫌な顏をあげて相手を見た。白粉の濃い事と、着物のはで好みな事と、よく歌をうたつてゐる事とで、彼は廣川を好まなかつた。自分が人選した中で、これが第一の失敗だつたと平生から思つてゐた。

「なんだか此處では申上げにくいんですが……」

心持顏を赤らめて、廣川は訴へるやうな目つきをした。

「それでは應接間にでも行きませうか。」

何かしら面白くない事件を持込まれた豫感で、愈々機嫌が惡くなつたが、節三は洋筆を置いて立上つた。前かゞみに背中の曲つた節三の後について、廣川の若々しい姿は廊下に出て行つたが、出て行きながら山東の方にながしめを投げた。

「え、あいつ變な目つきで見て行きやがつたぜ。」

何をさゝやいて節三を連出して行つたのかは知らないのだが、猪股は自分にからかふながしめ

だと思つて恐悦して、いきなり手を延ばすと、さつきから魂を失つたやうな氣持に惱んでゐる山東の背中をどやしつけた。

十

「まあおかけなさい。」
節三は、目の前に袂をいぢくつて、伏目に立つて居る女を、何といふ理由も無く苦々しく思ひながら、自分が先づ腰かけて、もうひとつの椅子を指さした。女は輕く頭をさげたが、矢張り腰かけはしないで、上半身をかすかに左右にゆすぶつてゐる。
「何か特別の用事ですか。」
此の年末の忙しさに、愚圖々々しては居られないと思ふばかりで無く、性分としても、様子ぶる女を虫が好かなかつた。
「實は御耳に入れた方がいゝか、入れない方がいゝかわからないんですけれど……」
羞しさうに目を落しながら、早口のよく響く聲で口を切つた。
「昨日で御座いましたが、誰だかわからない人から、こんなものが參つたのです。」

普通よりも胸高に帯をしめた懐から、桃色の西洋封筒の一通を取出して卓の上に置いた。思はず額に皺を刻みながら、節三は手を延ばして取上げた。

「拝見してもいゝんですか。」

さもけがらはしいもののやうに、おもてとうらに嶮しい眼をつけて、詰問する調子で訊いた。

「はあ、母が會社の上の方にお目にかけなくてはいけないと申しますものですから。」

さう云はれると、自分の地位が重く感じられ、又他所の娘を持つ母親に信頼されて居ると云ふ事が、悪くなく思はれるのであつた。節三は頷きながら、中の手紙を引出した。

封筒と同じ桃色の用紙に、右の肩の心持下つた細い字で、彼が想像したよりも短い文句が書いてあつた。

あゝ、戀は人を狂氣にします。朝に夕に同じ會社の内で、チヤアミング的タイプの貴女の美しいスタイルに、思ひを焦す事一年有半、此の苦しさを誰が知りませう。千萬言を費しても、此のハアトをあらはす事はインポツシブルです。私は何も申しません。ただ貴女の愛を、清き熱愛を要求します。それは決して卑しい性的の愛ではありません。純なる愛です。此のピユーアさを信じて下さい。そして私の愛を受けて下さい。清き愛に酬ゆるに、より清き

愛！　其處に吾等のパラダイスがある。あゝもう胸がいつぱいで何も書けません。是非々々御返事下さい。パルチサン式殘虐なのでなく、人道的の愛に燃ゆる嬉しき御返事を……

近頃流行る破格の文體にちつとも馴染の無い節三には、これでも艶書かしら、こんな事でお役に立つのかしらと思はれるばかりだつた。二三度繰返して默讀して、漸く意味はわかつたが、矢張り戀文とは受取り兼る心持が殘つてゐた。

手紙には宛名も、署名も、日附も無く、返事を呉れといふ文句を最後にして、おしまひになつて居た。しかし文言から見て、會社内の若い者の所業には違ひ無いので、職務上うつちやつては置けない。社長も支配人も、男女の社員間に間違があつてはならないと、平生やかましく云つて居るので、まるつきり取締りやうも無い事には違ひないのだが、節三としては、いかにも自分の落度のやうな氣持もして、こんな事が、萬一支配人に知れ、社長に知れたら大變だと考へると、事は重大に思はれて來た。多年の習慣で、直接自分の勤に關係さへ無ければ、どんな事が起つても無關心で居られるが、勤にかゝはる事となると、いかに些細な事でも、一方ならぬ心配を生むのであつた。一體誰がこんな厄介な事をしでかしたのだらうと、愈々不機嫌になつて、封筒を幾度もあらためたけれど、江川よりと書いてある外には何の手がかりも無く、郵便切手の消印は薄

くかすれて讀めなかつた。

「此處には名前が書いてないが、誰が寄越したか心當りでもありますか。」

手紙を卓の上に置いて、節三は廣川に訊いて見た。

「いゝえ、ちつともわかりません。」

少し首をかしげる癖を見せて、不相變よく響く聲で答へた。

「今迄にもこんな手紙を貰つた事がありますか。」

「はあ、いゝえ。」

あいまいな返事をして、羞しさうに笑つた。

「あるのですか。」

「いゝえ、御座いません。はじめてゞす。」

重ねて訊くと、さうは答へたものゝ、女の様子では、はじめての出來事らしくなく思はれて、一層節三の眉をひそませた。

廣川が男の社員から手紙をつけられたのは、二度や三度では無かつた。どれもこれも匿名で誰が寄越すのかわからなかつたが、大概は淸い交際を望むといふ極り文句に過ぎなかつた。さう云

ふ手紙を貰ふと、流石に胸が躍つて、少からぬ好奇心を起させられた。しまひには何となく、それが自慢の種にもなつた。父親が死んでからは、愈々口やかましくなつた母親には祕しかくしながら、會社の朋輩(ほうばい)には、さも困つたやうな顏をして、實は自分の美しさを裏書する材料として、そんな手紙を見せるのであつた。中には同じやうな經驗のある者もあつて、互に面白い話として、みせびらかす風さへあつた。

今度の手紙には、明かに山東の名が記してあつたが、廣川はそれを手際よく切取つてしまつた。女の事務員の連中が、密かに噂にのぼせてゐるやうな好男子ならいざしらず、學校教育も充分には受けて居ない安月給の下宿住居の、面皰(にきび)だらけの男から艶書を貰つたと云ふのは、何となく自分の恥辱に思はれた。自分の値打をさげるやうな氣がしたのである。別段母親に見せたり、相談したりしたわけでは無く、最初は破いて捨てようと思つたのだが、それとなく懲らしてやり度い氣持もあつて、名前丈切取つて持つて來た次第だつた。

そんな事とは知らないので、節三は眼の前の手紙の存在をもてあましながら、前後の處置を考へてゐた。社內の若者で、平生から浮(うは)ついた様子の男をあれこれと想像して見たが、別段見當はつかなかつた。筆癖を見ると、困つた事には自分の部下の山東のに似てゐたが、山東のは右の肩

が上るのに、これは反對に下つて居るので、まあまあ大丈夫だらうと、無理にもさうで無い方に考へてゐた。

「貴女の方に心當りが無いとすれば、會社としては一應取調べて、誰の所業か分明すれば、勿論嚴重に處罰します。御承知の通り此の會社は、平素社内の規律を保つ事に苦心し、又幸に今日迄面白くない噂はちつとも無かつたのでした。」

口の重い節三は、妙に固くなつて、ふだん支配人に聞かされて居る通りの事を、ぽつりぽつり云ふのであつた。それに從へば、會社は單に營利一方のものでは無く、一國風教の基だと云はんばかりの話だつた。眞面目くさつて喋つて居るうちに、節三の態度はまるつきり廣川を説得してゐるやうになつてしまつた。

「ですから、斯ういふ怪しからん手紙を書くやうな男は、見つけ次第免職します。將來のある若い人を、その爲めに浮ばれない羽目におとし入れるのは氣の毒ですが、風紀を保つ點から見れば致方ありません。しかし、貴女方婦人の事務員も、かういふ手紙をつけられたりするのは、多少何處かに隙があるのだと考へて、一層注意して頂き度いのです。」

言葉數を重ねれば重ねる程、只管うつむいて袂をいぢくつてゐる女の、白粉の濃い顔が許し難

いものに思はれて來た。第一、そんなはでな服裝をし、そんな厚化粧をしてゐるのが惡いのだと云つてやり度かつた。

「それでは此の手紙はお預りして置きます。不都合な事をした者がわかり次第適當の處置をしますが、貴女も充分注意して頂き度い。」

節三はもう一度同じやうな事を繰返して、卓上の艶書を封筒に納め、內かくしにしまつて椅子を離れた。廣川は、まるつきり意想外の、恰も自分が叱られてゐるやうな場面になつたのを馬鹿々々しく思ひはしたが、わからずやには何を云つたつて無駄だと思つて默つてゐた。其處で、心中の不滿を形にあらはし、突然頭を下げると、つかつか室外に出て行かうとした。

「廣川さん。」

後から呼止めて、

「此の事は社內一般に知れると貴女の爲めにも面白くありませんから、誰にも云はないで置いて下さい。」

節三は命令するやうな口をきいて、相手が頷くのを見てから、つゞいて廊下に出た。不愉快な事件を背中にしよひ込んだ氣がして、頭を上げて事務室に歸るのさへ人目が憚られた。

自分の席に戻ると、いつの間にか退出時間の四時も廻つてゐて、下役は仕事をしまつて歸支度をしてゐた。若い女の事務員と連立つて出て行つた主任の姿に、特別の興味を持つてゐる樣子は、節三自身にも感じられて、事は愈々不愉快だつた。彼は何となく顏が赤くなつて、女と別室で話をしたのは、決して自分自身の事では無いと證明し度い氣持になつた。

「どうも馬鹿な奴があつてねえ。女事務員に手紙なんかやる者がある。冗談は冗談なんだらうが。」

ひとり言めかしてつぶやいて、更に赤面した。

「へえゝ、女の人に手紙をやつた奴があるんですか。」

猪股は席を離れて、好奇心に目をかゞやかして訊いた。

「誰です、そんな事をしたのは」

「誰つて、そりやあわからないさ。まさか本名を出す馬鹿もないからねえ。」

節三は、さも一些事たといふやうな態度で答へて、忙しさうに机の上の書類をかたづけ始めた。

「へえ、女は廣川さんですね。」

それつきりでは滿足出來ないで、猪股は暫時節三の机の前に立つてゐたが、

「こんな事は此の場限りで誰にも喋つてはいけませんぜ。」

それつきり相手になつてくれないので、

「お先に失禮します。」

と頭を下げて、山東を顧みながら室外に出て行つた。先刻から頭の中の混亂に、床を踏む靴の尖が震へるやうな不安に襲はれてゐた山東は、同じやうに頭を下げると、同僚の後を追かけて廊下に出た。

「おい、廣川にレタアをやつた奴があるんだとさ。」

待ち構へて、猪股は目をまあるくして云つた。これ以上の大事件は無いといふやうな様子で呼吸もはずんでゐた。

「やりやあがつたなあ、どん畜生だらう。」

必ず乘氣になつて話相手になると思つてゐたのが、意外に冷い態度を持してゐるので、寧ろ腹立たしい位だつた。

「誰だらう。」

「誰かなあ。」

調子の合はない目を見合せながら、二人はやがて往來に出て、右と左にわかれた。

## 十一

かなり積つた雪ではあるが、大通の絶間の無い車馬の往來と、靴や下駄に踏まれる爲め、泥によごれながら早くも解け初めた。破れた靴の底からしみて來る水氣を感じながら、貧弱な鳥打帽子を氣にして、山東は泥濘(ぬかるみ)を飛び越え飛び越え電車に急いだ。見た處は、何の屈たくもなさゝうな身輕だつたが、頭腦(あたま)の中は混亂し、冷い夕方の風が吹く度にすゝりあげる水洟(みづつぱな)には涙もまじつて居た。

彼の眼には、苦り切つた節三の姿ばかりが、はつきりと浮んで來た。自分のやつた艶書は、たうとう主任の手に落ちてしまつた。それは一番恐れてゐた事だつた。馬鹿な事をしてしまつたなあと、幾度か繰返して悔んだ。あんまり目先の見えなかつた自分を考へると、腹立たしくもありなさけなくもあつた。そんな馬鹿な事をした自分も、何の同情もなく訴へ出た廣川も、共に憎む可きではあつたが、しかし節三の存在は、今の彼にとつては何よりも忌々しく、恨めしかつた。

けれども、猪股が好奇心に眼を光らせて、艶書をやつた男の名を訊いた時、

「そりやわからないさ。まさか本名を出す馬鹿もないからねえ。」

と他所事のやうに節三が答へた事も忘れなかつた。何故本名を明白に書いたのだらうと、とりかへしのつかない不注意を悔んでゐたのだから、此の節三の返答は、山東には大きな謎だつた。

何か考があつて、わざとあんな事を云つたのかもしれない。もう少し愚圖々々してゐたら自分を別室に連れて行つて、ねち／＼油をとり、あげくには馘首にしやあがつたかもしれない。さう思ふと、猪股の後にくつゝいて、さつさと退出してしまつた自分の素早さが、一時的の滿足を與へた。しかし明日の事を考へると、矢張り免れない運命には違ひ無い。若し馘首になればさしづめ喰ふ事が出來なくなる。何處でも人べらしを斷行してゐる最中だから、特別の縁故でもない限りは、新しい勤務先は見つかりさうも無い。どうしてもいけなくなれば、のめのめと故郷に歸つて、おやぢや兄貴の前に平身低頭してあやまり、直ぐにも百姓仕事にこき使はれなければならないのである。その時のみじめな姿が、明瞭に想像されるのであつた。

いろんな面白くない將來ばかりを考へられて、胸が重くなつてしまつた。彼はその晩眞直に下宿に歸る氣持にはなれないで、時々行つて顔馴染の女給もゐる神田のカフエで、夜更け迄ウヰスキイを飲んで前後を忘却した。

翌日、山東は會社を休まうと思つたが、休んで居る間に、ひどい目にあはされさうな氣持がして、愈々不安心に思はれ、又一面には、自分の臆病で無いところを見せ度い負惜みも強く、結局進まない足を引摺つて行つた。

三日續けて遲刻した事は、入社以來曾て無い事だつた。主任の席を怖れながら、事務室に入つて行くと、折よく節三の姿は見えないので、ほつとして机にむかつた。

「どうしたんです、毎日々々遲刻しては困るではありませんか。」

隣の猪股は、節三の口眞似をして訊いた。

「金廻りがいゝものだから、連夜の御愉快かい。」

がらりと調子をかへて、文學雜誌などで養はれた小才を振廻し度がる質なので、天晴氣の利いたやり方の積りで、面白さうに肩を搖つた。

「うゝん神經衰弱なんだ。毎晩寢られないものだから。」

山東は赤面しながら、手短かに答へて、しかけた仕事にとりかゝり、それを楯にして、相手になるのを避けようとしたが、片方は上役の居ないのをいゝ事にして、少しでも澤山お喋りをして居度いのだつた。

「昨日の話ね、あの廣川にレタアをやつた奴があるつて云つたらう。あの犯人誰だか知つてるかい。」

「え、知るもんか。」

内心ぎよつとしながらも、山東はさも平氣らしく、そんな事に取合つては居られないと云つた風に投げた返事をした。

「だけどさ、一體誰だと想像する。意外なところにひそんで居やあがるんだぜ。」

おもはず知らず山東は、同僚の方に振り向いて、緊張した態度になつた。第一友達の口から自分の名前が出たら、愚圖々々事務室に止(とゞま)つてはゐられない。直ぐにも覺悟をきめなければならない。顔面筋肉の硬張(こはば)つたのを、無理に作つた微笑でほぐさうとしたが効果は無かつた。恥と怖れと、泣き度いやうな氣持に、すつかり壓倒されてしまつた。

愈々自分のしわざとわかつたのを、わざと遠廻しに、ちくりちくりさいなむで居るやうに思はれて、不氣味だつた。

「どうだい想像はつかないかい。」

先方は得意になつて、

「ほら、營業の方に貝塚つて慶應出の氣障な野郎が居るだらう。前に三越に居たつていふ、氣取つた奴さ、ロイド眼鏡をかけた……」

どうだい、驚いたらうと云ひ度い樣子で、無言の同僚を見下した。

「ゐるぢやあないか、脊のひよろ長い、オオル・バックの……」

何時迄も默つて居るのがもどかしく、たゝみかけて說明した。

「へえ、あいつかい。」

事の意外に驚いて、暫時は何とも云ふ事の出來なかつた山東は、嘆息するやうな調子で危く相槌を打つた。

「驚いたらう。」

「驚いた。しかし、どうしてあいつだつて事がわかつたんだい。」

さては嫌疑は自分ではなかつたのかと、一寸逃れの息をついた。

「そりやあ蛇のみちはへびさ。」

猪股はすつかりいゝ氣持になつて、一段聲をひそめて話し出した。

それによると、猪股は豫々貝塚の樣子には疑をかけて居た。何時も朝早く來て、營業時間迄は

廊下や物蔭で、通りすがりの女事務員を呼止めては、妙に物柔かな調子で話をしてゐるし、晝休の時も、裏庭で日向ぼつこをしてゐる女達の傍で、英字雜誌などを讀んでゐる。

「第一目付がをかしいよ。ありや色魔に違ひ無いぜ。」

と、猪股は相手の首を竪に振らせなくては承知しない強い語調で力說した。

ところで今朝、猪股が出勤して、玄關口から眞直ぐに二階に上らうとすると、階段の下の薄暗い處で、何かひそ／＼話をして居た男女が、足音に驚いてぱつと分れた。それが貝塚と廣川で、分れる瞬間に、男の手から女の手に渡したのは確かに手紙だつたと、猪股はきめてしまつた。

「ね、あん畜生、廣川が柏さんに訴へ出たのも知らないで、無理押つけにレタアを渡しやあがつたんだよ。第一の匿名の手紙で瀨踏して、愈々我慢が出來なくなつて、名告りかけて口說きやあがつたんだぜ。押の強えつたらありやあしないや。」

目の前に不埒な男が居るやうな意氣組で、猪股は唾を飛ばしてまくし立てた。平生から、學校出の連中には反感を持つて居るのが、兎に角社内の評判になつて居る女を手に入れようとして居るのだと思ひ込んで居るので、充分やきもちも手傳つて居た。

「俺たんざ、夙からあいつは注意人物だと睨んでゐたんだ。」

猪股はすつかり興奮してしまつた。

聽かされて居る山東は、全く見當の違ふ話に安心しながら、内心貝塚に對してすまない氣もして、困つた顔付でうなづいてゐた。ところが、その樣子を猪股の方から見ると、まるつきり自分の慧眼に感服してゐるのだと思はれた。

「どうだい、名探偵のうでは凄いもんだらう。」

「凄い、全く凄いよ。」

相手を馬鹿にした優越感に似たものが、何時の間にか腹の中にはびこつて、山東の心苦しさは、次第にづうづうしさに位置を讓つてしまつた。

折柄節三が、忙しさうな足取りで戻つて來たので、二人は密かに顔を見合せて合圖をしながら、雙方一時にそろばんを彈き始めた。

## 十二

營業係の書記の一人、貝塚謹三郎か廣川珠子に附文をして、それが人事係の主任の節三の手に渡つたといふ噂は、迅速に社内の若い連中の間にひろまつた。誰がいひ出したのか、どういふ據

りどころがあるのかを究める迄も無く、平生氣障がられて居る貝塚と、誰の目にもつき易い廣川を主人公とする丈に、面白づくで、口から口に傳はつて行つた。

晝休の一時間は、殊に此の噂で賑つた。流石に貝塚の姿を見るとぴたりと口をつぐむけれど、ゐなくなつたとなると、あつちでも此方でも寄集つては、想像に想像を加へ、何時の間にか動かす可らざる證據を握つた事件として認められてしまつた。

勤人のならひとして、直ぐに勤と結びつけて、如何處分されるかと云ふ事迄話は進んで行つた。

「柏さん、どうするだらう。」

「どうするつて、勿論支配人に訴へるさ。」

「さうしたら支配人はどうするだらう。」

「どうするも、かうするもあるものか。不義は會社の御法度だ。馘首にする外に道はないさ。うちの禿(社長の事)は、他人の色事に對しては峻嚴だからなあ。」

新聞閲覽室の入口に立ちはだかつて、猪股と下村を取圍んだ一團も、てんでんの意見を吐いて居た。事柄が事柄だけに、兎角猥談に落ちさうな傾もあつて、時折は極どい場景を想像させて笑はせるのもまじつて居た。

山東は、その群を離れるのも弱味を見せるやうでいけないし、さりとて寃罪をかうむつて居る貝塚に對しては申譯がなく、平氣な顏もして居られないので、わく／＼する胸に兩腕を組んで、默然として壁にもたれながら、みんなの話を聽いて居た。

先刻、貝塚を犯人だと目星をつけた猪股の話を初めて聞かされた時は、相手はいはゞ內輪同志の仲間一人きりなので、少くとも自分が疑を免れて居る安心に、存外づうづうしい心持でゐられたが、事件が斯う迄こんがらかつては、結局あかるみで證據調にならなければ納まるまい。誰の意見としても、社內の風紀のやかましい此の會社としては、さう云ふ事をした者は馘首になると云ふのだから、疑はれてゐる貝塚が主任や支配人の前に呼出されゝば、むきになつて身の潔白を主張するに違ひ無い。それよりも第一の證據である廣川へやつた手紙が、節三の手にあるとすれば、貝塚を呼出す迄も無く、先づ自分が調べられるにきまつてゐるのだ。

其處迄考へた時、彼の目の前には、紫インキで認めた桃色封筒の一通が、又してもはつきりと浮んで來た。あゝ、何故あんな馬鹿な眞似をしたんだらうと、心の底から悔いた。自分が其の手紙を書いた時の事から、醉拂つて落した事、落して心配はしたが運よく泥にまみれて誰の手にも入るまいと思つた事、ところが意外にも新參者の沼尻とかいふ大男に拾はれて投函された事、あ

げくが上役の耳に入り身の上の大事となつた事を、順を追つて考へると、自分も廣川も沼尻も節三も支配人もひつくるめて、一切の人間が忌々しく憎む可きものになつて來た。彼は人々の談笑の聲さへ耳に入らず、ぼんやりと世の中の生き苦しさを感じてゐた。

「おい大將。」

突然肩を叩かれて吾にかへると、

「何とか云へよ、廣川は處女か、處女でないかつていふ大問題が提出されてゐるんだ。」

下村がいやしい笑に滿面を崩して、あたりを憚らない聲で云つた。

「馬鹿だなあ。」

山東は眞赤になつて、やうやくの思ひでこれ丈答へた。

「馬鹿な事があるもんか。」

相手は一層みだらな興味でいつぱいになつて、

「ありやあ、ほんとかしら。醫者が見れば歩きつきでもわかるつて云ふぢやあないか。」

「わかるもんか。それよりも鼻の頭を指で押して見ると確證が擧がるさうだ。」

外の一人は負けず劣らずの興味で口をはさみながら、いきなり下村の鼻の頭を突つかうとした。

「よせよ。試驗する迄もないぢやあないか。」

差延ばした手を振拂つて、下村は笑ひながら逃げて行つた。居合せた者も面白さうな高笑を入りまじらせながら、なほ口々に喋りながら、めい／＼の事務室へ引上げて行つた。

山東は最後迄、壁にもたれて居殘つたが、やがて午後の仕事時間になつたので、益々重苦しく、その癖身に迫る脅怖にびく／＼する心持に難澁しながら、一歩一歩を不愉快に踏みつけて二階に上つて行つた。

薄暗い段々を上り切つた出あひ頭に、何か話しながら節三と沼尻がやつて來た。

「それでは今の話はなほ詳しく伺ふ事にしませう。今は一寸支配人に用事があるもんだから。」

節三はいひ殘して、せか／＼支配人室の方に曲つて行つた。山東はぎよつとして、おもはず足をとめて後姿を見送つた。今の言葉も、支配人に用があるといふのも、すべて自分に關係のある事のやうに思はれる。さては愈々覺悟をきめる時が來たかと、冴えない顏色になつて、沼尻の傍を通り拔けようとすると、

「山東さん。」

と呼止められた。見上るばかりの大男は、左右の廊下に眼をくばつて、

「廣川珠子さんていふのは社内の人だつたんですか。」
氣味の惡い微笑を浮べて、からかふやうななぐさめるやうな、變に親しみを見せた態度で云つた。山東は相手の顔を正視する勇氣がなく、みじめにうなだれてしまつた。
「先刻猪股君が庶務係の室にやつて來て、下村君に話してるのを聞いて、どうも聞覺えのある名前だと思つたが、やうやく思ひ出しましたよ。廣川さんといふのはあの計算係の豊麗崩るゝ牡丹の如き美少女でせう。」
餌食を弄ぶ獸性を露骨に見せて揶揄しながら、一言もなく參つてしまつた山東の背中を撫でるやうに手の平で叩いた。
「安心したまへ、僕は何も喋りはせんですよ。ははは……」
突然廊下の壁に響く豪傑笑をして、沼尻はもう一度山東の背中を叩いて、肩を聳かしながら階下に下りて行つた。

## 十三

別の用事で支配人室によばれたのではあるが、節三の頭の中には、廣川へ宛て艶書を出した男

の事ばかりが渦巻いてゐた。
晝食の時に食堂で、古參の社員の田崎が、一つの食卓に向合つて坐つて居る計算係の主任に、何時もの豪傑ぶつた態度で、
「おい、君の方の廣川つていふ女に附文をした奴が居るさうぢやあないか。」
年甲斐も無く面相を崩して、食事の後の禹歯(むしば)を小楊子でせゝりながら顎をしやくつた。
「え、附文だつて。」
何の事だかわからないので、既に底になつた天丼を夢中になつて喰つて居たのが、丼の中から顔を出して訊いた。
「君の方に居るだらうが。若い奴等がペラさんと稱する娼婦型の女さ。あれに營業係の貝塚が手紙をやつたんだ。」
「へえ、さうかい。」
「困るなあ、さう世事にうとくては。いやしくも君の監督の下にある妙齡の女の事だぜ。町內で知らぬはといふ奴だ。」
誰憚らぬ高笑をして、田崎は椅子の背に滿腹の全身をもたせかけた。

「冗談云つちやいかん、僕は仕事の上の監督はするが、それ以外の事は一切知らんよ。社内の風紀上の問題なら、其處に居る柏君の責任だ。ねえ、柏君。」

珍しくブル食堂に顔を出した節三は、妻が手づくりのサンドウヰツチに、近所から取寄せた冷い牛乳を飲んで居たが、先刻からの話で尠からず胸をどきつかせ、一體誰が喋つて、斯う迄早く他人の噂にのぼる事になつたのかと、それさへ自分の不行屆だと考へて居た矢先だつた。

「よう、柏君ゐたのかい。」

自分の背後に節三の居るのを知らなかつた田崎は、大きく體を捻つて、

「かういふ場合に、人事係つてものは如何處置するんだ。一方が訴へ出たんださうだから、見て見ぬふりもなるまいし、さうかと云つて粹なさばきをして、柏君が仲人役を勤め、夫婦にしてやるわけにも行くまいし……」

節三は、相手が面白がれば面白がる程益々不愉快になつて、ぼろぼろに乾いた麵麭をたんねんに嚙みしめながら、苦笑する以外の態度を知らなかつた。

「證據物件としては艷書があるつて云ふぢやないか。そいつを一覽させて貰ふ譯には行かないものかしら。どんな風に書くものか、後學の爲めに覺えて置き度いんだ。」

「當節の事だから、私は貴女を愛しますと、至極く手取早く出るんだらう。」

「さうすると女の方が、オーライ、オーライか。」

五六人、周圍に居た者を併せて、一齊にどつと笑つた。

節三は自分が嘲笑されて居るやうな氣持がして、眞赤になつて席を離れたのだつた。その時の事が、現在支配人の目の前に立つてゐると、一層力強く彼を悩ました。

別段の用事でも無かつたが、新年宴會の座席割を庶務係と打合せる事、又宴會には出席させない女事務員には酒肴料を出す事などを、さも大事の事のやうに注意した後で、支配人は、

「もうあと一兩日で今年も終るのだが、近頃社内には別段變つた事もありませんか。」

俄かにくつろいだ態度で、口元に微笑さへ浮べて云つたが、節三には手痛い質問に思はれた。さては支配人も艶書事件を知つてゐるのか——知つて居る筈はないがと思ひ迷ひながら、

「はあ、いゝえ。」

とわけのわからない返事をする丈でも、聲が自由には出て吳れなかつた。

「實は此の暮に臨時賞與を渡したのを機會にして、多少の陶汰を決行しようかとも考へて居たのだが、先づ一息入れて、來春にでもなつてから、目立たないやうに片附けて行く事にきめまし

た。」

當の支配人は日常茶飯事のやうな口ぶりで、話すのだつたが、節三としては、問題が艶書事件を離れて遠くなつたのには安心したけれど、若や自分も馘首になるのではないかといふ心配で、愈々脣が硬張つてしまつた。支配人の油光に光る幅廣の顔を正視する勇氣が無く、自然と頭がさがつて來た。

「老朽陶汰は勿論として、若い者でも能率のあがらない者、或は平素品行のよくない者などはやめてしまふ。誰と誰をやめるか、それは私の方にも大體の案はあるが、直接多勢に接して居られる柏君などの意見もあらうし、殊に素行の問題に至ては、吾々には全くわからんのだから、どうしても他人の意見をきかなければならない。其處で貴方も自分の考を、內々きめて置いて貰ひ度いのです。」

いかにも部下を信任して居るやうな支配人の樣子に、節三は先づ胸を撫で下したが、再び社員の品行問題が出て來たので、艶書事件に惱まされて居る頭腦は手も無く混亂してしまつた。

いつそ今のうちに、うちあけて話をしてしまはうか、さうでないと後日事件が支配人の耳に入つた時、自分の立場がやり切れなくなるかもしれない、と思ふ一方には、若し支配人が一切の事

を自分の監督不行屆だと考へでもすると大變だし、運よく最後迄知られずに濟めば、これに越した事はないし、矢張り默つて成行きに任せる方が悧巧かしらと、右に左に考はぐらついてゐた。
「いや、お忙しい所を引止めました。まあ、お互にいゝ年を迎へませう。」
ぼんやりと思ひ迷つてうなだれかゝつた頭の上で、支配人の高い聲が響いたので、狼狽して姿勢を正した時は、相手は既に椅子を離れて立上つてゐた。
「一寸銀行迄。」
さう云つて、支配人は帽子と外套に手をかけた。
節三は叮嚀に頭をさげて、その後について廊下に出た。階段に靴の踵を響かせて下りて行く上役の後姿を見送つて、彼は始めて安心した。汗の出る時候でもないのだが、何となく氣持の惡い顏を手巾(ハンケチ)で拭いて、ほつとした。
品行の惡い者も馘首にしてしまふと云ふ支配人の言葉は、艶書事件を打明けようか、默つて置かうか、彼の迷ひを一層深くした。何事でも相談して、此方から賴り縋つて行く樣子を見せなければ喜ばない支配人の事だから、後々事がばれた曉、かくしだてをして居たと睨まれては大變である。しかし、誰が云ひふらしたのか、手紙の主を貝塚謹三郎だと極めて居るが、その證據はあ

がつて居ない。それを先づ一應は、自分の手で調べた上でなければ、うつかりした事は出來ない。萬事愼重にやらないと、飛んだ手落で自分自身がひどいめに逢はないとも限らない――やうやくおちつきを取返して席に着いた。

つひになく節三は仕事に專念になる事が出來なかつた。暫時は、眞當面に机にむかつて居たが、外の事は第二にしても、調べる手がかり丈でも握つて置き度くて、突然椅子から腰をあげると、二人の下役に聲をかけた。

「別段急ぎの用事が無かつたら、一寸應接室迄來て下さい。」

二人共、一緒に呼びかけられたとは思はないので、半ば腰を持上げながら、山東と猪股は互に顏を見合せた。

「二人とも。」

もう一言さう云つて、節三は先に立つて事務室を出た。

後からついて行く二人の心は、めいめい別々に不安だつた。猪股は別段思ひ當る事も無かつたが、別室へ連れて行かれるのだから、重大問題に違ひ無いと考へた。勤人の悲しさには、別室によばれるといふ事丈で、外には何の續合ひも無いのだが直に馘首になる運命を想像した。ふだん、

もつと仕事に身を入れてやればよかつたと、正直に悔んでゐた。

一層強い心配に苦しめられてゐるのは山東だつた。愈々糺問されるる身の上になつたのかと思ふと、床を踏む足もふだんとは調子が違ふやうな、まるつきりおちつきを失つた心持になつてしまつた。

「まあ、かけ給へ。」

節三は先づ自分から腰を下して、二つの椅子を指さしたが、畏縮して居る二人はなかなか尻をおちつけなかつた。

「外でもないのですが、君達は昨日の廣川さんの事を社内の者に喋りはしないだらうね。」

何と切出したらいゝか迷ひながら、斯う云ふ場合に處する自分のうでを、節三は疑深く反省してゐた。

「いゝえ、喋りはしません。」

猪股は、自分の身の上には左程の事でも無い事柄だつたので大分安心はしたものゝ、此の事件を盛んに喋り廻つた隨一人なので、不尠当惑した。

「君も喋りはしまいね。」

默つてうつむいて居る山東にも返辭を求めた。

「いゝえ。」

山東は震へを帶びた聲で答へた。

「さう、それならいゝが、どうしたものか社内一般の評判になつてしまつて、先刻も食堂は其の話で持切りだつた。廣川自身が喋つたのでなければ、私か君達の外には知つてる人は無い筈なんです。しかも其の手紙を送つたのは貝塚君だといふ噂もあるさうぢやないんですか。」

もつと強く詰問してやらなければならないと思ひながら、節三にはそれ丈の押が無くて、ついつい愚痴つぽくなつてしまふのだつた。

「えゝ、みんな貝塚君だつて云つてゐます。」

猪股は、自分が目星をつけた犯人で、目星をつけた事を自慢にもして居たのだが、たつた今自分は喋りはしないと云つた後なので、困つた事になつて來たぞと、思はないわけには行かなかつた。

「でも、どうして貝塚君だとわかつたらう。」

節三には、ほんとに、如何して貝塚の所業だとなつたのか察しる事も出來なかつた。

「みんな貝塚君だつて云つてるんです。」・
猪股にとつては手痛い質問なので、見當違ひの返事を辛うじてしたばかりだつた。
「だから、どうして貝塚君だときめたのかつて云ふんですよ。ねえ、山東君。」
「それは……」
山東は全く平靜の態度を失ひつくして、卓にかけた片手は明かに震へてゐた。
「ふだんからみんなに憎まれてゐるからです。」
「憎まれてゐるからだつて、それぢやあ貝塚君が可哀さうぢやないか。證據も何も無くて、そんな寃罪を受けては堪らない。」
流石に節三も、途方もなく的の外れた此の返事には笑出してしまつた。山東もしまつたと思つたので、馬鹿な返事をした自分を救ふ爲めに、
「おまけに、あの人が廣川さんに手紙をやつたのを見たつていふ人もあるんです。」
と、上ずつた聲で云ひ添へた。
「誰が、誰が見たと云ふんです。」
愈々調査の確證をつかんだ氣持で、節三は乘出して來た。

「誰だつたかしら、あれは……」

山東は自分の卑怯な心持を恥る心と、飛んでもない無考から、あがきのつかない羽目になつた當惑に、しどろになつてしまつた。

「誰がどんな事を云つてゐました。」

山東では埒があかないので、又猪股の方に質問は向いて行つた。

「誰ですか私は存じません。たゞみんなが噂してゐるので……」

一刻も早く此場を切拔け度いと思ふ一念で、猪股は繰返して煮切らない返事をした。

二人の様子を見ると、何から何迄が嘘としか思はれなかつた。しかし其の嘘は、二人にうしろ暗い事がある爲めでは無く、第三者——例之貝塚が手紙の主だと云ひふらした人間——をかばふ爲めのものだと節三は解釋した。

「何も君達に迷惑のかゝる事では無いのだから、かくさない方がいゝでせう。なまじかくすとかへつてよくありませんよ。」

さう念を押された時、二人共何か云ひ度くは思ひながら聲が出ないので、たゞ愼んで頭を下げるばかりだつた。

「實はね、手紙といふのはこれなんだが……」

節三は衣嚢へ入れて置いた桃色の封筒を取出して、二人の目の前に置いた。

「へえ、これですか。」

猪股は好奇心に目を光らせて、直ぐさま中の手紙を引出して見た。が、一見した丈で、彼の胸は呼吸が止る程驚いてしまつた、わざと右の肩の上る癖をかくして、弱々しい字は書いてゐるけれど、筆者はまぎれもなく想像出來た。彼は隣に息を呑んで、木像のやうに動かないでゐる同僚をちらちら見ながら、熱中して繰返して讀んだ。

「どうです、その字は貝塚君かしら。」

何も知らない節三は、遠くから猪股の手の中の手紙をのぞいてゐる山東の方に訊いた。山東は僅かに身動をした丈で、何も口はきけなかつた。彼は身の破滅の免れない事を覺悟して、乾いた脣を嚙みしめてゐた。

「ねえ、これ貝塚君の字かしら。」

すつかり輕蔑し切つた調子で、猪股は手紙を彼の方に押して寄越した。思はず知らず、山東は後悔しても及ばない其の手紙に自分の手を觸れたが、同時に眼の中に涙がいつぱい溜つて來た。

堪へようとしても、堪へようとしても駄目だつた。涙は手紙の上に落ちて、桃色の洋紙の滑かな肌に、紫インキが薄く滲み出した。

「濟みません。わたくしなんです……」

彼は兩手で顏をかくして泣き出した。ふとい指の間からも、涙は流れ落ちた。

節三は顏色を變へて愕いた。とつさの間にも、自分の部下から斯ういふ人間を出した事が、ひどく困つた事に思はれた。自分が進んで事件の調査をした事も悔まれた。どうかして、此の場限りで祕しかくしてしまひ度いと思ふばかりだつた。

「ふうむ、さうでしたか。」

吐息と共につぶやいたが、扨てどうしてよいかわからなかつた。

「兎に角後でゆつくり聞く事にしますから、それ迄は絕對に祕密にして下さい。よござんすか。」

傍でものずきらしい目附をしてゐる猪股に念を押して、節三は先づ立上つた。

「さ、君はあつちに行つてくれ給へ。ひとに疑はれてはよくないから。」

猪股を促し立てて立去らせた。

「山東さん、ほんとに君がやつたのかね。」

卓上につつぶしてゐる背後から、のぞき込んで訊いて見ると、山東は素直に頭を動かして、自分に違ひ無い事を答へた。節三は何ともやり切れない心持になつて、意氣地なく泣いてゐる下役の姿を、忌々しく睨んでゐた。

## 十四

三十日は日曜だし、大晦日は毎年休む慣例になつて居るので、今日と明日と勤めれば、今年ももうおしまひだと思ふと、爲殘りの仕事は總てかたづけなければ氣が濟まなくて、節三が我家へ歸つたのは、お腹が空いて待ち切れない子供達は、御飯も先に濟ませて、睡さうな顏をしながら女中を相手に遊んで居る時分だつた。

シヤツを脫ぐと寒いので、肌着丈はその儘に、着物を換へると、折たゝみの出來るちひさい食臺を間にして、妻と差向ひの箸を取上げた。

「今日は大變遲かつたんですねえ。折角の御馳走がつめたくなつてしまつたわ。一寸あつためて來ませうか。」

節三の好物のコロツケを二つ宛小皿に盛りながら、荻江は默りこくつて居る夫の顏を見た。

「いや、あつためるには及ばない。」
食物に對して細かい味ひを感じない節三は、お茶がコロツケだといふ丈で滿足して、溫かからうが冷たからうが頓着なく、無雜作にお醬油をかけて喰べ始めた。さういふ風に手數のかからないのが、荻江にはかへつて物足りなかつた。
「暮は矢張り忙しいんですか。」
自分も箸を手にしながら、何か面白い話でもして呉れたら、もつと樂しいだらうと、何時も想ふ事を思つてゐた。
「そりやあ、ふだんよりは忙しいね。どうも引受けてる仕事が仕事なもんだから、後から後から用事が出て來て、これで一かた付いたと云ふ事がないんだ。」
妻に對して會社の話をするのは、節三の唯一の樂しみだつた。兎角自分を働の無い人間のやうに思つてゐるらしい相手に、如何に自分が勤勉で、社長や支配人に重用されてゐるか、どれ程大きな責任を持つて仕事をしてゐるかを、それと無く知らせ度い心が強かつた。
「それに此の頃の若い者は不安心で何も任せては置けないから……」
彼は、ふと、今日の出來事を想ひ出して、話さうか話すまいか迷つた。

「だつて若い人の中にだつて間に合ふ人もゐるんでせう。貴女の下役がいけない人だつたら、他の人と取かへて貰へばいゝぢやありませんか。」

第一さう云ふ事からして、貴方は引込思案で駄目なのですと云ふ語氣だつた。

「さう自分勝手な眞似も出來やあしない。」

節三は話に張合ひを感じて、茶碗の底の飯を掻込んで、おかはりを求めながら、

「今日も亦困つた問題が起きてねえ。」

どうしても頭の中にもやもやして居る一件を、口に出さないではゐられなくなつて來て、艶書事件の一部始終を話した。

「まあ、そんないけない人がゐるんですか。山東つていふ人は、何時かお正月にうちへ來た小僧みたいな人でせう。」

荻江はさも苦々しさうに額に皺を寄せながら、面皰だらけのお凸の若者を想ひ出してゐた。

「外の事と違つて、社内の風紀を保つ事は豫々社長から嚴しく云ひつけられてゐるんでねえ……」

自分は監督者の位置に居るのだといふ事をそれと無く妻に聞かせて、子供らしいほこりを感じた。實際節三が一番怖れたのは、事件が廣く社内に知れ亙つて、やがては支配人の耳に入り、社

長の前に問題が持つて行かれると、自分の部下の事だから、責任を問はれる事になりはしないかといふ事だつた。その爲めに、退出時間になつて、歸らうとする猪股を呼止めて、もう一度應接室に連れて行き、絶對に祕密を守る事を誓はせたのであつた。それで、自分一存で山東を戒飭し、將來必ず不都合な眞似は二度としないとあやまらせて、事を洗ひ立てずに葬つてしまはうと思つたのだつた。

「けれども社長さん御自身は御身持がよくないんでせう。お妾さんが三人とか四人とか居るつていふんぢやないんですか。」

品行の惡い男に對する女に特有の反抗的な心持で、荻江は夫を詰つた。

「まさかそれ程でもないたらう。」

節三は他の社員とは違つて、上役の惡口を云ふ氣持を全く持つてゐないばかりでなく、妻や子供には、自分の會社の社長を、何處からも非難出來ない、あく迄も偉い人間にして置き度かつた。

「だつて新聞にも噂が出るぢやありませんか。」

「そりや少しはそんな事もあるかもしれない。けれども社長位の地位になればねえ。」

「をかしいんですねえ。社長さんなら品行が惡くても構はないつて云ふんですか。そんなら貴方

も社長さんになつたら、お妾を澤山置くんでせう。」
「馬鹿云つてら。」
荻江は冗談の積りだつたが、節三は意外に眞面目な態度で打消した。かりそめの事でも、さういふ不品行な人間だと自分が思はれる事は、彼の性質としては聞流してゐられないのであつた。
「でも社長さんになれゝばいゝぢやありませんか。」
すつかりいゝ機嫌になつてしまつた荻江は、少し位夫に不身持な事があつても、社長になれるものなら結構だなどゝ考へてゐた。あんまり堅過る夫が、如何にも氣の利かない人間のやうに思はれもした。
食事を終つて、荻江は後かたづけに臺所に立つて行き、節三は一人で夕刊を讀んでゐると、表の格子の鈴の音が冴えて聞えた。誰か取次に出るだらうと思つて耳を澄ませたが、流元の水の音と女中部屋で騒ぐ子供の聲が引續いて聞えるばかりで、出て行く者は無かつた。爲方が無いので大儀な體を起して自分が立つて行くと、薄暗い土間に力の無い姿で立つてゐるのは山東だつた。
一目見て、いやな相手だなと思ひはしたが、何時迄も其儘にしては置けないので、座敷に通した。

洋服の窮屈な膝をきちんと坐つた山東は、寒い往來を歩いて來たのだが、何と無く全身に汗を感じるやうな心持で、あかりがまぼしくて爲方が無かつた。
「今度はとんだ事を致しまして……」
餘程たつてから、漸く口を切つたが、言葉が續かないので、頭を掻きながら二三度おじぎをした。何とか先方が口をきいて呉れるといゝと思ふけれど、節三は火箸で火鉢の灰をならしながら、強情に默つてゐるばかりだつた。
「全く一時のいたづらで、深い考はありませんのです。これからは眞面目に勉強しますから、どうぞ許して頂き度いので……」
すつかり參つてしまつて、山東の言葉は愈々澁滯勝だつた。幾度となく杜絶えては又切出す詫言が、何度出直しても同じ文句で、つい／＼脣が乾いて後が續かなくなるのであつた。廣川に手紙をやつたのは自分に違ひ無いけれど、決して相手をどうしようといふやうな深い野心は無く、單にからかつたに過ぎないので、今後は二度と再びそんな惡戯はしないから、穩便に濟ませて貰ひ度い、萬一會社をやめさせられるやうな事にでもなると、自分自身が衣食に離れるばかりでなく、故鄕の貧しい兩親の悲歎の種になるといふ事を、繰返し繰返し云つてゐるうちに、相手の冷

かな態度の取付場のないのと、自分の態度の不見目なのに苛々して、自然と胸がふさがつて來た。水洟をすゝり上げて堪へてゐた涙が、ぽろ〳〵膝に落ちて來た。

折惡く、先刻から次の間でお茶を入れてゐた荻江が、何の氣も付かないやうな他所行の顏をして、茶盆を持つて襖をあけた。山東はあわてゝ水洟を横撫でにしながら、みつともなく濡れた顏を伏せて挨拶した。荻江は、傍の夫をかへりみて、いゝ氣味だといふ意味の微笑を浮べて見せたが、節三が苦り切つて居るので、其場をはづした。

いくらかき口說かれても、節三はちつとも心から動かされはしなかつた。涙を流して居るのや、疊の上に平つくばつて謝まる姿などは、寧ろ面白くなく思はれた。下らない事を爲出かして人に迷惑をかけたばかりで無く、安逸を貪る夜の時間を煩はしくつぶしに來た事迄忌々しかつた。それでも節三には、多年の習慣と生來の臆病から、どんな事件でも角立てずに内分にして置くのが第一だと思はれた。

「まあお樂においでなさい。君のいふ事はわかつた。しかし平生規律の正しい、別して風儀に關しては嚴重な會社で、しかも人事係に居る者が、かりにも婦人事務員に艶書を送るといふ事は由々敷い大事だと思ひませんか。」

直ぐに內分にしてやると云つてしまつては利目が無いから、一應は叱責して置かなくてはならないと考へて、無闇にかしこまつて居る相手を、愈々恐縮させながらやり始めたが、襖一重の次の間で荻江が聞耳を立てゝ居ると思ふと妙に差しくて爲方が無かつた。

「實際申譯が御座いません。」

「申譯が無いと云ふ丈では濟みません。一應は此の顚末を支配人にもお話して、如何いふ處置をとるべきか伺はなければならない。斯ういふ不都合のあつた場合には、會社の規律を守る爲めに、或は斷然馘首する事も止むを得ないと、豫々社長も云つて居られるので……」

支配人といひ、社長といふと、山東は益々おびえてしまつたので、節三も少しは可哀さうにもなり、又自分の立場も飮込ませたいと思ふので、自ら善良な心持が湧いて來た。

「けれども、君も將來のある人だし、又今度の事も取返しのつかないやうなところ迄は進んでは居ないのだから、私が內分にして置かうと思へば出來ない事も無い。其の爲めに、猪股君にも決して他の者に喋つてはいけないと云つて置いたが、それにしても君がほんとに改心して、今後二度とあやまちを繰返さないといふのでなければ、いつそ今のうちに會社をやめて貰つた方がいゝと思ふ。」

「いえ、もう決して御心配はかけません。」

山東は幾度となく頭を下げて誓つたあげくに、漸く穏便に濟ませてやると云ふ言葉を聞かされたので、

「此の御恩は一生忘れません。」

と鼻のつまつた聲で云つて、又疊に額を押つけた。

「では何分よろしくお願ひ致します。」

最後に又穏便に濟ませて貰ふ事を歎願して、しびれの切れた足をもてあつかひながら、手土産の紙箱を節三の前に差出した。

「つまらない物で御座いますが。」

「いけません。社内で物品をやりとりするのは嚴禁してあるんですから。」

「いえ、ほんのおしるしです。」

「困るねえ、さう云ふ事は社長も支配人もやかましいし、第一私が困るから……」

節三はほんとに困つた顏をしてゐた。たかのしれた品物でも、部下の者から受取るのは、大罪を犯すやうな氣持がした。それでも山東は只管頭を下げるばかりで、結局愚圖々々に土産物は疊

の上に残されたまゝ、客はしびれた足を引摺つて歸つてしまつた。
「どうしたんです。あやまりに來たんですか。」
つひぞ家內に特別の出來事の無い退屈にあきてゐる荻江は、さも面白い場面を見たやうな晴々した顏付で訊いた。
「ゆるしておやりになつたんでせう。」
「どうも若い者は爲様がないよ。」
節三は苦い顏をして、茶の間の火鉢の側に戻ると、又新聞を取上げた。
「なんでせうね、こんな物を持つて來て。」
座敷をかたづけて居た荻江が、土産の箱を持つて來た。
「珈琲入角砂糖だわ。」
「困るよ。」
節三は一層苦々しさうに云つて、ふり向きもしなかつた。
客が歸つたので、女中に促されて、遊び疲れた子供が眠い顏をしてやつて來たが、母親の膝の前の紙箱を見ると又眼が冴えて、

「母さん、それなあに。」
と寄添つてねだり出した。
「これお菓子ぢやありませんよ。」
「それぢやあなあに。」
「お湯に入れて飲むものです。」
「あたし飲んでみる。」
「僕も。」
子供はいきなり兩方から吾勝に手をかけて、その紙箱の蓋を取らうとした。右と左に引張られる拍子に、四つ五つ角砂糖は疊の上にころがつた。男の子は素早く兩方の手に一つ宛拾つた。
「いけませんよ。今、母さんがこしらへてあげるから、お出しなさい。」
無理に手の中の一つは取上げたが、もう一つはいきなり口の中に入れてしまつたので、どうにも爲方が無かつた。
荻江は舌打ちしながら湯呑を出して砂糖を入れて、湯をさした。つぶつぶ泡をふきながら黒い珈琲の浮び上つて湯に融けるのを、子供はのぞき込んで珍しがつた。

「あなたも一杯あがりませんか。」

節三は返事をしなかつたけれど、荻江は夫のと自分のと二つの湯呑にもそれをつくつた。勸められると別に拒みもしずに、節三も湯呑を手に取つて、親子四人は熱いのをふう〳〵吹きながら飮んだ。

## 十五

寒い往來に出た山東は、外套の襟に顏を埋め、兩手をかくしに突込んで、水洟をすゝりながら歩いてゐた。何から何迄張合がなく、電車に乘る氣にさへなれなかつた。

自分といふものがまるつきり値打の無い、無闇に忌々しいものに思はれた。今の今其の前に涙迄流して頭を下げた柏節三も、その又背景の會社も――會社といふと直ぐに思ひ出す女事務員の廣川も、何の魅力も無く、そんな人間を上役とし、そんな所に勤め、そんな女に手紙なんかやつた一切の事が、別の世界の出來事のやうに遠方に想はれた。だが、矢張り心持は滅入るばかりだつた。幾臺も電車は後から來て追ひ越して行つたが、何時迄も乘る氣にはなれなくて、歳の暮の浮調子に明るい青山の通を、あても無く眞直に、猫背になつて歩いてゐた。

何時の間にか小一里の道を歩き通して、暗い御所の土手の下に來かゝつた頃は、寒さが身にしみて、靴の尖が冷たくなつて來た。彼は二度三度嚔をした。

「畜生、一杯ひつかけるか。」

もう一度鼻の中のくすぐつたくなつたのを無理に堪へながら、まぎらかしに元氣のいゝ獨言を吐いた。目の下には赤坂の町の燈火が燦然と輝いてゐた。山東は俄に目の覺めたやうな氣がして、忽ち足が早くなつた。

或るカフェの扉をあけて一歩踏み込んだが、耶蘇降誕祭の晩の飾物の未だ其儘に殘つてゐる狹苦しい室の內部には、濛々と立込めた安烟草の煙の中で、何處の學生だか十數人が、ストオブを圍んで、女給達と一緒に歌を唱つてゐた。あんまり美々しい旺んな景色なので、一人ぼつちの侵入者は、忽ち喧嘩を吹かけられ、袋叩きにあはされさうな氣臆れがして、折角のぞき込んだ顏を引込めて、逃げるやうに向側の蕎麥屋に飛込んだ。しめ忘れたカフェの扉口には、眞白に塗り立てたエプロン姿の女給が、あやしい奴を追驅けるやうな視線を、彼の後姿に集中してゐた。

うどんかけで一本飲むと、すつかりいゝ氣持になつてしまつた。たつた今迄くよくよして居た自分が馬鹿々々しく思はれて、つい此間貰つたばかりの賞與金が未だどつさりある懷も氣が強く、

むざむざ下宿に歸るのは堪らなく不愉快だつた。
「無駄な心配なんかしたつてつまらないや。どうせなるやうにしかならないんだ。」
ふふんと云ひ度い心持で、又往來の人となつたが、愈々電車に乘る氣分を失つて、恰も目の前に刺戟の強い電燈の無數にぴかぴかする活動寫眞に、吸込まれるやうに入つて行つた。
「一等一枚。」
札賣場の變な洋服を着て銀杏返に結つてゐる女の横顏にからかひ笑を浴せながら、五圓札の眞新しいやつを得意の心持でつき出した。
「お氣の毒さまですが特等しかありません。」
土間に置いてある大火鉢の緣に兩足をのせて、講談雜誌を讀んで居た女は、ふり向きもしずに答へた。
「ぢやあ特等。」
「お入りになつても時間がありませんから直におしまひになつてしまひますよ。」
「知つてるよ。此方の勝手だ。」
ふり向いた女の愛想氣の無いまづい面が氣に喰はないので、つつけんどんな口をきいた。

案内されて暗い場内に入ると、澤山の人間の息の籠つた生温い空氣にむつとして、酒の醉が暑苦しく發して來た。何の映畫だか知らないが、多分羅馬帝政時代の歴史小説物らしく無闇に華麗な宮殿の内部で、立派な體格の武士に護衛された貴族達が、女どもの踊を見ながら酒宴をしてゐる場面で、山東には悉く縁遠い物だつた。ぐつたりと椅子の背中に全身をもたせかけて、益々汗ばんで來る酒の熱にぼんやりしてゐるうちに、晝間からの心配がすつかり疲勞になつて、つい居睡に誘ひ込まれてしまつた。

あたりがざわざわするのではつとして目を開くと、それが長尺物の一くぎりらしく、先刻の酒宴の連中であらう、夥しい人數が、火焰に追はれて逃げて行く光景が、ほんの一瞬間映つた丈で、拭いて取つたやうに消えると、ぱつと電燈がついて場内はあかるくなり、見物席は俄に騷々しくなつた。

何時も人の集る場所では、若い女の姿を探し出して、密かに美しいか美しくないかを見極めるのを樂しみにしてゐる山東は、端の方から順々に物色して、あての無い胸を躍らせた。映畫なんか見るよりも、此の方が餘程面白かつた。

殊に會社員らしいのや學生などが、若い女とおほつぴらに肩と肩とをくつつけて、樂しさうに

さゝやきあつて居るのを見たりすると、胸がどきどきするのを止め兼ねる。羨しいといふよりも寧ろ恥しい程心を打つのであつた。
前の方に居る人の頭と頭の間から、目ぼしいのを探して居たが、しまひには後の方を振かへつて迄も、館内隈無く檢閲しないでは氣が濟まなくなつた。少しみつともないかなと肚の中では考へながらも、首を廻して延び上つて、眞うしろに振向いた時、五六列距てた場席に、貝塚謹三郎の姿を見出した。其の次の瞬間には、更に意外にも、その隣がオールド・ロオズの毛糸の襟卷を鼻の上迄ひき上げて、顏の下半部をかくしては居るが、まがひも無い廣川の眞白な額を見つけたのである。
ぴつたりと視線のかち合つた雙方とも、少からぬ驚愕の色をかくし切れなかつたが、恰度其の時、休憩時間が切れて、場内の電燈は一時に消えた。
映畫幕の上には、山高帽子を横つちよにかぶつて、ステツキを振り廻しながら、何時に變らぬチヤプリンが姿を現はした。忽ち賑かな笑聲が四方に起つた。
「馬鹿、今更チヤプリンでもないぢやないか。」
十年一日の如く變な歩き方をして居る喜劇役者が、今もなほ人氣を失はないのが不思議だつた。

再び椅子に腰を下して、あかりの無いのを幸ひに、幾度となく後の方を振り向いて見たが、暗くなつた場内では、もとより見定める術はないのであつた。

山東はすつかり醉もさめて、興奮と嫉妬と、一種の義憤に頭がもやもやして、何もとりとめた考は追及出來なかつたが、それでも一脈の安心に似た感慨が無くはなかつた。無實の罪を背負はされた者が、自分の手で眞の犯人をつかまへたと云つたやうな氣持だつた。その上に、二人の人間に自分があざむかれて居たやうな心さへ起きて來た。こんな事と知つてたら、むざむざ白狀しないでもよかつたのだ。一切の罪は貝塚謹三郎におしつけて、涼しい顏をして居られたのだ。何といふ俺はどぢなんだらうと思ふと、先刻から目の前で、見ず知らずの女にお世辭をつかつたり、接吻を求めて橫面を張飛ばされたり、突飛ばされたり引つくりかへつたりして居るチヤプリンと共に、自分程馬鹿々々しい人間は無いとさへ思はれて、何から何迄忌々しくて堪らなかつた。

大笑のうちにチヤプリンが姿を消して、又あかりがついた時、彼は待兼ねて體をうしろに捩向けたが、其處いらと思ふ場所には、貝塚も廣川も見つからなかつた。

## 十六

今日が今年の最終の勤務なので、いゝ年をした社員迄、試驗の濟んだ日の學生のやうにうきうきした素振を見せて働いて居る。女事務員の中には、ふだんの手づくねの束髮とはうつて變つて、お正月の頭に馴れる爲めに、根の高い島田や銀杏返に結つて、据首をして仕事をしてゐるのもあつた。

山東は節三の前に顏を曝すのが氣臆がして、餘程休んでやらうかとも思つたが、一方には昨夜活動寫眞で見付けた貝塚と廣川が、どんな面をしてゐるか見てやり度い氣も強く働いて、遲刻はしたが出勤した。節三の前に頭を下げる時は、顏が赤くなつたが、先方でもばつの惡さうな物腰で目をそらしてしまつた。

「よう、お早う。」

冷かすやうな調子で猪股は意地の惡い微笑を少し出張つた脣にうかばせて云つたが、山東には此の男が一番苦手で、挨拶を返す勇氣も無く悄氣てしまつた。

とはいへ山東の心の中には、自分の身をかばふ心持よりも、貝塚と廣川の事をあばいてやらうと思ふ氣の方が強かつた。それは間接に自分をかばふ結果を持來すに違ひ無いし、又一種愉快なる冒險のやうに心をそゝる事であつた。誰に心置も無く無駄話の出來る正午の休息時間迄、一人

で肚の中にしまつて置く事は到底不可能だつた。

何か計算をして居る節三の隙を覗つてゐたが、まるつきり仕事に夢中になつて居る様子に安心して、心持猪股の方に椅子をずらしながら、低い聲でさゝやいた。

「おい、とても面白い事があるんだ。特種(とくだね)だぜ。」

不覺にも聲は震へたが、低聲ながらも口を切つてしまふと、かへつて胸が開けた。

「へえ、レコの事かい。」

相手欲しさに悩みながら、昨日の事件があつてから、俄に自分を憚る様子を見せる同僚に不滿を感じてゐた猪股は、皮肉な微笑を浮べて、これも椅子を近くに寄せて、インキのついた小指を出した。

「うむ、それがね……」

流石に一寸躊躇した。

「それがペラ公の事なんだよ。」

「畜生、覺えてゐろ。」

誰が手前の惚氣(のろけ)なんか聞くものかといふ、極めてお定まりの型を見せながら、彼は忌々しげに

舌打ちした。

「違ふよ、そんなんぢやあないんだよ。」

山東は眞赤になつて辯解したが、なかなか相手が承知しさうも無いので、いきなり机の上のメモレタムに鉛筆を走らせ、

いゝ話だから廊下に來ないか

と書いて、隣の机にまるめて投げると、そのまゝ何か用事のありさうな風をして、席を離れて室外に出て行つた。

紙片を開いて讀んだ猪股が、一寸間を置いて廊下に出て見ると、向ふの階段の處に山東の姿が見えるので、小走にかけて行つた。

「二人とも出て來ちまつて、柏さん何か云つてやしなかつたかい。」

「變な目つきはしてゐたけれど、構ふもんかと思つて出て來てやつた。」

二人は前後を見廻して、人のゐないのを見定めてから、其處の柱の蔭に額をつき合した。

「あのねえ、昨夜さる處で廣川を發見したんだよ。」

廣川の事だと、どうもすらすらと口がきけなくなつて困つた。

「よせやい。しらばつくれやあがつて。」
猪股はわざと巻舌でいひながら、同僚の背中を容赦なくどやしつけた。
「さうぢやないつたら。」
山東は眞顔になつて、もう一度あたりに人氣の無い事を確めた。
「實は赤坂の活動なんだが、全く偶然なんだ。ペラ公が貝塚ん畜生とくつつき合つてゐやあがるんぢやあないか。驚いたよ。とても驚いちやつた。」
「へえ、貝塚と？」
嘘をつくないと云ひ度さうな色を見せながら、猪股も意外な事を意外な人間から聞かされるので、目をまあるくして呼吸を呑んだ。貝塚と廣川とが怪しいといふ噂は、そもそも猪股から出たのだが、實は艶書の犯人が山東だと知つてからは、猪股は自分の目はしの利かなかつた事を恥ぢてゐたのだつた。若しも山東が今云ふやうに、矢張り二人はたゞの仲で無かつたとすれば、自分の慧眼は驚く可きものだと思ふと、ひと事では無いのであつた。
流石に柏節三の家へ珈琲入角砂糖一箱を持込んで、涙を流してあやまつた事はおくびにも出さなかつたが、赤坂の活動寫眞館で、ロイド眼鏡の貝塚謹三郎と、オールド・ロオズの肩掛に顔の

下半部をかくした廣川が、肩と肩とをぴつたりくつつけてゐるのを發見した顚末に、たつぷりおまけをつけて山東は喋つた。

「とてもあわてやあがつてねえ。まさかに俺様が追跡してゐようとは思はなかつたからなあ。」

身の潔白を證明しつくしたやうに、すつかりいゝ氣持になつてしまつた。

「さうか、矢張り俺は名探偵だらう。どうしてもあいつら二人は臭えと睨んだんだ。」

二人の仲を噂に立てた張本人として、ひどく器量をあげた氣持で、猪股も緊張した滿足を味つた。

何よりも若い者の血を湧かせる情事で、しかも自分達に夫々關係のある主人公の事だから、何時迄も熱中して話してゐ度かつたが、誰かしら階下から上つて來る足音がしたので、俄に怠けてゐるのが怖くなり、二人は先を爭つて事務室に歸つた。節三は不機嫌な顏をして、ぢろりと上目で睨んだが、それつきり又忙しさうに計算を始めた。

待兼た正午の休息時間には、先づ第一に貝塚と廣川が、どんな樣子をしてゐるか見てやらないでは氣が濟まなかつた。けれども山東としては、自分の方にも艶書を送つた弱身があるので猪股のやうに無責任に面白がつてもゐられなかつた。

「構ふもんか。貝塚の野郎冷かしてやらうぢやないか。あんまりづうづうし過ぎらあ。」

猪股はためらつて居る山東の肩に手を廻して、階下の營業係の窓際にゐる貝塚謹三郎を見に行つた。

慶應出身で、學生時代には英語芝居に出た事もあり、卒業後は暫く三越に勤めてゐたと云ふ貝塚は、總ての好みは少し派手過ぎるが、兎に角きちんとしたみなりをして、手入のいゝ頭髮をきれいに後に撫で上げた風采で、椅子の背にもたれながら小說本らしい英書を讀んでゐた。外の者の食堂に行つた後を、其日の當番として窓際に殘つてゐたが、折柄客も來ないので、呑氣な形でゐたらしい。

「ちえッ、氣障な奴つたらねえなあ。」

猪股は舌うちして罵つたが、年配も違ふし、月給高も比べものにならない相手なので、いざとなつては面と向つて冷かす丈の勇氣が無かつた。

「あゝあ、腹がへつた、腹がへつた。」、

わざと大きな聲で、何のかゝはりもない事を、無理にあてつけがましい態度で叫んで見たけれど、貝塚はロイド眼鏡のはづれから、ながしめを呉れたばかりで、顏色も動かさなかつた。かへ

つて山東の方が赤面して逃げるやうに地下室の食堂に下りて行つた。

食事が濟むと、猪股は裏庭の日あたりに散歩に出ようと促したけれど、風が寒いといふ口實で山東は應じなかつた。其處には屹度、女事務員が集つてゐるに違ひ無い、廣川もゐるに違ひ無い、さうと知りながらわざと自分を誘ふんだと思ふと、彼は腹立たしくなつて、意地の惡い笑を浮べながら執拗に勸める同僚を憎んで、さつさと二階に上つてしまつた。

ふゝんと鼻で笑ひながら、猪股はバツトに火をつけて、生意氣な恰好をして裏手の方に歩いて行つた。夏は日蔭に涼しい風が通り、冬は煉瓦の壁に當る日光が暖いので、食後には多勢の社員が烟草をふかす空地だつた。今日も四五人若い連中が安烟草の煙を吹きながら、四五日續く休暇をどうして暮さうかと話合つて居るところだつた。彼も其の内に割込んだ。

少し離れた所には、女事務員の一組が編物やタツチングの手を動かしながら、此方の男達の方に聞えよがしに甲高い笑ひ聲を立てゝお喋りしてゐた。廣川珠子の姿も其中に見出された。

猪股にとつては誰といふきまつたあては無いけれども、女事務員のすべてに無關心では居られなかつた。誰もが目をつける廣川たから、勿論彼も近づき度かつた。しかしそれ一人ときめて熱中し、進んで手紙を送らうと云ふ心持はまるつきり無かつた。それを、平生馬鹿にしてゐる田舍

者の山東が、臆面も無く斷行したのを知つた昨日は、たしかに安からぬ氣持がした。だしぬかれた氣持がした。柏節三の耳に入つたのが、寧ろいゝ氣持でもあつた。

ところが貝塚の場合は、遙かに忌々しく、忿懣に堪へ無い事である。山東のは小氣味のいゝ失敗だが、ぬかりの無い貝塚は、夙の昔に完全に手に入れてしまつてゐるかもしれない。さう思ふと、今目の前で洒々として喋つてゐる廣川の、誰よりも小柄で、誰よりも厚化粧で、誰よりも響く聲で笑つてゐるのが、許し難く思はれて頭の中が熱くなつた。

「畜生、きむすめらしい面をしてゐやがるが、どんなもんだかわかるもんか。」

彼の想像は、昨夜山東を逃れて活動寫眞館を出た後の二人の行動に迄及んで、怪しからない場面を、山王の森に結びつけて考へたりした。

一時になると、男も女もあわてゝ事務室に歸るのである。猪股は仲間の一番後から、殘り惜い烟草をやけにすぱすぱ吸ひ盡して、後からついて來る女達に押されるやうな形で家の中に戻つて來た。わざとゆつくり歩いてゐると、かけぬけて行く女もあつたが、食堂の前の階段を上らうとする處で、廣川と三杉が肩を並べた。外には誰もゐなかつた。

「廣川さん。」

猪股は女の横顔を我慢の出來ない程憎らしく思ひながら呼びかけた。先方が一人でなく連れのあるのは困つたけれど、すぐれておとなしい三杉の事だから構ふものかと思つたのである。

「昨夜はおたのしみ。」

さも惡黨らしく低く太い聲でいひながら、おちつきを示す爲めに目尻で笑つて見せた。

一足階段に踏みかけて、短く太いふくらはぎを少々ばかり見せてゐた廣川は、ぎよつとした様子で立どまつたが、忽ち險しい顔つきをして、

「何ですつて、猪股さん。」

と正面から詰問する態度に出た。

冷かしてやつたら、眞赤になつて逃げ出すだらうと思つてゐた猪股は、案外相手が強く出たので、內心ひどく弱つたが、ひけ目を見せ度くない根性から、強ひて平然として女の顏を見てやつた。

「昨日の活動面白かつた？」

「えゝ、面白ござんしたよ。」

廣川はすつかり度胸を据ゑて、

「それがどうしたつていふんです。餘計なお世話ぢやありませんか。」

「へえ、餘計なお世話かしら。それぢやあ山東が可哀さうでせう。」

少からずたじろいだ猪股は、受身になつて同僚の名をだしに使つた。

「いやな人。貴方なんか干渉する權利はないわ。」

「生意氣いふない。貝塚なんて色魔とくつゝきやがつて……」

あんまり相手が高飛車(たかびしや)に出るので、猪股もしどろもどろながら夢中に熱して來た。

「おいおい。どうしたんだい。」

何時來たのか沼尻の大きな姿が後に立つてゐた。

「あんまり喃々(なん／＼)しとると柏大將に密告しますぜ。ははは……」

「いや、あんまり此の人失敬な事をいふもんだから……」

すつかり聞かれてしまつたと思つて、猪股は内心悄氣てしまつたが、女を相手に弱味は見せられなかつた。

「貴方こそ失禮ぢやありませんか。いゝ加減ないひがゝりをして……」

「何がいゝ加減だい。君と貝塚が活動に行つたから行つたといふんぢやないか。」

萬一沼尻に、自分が廣川を口說いてでもゐると思はれては大變だと考へて、自分を辯護する爲めにも、あらひざらひまくし立てる外には途が無くなつた。かうなつたからには、沼尻といふ第三者のやつて來たのが、かへつて味方のやうにも思はれた。

それにひきかへて、廣川の方は旗色が惡くなつて來た。高の知れた猪股一人なら、一切強氣で押通してやらうと思つたのが、見上るやうな大男に立會はれては、流石に女らしく悲しくなつて來た。黑目勝の目のふちがこはばつて來るのを無理に我慢してゐたけれど、遂々堪へ切れなくなつて、長い袂を顏に當てるとしやくり上げて泣き出した。たぶん背中の半分位迄も塗つてゐるだらうと思はれる程白粉の濃い襟首から、まるみのある肩の肉迄、泉が湧上るやうに浪を打つて震へるのを猪股は逃げるにも逃げられず、手のつけやうもなく弱り切つて見守つた。

先刻から傍でおどおどして居た三杉は、うしろからかばふやうに寄添つてなだめたが、廣川は一層咽びかへつて泣くのであつた。

「はゝゝ、悲戀悲歌かね。」

途方も無く見當の違ふ、わけのわからない事を云つて沼尻が面白さうに豪傑笑をした時、丁度最後の食堂の人々だつた一連がぞろぞろ出て來た。折惡く、それは支配人と柏節三と、其外主任

級の人間だつた。

「どうしたと云ふんだ。」

幅の廣い油切つた顔に、怖しく不機嫌な皺を刻んで、支配人は其場の景色を睨んでゐたが、下らない事に自身かゝづらつては沽券にかゝはると思つたらしく、強ひて平生と違はないおちつきを見せて、さつさと二階の方に立去つてしまつた。

「どうしたんです。猪股君。君は愚圖々々してゐないで自分の仕事をしなければいけない。」

節三には兎角の分別は無かつた。何でも彼でも自分の配下の猪股が、目の前の事件には無關係である事ばかりが願はしく、萬一さうで無いにしても、無關係だと同僚達に思はせ度かつた。

「道草を喰つてゐてはいかんぢやあないか。今日は仕事は殘しては置けないんです。」

ふだんに似ない甲走つた聲で叱責されたのをいゝ機會にして、猪股は頭を掻きながら逃げてしまつた。

「何事が起つたんだ。」

「子供の喧嘩か。」

兎に角若い女の泣いてゐるのが面白いので、いゝ年をした連中も、足を停めたが、我事のやう

に氣を揉んでなためてゐる三杉に抱かれて、愈々さかんに泣き出した廣川の様子に壓倒され、口々に何かつぶやきながら行つてしまつた。

「一體これは如何したといふんです。」

自分の責任を感じて胸のふさがるやうなおもひをしながら、節三は其場にゐる沼尻をかへりみた。

「なあに犬も喰はんといふやつでせう。はははははは。」

それが相手の心配をうち消す爲めの好意の言葉だと受取つて貰ふ積りで、沼尻は場合も考へぬ高笑をした。

## 十七

その夕方、節三は浮かない顏付をして會社を出た。折角無事に年を越さうとした最終の日に、思ひもかけない事件が起つて、しかも支配人の目に觸れたのが、かへすがへすも殘念だつた。

嚴重に調査して報告しろといふ支配人の命を受けて、節三は戰場に乘出す軍人のやうな硬直した面持で、早速猪股を別室に呼んで詰問した。詰問された猪股は、飛んだいたづらが大事になつ

たので、すつかりのぼせ切つてしまつたが、元々自分は彌次馬に過ぎないので、事件の主人公は貝塚と廣川と山東なのだから、何をかくす事も無く、寧ろ大げさに色彩を加へて一部始終を喋つてしまつた。

「私は何も知らないんです。たゞ山東君に聞いたもんですから、ついからかつてやつたら泣いちやつたんです。これからは心を入替て眞面目になりますから、今度ばかりは許して下さい。」

と卓の上に額をつけてあやまるのを、節三は苦々しく見下しながら、それよりも一層面白くなかつたのは、昨夜あれ程涙を流してあやまつた山東が、歸りに活動寫眞のやうな賑かな所に出かけた事だつた。いかにもそれは、節三などには思ひも及ばない心持だつた。

困つた事になつたとは思ふものゝ、今更別に爲方が無いので、彼は貝塚と廣川が一緒に活動寫眞を見に行つたのを、自分の部下の者が偶然發見し、それを同僚に話すと、その男が女の方にからかつたので、遂に先刻のやうな場面になつたのだ、と幾度も咽喉の詰るやうな苦しい思ひをしながら、支配人の前に復命した。

「ふむ、さうすると貝塚と廣川といふのは、餘程以前から關係でもあつたのですか。」

むづかしい顔をして、徹頭徹尾睨みつけてゐた支配人は、すつかり聞き終ると存外好奇心を動

かしたらしく、膝を乘出して來た。
「さあ、それは如何ですか。兎に角活動寫眞には一緒に行つて居りましたさうで……」
「いかんねえ、容易ならん事だ。社内の風紀を保つといふ事は、社長が常々嚴しく注意されるところで、最初女事務員を雇はうと云つた時も、しきりに反對されたのだが、それを極力勸說したのは外でもない私なんです。」
「まことに申譯御座いません。私の監督が行屆きませんので……」
節三は支配人の言葉に益々責任を感じて、蒼ざめた顏をして幾度となく自分の不行屆を謝罪した。支配人は支配人で、全くそれが節三の監督がゆるい爲めに起つた不始末のやうに、繰返して會社の規律の重んず可き事を述べた。
「しかし出來てしまつた事は乍遺憾爲方が無いとして、此の善後策はどうする積りです。迅速に處分してしまはないと、一般の者に惡い影響が及ぶだらう。」
節三は處分といふ言葉をきくと、お手打に會つたやうな氣持になつてしまつた。いくら堪へようと思つても、彼の聲はみつともなく震へた。
「それは先づ、貝塚も廣川も解雇する事に致しまして、その上で私も辭表を差出す覺悟で御座い

ます。」

支配人の眞意は、男女二人を馘首にするといふのだらうとは思つたが、何となく自分も處分されさうな氣持もしたのだ。節三は自分の覺悟に感激して、固く脣を噛みしめた。

「はははは、何を云つてるんだ。君が辭表を出す程の事は無い。」

あまり冴えない笑方ではあつたが、節三はほつとした。

「あの貝塚といふのは誰の紹介で入社したのだつたかしら。」

暫時して支配人にかう聞かれた時、節三はやうやく頭をあげる事が出來た。

「あれは慶應時代に只今御洋行中の社長さんの御令息と同級でしたさうで。」

「あゝ、さうさう。三越の勤務時間が長過ぎて苦しいとか云つて、社長に頼み込んで來た先生だつたね。こいつは少し弱つたたな。」

支配人も苦笑して、俄に同情のある眼ざしで節三を見た。

「女を追出すんだね、その廣川とかいふのを。それが一番穩當だ。柏君、直ぐに解雇の申渡しをして呉れ給へ。」

決然としたもののいひぶりで、支配人は何の迷ふ處も無く命令した。節三は一言も無く頭を下

げて退出しながら、先づ自分の身の上の無事を喜んだのであつた。

いざとなると、何となく片手落のさばきのやうに思はれたが、上役の命令とあれば爲方が無いので、給仕に廣川を呼びにやつたが、何時の間にか歸宅してしまつて居なかつた。それをいい事にして、節三は書面を以て解雇の申渡しを差出して胸を撫で下ろした。

さういふ今日の半日の出來事を頭の中で繰返して考へながら、彼は銀座の人ごみを歩いて、尾張町の角迄やつて來た。

「柏君。」

いきなり肩を叩かれて見ると、矢張り電車を待合せてゐる沼尻だつた。

「此の尾張町は難有いです。此處で電車を待つてゐたばかりで貴方に邂逅し、おかげで職にありついたんですからなあ、はははは。」

周圍の人が驚いて振かへる程大きな聲で笑つた。少し酩酊してゐた。

「御機嫌ですね。」

節三は自分が浮かない心持なので、相手のいゝ氣持が面白くなかつた。

「いやあ、一寸麥酒を二三杯。先刻程月給を頂いたもんだから。はははは。」

彼は二十五日から三十一日迄七日間の日割の給料を渡されたのであつた。
二人は全く違ふ心持で、澁谷行の電車に割込んで乘つた。

十八

青山一丁目の停車場で、節三を殘して電車を降りた沼尻は、僅かながらも久しぶりで金錢の懷に入つたのが嬉しくて堪らなかつた。その金額をまぜて、やつと此の暮の下宿料が拂へる位の工面ではあるけれども、來月からは毎月きまつた收入のある身の上になつたのが、何にも增して氣を大きくさせた。たつた二杯でやめて置いたが、バアのてすりに寄りかゝつて、ぐつと飮み干した麥酒の味が、一際いゝ氣持にして吳れた。

下宿に歸ると、おせいは六疊間の眞中に夜着をかぶつて横になつて居た。

「あゝ腹がへつた。直ぐ飯を貰つて吳れないか。」

又始まつたなと思ひはしたが、さり氣ない風で聲をかけた。月に一度づつ、此の女は生理的の原因で、きちがひじみる事があるのであつた。

「眠つてゐるのか。」

狸だとは承知しながら、側に寄つて覗き込むと、女は何の返事もしずにくるりと背中を見せてしまつた。

沼尻は心の中で舌うちしながら、洋服を和服に着換へた。此の寒さに、室内には火の氣も絕えてゐた。手を叩いて女中を呼んで、火種を貰ひ、

「それから飯を大急ぎで呉れ給へ。お銚子を一本つけて。仕事じまひの日だ。久しぶりで一ぱいやらうよ。」

おせいの耳に入るやうにいひつけて、すまして烟草をふかしてゐた。

「あんた、お酒なんか飲んでいゝの。」

いきなり夜着をはねのけた女は、前のはだかつたのも其儘で、細帶姿で起直つた。ふだんよりも一層目のふちの黑い隈や、そばかすが濃く見える平つたい顏には、血の氣がちつとも浮んでゐない。

「明後日(あさつて)は大晦日ですよ、此の家のお拂だつて出來ないんだらう。」

突けんどんな物言ひで眞向(まつかう)から斬込んで來た。

「そんな事を云はずに仲善く飲まうよ。俺樣だつて××××株式會社の社員樣なんだ。さう何時

迄もからつけつぢあないからなあ。」

口いつぱいに吸ひ込んだ煙を、女の顔に吹きつけて、沼尻は妙に大きい手で懐を叩いて見せた。

「へん、言つてら。お前さんの大法螺も聞きあきちやつた。」

「それでも可愛くつて別れられないつてね。はははは。」

「馬鹿ッ。そんな意氣地無しに未練なんかあるもんか。」

頭痛のするこめかみをぴりぴりさせながら、おせいは上ずつた聲でまくし立てた。

女中はいつもの通りお膳を二つ持つて來た外に、いひつけられたお銚子を疊の上に置いて、何と無く様子の變な二人の顔を見比べながら出て行つた。

「まあ御機嫌を直して御臺様も一獻きこしめさないか。」

熱燗をぐつと引かけて、その盃をおせいに差した。

「御免だよ。あたしや頭痛がしてしやうがないんだもの。」

差されたやつを容赦なく引拂つたので、盃は横飛びに飛んで火鉢に當つて眞二つに割れた。

「おい、亂暴はやめて頂き度いね。いやなものなら無理にとは云はないんだ。」

沼尻もすつかり不愉快になつて、こはれた盃はそのまゝに、徳利をさかさにして茶碗に酒を注

いだ。
「あゝ、うめえ。全く百藥の長だ。ちつと位の頭痛なんか直きなほつちまわあ。」
わざと醉拂つた風をして、巻舌で物を言ひながら、咽喉を鳴らして飮んで見せた。おせいはちつと眼を据ゑて、脣を嚙んで見詰めてゐるばかりで、決して箸を取らなかつた。體の內に惡寒がして、膝頭がぶるぶる震へた。
お膳の上の冷くなつた燒魚と、はんぺんの薄く切つたのが二切浮んで居るのを肴にして、沼尻は茶碗の酒を見るまに飮んでしまつた。ちひさい盃と違つて、入物が大きい爲め、自ら迅速に底を見せてしまつた德利を二三度振つて見たが、一雫も殘つては居なかつた。
「おゝい、酒だ、酒だ。」
彼は手を叩いて、女中が梯子段の下あたりに來た足音にむかつて叫んだ。
「あんた、もうよした方がいゝよ。」
とんとん上つて來る女中の氣配を憚つて、低い聲で云ふ丈けのわきまへはあつたが、おせいは腹が立つて堪らなかつた。
「お呼びですか。」

障子を開けた女中に、

「もう一本呉れ給へ。もう一本だけだ。」

沼尻は空の徳利を渡して拜むやうな眞似をした。まるつきりそれはおせいにからかつて居るものとしかとれなかつた。さう思ふと口惜しくて口惜しくて、いくら我慢しようと思つても目頭には涙が浮んで來る。おせいは火鉢のふちにかけた手の甲に頭痛のする額を押つけて泣き出した。

二本目のお銚子も殘り少くなつて來た。折角いゝ機嫌で歸つて來たのに、女の方が不機嫌で、何から何迄佛頂面をして小言をいふばかりか、あげくの果てが最上の武器とする泣面を見せられては、麥酒の底が入つてゐるにも拘らず、心底から愉快に醉ふ事は出來なかつた。

「おい、飯を喰つたらどうだい。」

あんまり何時迄も泣いてゐるので、やり切れなくなつて聲をかけて見たが、女はかすかに首を振るばかりだつた。

「喰はないのか。そんなら俺が貰ふよ。」

沼尻は自分の膳の上には何も殘つてゐないので、おせいの分を引寄せて、さめたおつけをちゆうと吸つた。

「馬鹿々々しいなあ、懐には月給が入つたといふのに、下宿のお茶で、おまけに泣面を見せられちやあ。」

もう一本飲み度くなつた沼尻は、相手の強情なのが癪に障つて堪らなくなつて來た。たつた七日間の日割の給料なのだが、さも澤山の金高らしく聞かせ度かつた。彼はむしやくしや腹で荒々しく手を叩いた。

「あんた。」

猛然としておせいは立上つて、いきなり男の手にしがみついたが、息が切れて口はきけなかつた。

「放せよ。みつともないぢやないか。」

無理に振放さうとしてゐる處に、呼ばれた女中が顔を出した。

「すまないが、もう一本呉れんか。」

「いゝえ、いりません。いらないんです。」

金切聲を振しぼつて、おせいは怖い顔をして女中を睨んだ。つるし上つた兩眼から、大きな涙がぽろぽろ落ちてゐた。

「なあに、たつたもう一本だ。」
「いけないつたら、いけないいんだよ。飲むつたつて飲ませるもんか。」
「馬鹿な事をいふなよ。お松どんが笑つてゐるぢやあないか。」
沼尻は苦笑しながら、それでも女中の手前どうしても飲まなくては男が立たない氣がして、片手でおせいを引抱へながら、もう一つの手で空徳利をつかんで、
「さ、これつきりだから熱いやつを大急ぎで。」
どうしていゝか當惑しながら、矢張り珍しい喧嘩が見たくて立つてゐる女中の方に、太い腕を突出した。それを受取らうと女中の方からも手を延した時だつた。きちがひのやうに狂暴になつたおせいは、先刻盃をすつ飛ばしたと同じやうに、力任せに徳利を叩き落し、その勢で男の胸ぐらにむしやぶりついた。
「畜生、あつちに居た時分の事を忘れやがつたな。」
さう云ふつもりだつたが、咽喉がつまつて半分も口に出なかつた。滿洲の料理屋に奉公して居た時分のそもそもの馴染から、苦勞して貰ひためたお金も着物もみんななくなして、一緒に京城へ逃げて行つた頃の事迄が、前後の脈絡も無く頭に浮んで來て、しかもその思出のすべてが、口

惜しいといふ一念にかたまつてしまつた。

「畜生、殺されたつて放すもんか。」

どうしたものか、おせいの頭の中には、自分は此のまゝ男の手でなぶり殺しにあはされるのでは無いかと云ふ恐怖が起きた。それで愈々死身になつてしがみつきながら、あらん限りの力を込めて沼尻の手首に喰ひついた。

あまりの事に沼尻も血が頭に逆行して、先刻からの酒が一時に發して來た。物も言はずに立上ると、なほ嚙みつかうとする女の横面を二つ三つ張飛ばし、相手のひるんだ隙に、雙腕に力を込めて振放し、よろよろよろけながらもう一度むしやぶりついて來るやつを、眞正面から突飛した。

あつといふ暇も無かつた。ひとたまりも無くけしとんだおせいは、やうやくちんちん鐵瓶のたぎりかけてゐた火鉢の上に、仰向にひつくりかへつた。じゆうといふ音を立てゝ、六疊間いつぱいに灰神樂が舞上つた。

「ざまあ見やがれ。飲ませるところは何處にでもあらあ。」

あつけにとられて立つてゐる女中を押のけて廊下に出た沼尻は、蹣跚とした足取りで梯子段を踏鳴らして下りて行つてしまつた。

## 十九

正月の仕事始は四日である。上役の所には律義に廻禮に行つた連中で、未だ紋付やフロック・コオトを着て出て來るのも澤山あつた。あつちでも此方でも、改まつた顏をして、

「御目出度う御座います。舊冬中はいろいろ御世話になりまして……」

「今年も相變らず。」

など丶同僚同志他所行の口上を述べ合つて居る。其中で、すぐれない顏色をして居るのは人事係主任柏節三だつた。

大好きなお雜煮を喰べながら讀んでゐた今朝の新聞に、「會社員の妻猫入らずを嚥む」といふ大きな標題で、側には一廻ちひさい活字で「と見せて實は練齒磨」と小標題を置いた記事を見つけた。

會社員とある爲めに他人の氣がしないで、箸を止めて讀んだ。

舊臘二十九日午後十一時青山南町一丁目下宿屋青南館の一室に於て××××株式會社員沼尻某の内縁の妻西尾せい(二十七)は夫の寢息をうかがひ猫入らずを嚥み苦悶し始めたるより大騷ぎとなり……

といふ書出しで、最寄の醫師を呼んで來て手當を加へたが、しきりに苦しい苦しいとうめくもの丶何となく様子がそらぞらしいので、醫師も不審を起して調べて見ると、當人は猫入らずを嚥んだと云ふにも拘らず、實際は練齒磨を嚥下して、亭主を驚かす狂言だつたといふ記事だつた。

なんでも宵のうちに痴話喧嘩のあげく鐵瓶が飛び湯呑みが割れるといふ騒ぎを演じ亭主は宿を飛出して何處かでしたゝか醉つて歸つた面あてにやつた一場の喜劇で出張の警官に大眼玉を喰つた。

最後の一字迄繰返して讀んで、節三は餅か咽喉を通らなくなつた。

彼の心配は一通りでなかつた。相手が沼尻の事たから、洒々として會社に出て來るかもしれないが、若しもあの記事が社内の者の目に觸れ、支配人の目に觸れたとしたら自分はどうなるだらう――又あれ丈の大みだしがついてゐては、大概の人が知つてゐるに違ひないと思ふと、居ても立つてもゐられなかつた、お雜煮のおかはりをしないのを妻の荻江に不思議がられたが、節三は密かに半紙に辭表を認めたのを懐中して會社に出た。途中で青山の沼尻の下宿に立寄つて見ようと思つたが、その勇氣は出なかつた。

「柏君、今朝の新聞讀んだかい。」

遠慮の無い古參社員の田崎が、第一番に口を切つた。

「驚いたよ。會社の名前をすつかり出してゐるんだからなあ。」

もう一人の社員も節三の顏色をうかゞひながら應じた。

殆んど社員の全部が口々にその噂をしあつてゐた。年頭の挨拶が濟むと直ぐに、皆の興味は其處に集つてしまつたのだ。新參ながら面白い人間だと思つてゐた者もあるし、手腕家だと思つてゐた者もあるし、兎に角初對面の人にも臆面なくつきあひの出來る沼尻は、またゝくひまに會社全體に顏を賣つてゐた。それ丈此の事件には深い興味が伴つた。

「柏さんの紹介たつていふぢやあないか。」

「兎の字はのがれられないよ。」

何時迄も方々で話してゐるのを耳にする度、節三は愈々肩身が狹くなつてしまつた。十三年六箇月人一倍眞面目に勤續した會社にも、遂々別れなければならなくなつたのかと思ふと、目の中が熱くなる程萬感が胸に迫つて來る。彼は幾度も內衣囊に納めてある辭表を上から押へて支配人の出社を待つてゐた。

そろそろ正午近くなつた頃、

「支配人さんがお見えになりました。」

來たらば知らせて呉れと賴んで置いた給仕がさう云つて來た。節三は深い吐息をして、切腹の場所に行く武士のやうなのつぴきならない心持で出かけて行つた。

こつこつと扉を叩くと、はいれといふ聲が直ぐに應じた。血色のいゝ眞四角な支配人の顏を正面に見た時、節三は自然と頭が下つて、足の運びが自由には行かなかつた。

「何か用ですか。」

口をきかうと努めても聲が出ないので、唾ばかり呑み込んで居る節三の樣子を、さもじれつたさうに見ながら、支配人は力のある聲で訊いた。さつさと云つたらいゝぢやあないかと云ふ調子が明かだつた。

「申上るのも面目ない次第で御座いますが、今朝の新聞は御覽になりましたでせうか。」

節三は蒼ざめた顏を上げて、切口上で云ひ出した。

「新聞は每朝讀みます。」

不機嫌な態度を愈々あからさまにしたので、節三は倚更へどもどして、二度三度頭を下げた。

「その新聞の記事につきまして、幾重にも御詫び致し、又私の一身の處決も致さねばならないと

考へましたので……」
順序よく話を進める丈の氣力が無く、早くも内衣嚢から辭表を取出して、面積の廣い支配人の机の上に靜かに差出した。
「それは何です。」
支配人のいふ事は、一々意地惡く聞えた。手を延ばして一寸取上げたが、額の不機嫌は一層深くなつて、いきなりそれを節三の前に突返した。
「柏君。君のいふのは今朝の新聞に出てゐた、會社員の女房が猫入らずを嚥んだとか嚥まないとかいふ彼の記事ですか。」
「左樣で御座います。つい同窓のよしみで飛んだ者を御紹介致しまして、何とも申譯が御座いません。それで私は……」
「いかんねえ、さうあわてては。」
支配人には餘りに意氣地の無い節三の樣子が忌々しいらしく、机の上に握拳をこしらへて舌うちした。
「柏君。まあ考へて見給へ。今うちの會社には百人近い人間が働いて居る。その中には一人や二

人下らない眞似をする奴もあらうぢやあないか。それを取締るのが君の職責には違ひ無いが、さりとてそんな奴等のした事に對して、一々君が責任をしよつて居てはたまつたものでは無い。會社として其處迄君に要求しては居ないのです。此の辭表はまあしまつて置き給へ。」

言葉數が重なるうちに支配人の調子は幾分か柔いで、しまひには節三を慰めるやうな具合にさへなつて來た。

「そこで斯ういふ事件に對して、不取敢會社の取るべき態度が第一の問題だが、迅速第一――これがモツトオだ。どうです、左樣思ひませんか。」

迅速第一といふのは何の事だかわからなかつたが、さう云はれて見ると、節三は今朝から自分の身の上の心配で頭がいつぱいになつて居て、會社の立場から觀察し、會社として取る可き態度などは微塵も考へなかつた事に氣がついた。支配人と自分とを比較して、如何に自分が値打ちの無い人間であるかを、密かに痛感した。

「先づ新聞社の記事の正誤を求めなければならない。眞向から、そんな社員は此の會社には居ないと云ひ切つて、社員錄でも見せてやるんだ。又事實正式の採用の辭令は出して居らん。君の紹介で、正月一日から採用する積りであつたが、暮のうちに出勤して居たのは、本人の勝手で見習

に來てゐたのだ。多少の給料らしいものを與へたとしても、それは手當として雜費から出して置けばいゝ、さうではないでせうか。」

支配人の云ふ事は何から何迄節三の感嘆する處であつた。支配人にしてみても、節三の感嘆して居る樣子がはつきりわかるので、一段といゝ氣持になつたらしかつた。

「そこで本人には採用見合せの手紙を一本やつて置けばよろしい。又社內の告知板には、右見習の者は都合により採用せずと掲示して置く。萬事早い方がいゝ。迅速第一さ。」

同じ言葉を又口にして、支配人は机の上にのせてゐた拳固で、とんと卓子を叩いた。

## 二十

午後になつて、節三は支配人の室にもう一度出頭しろと云ふ迎ひを受けた。

いひつけられた通り、新聞社には一々使ひを出して正誤を申込み、沼尻には手紙で採用見合せの通知をし、告知板にも其趣を貼出した。さう云ふ風に取計つた後でも、彼の心の中は、輕々しく昔の友達などを引張つて來た後悔でいつぱいだつた。成程支配人のいふ通り、辭表を出す迄の事はなかつたとしても、今後の自分の出世の邪魔になる事は免れない。自分の信用が傷ついた事

に疑も無い。さう考へて居た矢先だつたので、支配人の室へ呼びつけられる事は、未だ自分には想像も出來ない怖ろしい事が待構へて居るやうに思はれた。

「御用で御座いますか。」

一歩支配人室に踏込んだ時、不覺にも聲は叉震へ、靴の踵の床を踏む音が、ふだんよりも不規則に聞えるのであつた。

「柏君。」

人と話をする時には必ず相手の名前を呼ぶのが癖だとは知りながら、さて今の場合に斯う改まつて呼びかけられると、益々威壓される氣持がして、自ら頭が下るのであつた。

「甚だ君には御氣の毒ですが……」

と支配人の言葉が途切れた一秒間は、一時間よりも長く思はれた。

「會社の規則として、今回の如き出來事のあつた場合、默つて置くといふ事も出來ないので……」

さう云ひながら、支配人は手許にあつた一通の辭令を節三の前に無雜作につきつけた。

それを受取る節三の手は硬張つて、いふ事をきかない感じがしたが、兩手で頂くやうな形でうやうやしく取上げて、そつと開いて見た。

人事取締上怠慢のかどあり譴責す

短い文言ではあつたが、節三にとつては嚴かなものに思はれた。感慨にうたれて言葉も無く二度三度頭を下げて、その一通を押頂いた。

「なあに形式だけの事だ。仕事始に緣起でもないが、氣にかけないで吳れ給へ。」

支配人は何の苦もなさゝうな、寧ろ冗談に近い調子で云ふと、いきなり右手の側机にのつてゐるうづ高い書類を取上げて、盲判を押し始めた。

それつきり取りつくしまがなくなつて、節三は又叮嚀なおじぎを繰返して、その室を引きさがつた。

廊下に出ると深い嘆息が、胸の底から湧いて來た。

「人事取締上怠慢のかどあり譴責す。」

彼はもう一度それを口の中で讀んで、今朝書いて出した、支配人に突返された辭表のひそんで居る内衣嚢に納めた。(大正十三年三月二十四日稿了)

# 晚年

# 一

「待て。もう一度讀んで呉れ。」

老人は、枕頭で一生懸命に新聞を讀んで居る書生の門馬の方に、萎びた、大きな手を振つた。

「遂に軍隊がどうしたとか云つたな。」

いざとなつたら、今でも力のありさうに見える筋立つた手の指を、一本々々幅廣くひろげて、横に振るのが老人の癖だつた。機嫌の惡い時、何か意に滿たない時、殊に體の自由が利かなくなつてからは、自分自身の肉體をもてあます時、屹度その癖が出るのであつた。

「遂に軍隊の出動を見るに至れる爲め、罷業勞働團は一層反抗の氣勢を高めたるが、流石に造船所には迫る能はず、目的を變更して、××神社へ××神社へと口々に叫びつつ、以前の集合地へ引上げんと、大通へさしかかる折柄、騎馬巡査に率ゐられた數十名の警官隊と衝突し、警官は官服を裂かれ、帽子を奪はれ、袋叩きにあふもあり、散々に打惱まされたるが、突如一齊に拔劍し

たれば、勞働團も崩れ立ち、群集の中に逃れんとするを、血迷へる警官等は、あく迄も追ひかけて滅多斬となしたるもあり、重傷者數十名を出したるは言語に絶したる暴狀といふべく、既に當地少壯辯護士團は實地踏査を開始し、民論に訴へて大に當局を問責せんと敦圍き居れり……」

「馬鹿ッ。」

老人は心底から憤に堪へかねて、目の前に新聞を讀んで居る書生の、無關心な横面に手が屆くなら、思ひきり張飛ばしてやらうと思つた程だ。

「何といふ言ひぐさだ。白晝、帝國の軍艦を建造して居る造船所を襲はんとする暴徒に對して、軍隊が出動して何故惡い。それでも云ふ事をきかん奴等を、巡査が斬つて捨てるのは當りまへだ。」

老人の全身は震へてゐた。さう云ふ怪しからん事を、寢ながら聞いては居られない氣がして、夜着を押しのけて身を起した。

「又お起き遊ばすので御座いますか。」

蒲團の裾の方で、絽ざしに熱中して居た看護婦の宮下は、狼狽てて針を置いて擦り寄つた。

「よろしい。手は入らん。」

背中に手を廻して、何時ものやうに助け起さうとする看護婦にさへ、弱い者扱ひは受け度く無いと思ふ程興奮してゐた。枕を力にして漸く上半身を起したが、永い間の床擦れで、肉の落ちた背中の骨は疼くやうに痛む。老人は、僅かに體を起すばかりの努力にさへ苦痛と疲勞を感じる自分の意氣地無さが、忌々しかつた。誰も彼も、書生も看護婦も、其の場には居ない世間の奴等も、その衰へを嘲笑つて居るやうに感じながら、肉體の疼く痛さの次第に薄らいで行くのを、夜着に突伏して待つて居た。

此の頃の癖で、さういふ時には、維新の際、鄕里で同藩の佐幕黨の爲めに滅多斬にされた闇打の景色が、まざまざと浮んで來る。

「あゝ、わしも弱つた。」

少しめまひのする頭をあげて、てれかくしに笑つたが、聲がかすれて心寂しかつた。

「門馬、お前は如何考へる。此の不景氣の時代に、會社が苦しんで居るのを知りながら、不當な要求をして同盟罷業をやり、あまつさへ衆を頼んで暴行を働くと云ふ事、それをお前達若い者は如何考へる。」

老人の聲は意外に穩かに、沈痛に響いて居た。關西の造船所の職工の罷業に、各種の勞働團體

が應援して、暴行をさへ働いたと云ふ新聞記事は、他所事として見過せなかつた。其の騷動のうらにひそむ民衆の思想を考へると、若年の頃から一身を賭して國事に盡し、今日の日本を築きあげたといふ誇を持つ老人の心はたゞならず刺戟される。捨てゝ置いては一大事だと云ふやうな緊張した心持が、熱情を伴つて湧起るのであつた。

先刻(さつき)から坐りづめで、しびれの切れた足を氣にしながら、門馬は一層固くなつて、幾日か剃刀の當らない老人の白い髯に埋もれた横顏を、竊み見て息を呑んだ。確かに自分の返事を豫期して居るのだと知りながら、何と答へるのが無事だらうと、そればかりが心配でうつかり返事も出來なかつた。

「何かそれ相當な意見があるだらう。無い事はあるまい。」

たゝみかけて促されても、門馬には返事が出來なかつた。思ふまゝに答へれば、忽ち一喝を喰ふ事は明白だつた。さうかと云つて、嘘いつはりの大嫌(だいきらひ)な老人に、出鱈目を云ふと、たちどころに見透かされさうだ。返事をしないで居れば、矢張り不機嫌になるに違ひ無い。彼は自身の腑甲斐なさに恥入つて、うなだれた。

まだ、此の社會に仕事らしい仕事も爲ず、從つて自分自身の仕遂げた事に對する愛着を持た無

い若者には、日々の世の中の出來事を、我身の事のやうに思ふ老人程の熱情を持つ事は出來なかつた。自己の性格でうらうちする程の力も無く、徒らに新聞雜誌の無責任な論調や、學校の若手の教授達の、人氣取を主とする講義などに、大部分の思想をつくりあげられてゐた。少し過激だなとは思ひながらも、職工達のとつた行動を是認しなければ、自分の知識が無價値になると云ふやうな不安心さへ感じた。巡査を袋叩きにしたり、官服を破いたりする事に對して、一方が抜劍するのも無理では無いやうに思はれもするが、兎に角多數者の味方をして、其の非を鳴らす方が、事を好む心持と、何と無く時勢に遲れ度くないと云ふ弱味から、自分のとる可き態度だとも考へられるのであつた。門馬はすつかりあがつてしまつて、胸をわくわくさせながら、老人の氣色をうかゞつて居た。

「どうしたといふんだ。意氣地無しめ。」

自分の意志に逆ふ者は許しては置けない性質だが、同時に又、人の機嫌を兼ねてびくびくしてゐる男も氣に喰はなかつた。老人はさげすんだ言葉を浴せかけて、そのまま靜かに身を倒し、枕に頭をつけて目をつぶつた。思ひ切り自分の意見を吐露してやらうといきごんで居たのだが、輕いめまひを感じて止めてしまつた。

「お前も三百代言や新聞やと同じ考へなんだらう。」

堅く目をつぶつたまゝ、力の無い聲でつぶやいた。門馬は看護婦と顔を見合せて、てれかくしに苦笑した。

たて切つた玻璃戸（ガラスど）の中の日あたりに、高い聲を出して、新聞を一面から順々に讀んで來たので、門馬の額は汗ばんで居た。かれた咽喉を濡らし度くもあつた。痼癪筋をありありと浮べて、目を閉ぢて動かない老人の、けはしい皺のたたみ込まれた顔を見ながら、釋放された氣持で膝を崩すと、不覺にもねむけを催して來た。

「門馬。」

驚いて居ずまひを直したが、老人の鋭い目つきは、まともに向いて居た。

「まだ居たのか。もう行つてもよかつたのだ。」

「はい、しかし未だ新聞が殘つて居ります。」

膝の下にすべり落ちてゐた新聞を取上げた。

「もうよい。あつちへ行つて勉強しろ。」

老人の言葉には多少の皮肉があつた。それつきり又目をつぶつて、向ふに寢がへつた。間も無

く、かすかな鼾（いびき）が聞えて來た。
門馬はほつとして、痺（しび）れてつれる足を、看護婦の手前氣にしながら立上つた。絽（ろ）ざしに一心になつて居る女の横顔から襟足の、白い柔かさうな肉感に、愈々自由にならない足が氣になつた。
病室をすべり出て、長廊下から書生部屋に行く迄、その足の痺（しびれ）は直らなかつた。

## 二

前からも後からも、群集が眞黑になつて押寄せて來た。しかも何の物音もしない。夥しい人數なのに、叫聲も、大地を踏む足音も聞え無い。どいつもこいつも、一生懸命になり過ぎて、筋肉の動かなくなつた顔に目ばかり光らせて、ひた押しに押して來る。何時の間にか、自分の胸のところに、ぴつたりとくつついて離れない小男がある。猾（ずる）さうな目つきを見ると、むらむらと憎惡（ぞうを）の氣持が漲（みなぎ）つて來た。無理に押のけようとしたが、必死になつて居て手を放さない。後からは、、大きな薄暗い二重廻を着た大男が、容赦無く背中を押して來る。間に挾まつた胸が、段々息苦しくなつて來た。無禮者めッ――あらん限りの力をこめて怒鳴りつけてやつたが、聲は咽喉に絡んで出なかつた。一人々々引摺出して見れば、取るに足り無い人間が、衆を頼んで壓倒して來るの

が堪へられない侮辱だつた。自分を知らないか、此の俺を知らないか。幾度と無く、自負と、同時に相手を非難する心持が混亂して、頭の中に渦を卷いたが、群集の誰一人注意を拂ふ者も無かつた。そればかりでは無い、彼等はみんな、自分の誰であるかを承知し切つて居る樣子だつた。承知してゐる爲めに、わざと自分の方に意地惡く押寄せて來るのだとさへ思はれた。幾度となく人波の上に兩手をあげて、群集の無秩序を押沈めようと試みたが、無駄だつた。かへつて、兩手を擧げた爲めに足場が惡くなつて、いやが上に、前後左右から揉まれるうちに、もがいても、もがいても足が地面につかなくなつてしまつた。と思つた時は、もう人間の頭の無數に蠢いて居る上に、胴上にされた形ではふり出された。突然目の前を怖ろしい勢で、騎馬巡査が過ぎた。無數の人間の頭の上を、小氣味よく蹂躪して、遙かに遙かに、遠い地平線の向ふに消えてしまつた。疾風のやうに又一騎、鞭をあげて來た。後から又一騎つゞいた。又一騎……。何の顧みるところも無く、人間の頭を踏みつぶして行くのが、自分自身の身の危險を忘れて、痛烈だつた。蹂みつぶせ、蹂みつぶせ――と叫ばうとした時、幾百頭、幾千頭、無數の騎馬巡査が山海嘯のやうに殺到して來て、眞白に光る洋刀が、夕立のやうにひらめいた。やられた――と思つた時、頽雪を打つて逃げ迷ふ群集の足の下に横はつて、冷い大地にへばりついてしまつた。背中の上を、曾て佐

幕黨に斬られたと同じく、巡査の刃に曝す外は無かつた。今度こそはやられたなと思つて觀念して、靜かに目をつぶつた――と思つた時、老人の夢は覺めた。

何時の間にかうつ伏になつて寢て居た。冷い汗が背中から脇の下へかけて滲み出して居た。枕に額をつけて、どきんどきんする動悸を靜めてから、やうやく半身を起した。

氣持の惡い體を拭いて貰はうと思つて、看護婦を見ると、先刻繍ざしをして居たまゝの位置で、繍ざしの框と針を手にしたまゝ、居睡をして居る。のぼせた頬邊の色は眞赤で、健康な肉體は憎々しく活々してゐた。老人はむらむらと不快になつた。病人の自分が、人手を要する時に、何も知らずに睡つて居るのは許し難かつた。怒鳴りつけてやらうと思つたが、それよりも意地の惡い考へが浮んだ。手を延ばして枕頭の呼鈴を押した。

廊下を小走に驅けて來る足音が入亂れて、段々近く聞えて來た。

「お祖父さま。御用？」

千歳の聲がして、腰硝子に紫つぽい着物が透いて見えた。障子をあけて入つて來たのは、千歳と、お加代だつた。

「あら、宮下さん居たんですか。」

千歳が腑に落ちない顔附で問ひかけた時は、既に廊下の人の氣配で目を覺まして居た宮下は、氣まり惡さうに紹ざしの手をもてあつかつてゐた。

「からだを拭いて呉れ。」

老人は、宮下の様子には頓着しない風で、お加代の方に聲をかけた。

「お體をお拭き申すんで御座いますか。」

狼狽てゝ宮下は膝で歩いて身近に寄つた。

「まあ、私においひつけ下さればよろしう御座いますのに。」

内心の混亂をかくし切れず、自身の立場を辯護する積りで云ひながら、顏が赤くなつた。老人は其の態度を面憎く思つた。貴様は居睡をして居たではないかと、叱りつけてやらうかとも考へたが、思ひ止つた。

「そんなら早くしろ。」

老人は、怖ろしい眼を光らせて云つた。

すつかり恐縮した看護婦が廊下を小走りに驅けて行く足音を聞きながら、老人は舌打ちした。自分の體の不自由な事が、その達者な人間の足音から、一層明かに意識されたのである。

外の奴等はいかん、門馬でも看護婦でも、親身の看護はしない、病人を馬鹿にしてゐる――さう思ふと、目の前に坐つてゐる千歳が一層可愛らしかつた。遠い昔に死んでしまつた千歳を生んだ女の事迄も、いぢらしく想ひかへされた。

看護婦は、湯を湛へた容器と西洋手拭を持つて歸つて來た。お加代が手傳つて、左右から老人の肌を脫がせ、汗で寢臭くなつた體を拭いた。

「お祖父さまのお背中の傷は痛みませんの。」

何かしらいたいたしさうに、皺だらけの老いた背中に、赤黑く亂雜に筋を引いて居る昔の刀痕を、千歳は長い眉毛をひそめて見守つた。さかんだつた頃の老人は醉ふと直ぐ肌をぬいで、其の背中を見せたものだつたが、今はめつきり衰へが目立つて來た。

「馬鹿な。五十年もたつた切傷が痛んで堪るものか。」

いい機嫌で笑つた。その傷痕のおもひでは、人の怖れた剛い心を、最も柔げるものであつた。

尊王攘夷を唱へて、反對する者があれば斬つて捨てる覺悟で、同志と共に奔走して廻つた頃の、元氣いつぱいの自分程いとしいものは無い。本土の果ての海岸を守る位置に在る大藩の、士分には違ひ無かつたが、身分は極めて低かつた。生れついての負ん氣と、人に勝れた強剛な肉體で、

若い時から腕節を自慢にして、家中の殿原に重くも見られると同時に憎まれもしたが、いいにしろ悪いにしろ、誰にも認められた事は確かだつた。就いて學んだ家塾の先生に鼓吹された尊王論に、熱し易い性分の心底から動かされ、年少にして早くも勤王の志士に交り、家を捨てて國事に奔走した。何時の世も同じで、事なかれを心がけて、現狀をみだす事を怖れる一派と、事を好んで諸般の革新を望む一派が對立し、藩論は二つに分れ、爭鬪が絶えなかつた。白晝街上に血を流す事も屢で、俗論を唱へる家中の首魁を斬つたのは外ならぬ彼であつた。何時か闇打ちに逢ふ位の事は、もとより度胸を定めて居た。寒い冬の夜、同志の集會の席上に踏込まれて、多勢に無勢で斬捲くられ、刄を合せた者の大半は命を落した。中で、體中に無數の傷を負ひながら、敵も味方も、自分自身も、死んだと思つたのが、虫の息で助かつた運の強さは、その後の一生を貫いて、何事も意の儘にならないものは無いと思はせる原因の重なものとなつた。不思議な氣力に信頼して、何んでも敢行しようとする心持が生れつきの一本氣を強くした。王政復古の世になつては、新しい時代の第一の施設に盡瘁し、いちはやく歐米諸國を巡遊して、彼の國の制度の學ぶべきものは先んじて移植した。內閣の一員となつた事もある。微賤の出が皇室の藩屛とさへなつたが、功成り名遂げた滿足も、何時の間にか老齡と共に薄らいで、意外にも世の中の事毎に、氣に喰は

ない事が多くなつて來た。

殊に、多數を賴む政黨政治には、どうしても折合ふ事が出來なかつた。壯年時から事を共にし、ともに廟堂に立つた誰彼が、時勢の要求だと稱して、政黨の領袖になつてしまふのが、餘りに世間に媚び過ぎた行爲としか考へられなかつた。內閣の首班として、流石に一目置いて居た一代の人物が、多數を賴む在野黨に壓倒されて、最後迄鬪ふ意氣地も無く內閣をあけ渡し、同時に自ら新政黨をつくらうと云ひ出した時は、彼は飽迄も議會解散說を主張して反對したが、固陋の見だと冷嘲されたばかりだつたので、持つて生れた癇癪から、二度と再び不愉快な世の中には顏を出すまいと決心して、富士山麓の別墅にかくれてしまつた。

知らないうちに、時勢は全く移り變つてゐた。自分のとつた行動が、少からぬ波瀾を起すだらうと內心期待してゐたが、ひとしきり新聞記事を賑はしたばかりで、彼の公生涯はそれを最後におしまひになつてしまつた。至誠事に當る外には何を求める事も無く、權謀術數を殊の外嫌つた猪武者として、子分らしい子分も無かつたから、華々しい世の中の圈外の人となると同時に、門を叩く人間も無くなつた。人生の孤獨と寂寞は、失意と共にひしひしと老の身に迫つて來た。

爾來、持前の熱情は、現在を憎む憤に形を變へた。目の前に起る一切の事が、唾棄すべきも

のに思はれて來た。就中人間の根性の汚さには、怒つても怒り足り無かつた。世の中は日に日に惡くなつて行く。なつかしいのは返らぬ過去である。さう思つて居る矢先に、父の如く師の如く、命を捧げて盡した明治大帝の死が、一層光明を消してしまつた。既に其の時病床にあつた老人は、崩御の報を聞いて子供のやうに泣いた。

若い時からの大酒の祟りか、或時他家の結婚披露の席上で卒倒したのが最初で、老人の肉體はめつきり弱つた。氣ばかりは昔に變らない積りでも、足腰が云ふ事をきかなくなつた。それでも生れつきの頑丈な體は、人の豫想したよりも早く回復しはしたが、三四年目に二度目の昏倒が來て、愈々杖が無くては歩行も不自由になつてしまつた。得意時代に購つた山の手の高臺の宏大な邸宅の外には、一歩も踏み出さない身の上になつた。視力は衰へ、耳は遠くなり、何をするのも億劫で、現在自分の城廓の外を取卷く世の中の低劣を憤る苛々した心持以外には、昔をかへりみて慰むばかりで、徒らに夜と晝とをあかし暮し兼ねてゐた。

「ああ、これでさつぱりした。」

看護婦に全身を拭かせて、老人は清々しい氣分になつた。

傍で、老人の背中を何時迄も同情深く見守つてゐた千歳は、機嫌のよくなつた顏色をうかがつ

て、
「お祖父さまもお庭にお出かけ遊ばせな。」
と勸めてみた。
「さうか、ひとつ奮發するかな。」
何時に無く無雜作に應じたので、千歳とお加代は兩方から手を取つて扶け起した。
「宮下さんはちつとお休みなさいまし。」
「難有う御座います。では、お願ひ致します。」
看護婦は挨拶して、自分の部屋へ休息にさがつて行つた。
縁側で結付草履を穿かせて貰つて、太い青竹の杖をつきながら、柔かい土の上に下りた。先だちになつて身輕に歩く千歳の後から、老人はお加代の肩に手を置いて、たどたどしい足取りで、遠く下町を見下す崖際の四阿迄行つて腰掛に休んだ。何處からか、耳の長い飼犬がかけて來て、千歳の袂に背中を擦りつける。
「いけません、リリイ。」
足下の小石を拾つて、崖下を目がけて投げた。犬は勢よく、斜面に植ゑてある躑躅の茂みの中

に身を躍らして、小石の行方を探しに行つた。

「リリイ、リリイ。リイリイ。」

よく透る聲を稍甲高く、遮るものも無い秋の空氣に響かせながら、千歳も犬の後から、うねうねと下の花畑の方に導く小徑を、裾を亂して追かけた。

「お祖父さまア。」

木立の中で一度呼んだが、灌木の枝の間にちらちらした着物の紫の影は、忽ち見えなくなつてしまつた。

「ははは、お轉婆だな。」

「羨ましう御座いますわ。」

老人はお加代をかへりみて笑つた。成人した千歳の姿を見るにつけて、昔の事が想ひ出された。生死の境に身を置いて國事に盡した當時の人間のならひとして、彼も亦色好みだつた。意氣地の無い奴が色に溺れるのは許し難く思はれたけれど、大きな仕事を國家の爲めに爲る者にとつては、當然與へらる可き慰樂だと考へられた。つまり、男性の腕を以て築きあげた此の世の中だと思へば、氣に入つた女を其の腕に抱いて寢る位の事に、何の疑も起る筈が無かつたのだ。擁夷の

名ではあつたけれど、實は徳川の政府に反抗する精神から、或る外國の使臣の館を燒打した時も、火の手のあがるのを見定めて、ちりぢりに逃げた同志の中で、大膽不敵を以て聞えた彼は、逸早く近くの女郎屋の馴染の部屋に身をかくして、徹宵盃をあげた一人だつた。第一の夫人は遊女あがりだつた。

氏素性の卑しい者にも似ず、心だての正しい、冷靜な判斷力を持つた人で、誰彼の差別無く癇癪まぎれに怒鳴りつけ、誰にも頭を下げた事の無い老人も、此の夫人にだけは一生頭が上らなかつた。公の事には夢中になる性質でゐながら、一身の私事には甚だ冷淡無頓着な方で、おまけに金錢には淡泊だつたから、夫人の細かい心づかひが無かつたら、身分相應の家を構へて行く事は出來なかつたであらう。其處此處でしでかすふしだらの後始末も賴まなければならなかつた。其の夫人が腎臟の疾患で、長患のあげくに死んだ時は、強情我慢の老人も、多勢の出入の者の居る前で、聲をあげて泣いて人々を驚かした。

その夫人の病中に手をつけたのが小間使のお加代だつた。別段きりやうがいいと云ふ方でも無く、どつちかと云へば薄ぼんやりしたやうな女だつたが、氣だての優しい事は無類だつた。身寄の少い薄倖の女で、第一に夫人のお氣に入りだつたが、さう云ふ事になつてからは、夫人はかへ

つてお加代をいたはる心を深くし、自分に萬一の事があつた場合には、一生老人の世話を見て貰ひ度いと賴み込んで、只管恐縮がる相手を納得させた。お妾ともつかず、女中頭ともつかず、お加代は老人にかしづく事になつた。

老人には子供が無かつた。昔、出入の植木屋の娘で、邸に奉公に來てゐた女に生ませた男の子を、夫人の子にして育てたのが、一廉の外交官になつて長年海外に居る。しかし此の長男は、曾て白耳義の公使館の書記官時代に、父を日本人とし母を佛蘭西人とする混血娘と結婚してしまつたので、老人の激怒をかひ、それつきり親と子は永久に融和しない間柄になつてゐる。その外に、相州の或る溫泉宿の女中の腹に出來たのを次男として屆けてあつたが、これは海軍の軍人になつて、日清戰爭の時戰死してしまつた。まだまだ、老人のおとしだねで、御恩にあづかる御用商人などに始末させたのもあつたが、そんな事は老人自身の頓着する所では無く、いづれも夫人の心配でかたをつけたのであつた。相手をさせた女が身重になつたときくと、一瞬間しまつたと思ひはするが、あとは如何ならうと、始末さへつけば、忘れてしまふのが當りまへの事になつてゐた。始末をつけてやらないでは身分にさはると云ふ丈の話だつた。鄕里から出て來て玄關にゐる門馬さへ、最初はおとしだねの一人ではないかと噂にのぼつた程、老人の行狀はよくなかつた。今年

十九になる千歳も、表面は長男の子になつて居るが、實は新橋の藝者の子なのである。
千歳を生んだ双葉は小柄な女だつた。一座の酌人の中で際立つて整つた男人形のやうな顔だちのが、外の女のやうに世辭も云はず、大きな聲も立てないで、きちんとした折目の正しい立居に如何にも凛としたところのあるのが目にとまつた。それ迄にも氣に入つたのがあれば、有無を云はせないのであつたから、此の時も待合の女將に耳うちすると、わけも無く事は運んだのである。
「どうだ、俺のやうなぢいさんはいやだらう。」
醉ふと機嫌のよくなる方で、人身御供にあげられて、なまめかしい姿で觀念して坐つてゐる双葉に言葉をかけた。
「致し方が御座いません。御前は御身分の高い方で、私はいやしい者で御座いますから。」
暫時して、双葉は若々しい澄んだ聲で、意外にははつきり答へたのである。
「いくつになる。」
「十八で御座います。」
屋敷奉公をする者のやうな切口上が、男人形のやうな顔と、きちんとした立居にしつくりはまつて、曾て此の種の女に見た事の無い風姿だつた。老人は、それを哀れと思ふよりも、小憎らし

い程可愛く思つた。

暫くたつて、又その築地の待合に行つた時、同じ女を呼べといひつけたが、病氣で休んで居ると云ふ事だつた。それつきり二度と逢ふ機會も無く、やがて老人は忘れてしまつた。

幾月かたつて、思ひもかけない待合の女將が、邸に伺候した。男を男とも思はず、元老だらうが大臣だらうが、女に弱味のある限りは、此の大兵肥滿の老女將には頭が上らないといひはやされて居た。夫人が未だ達者だつた時代の事であるが、老人の書齋に差向ひになると、女將が聲を落していひ出したのは、双葉が老人のたねを宿して、既に產月も間も無いといふ事だつた。

「馬鹿をいへ、俺はたつた一度だ。しかも今頃になつてそんな事を云ふ奴があるか。」

冗談を云ふなと云はんばかりに、笑ひながら相手になつてゐた。

「左樣です。今頃になつてとおつしやるのは御尤もで御座いますが、あの妓の親元といふのが、おちぶれ士族で、當節に無く野暮堅い方の親玉なんで御座いますから、そんな事を申し出るのはいやだなんぞと申しましてね、つい差控へて居りましたのですが、なにしろおやぢは半病人、おふくろは手內職をする、弟は役所へ給仕に出るといふ苦しいくらしなので、先方ではやめて呉れと申しますのを、見るに見兼ておお耳に入れにうかがつたやうなわけなんで御座います。」

嗄れた女将の聲は粘つて、妙に相手を壓迫し、いやとは云はせない呼吸を持つてゐた。
「うまい事をいひよるなう。相手は俺一人とは限るまいが。」
あく迄も冗談にして高々と笑つた。
「むろん御前御一人といふわけでは御座いません。けれども御前のやうなお立派な方は、たつたお一人で御座います。おなさけをうけました事は朋輩も存じて居ります。それを兎や角おつしやつては、それこそ野暮といふもので御座いますよ。」
同じ高さの、同じ速度のおちついた聲で、自分自身にでもいひきかせて居るやうに云ふのだつた。
「私が斯うと申しましたら、男らしくああさうかとおつしやればよろしう御座います。失禮ながら御身分にさはります。」
きつぱり云つて、女将は男のやうな聲で笑つた。
「よし、よし、わかつた。婆あ、お前にあつては俺もかなはんよ。」
其の女将の嗄れた聲に合はせて、持前のわだかまりの無い高笑ひを、室の隅々迄響かせた。
老人は女将の言葉を道理のあるものと思つた。自分程の人間として、そんな些細な事にこだは

つて兎や角いへるか——といふ極めて簡單な、しかも随分力のあるほこりの伴ふ心持があつた。高々と笑つてのけると、釋然として胸がひらけた。事は無雜作に解決したのである。

双葉は十九の夏の初め、産後の肥立が悪くて死んでしまつた。

「可哀さうな事をしたなあ。與に話をして何とかしてやつて呉れ。」

流石に老人も、待合の女将の口から其の事を聞かされた時、暗然として、男人形のやうな女を憐んだ。孫にもひとしい若い女が、願ひもしない子供を生み、其の子供の爲めに命を落してしまつた薄命を、いつに無く胸の痛手として受取つた。

女将から女の死を聞いた夫人は、自ら本所の裏長屋の老夫婦を見舞つて、尠からぬ金子を贈つたが、縁側に並んで居る早咲の朝顏の鉢の外には清々しい物ひとつも無い、貧しく暗い家ながら、其時の先方の折目正しい物腰が、一層哀れを深くして、夫人の心に忘れられなかつた。

前々から、女の子を一人手鹽にかけて育てて見度いのが夫人の願だつた。綺麗な着物を着せ、又なく美しい娘になつて、自分になついて呉れたらどんなに嬉しいだらうと年中考へてゐた。

おもてむきは長男の子供にして、千歳は邸に引取られたが、その長男は當時既に、妻子と共に海外に住んでゐた。

老人は子供は大嫌だつた。殊に赤ん坊の泣聲をきかされると、妙に神經質になつて、癇癪に觸つた。千歳を見ても、自分の生ませた子供だとは思ひもしず、そんな事は不可能だと考へ、うまうまとしよひ込まされた馬鹿々々しさばかり感じられたが、そのくせ別段肚の中にはこだはりも無く、さういふ風に大ざつぱに、人のいふまゝになつてゐるのが自分程の人間となつては當然なのだと思つてゐた。但し決して可愛らしいとは思はなかつた。御前のお歸りといふと、今迄家中の手から手に渡つて、ちやほやされて居たいたいけな千歳は、忽ち乳母の懷に抱かれて、逃るやうに御奥を退らなければならなかつた。

物心がついてからも、千歳は老人に對して、只管怖いと思ふばかりだつた。それにひきかへて、自分で腹を痛めた事の無いくせに、夫人は無闇に子煩惱だつた。抱きついて我儘をいへば、我儘は何でも通つた。その夫人が死んでから、千歳の心には一時にさまざまの變化が起きた。

おぢい樣おばあさまと呼ぶ人の外に、自分の父母にあたる人が海外にゐる事は承知してゐたが、それがほんとの父でも無く母でも無い事は、夫人在世の時から知つてゐた。しかし、自分の父親が、常日頃おぢいさまと呼びながら、内心怖い人とばかり思ひ込んでゐる老人だといふ事は、甘えて縋る人が無くなつてから初めて知つた。しかし、自分を生んだ人が誰であるかは、いくら考

へても、隨分人々の話の樣子に注意してもわからなかつた。千歳の心の中には、その事を口に出して人に訊くのが怖いやうな、爲す可らざる事のやうな、不思議な感じが根を張つてゐた。恐らくその人はふしあはせな人であつたらう、今は世にない人であらうといふ事も、何となく想像されて、女學校に通ふ頃の乙女心に、一層やるせなさを增す種となつた。

それでも、老人が自分の父である事は疑はなかつた。怖い怖いとばかり思つてゐた人が、めつきりと健康も衰へ、何時の間にか以前の威勢もなく、世間には遠ざかり、世間からも忘れられてしまつたのを見ると、親身の情愛といふやうな、わだかまりの無い慕はしさが胸にいつぱいになつて來た。自分丈が此の老齢の人のほんとの味方なのだ、肉身のつながりなのだと思ふ事は、思春期の娘にとつて、泣き度いやうな張合のある心持であつた。

千歳の方からおぢい樣おぢい樣と慕ひ寄り、つとめても親切を盡さうとするやうになると、老人の方も自然と優しい心を誘はれるのであつた。強情我慢で名を取つた人間も、二度迄も人中で卒倒し、不死身かと云はれた肉體も衰へ、權力には別れ、世の中には遠ざかり、不平と不滿に日夜惱まされて、僅かに安住の地は自分の家屋敷の内に狹められ、身心共に樂しまない事を嘆き始めてからは、曾て他人も自分も知らなかつた柔かな人なつかしい情合をいとほしむ氣も起きるの

であつた。

殊に昨年千歳が女學校を卒業すると間も無く、或る實業家の息子の嫁に貰ひ度いと申込まれ、老人は心中手放し度くないとは思ひながら、仲に立つた人間の熱心な口ぶりと、そんな事にも愚圖々々いふのは體面にかかはると云つたやうな、昔風の無雜作をほこる心持から、千歳には何の相談も無く、やつてもよからうと云ふ事にしてしまつたのが、その應諾の返事をした直ぐ後から、破談になつた事件以來一層千歳が可愛らしくて堪らなくなつた。實業家自身は、千歳が老人の正統の孫で無い事を知つてゐたが、その後妻で、永らく宮仕をして何の局と呼ばれた世の中にうといのが、自分の里方の緣類の娘を嫁として連れて來度い考へもあつたので、千歳が卑しい者の生んだものだと聞くと、忽ち權高に反對し、身分違ひを楯にして拒んだので、年齡の違ふ後妻に對し一目も二目も置き、かしこきあたりから賜つたもののやうにうやまつてゐる實業家は、如何する事も出來なくなつて仲立の人の前に平あやまりに謝つた。相手が名代の癇癪持なので、仲人は一層立場を失つたが、これも如何する事も出來ないので、恐る恐る老人の前に手をついて、矢張平あやまりにあやまる外に途が無かつた。

老人の憤は勿論の事であつた。あらん限りの侮蔑を、仲人と實業家とにあびせかけ、世が世な

らば斬つて捨て度いと思ふ程、身内を震はせて怒號したあげく、怒りに堪へかねて眩暈を起した。斯ういふ素町人共にさへ馬鹿にされるやうになつたのかと、後々迄も口惜しくて堪らなかつた。自分の一生に、これ程の恥辱はないと思つた。その憤激の強ければ強い程、老人は千歳がいとしく思はれたのである。どういふものか其頃から、時折の夢の中に、今の千歳が生寫の、男人形のやうな双葉の姿を見るやうになつた。

「少し風が出て參りましたが、御寝室にお戻りになりませんか。」

靜かな秋の空の下に、薄く黄葉し始めた樹木もまじる此一帶の高臺の森の端れに、人間の動いて止まない繁華な町の姿も見えるのであるが、それもたゞ屋根に日光が照りかへすばかりで忌々しい人間の姿は見えない。高い所から低い所を見る時に感じる優越感にうつとりして、老人は何時迄もとりとめもない追想にふけつてゐたが、傍のお加代に促されて、青竹の杖を取つて立上つた。

「千歳はどうした。」

おおいと呼んで見度いやうな氣持を感じながら、未練らしく崖下の木立の底に、かがやく着物の色を求めたが、それは勿論見えなかつた。

「いたづらをして居るのだらう。」

つぶやきながら、一歩々々引ずる足取りで、お加代に助けられながら、老人は家の方に歸つて行つた。

千歳はリリイを相手にして、芝生の上で遊んで居た。投げ出した足のほとりの草むらには、微かな聲で鳴く虫がゐた。

竹藪を越して隣の庭のテニス・コオトで打合ふ球の音が長閑に聞え、白いシヤツの姿の人影が、葉越にちらちら見える。時々湧起る男性の力強い笑聲が、いかにも面白さうに四圍に響きわたる。千歳はそのかされるやうな快感をもつて、千歳はその笑聲に伴ふ想像をほしいままにして居た。

突然犬が、千歳の袖の下をくぐつてかけ出した。

「リリイ、リリイ。」

自分も身を起して呼びかけたが、犬は縞薄の延びてゐる草むらに、まつしぐらに飛込んでしまつた。

「リリイ。」

繰返して名を呼ぶと、がさごそ草を分けて出て來たが、口いつぱいに球をくはへてゐる。

「濟みません、球がそちらへ飛込んでしまつたのですが……」

若い男の聲に驚いて見ると、笹の葉を押分けた間から顏を出して呼んでゐるのであつた。

千歳はただならぬ動悸に顏が紅くなつた。學校に通ふ頃、朝夕のゆきかへりに、度々往來であつた若者で、あまり年中ゆきあふ爲め、挨拶をしないのが不自然に思はれる位だつた。殊に向ふに道連の學生でもある時は、その道連が自分をたねにしてからかつて居るやうな樣子も見えて、妙齡の女としては、立入つた事迄想ひ及ぶ事もあるのであつた。細づくりの脊の高い、いきいきした血色の、貴族らしい學生であつた。或大々名の分家の、男爵のあとつぎで、學習院を出るには出たが、法律や經濟を學ぶ氣にはなれないで、子供の頃から好む道に行く外に生甲斐は無いと決心し、一家一族の反對にうちかつて、あらためて音樂學校に通つてゐたのだ。他所の娘のやうに、社交の席に出たり、物見遊山に行く事も無く、世間の狹い千歳にとつては、眼をつぶつても姿の浮ぶ、たつた一人の若者だつた。

リリイの口から球を取りはしたが、それを投げてやるのもはしたない氣がするし、垣根の際迄持つて行つて男の手に渡すのも羞かしかつた。でも、投げてやるやうな事をしたら、相手がどう思ふだらうと考へると、矢張り側迄持つて行つて渡す外には途が無かつた。視線のやり場にも困

る程自分の立場をもてあつかひながら、垣根の際迄進んで行つて、二の腕迄もあらはになるのが愈々きまりが悪かつたが、延上つて、先方の差出す手に球を渡した。

「難有う。」

微笑をふくんだ男の顔が、呼吸を感じる程近く思はれた。運動で火照る男の手に指尖の觸れた事も、千歳をすつかり恐縮させてしまつた。

垣根の向ふに男の顔がかくれると、直ぐにラケットで球を打つ音が際立つて高く響いた。今の若者の相手であらう、何か大きな聲で冷かすやうに叫んだと思ふと、ピイイと高く口笛を吹いた。誰も見てはゐないのだが、千歳は又面を染めて、逃れるやうに垣際を離れた。

## 三

永年住込んで居たよぼよぼの植木屋が死んでから、次第に荒れるに任せるやうになつた屋敷の内を、時折りお加代や千歳に手をとられて、とぼとぼ歩くばかりで、老人が門の外に出ない事も久しくなつた。殆んど終日床の中に身を横へて居る爲め、夜は安眠出來なかつた。それが極度の退屈と相俟つて、一層短氣にし、癇癪のもととなつた。

少しは氣ばらしに、市中の景色でも見に出た方がいいと云ふ主治醫の勸めは、老人のお相手として年中垂こめて居なければならないお加代にも千歳にも、あかるい希望に似た喜びを起させた。自動車か馬車を雇つて、天氣のいい日に東京市中を廻るといふ丈の事が、變化の無い生活に飽々してゐる女にとつては、想像するばかりでも胸のをどる事であつた。

けれども、かたくなな老人は、初めて此の勸說を受けた時、一言の下に拒絕した。

「一人歩きも出來ん病人なんか往來の邪魔だ。」

筋立つた手の指を、一本々々幅廣くひろげて橫に振る癖を見せて、どうしたものかひどく不機嫌だつた。

「でも自動車で御出になれば……」

「それで何が面白い。自分達が出歩き度ければ行つて來るがいい。」

お加代はすつかり悄氣てしまつて、そのまま口をつぐんだのであつた。

老人にして見ると、多くの人に知られた自分が、現在病み衰へた姿を、氣に喰はない世間の目に曝すのは堪へ難い屈辱だと考へられた。自分達か壯時身命を賭して築き上げた帝都ではあるけれども、今その帝都を自由勝手にして居るのは、先輩の恩を忘れ、正しい志を持たない奴等であ

る。さういふけがらはしい人間が、達者で、意氣揚々として活動して居る所へ、杖に縋り、人手をかりて僅かに身を支へて居る自分が出て行く事は、とりも直さず嘲笑を求めに行くのに等しい。誰が行つてやるものか。さうした根性が強いので、二人がかはるがはる勸めるのも、強ひて自分を嘲罵の渦巻の中に引摺り込まうとするもののやうに思はれて不愉快だつた。遠く下町を見はるかす邸内の崖際の四阿から市中の家並を見下す時には、何かしら感慨を誘はれる事はあつても、其處に自分自身が下りて行かうといふ氣は全く起らなかつた。

これでも、勸める方の二人はなかなかあきらめなかつた。何彼につけて主治醫の言葉を楯にしては、看護婦共々、氣ばらしの外出を說く事を忘れなかつた。一度でも外に出かけるやうな心持になつて吳れたら、生れ變つたやうに取扱ひいい人になるだらうといふやうな、根柢のない夢想が存外強く胸に巢くつてゐた。

「それ程お前達が出たければ、おつきあひをしてやらうか。」

どういふ其の日の氣持だつたか、たうとう老人も皆のすすめに同意してしまつた。千歲とお加代は近頃に無い晴々した心持で顏を見合せてうなづきあつた。

年が年中病床に橫たはつて、身心の苦痛に癇癪ばかり起して居る主人が外出すると云ふ事は、

邸内の下々の者に迄、何かしら希望を抱かせた。

みんなの待つてゐた其の日は、十一月の初旬、風の無い一日にえらばれた。

「たうとう引張り出されてしまつたよ。」

近所で雇つた自動車に乗る時、老人はいい機嫌で家扶や女中をかへりみて笑つた。

あざやかに晴れた高臺から、靜かに自動車のゆるぎ出した時は、永い間家にばかり引籠つてゐた老人の身内にも、未だ殘つてゐる血が新しくなるやうな快感があつた。背中にあてた羽蒲團に半分體を埋めた左右に千歳とお加代が席をとり、向あつて看護婦が腰かけてゐた。虎の門から日比谷公園を抜けて丸の内に出ると、噂には聞いてゐたが、僅かの間に大きな建築物の並び立つた有様は、三菱の原と呼ばれた草原時代の景色に最も親しい老人には、外國にでも行つたやうな氣を起させた。何事によらず壯大なものを好む老人は、人力の偉大を十分に示す附近の光景を、大寺院に對する時のやうな莊嚴な感じで見守つた。それもこれも、總て自分達の若い時代に造りあげた基礎の上に出來たのだ。今日の日本の文明が、即ち總て自分達の努力の結晶なのだといふやうな、胸の波打つ感慨が深かつた。老人は涙ぐんだ目をして皇居の方を拜し、天子の御代の愈々榮ゆる事を祈つたのである。

老人の滿足した樣子を見ると、お加代も千歲も自分達の手柄をほこる心持がかくし切れなかつた。

「おぢいさま。一寸の間に隨分立派になりましたでしよ。」

あちらこちらと指さして說明する千歲の心には、老人自身が自分の過去の功績を考へてゐるのとはまるつきり反對に、此の繁昌の都會は老人などの知らない、自分達が屬する新しい時代ものだと思れるのであつた。

千歲の發意で、萬世橋から上野に出て、淺草を通り、厩橋を渡つて向島迄行つた。悠々として漲り流れる隅田川の水を車窓から眺めるのも惡くなかつたが、いくら徐行しても多少の動搖は免れないし、永い間腰をかけた姿勢をかへないで居る事も病床にばかり昵んでしまつた老人の體には少からずこたへるのであつた。かなり瘦我慢も張つてゐたけれど、たうとう我慢出來なくなつて、

「もういい加減にかへして吳れ。矢張りうちの方が樂だ。」

冗談めかして云ふ丈の機嫌はあつた。何時迄も遊びの氣分でゐたい連中も、老人の體に餘り長い運動はよくないと思ふので、白髯の邊迄土手をさかのぼつたのが、靜かに方向を轉換した。

いざ歸らうといふ段になると、往きに抱いてゐたやうな新鮮な印象は消えて、市中の景色も徒らに車馬の雜沓するうるさいものに思はれて、わざわざこんな遠方迄出かけて來た馬鹿々々しさが、老人の心の底にはびこつて來た。段々と、不自由な肉體の不快が加はつて來るので、羽蒲團に後腦を埋めて堅く目をつぶつてしまつた。

自動車は成る可く近い道を擇んで、相當の速力で走つた。最初のうちこそ病人を氣づかつて、命ぜられたまゝ速力を出す事は差控へて居たが、追々馴れるに從つて、運轉手は大膽になつて來た。一番氣持のいゝ丸の内に入つて、馬場先の凱旋道路を眞直ぐに二重橋の方へ進む時は、前に行く小型のタクシイを追越さうとする迄になつた。二臺の自動車はぴつたりくつついて、鋭いカアブを描いて櫻田門をくぐつたが、ぐぐうつと半圓を立て直して車が大通に出た時、多勢の人間の行列が、直ぐ目の前の行手に見えた。澤山の旗を立て、口々に熱狂して歌をうたふ示威運動の團體だつた。

運轉手はしきりに警笛を鳴らし、腕に綠と白の横筋のしるしを卷いた交通巡査も、行列の眞中どころを一時中斷して、自動車を通さうとした。前に進んだタクシイは、人數の薄いところを素早く切拔けて、急速力で眞一文字に走り去つたが、つづく此方の自動車は一倍大型なので幅を取

り、自然敏速を缺く爲めに、一瞬間二つに別れた行列は又ぴつたりとくつついて、面あてがましく唱歌を合唱し、交通巡査が興奮して兩手を擧げて叫ぶのを冷嘲するやうな態度さへ示すのであつた。運轉手も、本來滑かに走つて行く筈の車を遮ぎられたので、自棄に鳴らす警笛にも苛々した氣分をあらはしながら、列のわき腹から無理に脅かしても突切らうとする氣勢を見せたが何の甲斐も無かつた。

俄に自動車が止つたので、うつらうつらして居た老人も目を開いた。女達は物々しい車外の光景に胸をとどろかしながら、どうする事も出來ないで、ただ徒らに顏を見合ふばかりだつた。

「普選運動でしよ。」

窓硝子に額を押付けてのぞいて居た看護婦も、おびえた顏色をしてささやいた。老人はさう聞くと、一段と不快な面持をして、羽蒲團に埋まつてゐる上半身を起さうとした。これも亦彼の嫌ふ、衆を賴む人間の蠢動だつた。

突然、目の前の行列は、前の方から逆に後へ波を打つて亂れ始めた。行列の先驅が、餘りに熱狂の度を高めた爲め、これを制止しようとする巡査の群と衝突し、反抗し、鬪爭を引起したのである。うねりを打つて押戾され、押戾されまいとして踏止まる群集に、俄に殺氣が漲つた。とた

んに自動車の前面に、大手を擴げて立はだかつた醉漢がある。黒いソフトの上から手拭で鉢巻をし、肌をぬいだ茶色のシャツの上から、何か文字を筆太に書いた白襷をかけ、袴の股立を取つたのが、手に持つ旗を振りながら、大聲で演說めいた事を叫び出した。拍手喝采するどよめきが、地鳴りのやうに湧きかへつた。

自動車は何時の間にか群集に包圍されてゐた。車の中に若い女の姿を認めた彌次馬は、いやしい笑を滿面に浮べ、からかひ面でのぞき込むのもあり、醉つたまぎれにあらん限りの聲を張上げて、面あてらしく歌を唄ふのもあり、手に手に持つてゐる小旗で窓硝子をつつく者さへある。運轉手はのぼせ上つて、無駄に警笛を鳴らす外に詮方無いのであつた。

ばらばらと巡査が七八人かけて來て、先刻から力を盡して居る交通巡査を應援しようとしたが、行列の先頭が其の仲間の巡査達と衝突して居ると知つてゐる群集は、かへつて反抗の氣勢を高め、其處此處で格鬪が始まつた。何の關係も無い自動車も、單に巡査が道を開かうと努力してゐるといふ理由で、彌次馬の敵意の的になつてしまつた。なほも兩手を高く擧げて絕叫してゐる鉢巻の醉漢を、二人の巡査が左右から胸ぐらを取つて引立てようとすると、附近に群る其の仲間は同志を奪はれまいと反抗し、此處にも爭鬪が渦を卷いたと見えた時、何處から飛んで來たのか小石が

ひとつ、自動車の窓に命中した。女達は眞青になつて一齊に突伏したが、硝子はこなごなに碎けて飛散した。
「無禮者めッ。」
あらん限りの聲をしぼつて、叱咤しようとした老人は、半身乘り出して大きく口を開いたが、あまりの憤に脣が硬張つて、滿足な言葉は出て吳れなかつた。そればかりではない。阿呆のやうに開いた口尻から、たら／＼と涎が顎を傳つて胸に落ちた。
いくつもいくつも、いやしい男の顏が重なり合つて、自分を嘲笑して居ると感じた時、目まひがして何も見えなくなつた。

四

秋は次第に深くなつた。時雨の度に色を變へた樹木の落葉は、しきりなく微かな音を立てて冷い土に降りそそぐ。香りの高い花を持つ樹を好んで植ゑた庭は、近年手入が行屆かないので廢園のやうに荒れてしまつたが、木犀の強い花の香は、蒸されるやうに濕つぽく漲りわたつた。
無理に勸められて自動車で市中の見物に出て、不慮の事件に遭遇し、それが原因で三度目の昏

倒となつた老人は、此の頃は全く病床を離れる事が出來なくなつた。一時は、今度こそ駄目かと身近の者も思ひ、幾年か顏を見せなかつた昔の知人なども、流石に噂をききつけて見舞に來たが、しんの強い老人の體は再び持直して、先づ第一に醫者を驚かした。

しかし身心の衰弱は、とり返しのつかないものになつてしまつた。時折、天氣のいい日には、障子をあけ、緣側の硝子戸をあけて、甘つたるい木犀の香をなつかしむ事もあるが、大概は枕に顏を埋めて、眠るともなく終日惱み通した。餘程氣分のいい時には、千歲や門馬や宮下に新聞を讀ませて聞く事もあつたが、めいめいの讀み癖で自然と一定の韻律を持つ朗讀を耳にするのが、暫時なりとも身內の苦痛を忘れさせて吳れるばかりで、何を讀んで貰つたのか、あと迄覺えて居るやうな事は全く無かつた。

あらゆる感覺は、老齡と永い間の病氣の爲めに鈍つてゐたので、愈々救ふ可らざるものとなつた。一番もどかしく思はれるのは、はつきり口をきく事の出來なくなつた事である。自由に口が動かないで、強ひても何か言はうとすると、言葉よりも先に涎が出て來る。さういふ時は、一切の事が自分を侮辱してゐるのだと思はれて、苛立つ心を靜め兼ね、皺だらけの指の節ばかり目立つのをひろげて、目の前で振る癖をしきりに見せた。物の味も、うまいと思ふ事はなくなつた。

少しばかりの半流動食も、勸められるから食べるばかりで、若し誰も勸めもしず、誰も口に入れて呉れなかつたら、恐らくは手をつけなかつたであらう。耳も眼も鼻も、勿論うとくなつてしまつた。

それにも拘らず、不思議に微妙な音響や色彩を、此の頃になつて發見する事がある。若い時から國事に奔走し、それ以外の事には何の興味も無く、又さういふ性分でも無かつたので、酒を飲む事と女を抱く事は好きだつたにしても、その間の深い味に耽るわけでも無く、たゞ無雜作に樂しむ丈だつたから、一切の風流がつた事には全然無關心で押通して來たといつていい。それなのにどうしたものか、夜中に不圖目を覺まし、傍に熟睡してゐるお加代や看護婦のすこやかな寢息が耳について困るやうな時、たまたま板戸にはらはらと亂れかかる落葉の氣配を聞いて、何とも取りとめのない深い感慨に襲はれる事もあつた。床下か壁の中か、或は自分の枕の下あたりかと思はれる蟋蟀の啼く音も、つひぞ昔は知らなかつた優しい聲だと考へる。まだ其の外に、夜更けて障子にかぼそい音を立てる名も知らない虫の居る事なども、七十餘年の生涯の終りになつて初めて心に觸れて知つたのであつた。

さういふ事は、氣分のいい時に、お加代や千歳に話しても見たが、未だ口に出して云はないの

は、そのお加代や千歳の顔や姿なども、今日迄の永い間無雜作に見てゐたのに、近頃になつて漸く細かい特徴を見出すやうになつたのである。

たとへば少し平顏の、どつちかと云へば蒼白く色艶のよくないお加代の、それが何よりの特徴だと思はれるふくらみのいい頰に浮ぶ片靨の、深過る程凹むあたりにちひさい黑子のある事を、曾て老人は氣が付かなかつた。女といへば、可愛がつてやるといふ心持さへ薄く、簡單に相手をさせるといふ氣持しかなかつたのだから、此の女が小間使をしてゐる頃、初めて手を出した時さへ、夫人の病中のさびしさに、おとなしやかで、何といつても逆らひさうも無い手近の若いのを、いきなり寢間に引入れたに過ぎないので、別段きりやうに引かれたといふのでは勿論なかつた。果して老人の眼識に間違ひは無く、おどおどして身をすくめて居るばかりで、殆んど無神經のやうな女だつた。夫人が死んだ後でも、妾とも女中ともつかない位置にゐる位で、深い愛着なぞは感じなかつた。ただ、さうある可き女として傍に侍らしてゐたのだから、そんな細かいところに氣の付く筈は無かつた。

ところが或日、朝の日光のあかるい枕許で、講談本を讀んでゐるお加代の、日ざしの爲めに光澤を增した左の頰に、ちひさくうすい黑子のあるのが、はつきりと目にとまつた。老人は不思議

な感激をもつて、ぢいつと、見守つてゐた。

「何を御覽になつてゐらつしやいます。」

ふと氣の付いたお加代が、講談本を膝にふせて首をかしげながら、心持顏を紅く染めてにつこりした時、その黑子は深い醫の底に沈んでしまつた。老人は、その時程此の女に對して優しい感情を持つた事は無い。

看護婦の宮下にも、書生の門馬にも、それぞれ何かしら新しい注意を促す特徴や癖を見出したが、殊に現在の自分にとつて、たつた一人心底からなついて居ると思はれる千歲については、一つ一つ顏の道具から、姿かたち迄、今更細かい美しさといとしさを感じて來た。

千歲の姿が身近に見えないと、老人の心の中には微かな不安が起る。自分以外の者が、永久に千歲をうばつて行つてしまひさうな不安である。さういふ時には、千歲はどうしたと側の者に聞くのを我慢すればする程、此の不安は大きくなつて來て、肉體の苦痛さへ增すやうな氣がする。我慢が出來なくなつて呼びにやる事もあるが、

「おぢいさま、何か御用。」

といひながら、小走りに廊下をかけて來る千歲を見ると、老人は淚ぐましい心持になる。不思

議な程鋭く、千歳の髮や體にまつはる香料や白粉の匂が、その涙ぐましい心持を強めるのであつた。此の事を自分で意識した時、あまりにも意氣地の無くなつた自分が忌々しく、老人は人知れず腹が立つてたまらなかつた。

或時、主治醫が見舞に來て、一通り診察を濟ませ、手洗の水や石鹼を持つて看護婦が引さがり、お加代丈が老人の裾の方にちひさく控へてゐる外に誰もゐないと見ると、さも機嫌を憚るやうな態度を見せながら、叮嚀な言葉で切出したのは、千歳の緣談の事であつた。

廻りくどく、老人の氣に入らない事を云つてゐるのではあるまいかと氣兼しながら話す主治醫の言葉をかいつまんで見ると、千歳を嫁に貰ひ度いといふのは隣の男爵家だつた。當主は多年貴族院で鳴らした稍々急進的の色彩を帶びた人だつたが、近來は健康が勝れないで、大概は興津の別莊に引籠つてゐる。成る可く早く長男に嫁を迎へて、孫の顏を見度いといふのが唯一の願ひとなつた。たまたま、隣同志の事であるから、學校に行く千歳の姿は隣家の人々のよく知る處でもあり、又その長男といふのも千歳を是非にと望むので、自分が旨を受けて御內意を承り度いと云ふのであつた。

話の間に、襖一重向うに人の氣配のするのを醫者は確かに千歳だと思つた。その爲めに特に語

氣を強めて、如何に先方が懇望してゐるかを、はつきり呑込ませようとさへ努めた。
「御當主も、奥様も、至つてさばけた御方でして、新夫婦を御本邸に住まはせ、自分達は別莊を住居にしようとおつしやつてる位ですから、御出でになつても舅姑の御心配も御座いませんし、至極結構な御縁邊ではないかと存じますが……」
若い頃は美貌で有名だつたといふ醫者は、頭の皿が薄赤く禿げた年になつても、すべすべと白い顏に愛嬌笑ひを浮かべて、揉手をしながら云ふのであつた。
老人は肉が落ちて凹んだ鋭い眼をみはつて、細かく動く醫者の脣を見詰めながら、默々として聞いてゐた。次の間に千歳のゐる事を、醫者よりも先に知つてゐた。さうして、さも隣の室に聞えるやうに調子を張る醫者の心事を憎む心持さへ持つてゐた。
そんな事よりも、千歳の縁談といふ丈で、老人の心は苛々してゐた。此の前の縁談のあつた時程無雜作には考へられなかつた。その破談の不快な記憶もまざまざと思ひかへされたが、何よりも千歳を他所に奪はれるのがいやだつた。
「一體その息子といふのは何をして居る。」
老人は沈んだ聲で、強ひておちつきを見せながら、矢張り詰問する調子だつた。先刻から口數

多く喋りながら、先方の身分とか家柄とか、兩親の事ばかりを繰返してゐて、當の相手についてはに僅かにおとなしい人間だと云ふばかりの醫者の態度を面白くなく思つた。殊にその息子が、千歲を見知つてゐて懇望するといふ事が、何となく氣に入らなかつた。

「それが御幼少の時から音樂が御好きでして、學校は立派に御卒業になつたのですが、只今は又御好きな道を御硏究中なので……」

少からず狼狽の色を見せて、主治醫は又忙しく揉手をした。

「音樂といふと。」

「私はその方の事はよく存じませんのですが、笛を御吹きになるのださうで御座います。笛と申しましても西洋のものださうでして、つまり其の方の天才とでもいふべきださうで……」

「馬鹿ッ。笛吹き風情が……」

詳しい說明をしようとあせる主治醫の言葉を打消して、老人の憤に震へる聲が高く響いたが、中途で咽喉が詰つて何も云へなくなつた。口尻から涎をたらしながら、すさまじい眼光で睨みつけた。

先刻から、今にも何か不祥な事が起りさうな豫感に惱まされてゐたお加代は、枕元にすり寄つ

てなだめようとしたが、老人は骨立つた手を振つてこれを拒んだ。此の場合どんな事にも人手を借りるのは、弱味を示すに等しいと思つたのだ。

「幇間醫者を早く歸してしまへ。」

それつきり老人は堅く眼をつぶつて、只管あやまる主治醫も手のつけやうが無くなつてしまつた。

その事があつてから、老人の千歳に對する情愛は又深くなつた。世間の奴等は、自分の手から千歳を奪ひ去らうとして居る。その世間の奴等といふのは、無責任な幇間醫者や、祖先は武勳あり、皇室の藩屏として、此の有時の日に身命を投げ出しても國家に盡す可き男子の癖に、事もあらうに笛を吹く稽古をして居る不心得者だ。――オボオやクラリオネツトの形を知らない老人の目には、平生遊藝人として卑しみ切つて居る長唄のおはやしの中で横笛を吹く人間の姿が、まざまざと映つた。一切の事が、衰へ果てた自分を輕蔑する事から起るのだと思つた。

千歳は主治醫と老人の對談を、偶然にも次の室で聽いてしまつた。其處に置いてあつた筈の編物の道具を探しに行くと、ふと自分の名前が醫者の口から漏れるのを聞いて、思はず下した膝を上る事が出來なくなつてしまつた。千歳は殆んど若い男と口をきいた事が無く、學校で友達の間

に噂される男女間の戀愛や結婚の話については、多分の好奇心を持ちながら、聽かないふりをして居たのであつた。さういふ事を平氣で口にし、中にはおほつぴらに自分の愛人との交際を話して聞かせるのさへあるのを、女の恥のやうに考へて居た。其の癖結婚といふ事を、人一倍神聖な事として胸に描く事はあつたのである。自分の出生、生立ちに暗い陰影のまつはる事も、屢々寂しい心持に誘ふ原因であつたが、なついてゐた祖母にわかれ、氣むづかしい老人以外には親身の人も無い孤獨の身の上なので、結婚と同時にあかるい樂しい世界が開かれるやうな儚ない希望も抱いて居た。

自分の結婚の話だと知つた時は、人知れず頰が紅く火照つて、耳の鳴る思ひがしたが、立聽くやうな位置にゐる事を惡い惡いと思ひつつ、身動きをして音を立て、人に知られるのは尙更困る氣がして、そのまま其處に落つかない形で膝をついてゐた。

自分を懇望して居る人が隣家の若者だと知つた時、千歲は一層胸がどきんどきんして、堅く引締めた身内が震へた。度々往來で見かけた細づくりの血色のいい學生服の時の姿と、つい此間庭球の球を拾つてやつた時の白シャツの姿が、大うつしになつて目に浮ぶのであつた。曾て其の人を戀しいと思つた事は無かつたが、少くとも千歲の乏しい經驗の中で、一番身邊に近い若者だつ

た。
忽ち老人の怒聲で、醫者を叱責するのを聞いた時、千歳は飛上る程驚いたが、その時以來心の底におのれをはかなむ寂しさの增した事を、自分ながら知るやうになつた。
千歳の様子に一番早く氣付いたのはお加代だつた。以前の通りおぢいさまおぢいさまと大切にかしづく事には違ひは無いのだが、何となく自然でない無理が感じられた。時々は人の居ない所で、浮かない顔をして吐息をもらす事も知つた。敏活に氣の付くたちでは無いのだが、お加代は何か直感するもののある事を覺えたのである。
云ふ可きか、云ふ可きでないか、決斷の遅い胸の中で幾日か迷つたあげく、たまたま老人の機嫌のいい折を見はからつて、お加代は先日の主治醫の話を千歳が次の室で聽いて知つてゐる事、その時から浮かない様子を見せる事、或はその縁談は望んで居るのではないだらうかと、親切一方の心持で話して見た。
「下らん事をいふな。」
老人は靜かな音調で云つたけれど、みるみる不快な面持をして、お加代を見る目が鋭くなつた。
「相濟みません。」

おとなしい女は、泣き出しさうな顔をして口を閉ぢた。

老人の心は頗る平かでなかつた。さう云はれて見ると、此の頃の千歳の姿に力の無いのは事實のやうである。まさかにそんな事はあるまいとは思ふが、若しもお加代の想像があたつてゐたら如何しよう。馬鹿な――誰が笛吹風情なんぞに、と思ふ側から、老人の心配は世間に對する憤に變つて行つた。七十餘年の生涯を、國家の爲めに捧げ盡し、幾度となく生死の境に身を置き、新文明の移入に努めて明治維新の大業を完成させた人間が、今老齢と病軀の爲めに日夜惱まされてゐるのに、誰一人眞心から慰めの言葉をもたらす者も無い。たつた一人自分のものだと思つて可愛がつてゐる千歳をさへ、自分からもぎ離して値打の無い人間の弄びものにしようとするのだ。老人はさう思ふ心の隙間に、憤よりも強くひしひしと迫るのは、不覺にも人生の寂寞であつた。不圖自分が身命を賭して報國の爲めに踏んで來た生涯をかへりみて、意外にも得意と滿足以外に、何といふ確たる形は備へてはゐないけれど、漠然としてしかも限りのない深い悔恨のある事を知つたのである。彼は自分の弱々しい心持を打消すやうに、誰も傍にはゐなかつたが、骨立つた指を擴げて二度三度手を振る癖を出した。

其晩、枕許に千歳だけが附添つて、外の者の姿の見えない時、老人は何かに誘はれるやうな氣

持になつて、

「千歳、お前を嫁に貰ひ度いといふ者があるが行き度いか。」

と訊いて見た。

雨戸の外に冷い雨の、落葉の上にしめやかに降るのにうつかり耳を貸してゐた千歳は、意外な質問に驚いて老人の顔を見た。無理に浮べた微笑が、意地悪くあらはれてゐた。

「いいえ、私は何時迄もおぢいさまのおそばに置いて頂き度う御座います。」

震へてはいけないと思ひながら、千歳の聲はかすれてしまつた。

「さうか。だが、俺の壽命ももう長くはあるまい。」

暫時たつと老人は靜かな聲で、寧ろなぐさめるやうに云つた。素直な千歳のいとしさが我慢の出來ない程強く胸を打つと同時に、何とも知れない寂しさが心の底から滲んで來た。

「馬鹿ッ。」

意氣地のない自分が忌々しく、口の中で叱りつけながら、老人は堅く眼を閉ぢたが、やがて其の瞼のうらが熱くなつて來た。（大正十三年四月二十三日）

# 罹災者

祖國生命保險株式會社の市内支店の次席大田原三造は、大地震の時、最も危い目にあひながら、命拾ひをした一人である。

其の日は、大口の契約をまとめようと苦心して居る部下の外交員牛島明六の應援の爲めに、淺草方面に出かけた。牛島は二流會社をあつちこつち飛廻つたすれつからしで、惡辣なうできだつたが、殊に誰の紹介も無く未知の人にぶつかつて勸誘する飛び込みの名人として聞えて居た。今度もいきなり正面からぶつかつて、一にも押二にも押で、しつつこく勸誘したのであつた。相手と云ふのは、先代は有名な高利貸で一生金をためる事ばかりを樂しみにして死んだ後を繼いだ二代目の、世間には知れて居ない三四の會社の重役の肩書を持つて遊び暮らして居る人間たつた。最初はなか／＼うむと云はなかつたのを、もう一息といふ所迄進んだ折柄、他の會社の邪魔か入つて話がもつれてしまつた。生憎競爭者の方は第一流の會社で、資産も信用も比べものにならないから、默つて居ては完全に横取りされさうな形勢となつたので、牛島は支店長の應援を求めたのであつた。

支店長の栗本といふのは、多年外交員として鳴らしたあげく抜擢されたのだが、金錢上兎角の評判の絕えない、人望の無い男だつた。しかし、いざとなると力強い働手なので、斯ういふ場合には、殊に信頼された。ところが、其の日の丸の內の本店に幹部の會議があつて出席しなければならないので、三造が代理を命ぜられたのであつた。

三造とても二十年間保險會社に勤續し、外交員としての經驗もあるにはあるのだが、此の方面では餘り見事な成績を擧げた事は無く、おまけに此のところ數年は本店の經理課で內勤專門だつた爲め、自然と氣持も弱くなり、自分が行つたところで如何なるものでもあるまいと、內々は考へて居た。けれども、凄い手腕は持ちながら評判のおもはしく無い支店長の缺點を補ふ爲めに、此の春選ばれて次席となつた事に對しても、何とかして責任を果し度いといふ熱はあつた。「人格者」といふ多少輕蔑の意味を含むほめ言葉を社內では一身に引受けて居る三造を、牛島のやうな肌合の男は、勿論馬鹿にして居たが、それでも急を要するはめになつて居るので、支店長の都合のつく日迄待つよりは、兎も角先手を打つ方がよからうと云ふので、二人は連立つて會社を出たのであつた。

九月に入つたといふのに變に蒸暑い日で、電車に乘つてからも、三造は汚れた夏帽子をとつて

はしきりに額の汗を拭いた。隣に並んで腰かけて居る牛島は、外交員の常として、比較にならない程身綺麗にして居た。同じ麥藁帽子でも、それは八月になつてから二つめのを買つたので未だ眞新しく、雪白の胴衣の胸には太い金鎖をからませ、折目のくつきりした細縞の洋袴の足を西洋人風に組んで、水色の絹の靴下に白靴といつたこしらへで、アルパカの上衣の胸をあけ、指輪の光る手を動かして扇子をつかつて居た。

「どうも惡い相手だね。」

三造は心にかゝる競爭會社の事を考へて居たので、自分の使命の結果を惡い方に想像して居た。

牛島は一寸解せない顔をしたが、直ぐにわかつて、

「なあに驚く事はありませんよ。一流會社だなんて云ふと偉らさうだが、實は御大名商賣なんだから、外交員だつてなまじつか學校なんか出たぼんくらばかりですぜ。保險料こそ安いかしらないが、うちの方が配當はいゝですからね。」

意氣地の無い三造を勵ますやうに強氣を見せた。

「しかしね、大田原さん、あなたと打合せて置かなければならない事があるんです、それはね……」

狡猾な微笑を浮べながら、半開きの扇子を口にあてゝ聲を低くした。

「實は先方には、是非ともうちの會社につけて貰はなくちやあ面目が立たないから、今日はわざ〳〵支店長が御願に來る筈だと云つてあるんだから、その積りで居て下さい。つまらない事のやうだけれど、これで支店長が遙々出かけて來たつて云ふと、矢張り向ふの氣持が違ひますよ。感じがね。」

「だつて僕の名刺には、東京支店次長つて、ちやあんと肩書が入つてゐるよ。」

些か侮辱された感もあつて、三造はまぎらかしに額の汗を拭いた。

「なあに名刺なんか出さない方が、かへつて重味があつていゝんです。私が支店長々々つて呼ぶから、ふん〳〵返事をしてくれりやあ、それで通るんだ。此の口がまとまつて御覧なさい、年末の賞與が大分違ふんだから。助けて下さいよ。その代り御禮はたんまりしますからね。」

つぼめた扇で三造の肩を叩いて笑つた。

電車を降りて、先に立つ牛島の後からついて行くと、間も無く大きなお寺の裏手にあたる意外に閑靜な所に、目差す家はあつた。堂々たる石柱の門の前に、栗色に塗つた自動車がとまつて居た。

玄關に取次に出た女中は、此の頃度々やつて來る牛島の顏を知つて居た。

「大將は御在宅ですか。昨日電話で申上げて置いた通り、うちの支店長が御挨拶に伺ひましたつて云つて下さい。」

馴々しい口をきく牛島の後に立つて居る三造は、支店長と云はれたので、すつかり氣臆(きおくれ)がして、平生から餘りみなりを構はない方なので、汚れの目立つ白洋袴(ズボン)が氣になつて爲方が無かつた。

「一寸お待ち下さいまし。」

と云つて引込んだ女中は、又直ぐに現れて、主人は恰度出かけるところではあるが、折角の御越だから一寸御目にかかる、まあ上つて呉れと云ふ口上を述べた。

二人が通されたのは椅子卓子(テーブル)を置いた日本座敷で、目の前の狹いながらに手の込んだ庭の池に、見事な蘭虫(らんちゆう)が泳いで居た。

直ぐさま主人が出て來た。でつぷり肥つた四十前後の好男子で、最近流行の少しにやけた好みの洋服で、見るから遊び好きらしい樣子に見えた。

「やあ、御待たせしました。生憎野暮用で一寸出かけなければならないのですが、折角支店長さんが御見えになつたと云ふので……」

快活を賣物にして居るやうな態度で、慇懃に挨拶をする牛島に言葉をかけてから、初めて三造の方に向直つた。
「これがうちの支店長で。」
何か言はうと思ひながら椅子を離れて立上つた三造よりも先に、牛島がひきあはせた。
「さあ、まあ御かけ下さい。どうも今年は暑ござんすなあ。」
團扇を勸めながら主人も腰を下ろした。三造は一番口不調法なので、額の汗を拭きながら、何とかうまい事を云ひ度いと思つたが、直ぐさま商賣の話をするのも面白く無いと思つたので、
「實に立派な金魚ですなあ。」
とさも感嘆したといふ様子でほめた。大きな獅子頭の金色にぴか〳〵光るやつには、ほんとに驚嘆したのだつた。
「はゝゝゝ」
別段可笑しくもないのに、主人は雨肩を上下にゆすつて笑つたが、その時女中が運んで來たお茶をぐつと飲むと、
「牛島さん、此の暑いところをわざ〳〵支店長さんが御見えになつたのに、甚だなんだけれど、

只今申上げたやうな次第で、もう時間も迫つて居るので……」

一寸時計を引出して見た。

「今日は失禮させて頂くとして、その代り過日來の御話は半分承知といふ事にきめませう。半分と云ふと可笑しいが、君の方に五萬圓、東京生命の方に五萬圓、雙方に花を持たせて土附かず引分といふさばきにしようぢやありませんか。」

「そりやあいけません。毎々申上る通り私の方が先口で、東京生命の方はいはゞ割込んで來たんですから、今度は最初御願ひした通り、手前の方に是非共十萬圓頂かせて下さらなくつちやあ……」

牛島はさも不平らしく、強い語調で言ひ張らうとした。

「まあ其處んところは我慢したまへ。大體吾々風情には五萬圓一口でも負擔が重過るんだが、君の熱心に感じて顏を立てようと云ふのだから、そこを酌んで呉れなくては困る。それに、いづれは又何とかする積りなんだから。」

先方の方がかへつてなだめるやうな態度で、

「支店長さん、どうも此の牛島君の熱心には感心させられました。その結果たうとう口說を落さ

れてしまつたんです。」
と三造の方にも愛嬌を見せたが、又しても時計を出して見て、
「どうも申譯ありませんが、既に少々約束の時間に遲れましたから失禮させて頂きます。」
さも忙しい人間なんだと云ふ事を見せ度いらしく、勢よく椅子を押除けて立上ると、主人の方が先に頭を下げた。
「では御免下さい。診査の方は明朝十時から十一時迄の間ときめて置きませう。失禮。」
さう云ひ捨てゝ歩き出した。
三造と牛島も誘はれるやうにその後にくつついて玄關に出た。
「どうも失禮しました。御免下さい。」
もう一度帽子をとつて挨拶して、運轉手のうやうやしく扉をあけたところへ飛込むやうに乘込むと、自動車は烈しい音を立てながら、滑かに動き出した。
「いや、どうも御苦勞さまでした。おかげでもう大丈夫です。」
かくし切れない喜びを見せて、牛島は三造の前に頭を下げた。
「しかし、折角の十萬圓が東京生命に半分とられたのは殘念たなあ。」

「なんの、そこは拙者の腕のふるひどころです、いつたん契約するときまれば、あとはわけなしです。明日の朝醫者を連れて行つて、向ふがなんと云はうとも、きつと十萬圓にして見せます。かりにも祖國の牛島だ、東京生命の奴なんかと五分五分の相撲がとれるもんか。大まけにまけても七分三分迄で、それ以上は讓りはしません。」

すつかり興奮してしまつた牛島は、自分のうでを見せた滿足と、それに對する多分の報酬が近日懷に入る豫想で、自ら顏面筋肉も緊張してゐた。

これに反して三造は、まるつきり氣が滅入つてしまつた。牛島の話では、思はぬ強敵が現れた爲め、此の契約を承諾させるのは大仕事で、その爲めにわざわざ應援を賴むのだと云ふ事だつたから、自分の外交手腕には自信が無いにも拘らず、兎に角全力を盡して責務を果さなければならないと考へて居た。どういふ風に說得してやらうか、寧ろ理窟張つた事は云はずに、最初から頭を下げて拜み倒してやらうかと、昨夜は寢床に入つても、其の事ばかり考へて、なか／＼寢つかれなかつた。拜み倒しは自分の柄に無い事だが、柄に無い事さへ敢てやるのが卽ち自分の職分に忠實なる所以なのだと思つた。何にしてもいろ／＼心配して、成功しなかつた時の不面目なども念頭を去らずに彼を惱ました。

それなのに、いざ行つて行ると、先方はさも待つて居たやうな無雜作な態度で、此方には一言も口をきかせずに、さつさと解決してしまつた。保險金額が拾萬圓で無い事を牛島は殘念がつて居るけれど、五萬でも壹萬でも隨分少くないのを、何の苦も無く取る事が出來たのだから、支店長に對しても、本店の重役に對しても、自慢の出來る結果なのだ。しかし、折角いき込んで行つた三造が、一言も筋道の立つた口をきく機會をつかまへる事も出來ないで、まるつきり木偶の坊に等しかつた場面を想ひ起すと、すつかり不愉快になつてしまふのであつた。殊に、たつた一言挨拶のかはりに云つた言葉が、池の金魚をほめた事だつたのが、羞しくて堪らなかつた。彼は、當の契約者の何不自由の無いらしい生活や、妙に世間馴れた風を見せ度がる樣子や、さては餘りに悠々と泳ぎ廻つて居た金魚迄引くるめて想ひ起して、浮かない心持を消す事が出來なかつた。

「大田原さん、前祝ひに一杯差上げ度いんですがなあ。」

過ぎた事を繰返して考へながら步いて居る三造を振かへつて、牛島は足を停めた。

「僕は社に歸らなければならない。月初は忙しいんだ。先月の締切の成績も未だはつきりわからないし。」

「いゝぢやありませんか。若し話が手輕に片づかなかつたとしたら、斯う早くは引上げられやあ

しないんだから。」

牛島は金鎖を引張り出して、大型の金時計の蓋をぱちんと開けた。

「それにもう十一時過ぎましたぜ、どうせ晝飯を食はなければならないんでせう。そんなら大金か金田にでも行かうぢやありませんか。」

「いや、さうはして居られないんだよ。」

とは云つたが三造も時計を出して見て、誘はれさうになつて居た。その樣子を見てとつた牛島は、

「では手輕に濟ませませう。」

と云ひながら、いきなり先に立つてさつさと歩き出した。

細い路地をぬけて、愈々人ごみの活動小屋の間を通つて池のふちから十二階を仰ぎ見た時、幾年間つひぞ此方の方面に來た事の無い三造の目には、重くるしい空に間抜な形をして聳えて居る高塔が、ひどく珍しい景色に映つた。

「何處に行くんです。御大層なところはいやだぜ。」

先に行く牛島に追ついて聲をかけると、此の方は土地馴れた顏付で得意らしく、

「天ぷらでも食べようかと思つたけれど、そいつも少し暑苦し過るから、大金に行かうと思ふんです。」

「そりやあいかんよ。靴をぬいで上り込んで、しかも君の御相手では、とても今日中には社に歸れなくなつてしまふ。僕は其處いらの天ぷら屋で結構だ。」

目の前に在る小料理天ぷらと書いた大看板を出した家を指さして、三造は再び立どまつた。

「駄目ですよ。こんなところの物なんか食へるもんですか。天ぷらなら天ぷらで、おつに食はせるうちを知つてるんです。」

「僕は迅速第一だ。其處の腰かけで天丼でも食へばいゝ。どうしても二時迄には社に歸らなければならない用事があるんだから。」

いつたんつかまつたら放しさうも無い牛島の様子に少し怖氣づいて、田舍者相手の安料理屋の前で、三造は動かなくなつてしまつた。

「どうも大田原さんにあつちやあかなはない。」

野暮な奴だと云ひ度さうな、さげすんだ笑を見せながら、爲方が無いとあきらめて、自分が先に立つて其の安料理屋の暖簾をくぐつた。

「いらつしやい、おあがんなさい。」

腹に力を入れて、無理に鼻にかけた聲で迎へる女中は、二階へ上れと云つたけれど、二人は土間の卓子に向合つて腰かけた。むうつと鼻をつくいきれの中で、煮詰つた油の匂が重く漂つて居た。

「何に致しませう。」

「僕は天丼だ。」

女中の問に、三造は躊躇しずに答へた。

「いけませんよ、天丼なんか。姐さん、兎に角お刺身とお椀で一本つけて來ておくれ。」

牛島が傍から打消した。

註文したものが來て、盃を取ると、三造は香をかいだ丈で陶然としてしまつた。分量は極く少いのだが、毎晩一本のおしきせをゆる〳〵なめて樂しむのが唯一の贅澤で、其の外には茶屋酒を飲む事も知らず、芝居や寄席に行く事も無く、貯へた金で確實な株を買ふのが生涯の目的のやうな三造だつた。酒には強い牛島に勸められ、たゝみかけて飲まされると、たゞさへ暑い日の正午の事とて、すつかり醉が顏に出て、流れる汗は拭いても拭いても又流れた。近所の玉乘や見世物小屋から聞えて來る樂隊の騷々しい音響も、絶間無く耳の底を搔き亂すのであつた。

「もういけないよ。これから社に出るんだから。姐さん天丼を一つ大急ぎで持つて來て吳れ。」

自分もいゝ機嫌になつた牛島が、外交員としての手腕が如何に勝れて居るかといふ事を、遠廻しに聞かせながら、しつつこく強ひる盃を拒んで、三造は勝手に註文した。

「まだ一本位いゝぢやありませんか。何しろ貴方をわづらはした甲斐があつて、もう拾萬圓は確實なんだ。考へて見れば此の商賣程ぼろいものはありませんや。」

「しかし僕なんか何の應援にもなりはしなかつたぜ。君の話ではひどく手ごはい相手らしく思はれたが、行つて見るとまるで、向ふから飛込んで來たやうなものだつたぢやあないか。」

「其處が貴方のおかげだつていふんだ。人間てものは變なもので、これで支店長がわざ〳〵來たとなると、さうむざとは斷れなくなるんですよ。あいつ隨分強硬に云ふ事をきかなかつたんだが、僕も此のまゝ引込んでは名折れになるつて尻をまくつてやつたし、最後には支店長を連れて來て、それでもいけなければ支店長の面前で切腹だつてね、一寸脅してやつたのさ。はゝゝゝ」

周圍の人が一齊に振かへつて見る程氣持よささうな高笑をして椅子の背にもたれかゝつた時、突然物凄い音がして大地が震ひ出した。と思ふひまも無かつた。安普請の天ぷら屋は、組合せた材木と材木とのきしめく中で、今にも崩れさうに見えたのである。皿小鉢の壞れる響、人々の叫

喚――浮腰になつて卓子につかまつて居た三造が、必死の氣力を出した時、頭の上から天井がもろに落ちて來た。

重たい力で頭と背中をぶんなぐられ、目が眩んで昏倒しさうになつたが、三造は崩れ落ちた家の外にころがり出て居る自分に氣が付いた。もう其の時は、其處いらは芝居、活動寫眞、飲食店其他人の集る場所の立並ぶ一區劃の事なので、獸のやうに悲鳴をあげて往來になだれ出る人數でいつぱいだつた。三造は押倒されさうになりながらも、牛島の生死が氣にかゝつて、今つぶれた天ぷら屋の屋根の下の僅かの隙間から匐ひ出して來る人を一人々々注意してゐたが、遂に牛島は出て來なかつた。轟といふ遠鳴につゞいてゆりかへしの來る度に、彼は心が寒くなり、今度こそは自分もやられるのではないかと思ふと、俄かに怖氣づいて、人波に押されながら馳出した。

何處だか知らないが、無數の人で埋まつて居る空地迄逃延びた時、彼は初めて今の今迄大空に聳えて居た十二階が何時の間にか見えなくなつたのを知つた。恰度其の塔の下にあつた天ぷら屋は、崩れ落ちる煉瓦に打たれてつぶれたのだ。同じ家に居た人が何人死んだらうと思ふと、自分の幸運が沁々感じられた。

下敷になつても助かるかもしれないと思ふ心地もあつた。自分が椅子をはなれた時、向側に中

腰になつてゐた牛島の、一瞬間に醉のさめたことはばつた顏が、目の前にはつきり浮んで來た。その爲めにも、自分が助かつたといふ安心は一層強められた。何かに打たれた頭が痛んで、時々氣が遠くなるやうにも思はれたが、牛島の事、會社の事、此處からは一里餘もある下澁谷の我家の事、それからそれと不安の念の起るのも、兎に角命は無事だといふ事で押伏せて、遠方にあがる火事の黑烟をのぞみながら、彼は呆然として何時迄も、佇んでゐた。

自分が次席として机を据ゑて居た日本橋の支店は燒けてしまつたけれど、我家も、丸の內の本店も無事だつた。百數十人の社員の中で、燒出されは三分の一以上に達したが、死者は牛島明六一人だつた。三造は其の日の事を考へれば考へる程、九死に一生を得た震撼と幸福感に打たれるのであつた。

日がたつても、九月一日の朝から晩迄の事が、はつきりと目に浮んで來る。寧ろ日がたてばたつ程すべての景色が色彩を加へて展開されるのであつた。逢ふ人每に、遭難の日の一部始終を事細かに話すのが何よりの慰樂だつた。元來口數の少い方だつたのが、地震の話となると、人の話

を奪つても自分が中心になつて話し度がつた。自分程危險な目にあつた者は無いと云ふ事が、密かに彼のほこるところだつた。他の人は早く興奮狀態から覺めたけれど、彼は其の日と同じ緊張した心持を續けた。

一時は、どの位の死亡者で、どの位の保險金を支拂はなければならないか見當もつかなかつたので、政府の補助を受けなければなるまいかなどと、社長も支配人も公然口にして悲觀して居たが、會社の損害は存外少く、橫濱の支店と市內の日本橋支店とが燒けたけれど、これは借家の事だから大した事では無く、同業會社の中でも至極く運のいゝ方だつた。

三造の家は瓦や壁が落ちたばかりで、それも借家の身分だから際立つた損とては何も無かつた。重ね重ねの幸に、命拾ひの嬉しさで夢中になつてゐる彼は、一層有頂天になつてしまつた。罹災者の誰を見ても、うるさい程同情した。電車が復舊しないので、毎日朝も夕方もてく〳〵一里半の道を步いて、丸の內の本店と我家との間を往來するのも苦にならなかつた。

彼の下役の小沼新次郎は燒出されの一人だつた。夜學の商業學校を出たばかりで、會社では薄給だつたが、小間物屋をして居た父親の殘した金で築地の方に貸家を建て、最近には、又其の貸家を擔保に金を借りて、郊外の新開地にも二三軒新しい普請をして、暮らしにはちつとも困らな

かつた。四十近い身でありながら、ひどくおしやれで、生活は月々懐に入る家賃で十分だつたから、月給は全部身につける物の爲めに費されるのであつた。洋服は何時も形の崩れないのを着て、あきるとそれを賣拂つて新型の物をあつらへる。襯衣（シャツ）、襟飾（ネクタイ）、襟飾洋針（ネクタイピン）、指輪、腕時計――何から何迄會社員には珍しい贅澤をし、男ぶりはよくなかつたが、ほつそりした色白で、一筋も亂れない頭髮の手入迄行屆いて居るので、月並な洒落ではあるが、社內では「木戸郎さん」と呼んで居た。氣の弱い好人物で、仕事の手腕は無かつたけれど、身なりの潔癖なのと同じく、投げやりにはして置かない几帳面な執務振だつた。

その小沼は、生活の資源だつた築地の持家を燒かれ、大事の衣類も殘らず灰にしてしまつた。九月一日に着てゐた薄色の縞セルの上衣に白い洋袴の一着が、今では泥まみれになつて居たが、その外には着るものもなく、てか／＼光らして居た頭髮も亂れ放題に亂れ、薄靑く剃あとの目立つたすべつこい頰邊（ほつぺた）にもまばらに髯が延びて、以前あんまり手入れがよすぎた爲め、うす汚さは一際目立つた。

九死に一生を得た大田原三造は、何時迄も其の日の興奮から覺めないのに、小沼新次郎はすつかり悄氣（しよげ）てしまつて、これは其の悲嘆から浮び上らないのであつた。陰鬱な顏色をして、誰とも

口もきかず、机にむかつてゐてもぼんやり考へ沈んで、爲かけた仕事を忘れて居る事もあつた。平生群をぬいて立派な身なりをしてゐるのが多少の嫉妬を買ひ、あの「木戸郎さん」かと輕蔑されて居た位だから、お互に燒出された仲間うちでも、何と無くいゝ氣味だと思はれ易い傾があつて、愈々一人で暗い姿をして居たが、三造丈は机を並べて居る關係もあり、殊に自分は危ない命を助かり、家も無事だつた幸とひきくらべて、心から同情の念に堪へなかつた。親切な言葉をかけられても、さも鬱陶しさうな風に見えるのも構はず、閑さへあれば三造の方から話しかけた。

「小沼君、君は何處か惡いんぢやあないんですか。ひどく元氣が無いぢやあないか。」

「えゝ神經衰弱らしいんです。」

「そりやあいけないなあ、しかし何時迄もくよくよして居ても爲方が無い。大に元氣を出してやるんですねえ。人間の運はわかりませんよ。現に僕なんか彼の日牛島君の應援で淺草に行つて、牛島先生は拾萬圓の契約が出來たと云つて成金氣分になる、僕は一文にもならないのを悲觀して居たところが、一時間たつたかたゝないうちにあの珍事で、得意になつてゐた牛島君は死んでしまふし、僕の方は不思議の命を拾つた。これで又、どんな思ひもよらないいゝ事が起るかわかりやあしない。もう斯うなれば人間はお互に助け合つて、自然に對抗する氣分になる外無いね。金

なんかあつたつて無くたつて同じだ。僕はつくづくさう思つた。君の事にして見ても、なまじ家作なんか持つてるのがいけないんだ。借家ならそんな心配も無い。道具だつて、着物だつて、現代の人間は無駄に持過ぎて居る。吾々のやうな貧乏暮しのうちでも、小皿だとか茶碗だとかいふものは、ろくに使ひもしない餘分のやつが多過る。茶碗一つ、西洋皿一枚で、何でも食べる事にしたつて、決して不便は無いんだ。今度といふ今度は、僕は根本的に悟つた。着のみ着のまゝで、一切無駄無しにやつて行く。結局其の方が氣樂ですよ。」

すつかり樂觀論者になつてしまつた三造は、話が適切に相手を慰める言葉でないのにも頓着無く、一人で面白さうに喋るのであつた。さういふ時、小沼は最初こそ眞面目に聞いてゐるけれど、何時の間にか自分は自分で、何か外の事を考へ耽るのであつた。

三造は口先ばかりで無く、實行にも驅られて行つた。小使や集金人の可哀さうなのが、バラツク住居をしてゐたりすると、無理にも見舞金を握らせなければ納まらなかつた。だから小沼の意氣地無く打擊に打負かされたのを見ると、何とかして救つてやり度くて堪らなかつた。此間迄、夫婦と子供と三人ともに、着飾つては日曜毎に出歩いて居た小沼一家が、着のみ着のまゝで市外の親類の厄介になつて居ると聞くと、先づ自分の單衣物と兵見帶を小沼に與へ、決していゝ顏を

しない妻を強ひて小沼の細君の爲めに女物をやれと迫つた。

「あたしなんか何も他人様に差上るやうなものなんか有りませんわ。ふだんから人並の風をした事も無いんですもの。」

「なあに寢衣の古でいゝんだよ。燒け出されたんだもの、襦袢一枚だつて難有がるに違ひ無いや。」

「まさか着古した寢衣もあげられやしないぢやありませんか。」

「かまふもんか。此の際の事だもの。」

「なんぼ此の際だつて。」

いゝ物をやるのは惜いし、洗ひざらした物ではみつともないと、どつちみち根本は物惜みの心の強い妻を無理に領かせて、肌につける物迄一通り取揃へ、小沼のうちの子供は女で、自分のところは男の子なのだが、當座の間に合せだからと云ふので、紺飛白の筒袖も一枚まぜた。その風呂敷包を小沼に渡した時、つひぞ知らなかつた喜びを感じた。

「君のやうな衣裳持で聞えた人に、こんな物を上るのは羞しいと女房は云つたけれど、此の際そんな事を云つてる時では無いから、寢衣がはりに着て呉れ給へ。」

「難有う御座います。非常に助かります。」

小沼は涙ぐんだ目で風呂敷包を見守つた。

「實に私なんか考が間違つて居ました。生來變に潔癖で、まづ衣裳道樂とでも云ふのでせうか、自分ばかりで無く、女房にも子供にも不相應ななりをさせなければ承知出來なかつたのですが、そんな物は何にもなりませんでした。銀行に貯金でもする事か、指輪や時計のやうな無駄なものを澤山買つたりなんかして。しかし今度ですつかり懲りました。もうなりふりなんかにかまつて居る場合ではありません。」

珍しく感激して、幾度も禮を云つて其の包を抱いて歸つた。

東京は當分復舊の見込は無く、或は本據を大阪にでも移さなければなるまいと悲觀されて居たのが、人の氣力はめきめき回復して來て、會社の仕事も存外景氣は惡くなかつた。三造は、地震や火事に苦しめられても、又いゝ目が出る事もあると云つた通り、此の復興の氣運が新しい幸福をもたらすに違ひ無いと、愈々樂觀論を口にしてゐたが、それにひきかへて小沼の方は、益々元氣が無くなり、時折は人前で吐息を漏らす事さへあつた。

「いかんねえ君は、慢性神經衰弱に罹つたのではないか。」

三造は心から心配して、幾度となく訊くのであつた。

「實は少々困つた事がありまして……」

と言葉を濁して、なかなか實を吐かなかつたが、さうなると一倍熱心に相談に乘り度がる相手にほだされて、たうとう口を切つた。

それは以前からの築地の家作を抵當に入れて、先年新しく郊外に家を建てたが、その金を貸して呉れた人も今度は全燒けで、此の場合多少まとまつた金が無くては一生浮かばれない羽目に陷つて居て、小沼に對して頻に返金を迫つて來る。勿論約束は月賦で返す事になつて居て、今迄にも月々きまつた額を入れて來たので、あとは千五百圓ばかり殘つて居るのだが、もともと築地の方の貸家から上る家賃から拂つて行く豫算だつたから、燒拂はれた今日となつては、當分かへす途が無い。ところへ先方は地震の大災厄をいひたてにして、どうでも一時に全部返濟して呉れと迫つて來る。其の相手と云ふのが、死んだおやぢの問屋筋に當る人なので、實際窮境に陷つて居るのを知つては、何とかして先方の云ふ儘にしてやり度いと思ふが、さて思ふ半分も始末がつかないのだと云ふ話だつた。

「意氣地の無い事ですけれど、此の事が氣になつて夜もろくろく寢られませんし、會社に出て居

ても申譯の無い事ですが仕事も滿足には手につかないのです。たつた一つの解決法は、市外の方の家作を賣つてしまふ外無いのですが、さうすると私は一生人間並の暮しは出來なくなつてしまふのです。」

今にも泣出しさうな顏をして、勢の無い聲で話したのである。

「ふうむ、それは困つたなあ。」

三造はすつかり同情して、自分の預金が丁度千六百圓ばかり銀行にあるのを想ひ出しながら、いつそそいつをそつくり此の男に貸してやらうかとも思つたが、自分にとつても大金なので、心の中で自身を叱りつけ、口に出す事はあやふく差控へた。

或日曜の午後、妻が子供を連れて買物に出た留守番を三造が引受けて、狹いながらもすつかり秋の色になつた庭の草花の手入れをして居るところへ、珍しくも小沼がたづねて來た。一人で寂しがつて居た所だし、適度の運動をした後の快活な氣持で、喜んで迎へ入れた。小沼は三造に貰つた時候違ひの單衣物を着て居たが、それが又三造には少なからぬ滿足を與へた。彼は自分の温

い心持を、完全に他人が受入れて呉れた事を認めたのであつた。

差向ひで、大體は三造一人で喋つてゐたが、話は矢張り震災の外には出なかつた。殊に牛島の保險勸誘の歸りに、自分が危ない命を助かつた淺草に行つて見た話で夢中だつた。前の日會社の應援に行つた金持の家の燒跡で、其處の主人に出あつた時の光景は、話してゐる自分の眼前に彷彿として來るのであつた。何の苦勞もしずに親讓りの財産を受繼いで、さも世の中が面白くて堪らなさうに暮して居た人も、すつかり悄氣て、土方のやうな恰好で、燒跡の片づけを手傳つて居た。

「やあ、祖國生命の支店長さんでしたね。いやはや御覽の通りむざんにやられてしまひました。」

三造の挨拶に答へて、とつてつけたやうに笑つたが、其の笑にはさつぱり力が無かつた。

「へえゝ、あの牛島君がやられましたつて。手前共の歸りに。氣の毒な事をしましたなあ。」

驚く相手に、その日の光景を、三造は又細かに話して聞かせた。此の家の木口をえらんだ建物も、手の屆いた庭も、すべてが灰と瓦礫だつた。立派な蘭虫の泳いで居た池の三和土は割れて、一滴の水も無かつた。

「あの見事な金魚も死んだのですか。」

此の前訪問した時、たつた一言金魚をほめた丈だつた自分の氣の利かないていたらくさへ、今では輕いをかしみをもつて追想する事が出來た。

「金魚？　大方からゝあげにでもなつたでせう。」

主人は又力の無い聲で笑つた。

三造はその會話迄まぜて小沼に話して聞かせたのである。

とかくして居るうちに、向の丘の火藥庫の森も薄暗くなる頃、妻と子供は歸つて來た。小沼はあらためて細君にむかつて、自分や女房子供迄衣類を分けて貰つた禮を繰返して、やがて歸ると云ひ出したが、三造は引留めて放さなかつた。

「何も無いけれど飯を食つて行つて呉れ給へ。」

歸る歸るといひながらうぢうぢして居るうちに、小沼は結局尻を落ちつけてしまつた。つましい暮しに馴れ切つて、少しでもきばらなくてはならない客來を嫌ふ妻は、不平な顔つきをあからさまに、近所の魚屋に走つて行つた。

「ほんとに何も無いんですよ。此の際お互に節約しなければならないからねえ。」

その實平日よりも奮發した膳の上に滿足して、三造は大好物の盃を取上げた。

もとより酒の量は少いのだし、小沼と來ては殆んど一滴も飲めないのであつたが、客をだしに使つて二本目の徳利をねだる頃は、三造は全く醉つて、一切の邪念が無くなつてしまつた。又しても地震の日の遭難談を繰返し始めた。

小沼は何か用あり氣な、落つかない素振を見せて居たが、ふと三造が話止んだ時、更に行儀よく膝を正して、思ひ決したやうな、しかし物靜かな態度で切出した。

「甚だ厚かましい事で、平素一方ならぬ御引立を受けて居る身で、こんな事は御願出來る筈では無いのですが、どうにも致方がありませんので……」

薄着の肌寒さうな姿ながら、半巾を出して額を拭いた。

「先日も御耳に入れた事ですが、あの家作の一件でして、實際申兼る事とは思ひますけれど、何とか御願ひ出來ないもので御座いませうか。」

いゝ氣持で、稍眠氣を催して居た三造も、胡坐の膝を坐り直して固くなつた。彼は自分が密かに恐れてゐる事が、身に迫つて來たのを知つた。

「私が金を借りました人には、おやぢの代からお世話になつて居りますし、さりとて此處で殘つた方の家を手放しては、私共親子は衣食の途が無くなります。築地の方もゆくゆくは、今ある方

の貸家の家賃を貯へて建直さうと思つて居りましたが、萬一此の際どうにも方法が立たなければ、これも出來ない相談で……」

何時もとは違つて、餘程決心して來たらしく、力の籠つた口ぶりに、三造は最初からおされ氣味で、到底拒み切れないやうな豫感が強かつた。

「それで、一體いくらあれば濟むんです。」

成るたけ弱味は見せまいとして、さも事もなげに訊いて見た。

「過日も御話したと思ひますが、只今一千五百圓殘つて居りますので、先方では何とかしてこれを一時に返して呉れと云つて參るのです。」

「ふうむ、千五百圓。」

斷らうか、斷るまいか、せめて半分位なら融通してやつてもいゝのだがと、とつさの間にいろいろの事を考へた。

「それ丈あれば私共一家は助かります。」

小沼ははりつめた氣にゆるみが來たか、しよんぼりうつむいて嘆息した。相手のみじめな様子を見ると、三造にはむら／＼と優者の感が湧いて來た。あの時若し自分が死んで居たらどうだら

う。若し命は助かつたにしても、此の家が焼けたとしたらどうだらう。その損害は千や二千の金には比べられない。さういふ考が浮んで來ると、覺めかゝつた醉が又發して來て、三造の心は弱くなつた。

「外にはどうしても融通の途が御座いませんものですから、ついこんな詰らない事を申上げてしまつて……」

「いや、私だつて御承知の通り別段貯へのある身分でもないが、千圓や千五百圓の事ならどうにかならぬ事もないのです。」

その實千六百圓あるかないかの預金だつたが、どうしても此の場合ゆつたりした心持を示し度かつた。

「よござんす。僕がその金を貸してあげませう。」

自分でもひやりと感じながら、勢に乘つてきつぱりと云つてしまつた。

「なあに此の際の事だ。お互に助け合つてこそ人間なんだ。」

「難有う御座います。」

小沼は疊の上に兩手をついて低頭した。その芝居めいた場面も三造には嬉しかつた。

けれども、小沼が幾度も禮を云つて歸つた後で、三造はひどく後悔した。ありあまる收入でも無く、永年足り無い勝の生活の中で、儉約が生んだ貯金を、たとへ一時の事にしても殘らず他人に貸してやる約束をしたのは輕はずみ過ぎた。どうも自分は思慮が足り無い、こんな事では世の中は渡れない、と寂しい心持でいつぱいになつて居る處へ、臺所で後片づけをして居た妻がやつて來た。

「あなた小沼さんにお金でも貸してやるんぢやないんですか。」

妙に緊張した顏付で身近に迫つて來た。

「あんまり可哀さうだから、少しばかり融通してやらうかと思ふんだ。こんな大事變の時にはお互様だよ。」

妻の抗議は最も怖れて居たところだつた。狹い家の中で低い聲で話して居ても大概の用件は察しがつく上に、小沼は玄關でも亦叮嚀過る感謝を示して行つたので、たゞさへ察しのよすぎる妻は、殘らず感付いたに違ひ無い。無理にもひけめは見せ度くないと思つて、なんのこんな些細の事と云はんばかりの態度をしたけれど、妻の方は眞劍だつた。

「そんな事を云つて、うちだつて苦しい經濟なんぢやありませんか。なんぼ人様が困つて居るか

らつて、ありもしないお金をおいそれと貸してやるなんて、あんまり人が好過ぎますよ。」
「しかしね、ふだんとは違ふんだ。災難にあつた人を、災難に合は無い者が助けるのは此の際當りまへだよ。それでなくては社會はなり立つて行かないんだ。」
「社會だかなんだか知りませんけれど、いつたいいくら貸して呉れつて云ふんです。」
「え、千五百圓ばかりつて云ふんだがね。」
「まあ、そんなに澤山なんですか。それを貴方は承知なすつたんですつて。」
妻は顏色から聲迄ヒステリックになつて詰寄つた。
「出來る事なら此の際なんとかしてやり度いからねえ。小沼も可哀さうだよ、震災前迄は相當に暮らして居たんだから。」
三造は醉も覺め切つて、自分の口約束を後悔して居る矢先に、妻ははげしい權幕なので、すつかり閉口してしまつた。
「なんですつて、相當の暮しをして居た人だから可哀さうだつて云ふんですか。小沼さんとこなんか身分不相應な贅澤をして居たんぢやありませんか。下役の癖に社長さんとこの園遊會なんかに行つて見ると、あすこの奧さん程贅澤な人なんて一人もありやあしません。何處の重役の奧さ

んかと思ふやうな風をしてゐるし、小沼さんだつて男の癖に指輪なんかぴかぴかさせ、娘さんといへばまるで半玉のやうななりをさせてゐて、とてもうちなんかとは違ふ遣口なんです。心掛さへよければ、こんな時にだつて困らない位のお金はたまつて居る筈なんです。それよりも儉約々々で、着度い物も着ず、見度いものも見ず、ろくすつぽおいしい物も食べないで居る私達の方が、どの位可哀さうだかしれやあしない。やつとの思ひで少しづゝでもお金を殘して居るのは、こんな時に他人に迷惑をかけるやうな、みつともない眞似をしたくないからなんでせう。それたつていふのに、あなたつていふ人は……」

口惜しさに涙ぐんで、咽喉がつまつて口がきけなくなつてしまつた。三造は一言も無く、一々詰問される事が尤もに思はれ、頭から降參してしまつた。妻は何時迄も甲高い聲で怒つてゐたが、次の間で机にむかつてゐた男の子が、心配と好奇心とでいつぱいになつて、何氣ないふりをしながら入つて來たので、やうやく心を抑へつけて、

「あなたは地震の時頭を打つたつて云つてらつしやつたが、それ以來腦が變たんぢやあないんですか。」

と捨ぜりふを殘して臺所に引上げた。

妻の抗議があつたからと云つて、今更取消す事も出來ないし、その上翌日會社で顏を合せると、小沼は又しても平身低頭して感謝するので、三造は逃れる途がなくなつてしまひ、たうとう預金を引出して、千五百圓を小沼の手に渡した。

「お返しする方法は、毎月の給料の半分位は必ず差上る積りですが、利息のところは如何致しませうか。」

いひにくさうに云ふ小沼に對し、こゝ迄來てはあく迄も自分の厚意を大きく深くする外に立場もないので、

「なあに君と僕との間で利息なんかいりませんよ。たゞ毎月一定額宛返して下さればそれでいゝんです。」

と答へた。

「これで全部借金を返してしまへば、先方も私共も大助かりです。これからは心を入替へて儉約して、二度とこんな御迷惑を人樣におかけしないやうに努めます。」

幾度となく繰返して誓つて、その札束を懷に納めた。

日がたつに連れて、小沼の元氣も次第に回復して來た。地震で受けた恐怖の念もうすらいで來たのであらうが、三造は自分の厚意で彼が窮境を脫した安心の爲めに、めきめき氣力がついて來たのだと思つた。

「近頃は大分血色もよくなつたやうだが、神經衰弱もなほりましたか。」

「えゝ、大分よくなつたやうですが、未だ十分眠られません。」

さう云ふ返事をきくと、三造の心の底には物足りない感があつた。

「えゝ、貴方のおかげで難關を切拔けましたので、すつかり安心して體の具合もよくなりました。」

と、答へて貰ひ度いのであつた。但し相手の返答が如何であらうとも、確に自分のなさけで同僚を救つたのだと彼は信じて居た。貯金の殆んど全部を貸してしまつた事を妻の前で白狀して、前にも增して怒られ罵られ、しまひには泣出された時さへ、その場では閉口しきつても、やがて又いゝ事をしたといふ滿足が、もくもく頭を持上げて來るのであつた。

けれども、流石に三造もぎよつとしたのは、其の月の月給日に、人目の無い所で小沼に呼止められ、會社の名前の入つて居る封筒に納めたものを渡された時だつた。

「あんまり少しづゝで御羞しいんですが、どうも物入りが多くてやり切れないものですから……」
いひにくさうに言葉を切つて、
「せめて月給の半分位づゝはお返しし度いと思つて居ましたけれど、追々寒さに向ふ支度もありますし、何時迄も親類のうちに厄介にもなつて居られないので、築地のもとの所にバラックでも建てようかとも考へますし、御迷惑ついでと云つては申譯ありませんが、御厚意に甘えさして頂いて……」
くどくどと辯解しながら、しきりに頭を下げた。
「いゝえ、君の苦しい事は知つてるんだし、僕の方も差當つて金の入る事も無いのだから、そんな心配には及びません。」
といひ捨てゝ、無雜作に封筒を衣囊に突込んで、さつさと其の場を切上げてしまつた。
人の居ない所で開けて見ると、中には十圓札が一枚と五圓札が一枚はひつて居た。一千五百圓の札束を渡した日に、小沼はどうにかして毎月の給料の半分宛はかへす積りだと云つたが、それは苦しいに違ひないとしても、まさかに十五圓とは思はなかつた。此の勘定で行くと、全部皆濟となる迄には八年の歲月がかゝる事になる。おまけにこんな半端な金だと、つい使つてしまふ氣

になるものだから、うつかりすると無駄に費消してしまはないとも限らない。さう考へると、千五百圓の金は貸したのでは無く、全然やつてしまつたのと同じ結果になりはしないかと思はれて、胸が重苦しくなつた。

きちがひ染みた殘暑の後で、追々寒さが加つて來る頃、小沼の築地のバラックが出來上つた。彼はすつかり元氣がよくなつた。同時に、みなりは一切新調づくめで、以前の「木戸郎さん」として復活した。鶯茶の中折帽、それよりも稍薄色の背廣、ぴつたりと體に食ひつくやうな型の紫紺に近い派手な色氣の外套を着て、細身の散歩杖を腕にひつかけて來た時は、會社の者は一齊に目を瞠つた。以前は以前として、地震以後は一張羅の汚れ切つた夏服で通勤し、不精髯を延ばし、頭ももぢやもぢやに亂れて居たのが、俄に服裝をとゝのへ、髮は油でかためてかつきりと分け、もともと色の白い頰邊に剃あとの靑々としたのがあらはれたので、忽ち物好きな連中の嘲笑の的になつてしまつた。

「何しろ親子三人で親類の家に厄介になつて居ては、先方に對しても着物をこしらへるなんて贅澤らしい眞似は出來ないから我慢して居ましたけれど、やつとの事でバラックながら住居も出來るし、此の頃の涼しさに夏服でも居られませんから……」

彼は眞顏で辯解して、
「此の散步杖(ステッキ)は、これは罹災者に下さつた恩賜金で買つたのです。何か記念になる物と思ひましてね。」
唐草の金具のついた杖を人々に見せた。
その樣子を見た三造は、不尠(すくなからず)不愉快だつた。彼は自分自身、今年は冬服を新調しなければならない筈だつたのだが、着物どころの騷ぎではないと遠慮して、本來は古着屋におろしてしまふ積りの毛は擦り切れ、色は變つた一着で押通す覺悟を定めたのに、燒出されて金の融通を賴みに來た小沼に、派手な好みの眞新しい衣類を見せつけられては、流石にいゝ氣持はしなかつた。何か皮肉な事を云つてやり度い氣もしたが、それも柄(がら)に無いので、口に出す適當な言葉も見つからなかつた。しかし思ひ切つて、
「小沼さん、もう衣裳道樂はやめると云つて居たが、矢張りさうも行かなくなりましたね。」
と云つてやつた。
「はゝゝゝ、矢張り性質ですなあ。汚いなりをして居ると氣が滅入つてしかたが無いのです。たうとう月賦で註文しました。しかし以前のやうな事はしない積りです。此の一着で何處にでも

押出す考へです。」

小沼も頭に手をやつて、恐縮した樣子を見せたが、しかも新調の衣類を身に着けた嬉しさはかくし切れなかつた。三造は苦い顏をして話を打切つた。みじめな罹災者として同情して居た時のやうな、溫い氣持は持てなくなつた。あざむかれたといふ氣持さへ消す事が出來なかつた。

年の暮近くなつて、三造の身にとつて困つた事が出來たのは、彼が多年の間にやうやく貯蓄した金で買つた株券の値が地震の爲めに下つたばかりで無く、どの會社も下半期の配當は落ちさうだし、その上に未拂込の分に對して早晩拂込が來るらしい豫測が、新聞などにあらはれて來た事だつた。紡績會社と砂糖會社は工場が倒潰し、東洋一の宴會場だと稱してゐる帝國會館は、新築間も無くの美麗を極めた建物が物の用に立たなくなつた。三造としても、或は拂込を徵される事がありはしないかと思つた事もあつたのだが、震災直後の人の心には、此の打擊を受けた株主達に、更に拂込を強要する事は出來ないといふ考が共通だつたので、何れ來るには來るにしても、當分は大丈夫だと云ふ肚があつた。財界の知名の人の意見も、大體さう云ふ風に發表されて居た。もとより澤山の株數では無いのだけれど、運惡くどれもこれも一時にやつて來て、一株について十二圓五十錢宛の拂込は、三造にとつては一大事だつた。彼はそれらの會社の重役會で大凡拂込

の事實が內定した事を新聞で見た時は、其の新聞を持つ手が震へた。此の年末に手に入る筈の賞與金をすつかり拂込に廻しても、まだまだ足り無い事を想像すると、今の處銀行には百圓あるかなしかで、その外に手近に融通の途を求めれば、自分が契約して居る保險の證劵を擔保にして借入れるばかりだが、それとてもたかゞ知れて居る。萬一地震あふりを食つて、年末賞與が無くなるか、減るかすると、愈々收支の差が大きくなる。まさかそんな事はあるまいと思ふが、重役の肚の中は察しがつかない。あゝか斯うかと考へると、自然と落ちて行くのは小沼に貸した金の事だつた。あれさへあればと考へると、此の際小沼が何とか心配して吳れてもいゝ筈だと思はれる。何もない、何もないと云ひながら、バラックも建て、月賦にしろ洋服も外套もこしらへたところを見ると、自分にはかくして居ながら、多少の蓄財があつたのではあるまいか。それでなければ何處かに融通を仰ぐ途があるのでは無いだらうか。いろんな邪推を廻して居るうちに、彼は不圖不愉快な想像に到達した。それは、此の間千五百圓貸して吳れと云つたが、實はそれ程は要らないので、そのうち一部は小沼自身が一時の用に立てゝ居るのではないかと云ふ事だつた。幾度も此の卑しい疑(うたがひ)を打消さうと努めながら、完全に心を洗ふ事は不可能だつた。

段々期日が迫るにつれて、三造の頭には拂込金の調達の外には何も浮ばなくなつてしまつた。

それは來年早々の事だつたが、生れてから大金を持つた事も無いかはりに、借金をした覺えの無い彼には、よそから金を借りるといふ丈で、既に一大事だつたから、やがて迎へる正月もたゞ忌々しいばかりだつた。親類も緣者も餘裕のある生活をして居る者は一人も無く、友達の中には出世したのもあるにはあるが、平生親しいつきあひをしてゐる譯でも無いから、突然金策などは依賴出來ないし、彼の性質から云つても、こだはりなく賴む事は想ひも及ばなかつた。いろいろに想ひ惱んだあげく、以前の同僚で今は或銀行の貸附係をしてゐる男の事を思ひ出した。その男に賴んで、株券を擔保に借りる以外には方法が無かつた。丁度小沼に貸した位の金額で、あれとこれとの違ふのは、向ふは無利息なのに、此方はどうしても一割は仕拂はなければならない事だ。三造はすつかり馬鹿々々しくなつて、快活な心持を失つた。

休日の午後、久々でたづねる以前の同僚に、手土産をとゝのへて、いざ出かけようとするところに小沼夫婦が娘を連れてやつて來た。

「お出かけですか。」

「いゝえ、一寸人を訪ねる用事があるんだけれど、まあ上つて下さい。」

妻にも祕しかくした用件だから、まさかに金策に出かけるのだとも云へなかつたが、餘り酒落

た服装をしてゐる此の客に對しては、づけづけと眞實の事が云つてやり度かつた。何時こしらへたのか、小沼は厚手の二重廻をぬぐと、役者でも着さうなお召縮緬の重着で、茶がかつた無地に縫紋の羽織を着てゐるし、細君も金紗づくめで、大丸髷に結ひ、娘には洋服を着せてゐた。三造は苛立たしいやうな心持に苦しみながら、自分の妻の思惑を怖れてゐた。

「今日は御禮に參上しましたので。」

と小沼は改まつた態度で、九月の事變以來一方ならぬ世話になつたおかげで、どうする樣もなかつた難關を切抜け、假の住居も出來上り、親子とも衣食住の心配の無くなつた事を繰返して感謝した。

「御覽の通り、やうやく人中に出られる着物の一枚宛もこしらへる事が出來ましたのは、あなたの御かげだと申して、家內も一度御禮に上らなくては氣が濟まないと云ふものですから、一家總出で御邪魔しました次第です。」

といふ後について、細君も亦妙にねばり強い語調で、同じやうな事を述べた。

三造の妻がふだん着のまゝのひけ目を見せながらお茶を運んで來ると、もう一度づゝ御禮の口上が繰返された。

「ほんとに其の節は着物から襦袢迄も頂戴しまして、大助かりで御座いました。」

と小沼の細君がいふのに對し、

「どう致しまして、着古しなんか差上てかへつて失禮で御座いました。」

と三造の妻も何氣なく答へはしたものゝ、云ふ可からざる侮辱を受けたやうな感じが、むらむら起つた。その當時はどんな古い物でも、粗末な物でも調法だつたに違ひ無い事などは考へもしないで、自分なんかつひぞ手を通した事も無い服裝をしてゐる目の前の細君を見ると、あんな物を贈つた自分を、さぞかしさげすんで居る事だらうと邪推されるのである。自分のやつた古物なんか、くるくるまるめて捨てゝしまつたのではないかなどゝ、理窟もなく考へられて、羞しいやうな口惜しいやうな感情で胸がいつぱいになりながら、相手の頭の物から衣類一切に、惡意の籠つた視線を集中して居た。

小沼はつとめて話材を提供しようとして、今更らしく震災當時火の手に追はれて逃迷つた話や、東京の復興の速かな事などを口にしたが、三造夫婦はいかに努めても返事をするのさへ氣が重くなり、座敷の空氣は長座するに堪へ切れなかつた。

「どうも御出かけの所を飛んだお邪魔を致しました。」

小沼夫婦は一寸目くばせをして座蒲團をすべり下りた。
「まあいゝぢやありませんか。用事と云つたつて大した用事でも無いんです。」
「いゝえ、又ゆつくり御邪魔させて頂きます。今日は久しぶりで麻布の明治座にでも行つて見ようかと思ひまして。」
「さうですか、それぢやあ御引とめしてはかへつて御迷惑だ。」
三造は益々不機嫌になつてしまつた。
客の歸つた後で、夫婦は互に不滿足な顏を見合せた。當の相手が居なくなると、夫は妻に對して多少のひけめを感じ、妻は夫に對して憤慨の念に堪へられなかつた。
「まあ、なんて人達でせう。借金を返すからつて他人にお金を借りて置きながら、あのなりは何んでせう。他所行の着物を買ふお金があるなら、第一にこつちの借金を返すのが當前ですわ。あんな人達のいふ事だから、ほんとに先の借金を返したかどうだかわかりやあしない。あなたなんかお人好だから屹度だまかされて居るのに違ひないわ。」
妻は血走つたやうな眼付をして早口に罵つた。
「まさか、さうでもあるまいよ。小沼つて男は惡氣は無いんだけれど、あゝ云つた性分なんだ。」

「いくら性分だつて餘り馬鹿にしてゐるぢやありませんか、悪氣が無い悪氣が無いつて、世間の人はあなたなんかとは違ふんですからね。あなたはほんとに此の頃頭が悪いんですよ。」

三造はさかんにいひまくられて、返す言葉もなく口をつぐんだ。

「では一寸行つて來るよ。」

彼は逃出すやうに土産物の風呂敷包をかゝへて立上つた。

「ほんとにしつかりなさらないと、今にどんな目にあはされるかわかりませんよ。」

まだ痛癪が納まらないで、玄關に送り出してからも妻は口汚なく罵つてゐた。

往來に出て三造はほつとした。十二月だといふのに、日ざしの暖い午後で、道を行く人の數も少くなかつた。着飾つた小沼夫婦が娘を間にはさんで、芝居を見に行く姿を想像すると、金策に行く自分の馬鹿々々しさが一層はつきりした。

「いつそ自分も全燒(まるやけ)にあつた方がしあはせだつたかもしれない。」

と脫線した事を考へた時、牛島と一緒に淺草で死んでゐる自分の事迄想像した。

「馬鹿な。」

打消すやうに頭を振つて、しかし力無く步き出した。(大正十三年六月二十二日)

# 女事務員

# 一

役所の給仕をして居る弟の欣一は、辨當箱と夜學の教科書を抱へて出て行つた。母は臺所で朝の食事の後始末をして居て、皿や茶碗の觸合ふ音だの、時々流す水の音が、障子一重の向ふに聞える。富美子は、だらし無く膝を崩して長火鉢にもたれかゝりながら、先刻から迷つて居る問題を、又ぼんやり考へて居た。

去年の夏、數年間勤めて居た關東貯蓄銀行をやめた時、もう二度と會社勤めなんかするものかと、自分では固く決心した積りで居たが、一月たち二月たつうちに、毎日何の仕事も無くうちに居るのが堪へ難くなつて來た。女學校の卒業間際に父親に死なれて、月々のくらしが苦しくなつた爲め、或る商店の事務員になつたのが始まりで、其後貯蓄銀行に移りはしたが、兎に角永年事務員の生活を送つて來た。母親は、自分でも內職に針仕事をしたり、經木（きやうぎ）の帽子を編んだりして生計（くらし）を助けては居たが、めいめいきまつた日給を貰つて來る娘と息子に心から感謝して、家に歸

つて來ると、何ひとつ用事はいひつけなかつた。

「お前達が働いてくれるので、お母さんもおかげでおいしい御飯が頂ける。」

と、つましい夕餉のちやぶだいを前にして、健康な我子の食慾迄も心地よささうに、母親は年中口にして居た。

子供達も、母親が心底から感謝して居るのを知つて、少からず滿足して居た。富美子にとつては、どうにかして免れ度いと思ふ事務員の生活も、この滿足に慰められて、辛抱出來たのであつた。

それが、もう半年近く、何もしずに家に居るのだから、母親に對しても申譯が無かつた。前からの習慣で、臺所仕事の手傳ひもさせないし、やがて夏の支度も近づいて來たので、せつせと經木を編んで居る母親の傍に、ぼんやり坐つて居る術なさは、心苦しいばかりで無く、段々富美子を不機嫌にしてしまつた。絕えず苛々して、些細な事にも腹が立ち、後では濟まないと思ふのだが、つい母親に對して突慳貪な口をきく事も稀では無くなつた。

そんな事も考へるといやだつたが、それよりも自分が遊んで居ては、差當つてうちのくらしに響く事は明白だつた。今度は女中奉公をしても、女事務員なんかにはなるまいと、一人で誓つて

居たのではあつたが、何時の間にか毎朝町角に出て新聞を買つて來て、熱心に職業欄を見るやうになつた。待合だの料理屋の女中だの、カフエの女給を雇入れ度いといふ廣告にまじつて、女事務員募集の廣告は、繼子のやうに下段に組まれて居る。それさへ富美子には侮辱されたやうに感じられるのであつた。世の中に害毒を流すけがらはしいものに雇はれて行く者が澤山あるのだと思ふと、女性の共同の恥辱だと云ふ氣もした。しかも、そんないやしい職業の方が、自分達とは比較にもならない程のお金になるのだと思ふと、強い嫉妬も起るのである。きりやうのよくない女に特有の根深さで、富美子はさういふ職業に携はる人間を憎んだ。

女事務員採用、身許確實健康にして能書の方履歴書持參來社あれ丸の內大正商事株式會社、といふ廣告を今朝の新聞で見てから、富美子のもう一度就職しようかしまいかと云ふ問題は切實になつて來た。外にも女事務員募集の廣告は並んで居たが、特に大正商事のに望をつないだのは、健康にして能書と明確に資格の指定してあるのが、何となく眞面目な會社らしく、信頼しても間違ひ無ささうに思はれたのである。富美子は健康で能書だつた。小學時代から級長をつゞけ、女學校でも優等だつたが、殊に習字と作文は得意だつた。その能書といふ二字が、少からず彼女の心に媚びた。

たゞ、女事務員としての過去の苦い經驗が、かすかに二の足を踏ませようとするのであつた。

生れつき自分が醜いといふ事それから一切の不幸が起るのであつた。弟はきりやうよしの母親に似て、すらりとした體つきから、引締つた顏立まで、人にすぐれた方なのに、富美子は死んだ父親に似て、その惡い特徴をそつくりうけついで居た。日本人には珍しい程色が白いといふ事も、ちつとも取得にはならなかつた。眞四角に拔上つた生際、はれぼつたい眼、幅廣く開いた鼻、殊に下脣の方がつき出て居て、しかも引くりかへしたやうに厚ぼつたいのが、冴々と紅かつた。色の白いのと脣のすぐれて紅いのが、ふきりやうな女を淫猥に見せた。

或省の屬官をして居た好人物の父親は、晩酌のおしきせですつかり醉つてしまふと、まだちひさかつた姉弟を前にして、

「何故女の子が俺に似てくれたんだらう。」

とか、

「あいにくなもので、男の子の方が人並の面をして居る。」

などゝ、愼みの無い事を云つた。母親はふきりやうの娘に同情して居たけれど、内心は矢張り可愛らしい顏つきで、性質も素直な欣一の方がいとしかつた。

富美子は、自分でも、子供心に深くふきりやうを悲しく思つた。級長として、免狀式の總代になつたりする時も、純粹には喜べなかつた。學問なんか出來なくても、可愛らしい顏立に生れて來た方がよかつたといふやうな、やるせない心持を起したものであつた。

最初勤めた商店では、もう一人ゐた同僚が、さほど美人といふのでも無かつたが、若い店員の間で騷がれるのに引かへて、自分の事を小僧迄が、かげではブスケ、ブスケと呼ぶのを知つて、つくづくいやになつたのであつた。

「おい金どん、ブスケつてなんの事だい。」

「知らないよ、そんな事。江川さんにきいてごらん。」

年下のいたづら盛りの小僧達は、しまひにはあからさまに、そんな事を云つてからかつた。富美子は人しれず口惜涙を流して居たが、たうとう辛抱出來なくなつてやめてしまつた。

次に行つた貯蓄銀行の方は、流石にさういふはした無い事を云ふ者は無かつたけれど、多勢居る女事務員は、みんな派手なみなりをして、若い行員と遊戲のやうな戀を樂しんでゐたが、富美子には見て居られなかつた。そろばんと字の達者といふので、外の者よりも給料もよかつたから、足かけ四年間我慢したが、恰度去年の夏、創立十五年のお祝があつて、頭取の玉川の別莊で、行

員全部が假裝會をする事になり、女事務員はお揃の島田に結つて、赤前垂で模擬店の給仕になるといふ趣向だつた。みんなお祭氣分ではしやいで居たが、富美子はどうしても島田になんか結ふ氣になれなかつた。そんな催し迄が、自分一人を嘲弄する爲めにたくらまれたもの丶やうに考へられた。さんざん一人で口惜しがつたあげくに、家事の都合をいひ立てに、突然退職願書を出してしまつた。祝賀會だけに顏を出さないで濟ませるといふやうな、妥協的な心持には、その時はどうしてもなれなかつた。

何故やめたのかと心配して訊く母親をうるさがつて、富美子は苛々して居たが、母親にして見ると、何か娘の身の上になみなみならぬ事でも起きたのではないかと云ふ不安から、ついつい執拗く訊いて見度くなる。しまひには、富美子は泣聲を出して母親に當りちらした。

「別に理由なんて無いつて云つてるんぢやありませんか。あたしがいやになつたからやめたんです。いやになつてやめて惡いんですか。」

母はヒステリ性の興奮できんきん叫ぶ娘の權幕に辟易して、それつきり口をつぐんでしまつた。けれども、働手が一人減つたと云ふ事は、事毎に痛切に思はれて、いくら控へようと思つても、つい愚痴になり度がる。母親としては、どんな事があつても娘と息子の間にわけへだてをしては

ならないと、自身を戒めてゐるのだが、娘の方ではつまらない事に迄ひがんで、失職後の自分に對する母親の態度が著しく變つたやうに邪推した。

「あゝ、いやだいやだ。また會社づとめをしなければならない身の上なのか。」

と考へて、富美子は泣くよりも苦しいおもひに惱んで居たのであつた。

兎も角も大正商事株式會社といふのに行つて見ようと心をきめて、長火鉢にへばりついて居た重たい體を無理に起して、奥の八疊に行つた。其處はこの家の座敷でもあり、欣一の勉強部屋でもあり、又親子三人の寢部屋でもあつた。富美子は弟の机にむかつて、履歴書を認めた。能書といふ資格の與へられて居る滿足に、三枚まで書いて並べて比較した上で一枚を撰び、着物を着換へた。縞物の銘仙に、流行遅れの色氣の金紗縮緬の羽織を着て、もう一度鏡臺にむかつて紙白粉で一撫で撫でた。

「お母さん、一寸出て來ますよ。」

と聲をかけると、

「どちらへ。」

と洗物の手を止めてきいた。

「一寸其處いら迄。」

さう云つて、逃げるやうに下駄を出して、格子の外に出た。

此の路地の奥では一番立派な新しい二階家に、此頃引越して來た何處かの妾だといふ女が、蒲團の干してある緣側の欄干にもたれかゝつて見下して居た。綺麗に結ひ上げた丸髷のよく似合ふゆたかな顏をちらと見上げたばかりで、富美子はみすぼらしい自分のみなりと、醜い容貌を恥ぢながら、憎惡の念でいつぱいになつて、かたかた溝板を鳴らしながら往來に出た。

二

「あのう、こちらで女事務員を御採用になりますんでせうか。實は今朝の新聞で拜見しましたのですが……」

大正商事株式會社の受附で、金釦の制服を着た白い髯の老人に、富美子は叮嚀に頭を下げた。目鏡越にじろじろ見ながら、老人はさも面倒臭さうに奥の廊下の方を指して、

「履歴書を持つて居るなら、あすこの應接室で待つて居て下さい。」

と答へて、直ぐに又今まで讀んで居た新聞を取上げた。

應接室に入つて行くと、中には七八人の若い女が、みんなとりすました容體で椅子にかけて居た。富美子は輕く頭を下げて、もう空椅子はひとつも無いので、壁に背中をむけて立つて居なければならなかつた。たしかに此室に集つて居る者は、自分と同じ應募者に違ひ無いと思ふと、誰も彼も、さもお互に見ないやうなふりをして、ちらちら好奇の視線を投合つて居るのがあさましかつた。殊に後からはひつて行つた富美子は、一人だけ立つて居るので、一層衆目を集める位置に在つた。それが本人にして見ると、自分の容姿のひけめを年中考へて居るだけ、人々の見る眼を惡意のものと感じて居た。

間もなく、五十恰好のでつぷり肥つた男が、威儀をつくろつた樣子ではひつて來た。

「大層お待たせ致しました。」

何處かの地方の訛のある重たい調子で挨拶した。

「最初にはつきりお斷りして置きますのは、此の會社では今日迄婦人の事務員を使つた事がありません。今度が始めてなのです。それで、先づ試みに五名を限つて採用しまして、成績がよかつたら更に增員する。つまり貴方がたの成績が優秀で、婦人も能率上男子に劣らないと云ふ事を確めれば、大に婦人を歡迎し、課長にもする、支配人にもする、やがては重役にもする——と云つ

たわけでして、貴方がたの責任は極めて重大なのであります。」

いやに氣取つた態度とものいひで、しかも誰も豫期しない途方もない愛嬌を振りまいて、先づ自分自身が滿足さうに笑つた。女の人も笑つた。

「いや、ほんとなのです。そこで其の人選も餘程嚴密に致さなければならないのですが、別段メンタル・テストをやつて見ようといふのでも無く、第一の資格としては健康である事、第二には能書――字の上手ですね。その上に慾張れば、そろばんが達者ならば申分ありません。たぶん皆樣は此の條件を備へ、更に多くの他の條件をも備へてゐらつしやる事と思ひますが、何分採用人員は只今申上げた通り五名限りなので、此處にお集りの方、及びこれからお出でになる方の中から、その人數だけを選び、他のお方はお斷りしなければならないのを遺憾に存じます。恐らく、みなさんには甲乙を區別する事が出來まいと思ひますので、或は籤引でゞもきめなければなるまいかとも考へて居ります。」

もう一度みんなを笑はせて、

「それでは先着の方から順々に、次の室へ御出で下さい。」

と云つて、中の一人の立上るのを見ると、先に立つて室の外に出て行つた。後に殘つた者は、

互に顔を見合せて忍び笑をした。

暫時たつて、最初に次の室へ行つた女が扉口に顔を出した。

「お次の方にお出で下さいましつて。」

いひ捨てゝ行つてしまつた。面會の濟んだ者は、どんどん歸つて行くのであつた。二番目の人が立つて行き、又その人が三番目の人を呼んで、段々順番は廻つて來た。其の間にも後から新參の者が三人四人とふえ、八番目の江川富美子が呼ばれて行く時には、それより後に來た人數が、それより前に來て居た者よりも多かつた。こんなに澤山の應募者の中から、僅かに五人しかとらないと云ふ事を考へると不安だつた。

富美子は、駄洒落好らしい試驗員の先刻の挨拶が、何となく人を愚にして居るやうでいやだつたが、それでも五人の中の一人に選ばれ度いといふ競爭心は持つて居た。

次の室に入つて行くと、試驗員は卓子に肱をついて、わざとつくつた笑顔で迎へた。

「さあ、おかけなさい。履歴書を拜見しませう。」

さういつて椅子を勸めた。富美子は帶の間にしまつて置いた履歴書を取出した。

「はゝあ、見事な筆蹟ですな。失禮ですが、貴方の自筆でせうね。代筆ではありますまいね。」

仔細らしく一人で頷きながら、鋭い目で富美子を觀察してゐた。
「えゝと、本籍は麴町區九丁目、江戸子ですね。現住所右に同じか。平民戸主欣一姉……これは、お父さんはなくなつたのですか。」
「五年前になくなりました。」
「それで此の弟さんは。」
「役所に給仕をして居ります。」
何も恥るには及ばないと思ひながら、つい顏があかくなるのであつた。時々往來で昔の學校友達に逢つても、自分が事務員になつて居るといふ事を、かくして居たのと同じ心持だつた。
「年齡は。」
「二十三で御座います。」
「此の履歷書を拜見しますと、事務員としての經驗があるやうですが、大吉商店といふのはどういふ理由でやめました。」
「個人商店よりも會社か銀行の方がいゝと思ひましたので……」
「それでは關東貯蓄銀行の方は。」

「それは、あの……」

退職の直接の原因があまり並外れて居るので、富美子はどぎまぎして、一層顔が上氣するのを感じた。

「風儀が面白く御座いませんものですから……」

やつとのおもひで答へたが、相手は容赦なくたゝみかけて來た。

「風儀が面白くないといふと、どういふのです。」

意地惡くも、面白づくのやうにも聞えるのであつた。

「いろんな噂が御座いますものですから……」

あいまいな事を云つて口をつぐんだ。なほ執拗く訊くやうなら、もうこんな會社になんか雇つて貰はなくてもいゝと云ふやうな腹立たしさを感じて居た。その氣ぶりを先方も覺つたのであらう、

「わかりました。」

と大きな聲で云つた。

「そこで第一には健康だが、男子の社員だと一々裸體にして健康診斷をするのですけれども、婦

人は迷惑だらうとお察しして、御自分で健康だと證明してくれゝば、それで十分です。別段持病はありませんか。頭痛がするとか、よくお腹が痛むとか。」
肉體の事を訊くのが特別の興味らしく思はれた。
「別に持病は御座いません。めつたに風邪を引いた事もありません位で……」
「滿點です。」
わざとらしい大げさで、とんと卓を叩いた。
「但し先刻も申上げた通り、僅かに五名しか採用しないので、多勢の滿點の中から籤引ででもきめる外ありませんから、必ず來て頂けるとは申せないが、兎も角御參考迄に私共の方の條件を御話して置きませう。先づ勤務時間は午前九時から午後四時まで、給料は日給で、或は他所よりも少々低いかもしれないが、初任給九十錢、賞與はその年度の營業狀態如何によつてきまるのです。尤も男子と同率にする積りです。此の條件では不滿足だといふ方は、遺憾ながら御緣が無いのだと思つて貰ひます。」
たてつゞけに喋るのが少からず得意らしく、一息でいひ切つて、心地よささうに椅子の背によりかゝつた。

富美子は日給九十錢といふのだけが、あまりに自分の豫期をうら切つて居るので、きゝ流す事が出來なかつた。給料の事を兎や角いふのはみつともないとも思つたが、

「朝は九時からで御座いますか。」

と先づ遠廻しに話を持つて行つた。

「さうです。そして夕方は四時です。吾々は忙しくなると夜業もしなければならないが、婦人は四時になつたら歸つて構はない事にしようと思つてゐます。」

「それで給料は月給ではないので御座いませうか。」

「日給です。月給說もありましたが、どうも婦人を雇つた經驗がないので、若し月給にして休みが多くては困ると思つて、最初は日給としました。なあに皆さんの働き次第で如何やうにでも直します。」

「で、最初は九十錢なので御座いますね。」

富美子はやつとのおもひで本題に入る事が出來た。

「さうです。少し低いやうだけれど、矢張り成績次第でどしどし上る積りです。貴方が前に勤めてゐた關東貯畜ではどの位出しました。」

「最初は矢張り九十錢で御座いましたが、やめます時は一圓三十錢頂いて居りました。」
「ふうむ、それはなかなかよござんすね。私の方は何分試驗同樣に採用するのですから、最初は我慢して貰はなくてはなりません。いづれ改善の時期は來るんだから。」
富美子はかなり不滿だつたが、話はそれで打切つた。今日迄曾て女事務員を雇つた事の無いといふのが、何となく氣樂な氣がした。意地の惡い同性の古參者にいやなおもひをさせられない丈でも結構だ。若し雇つてくれるものなら雇つて貰ひ度いと思つた。
「それでは、御採用下さるかどうかおきまりになりましたらお知らせ願へるので御座いませうか。」
「えゝ、明日か明後日、迅速に御返事します。通知をあげる其の日からでも出勤して貰ふ積りですから。」
「何分よろしく御願ひ致します。」
「やあ、又お目にかゝる機會もありませう。では次の人に來るやうに云つて下さい。」
富美子は叮嚀に頭を下げて、先刻(さつき)の第一應接室に戻つてみると、其處には又十人ばかりの若い女が順番を待つて居た。

「どなたか、お次の方にいらつしやるやうにつて……」

さう云つて置いて、自分は受附の白い髯の老人の前を通つておもてに出た。たつた五人の中にえらばれるか、はねられるか、張合のある期待と、不安とが、久しく退屈して居た胸の中に動いて居るのを感じた。

三

時折母親からそれとなく勸められても、もう二度と會社勤めなんかしないと不機嫌にいひ切つた手前もあるし、萬一不採用の場合の不面目も考へられるので、大正商事株式會社の事務員を希望して面會に行つた事は、うちに歸つても知らせなかつた。

採否の通知は明日にも來るやうな試驗員の話だつたが、三日たつても四日たつても來なかつた。妙にすべつこく、鮪のやうな血色の無髯の試驗員の顏を、富美子は始終目の前に見るやうに思ひながら、苛々して居た。かうまで返事の遲いところから想像すると、駄目だつたのかとも考へられる。十の八迄駄目に違ひ無いと思ふと、殘念で堪らなかつた。給料の安いのは、自分を安く見くびられて居るやうで面白くなかつたけれど、前の勤先の貯蓄銀行に比べて、何となく大樣で、

おちついた有様が好ましかつた。銀行の方は、取引をする多勢の預金者の前に、一日にさらされる廣い事務室で、夏の暑い頃は、額から鼻の頭にかけて玉の汗を流し、白粉の斑にはげた顔を見られるのがいやだつた。大正商事の方は、一寸見たところ、別段多くの人の目に觸れる所で執務して居るのではなささうだし、澤山のお客に直接接しる事もなささうなのが、自分のきりやうの悪い事を、年中肩身狹く思つて居る富美子にとつては、救はれるやうな心持を起させるのであつた。

四五日過ぎても何の通知も無いので、到底望みはないものとあきらめて、又町角の本屋で新聞を買つて來て、職業欄を見るやうになつた。保險會社だの無盡會社だのの廣告が並んでゐるけれど、どうも此間の大正商事の廣告のやうには心を引かなかつた。樂しくない日を送つて居ると、七日目に會社名の刷込んである粗末な封書が屆いた。

拜啓貴下當會社へ就職御希望の趣御申出に接し候に就ては詮議の結果日給九十錢にて採用可致決定致候間速かに御出社相成度此段御通知申上候

富美子は其の手紙を繰返して讀んで安心した。

「お母さん、あたし又働いて見ようと思ふのよ。」

長火鉢の向ふと此方で、氣まづい顏をして居たのが、其の手紙を讀み了ると晴々した氣持になつた。

「さうかい。それは結構だね。」

うまさうに煙草を吸つて居た母親は、ゆるくたちのぼる煙の末を見てゐたが、思ひもかけない顏つきで娘の方を見た。

「給料は惡いんですけれど、堅さうな會社だから行つて見ようかと思ふの。」

「お給金なんかいくらでもいゝぢやないか。遊んでるよりかどの位いゝかしれやあしない。」

娘が差出して見せる手紙を讀んで、母親もすつかり喜んでしまつた。

「あらまあ、もう勤め先迄きまつてるのかい。なんの相談もないものだから、あたしはちつとも知らなかつた。何にしても御目出度いから、今晩はお母さんが鰻丼でもおごらうかしら。」

勤めに行かなくなつてから、始終不機嫌な娘の樣子にくさくさして居たところなので、その面白くない氣持から救はれるだけでも結構だつた。

あんまり喜ばれて、惡くない氣持でてれて居る娘の樣子を見ながら、母親は一倍うまさうに、新しく一筋の煙を鼻の穴から立上らせた。

四

大正商事株式會社では五人の女事務員を雇入れた。井村芳枝、城川秀子、野邊地涼子、高岡仙子、江川富美子の名札が、受附の老人の背後の壁の末端に掲げられた。

最初の日には、此間の試驗員――庶務人事課長篠原恭平から、會社の內規や、社員の心得をきかされた。

「えゝ、みなさんと此處に再び御目にかゝる事を得たのは、私の甚だ滿足するところであります。應募者は二十餘名にのぼりましたが、熟考の末あなたがた五人に來て頂く事になりました。過日も申上げた通り我社では、婦人の事務員を採用した事は曾て無かつたのですが、今日から萬綠叢中に紅數點を加へたわけです。どうぞ吾々同僚と共に、社業を助けて頂き度い。別段くどい事は申しません。勤勉、誠實、それにもひとつおまけに品行方正、たゞそれだけです。但し、社內にも若い男子が澤山ゐますから、多少の御用心も必要でせう。」

課長は先づ自分から笑つて見せて、若い女達の笑聲を誘つた。

お互に女同志の生れながらの競爭心と嫉妬心で、じろじろ相手を盜み見てゐた五人は、一々初

對面の挨拶をして、それから課長の案内で、所屬の課に連れて行かれた。井村と城川と江川は簿記會計課、野邊地と高岡は調査課の仕事をする事になつた。

富美子達が篠原につれられて入つて行くと、忙しさうにそろばんを彈いて居た者も、一齊に手を止めて、机の上にうつむけて居た顏をあげた。呼吸器の惡さうな蒼黑い顏をした會計課長は、二言三言篠原がさゝやくと、にやりと笑つて新入の女達の方を見た。

「皆さん、御紹介致します。」

篠原は人の惡い微笑を浮べて、

「こちらに居られる三人の婦人は、今日から入社された方々で、井村芳枝さん、次が城川秀子さん、それから江川富美子さんです。」

と紹介した。好奇心に輝く男性の目が、一齊に三人の上にそゝがれた。中には隣同志さゝやきかはして居るのもあつた。次の室との間の開閉扉があけ放しになつて居る向ふでは、外の二人の女が、既にめいめいの机と椅子を貰つて、固くなつて坐つて居るのが見えた。そつちの男の社員で、無遠慮に此方をのぞいて居るのもあつた。新參の女はあかくなつて頭を下げた。

「まあ、暫時其處で仕事振を見物して居て下さい。」

咽喉の弱さうな簿記會計課長は、嗄(しやが)れた聲でさう云つて、三人の爲めに用意してある椅子を指した。そのまゝ忙しさうに大きな帳面を開いて、せかせかと細かい文字を記入し始めた。若い社員もめいめいの働き振を見せる氣になつて、眞面目に事務にとりかゝつた。新參の女の存在の爲めに、息苦しい程緊張した樣子が室内に漲つた。

同時に入社したといふ事と、外に女がゐないので、五人は直ぐに一團になつてしまつた。晝の食事は地下室の廣い食堂で、會社專屬の賄(まかなひ)が一食十五錢均一で引受けて居て、社長や支配人は姿を見せないけれど、課長以下は一緒に食べる事になつて居た。新入の女事務員も、その一隅の卓を圍んで、多數の社員に注目されて居るのを感じながら、一皿の豚のカツレツと、丼に盛切りの御飯を食べた。

食後は、一時迄自由の時間になつてゐる。煙草をふかしながら日比谷公園や宮城前の廣場まで散歩に行く者もあり、裏の空地の物置場で無駄話をして居る者もあり、食堂の隣の新聞雜誌閲覽室でお茶を飲みながら何か讀んだり喋つたりして居る者もあつた。五人の女は、男のゐる所を避けて、廊下に立つて話をしてゐた。未だお互に遠慮はとれないのであつたが、いとゑに著しい田舍訛りのこびりついて居る高岡仙子は、一番飾氣のない態度で口をきいた。年齡(とし)も上だつた。

「お辨當は十五錢なら高くはないわね。」

と正直に云つたのも此の女だつた。外の者は意外の無遠慮な言葉にびつくりして、顏を見合つて笑つた。

「だけど隨分あぶら臭かつたぢやありませんか。」

一番年下の、耳かくしの井村芳枝は、頬紅をさした厚化粧の顏を、物言ふ度に傾ける癖を見せて、濃い眉毛を寄せた。あんな安辨當に感心してをかしいわといひ度いやうな表情だつた。その心持を察して、みんなは又笑つた。

そんなつまらない話が出て、さもをかしくて堪らないといふやうに笑ふ度に、一度々々初對面のわだかまりは解けて行くのであつた。お互に仲よく一致團結して、將來力になり合はうと誓つた。

女の社員が採用されたと云ふ事實は、社内一般に活氣を呈した。丸の内いつたい、何處の會社でも夙くから澤山の女を使つてゐるのに、自分達の方だけが舊弊な事を云つて雇はないのは、若手の社員には少からず不平だつた。女を使ふ方が經濟的だといふ表面の理由を述べる者も、内心は社内に色彩が欲しいのであつた。近所の會社のひけ時に、男女の社員が待合せるともなく待合

せて、一緒に話しながら歸つて行く姿は、彼等にとつて妬ましくも羨ましいものであつた。藝者はブルヂョアの相手で、安月給取の手は屆かない。カフヱに行つても金がかゝる。一番安上りで、且最も親しみ易く、てつとり早く面白いめのみられるのは職業婦人に限る。むかしならばいたづら事とけなされる事も、今は戀愛の自由とよばれて若い者の特權のやうに思ひなされて居る。永年つゝしみ深く育つて來た女も、俄に男同樣に出步くやうになると、一足飛に放縱になつて、實はもともと情事にかけては男よりも熱烈なのだから、自由戀愛を享樂する思想は、何の苦もなく一般的になつた。男の方から持ちかけて行く迄もない位の有樣だから、さういふ連中を手近に持たない事は、大正商事の社員にとつて、何よりも殘念な事だつた。

それが、突然若い女が入社したと云ふのだから、數十人の若い社員は、一樣に或種の希望を胸に描き、少し年をとつた連中さへ、面白づくの興味で夢中だつた。

「おい、ちつとはいゝのが居るかい。」

「とても素敵なのが居るぞ。會計の方に二人、調査に一人、ありやあたしかにシャンだ。」

「篠原さんが試驗委員で選拔したんださうだ。その標準が面白いや。これが最初の女事務員で、どんなのがいゝか見當がつかないから、一等美人を三人と、一番まづいのを二人とつたんださう

だ。」

「ひでえいたづらをしやがるなあ。」

「あいつ、とても不良老年だからね。」

裏の空地に集つてゐる連中は、しきりに噂をしてふざけて居た。

「菅田君、君の方には三人はひつたのかい。」

「うまくやつてやがるなあ。前祝でもやれよ。」

會計課にゐる私立大學の專門部出の男は、冷かされて赤面しながら、にやにや笑つて居る。

「馬鹿、嬉しがつてやがら。」

いきなり背中をどやしつけた者があつたので、一齊にどつと笑つた。

「隨分みつともないのも居るよ。鳥羽さんの隣にゐるのと、その次のは實際シヤンだけれど、僕の直ぐ前に居る奴と來たら、とてもひでえんだ。江川富美子なんて乙な名前なんだけれど、あいつは不美子だ。」

空(くう)に手を差延して不の字を描いて見せた。

「あゝ、あの一番肥つてるのかい。あいつはひどいなあ。」

「とつても。」
青田は力をこめて云つた。
「ぜいたく云つてやがら。あれだつて女だぞ。」
「それがどうしたんだい。」
「ゐないよりはましだらうぢやないか。」
もう一度みんなは聲を揃へて笑つた。

## 五

五日十日たつうちに、女同志はお互に氣心を知合つて、仲のいゝのも惡いのも、すべてがはつきりして來た。男の社員も同じ課に居る者は、仕事を教へるのをいゝしほにして、親切な人とか、面白い人とか、氣の置けない人とかいふ特徴を、早く認めて貰はうと思つて、人前の具合の惡さなんかものともせず、一度でも多く口をきゝ、少しでも身近に接近しようとあせる色が露骨になつて來た。敏感な女の方では、直ぐに男の方の心を讀んでしまつた。
「あたしあの鳥羽さんて人、なんだか氣味が惡いわ。何か仕事の事で用のある時なんか、女より

も叮嚀な言葉で、とても變よ。」

女學校を出たばかりの井村芳枝は、あけすけに物を言ふ質だつた。身の輕さうな姿で、一寸見には活動寫眞の女優のやうな派手づくりのおきやんだつた。請負師の娘で、ぜいたくに我儘に育てられてゐたのだが、父親が失敗したあげくに死んでしまつたので、半分はやけになり、滿足な支度をして嫁にも行けないのだから、いつそ職業婦人として身を立てようといふ氣になつたのである。其の決心が、自分ながら悲壯に感じられ、又現代の新しい女性の踏むべき道だと考へて滿足してゐた。

「男の社員なんてみんなそんなものよ。先にあたしの行つた保險會社なんか、隨分ひどかつたわ。課長の白髮まじりのおぢいさん迄、いやらしい事をいふんですもの。」

貯金局に居た事もあるし、百貨店に居た事もあるし、火災保險會社に居た事もあるといふ城川は、それが世の中なのだといふやうな顏つきだつた。

「さうを、あんたなんかシヤンだから大騷ぎされたでせう。」

「いやな高岡さん。知らないわよ。」

輪郭からいへば希臘型の上品な顏立ちでゐながら、ぐらぐら漂つて居るやうな濡色の瞳が、お

そろしく艶めかしく、ふだんはしつかり結んだ脣だが、笑ふとみそつぱの見えるのも、かへつて男の心を引く特徴となる。淫婦型だと負惜みに惡口をいふ者もあるが、何と云つても第一の美人として衆目をひくのが城川だつた。萬事に世馴れたものごしで、みなりのいゝのと、きりやうがよすぎるのと、男達が御機嫌を取るのが片腹いたく、外の女は此の一人を好かなかつた。

男の方の話といへば、新しく來た女事務員の事にきまつてゐるのと同じく、女の方も稍遠廻しではあるが、矢張り社内の男の噂が話材となつた。さう云ふ話の出る時は、きりやうのよしあしで、めいめいの胸の中には、それぞれ違ふ男性觀が、光と影をつくるのであつた。城川は、自分は人に勝れた美人で、男といふ男は必ず好意を持つものと思つてゐたし、既に男性の弱點をすつかり知りつくして居るので、男なんてそんなものだといふ極めてこだはりの無い心持を持つてゐた。馬鹿にしながら、からかつても、からかはれても見たかつた。新しい方の型を代表する井村は未だ十八で、小說や芝居や活動寫眞ではぐくまれたロマンテイツクな戀愛の到る所に發見される世の中だと空想して居た。男女の間の事なども、好奇心をもつて觀察し、自分の身に起る場合も待兼るやうな心持で想像してゐた。優しい、女らしい女と一口にいへばいへる、稍寂しい風情のある野邊地涼子は、何時も默つて人の話を聽いてゐたが、自分では自分の見る男性が、他の人

とは違ふ——男は女にとつては極めて甘いくせに、どうも始末の悪いものだと考へてゐた。その三人はきりやうのいゝ方であるが、他の二人は不きりやうだつた。高岡は年もとつてゐたし、自分の容貌のよくない事も知つてゐるが、男なんてものは、こつちからのしむけ次第で、どうにでもあやつれるものだと、馬鹿にしてかゝつて居た。富美子は其の中で、たつた一人のモオラリストだつた。男の話なんかするだけでも顔があかくなつた。しかしそれは、何といつても生れついての不きりやうの爲めであつたらう。外の者が浮いた話をしてゐるのを、忌々しく思ふ心の底に、一種の嫉妬のある事を、自分でも氣が付いては心を責めて居た。

　そんな心持があつてはならないと思ひながら、男の社員がみつともない程手を盡して氣に入られようとする城川の、自分の容姿に滿足しきつたおもひあがつた様子を見ると憎らしかつた。何か落度があつてくれゝばいゝと願ふ心さへあつた。自然城川と一番仲の悪い井村と親しさを増す事になつた。

　井村は四谷に住んで居て、歸途も同じだつた。直ぐに電車に乗る事もあつたが、時々は日比谷公園を歩き廻つたり、お堀の土手の柳の蔭を、話しながら歩いて居るうちに、櫻田門から三宅坂にかゝり、ついでに自宅まで歩き通してしまふ事もあつた。春から夏へなりかゝる頃の、いきい

きした肉體は少しでも多く運動し度がつてゐるのであつた。
生來無口の上に、自分のふきりやうな事を知つて、萬事に控目になる結果、いつも晴々した氣持になり切れない富美子は、早口のお喋りの井村にとつて、いゝ聽手だつた。小粒ながらも氣の勝つた井村は、自分が話をしてゐる最中に、他人に横から口を出されるのが嫌ひだつたから、何を云つても默つて聽いて居る相手が一番よかつた。
井村は所謂文學少女だつた。少女雜誌の投書家として、短い感想文などを書いて居たのが、此頃は小說家になりたいと熱望して居た。閨秀作家として名前の出る日の事を、はなばなしく空想しながら、既に三つ四つ短篇も試みて見た。そんな話も、一脈の得意の色と、正直な情熱を加へて話した。
「あたしね、誰か文壇の一流の人に見て貰はうと思つて居るのよ。けれども、文士なんてみんな品行が惡いからいけないつて、お母さんが許さないの。あたしのお母さんと來たら、とつても古いんですからねえ。だけど、中桐さんなら品行のいゝ方だつて評判だから、構はないと思つて、御手紙差上げたのよ。ところが御返事が無いの。隨分ひどいと思つてゐたら、あたしが手紙を出した恰度其の日に、人妻と心中してしまつたんですもの。品行がいゝなんて嘘だつたんだわ。

すれつからしのやうな、無邪氣のやうな口のきゝ方で、井村は頻に文人の噂をした。

富美子は別段文學好(すき)といふ側(かは)では無かつたが、矢張り中桐義人の小説や感想文には感激して居た。直き近所に其の人の住居があつたので、いかめしい門の前を、わざわざ通(とほ)つて見た事もあつた。づつしりと重たい大きな邸宅の中に、あの優しい人情脆い作者が居るのかと、新聞や雜誌の口繪で見た作者の面影をなつかしく想像した事もあつた。ふきりやうな女に有勝(ありがち)の、戀愛をけがらはしいと思ふ一方に、若し神聖な戀愛ならば其(それ)以上尊いものはないと云ふやうな空漠な考へを持つてゐて、その作者が夫人を失ひ、愛兒をかゝへて禁慾生活を送つて居るといふ事に、すつかり參つてゐたのであつた。それが、姦通がばれて情死したと聞いた時は、これ程の人さへ汚い根性を持つて居るのかと、つくづくなさけなくなつた。世の中の光明が、全く消えた氣持で、涙に胸が迫つた位である。井村の話をきくと、今更中桐義人にあざむかれたやうな心持も起きた。

「あたしも中桐さんのものだけは隨分讀んだわ。あんな間違つた事をなさる人だとは思はなかつたんですもの。」

「女性を裏切つたんだわ。あたし達の學校では、口惜しがつて泣いた人が隨分あつてよ。けれども藝術家の生活は、絶對に自由でなくてはならないやうな氣もするわねえ。」

あく迄も道德的な富美子とは違つて、井村は、はつきりした觀念を持つて居るわけでは無かつたけれど、藝術とか、戀愛とか、自由とかいふ憧憬の對象にむかつて、あらゆる事を許してもいいやうに考へる時もあるのであつた。

## 六

あざやかな日光と、爽かな空氣が、めきめき初夏の色を加へて來ると、人間の顏色までも、野蠻といひ度い位いきいきして來る。單純で強烈な色彩の着物や日傘が、丸の内の景色をつくり出した。俄に洋裝の女が殖えた。貧弱な體の線があからさまになり、足の形の畸形的に曲つたのも一向頓着なく、人波を分けて行くのも、そのあたり一帶の朝夕の特殊の景色だつた。

大正商事株式會社でも、高岡仙子はお手製の洋服で、櫻ン坊のこしらへ物のくつついて居る帽子をかぶつて來た。それが又社內の噂の種になつた。誰が聽込んで來たのか、高岡は茨城の小學校の先生をして居た時、宿直室で男教員と密會して居るところを校長に發見されて、追放されたのだと云ふ蔭口が廣まつた。男の社員と一番先に親しい口をきくやうになつたのは此の女だつた。男の方でも、美しい方よりも口がきゝいゝので、最後の目的は外にあるのだが、其處に近づく第

一段として高岡を利用した。その內實の心持も、高岡はよく知り拔いて居た。
「あんた達、みんな用心しないといけませんよ。男なんて、ほんとに意地が汚いんだからね。あたしなんか、もうこりこりしちやつた。」
悍氣もなく云ひ放つて、男性的な口のきゝ方や、ざつくばらんの態度をほこりとして居た。その癖男に對しては、存外色氣のある樣子で、顏立のいゝ給仕をつかまへて、しつつこくからかつたり、肩に手をかけたり、後から忍び寄つて目かくしをしたりした。
男女の社員間に、何か間違ひが起りはしないかと云ふ事は、會社の重役や支配人の、一番心配して居る所であつた。庶務人事課長の篠原は、元來女好きなので、そんな事には神經をいためない質なのだが、職務上默つてゐられないので、萬一何かしでかされては大變だといふ心配を、面白づくとも取れる樣子で、年中觸廻つてゐた。
最初の出來事は、一番年の若い井村芳枝にふりかゝつて來た。食後の時間を、例によつて廊下の一隅で喋つてゐる時、
「あたしの机の抽出にね、こんなものがはひつて居たのよ。」
井村は持前のすれつからしなのか、無邪氣なのかわからない樣子で、帶の間から、女學生仲間

で使ひさうな桃色地に紅く撫子の花を染め出した封筒を取出して見せた。
「あら、レタアね。」
レタアといへば、普通の手紙とは意味の違ふものと考へて居る連中だから、忽ち四方から手を出したが、素早く奪ひ取つたのは高岡だつた。
井村さん！
あなたのいきいきした聲、動作、それは小鳥のやうに輕快です。彼のメリイ・ピツクフオードを生みたる國の山に野に森に林に囀る駒鳥にたとへませう。
おゝロビンよ。
井村さん！
あなたのチヤアミングな花のかんばせを何にたとへませう。櫻や梅は舊式で、現代の吾々の心をとらへる力がありません。白百合は寂し過ぎます。菫？　それも月並です。おゝ、姿優しく匂濃きカアネーシヨン！　勿論色はピンクです。私はあなたをカアネーシヨンの君と呼びませう。
さらばカアネーシヨンの君よ！　御覽なさい、此の初夏の空を。鳥も獸も蟲も樹も草も、生

の歡喜に血を湧かせつゝ、造化の妙を讃美して居ます。それは樂しいコオラスです。まして人、まして吾等若く新しき時代の子は、此の人生を心ゆくばかり享樂しなければなりません。それが吾々の特權です。使命です。いざさらば、もろともに歌ひませう。もろともに踊りませう。おゝ、カアネーションの君よ！

いづれまたお手紙差上げます。　若き花守より

「素敵ねえ、詩人だわ。カアネーションの君よ。ラ、、、、、」

高岡は讀上げた手紙を高く差しかざしながら、何の眞似か、片手をカルメン風に腰のうしろにあてゝ、靴のつまさきだけで、輪を描いて歩いて見せた。

「いやあよ、高岡さん。時代遲れな文句だわ。いやみつたらしいつたらないわ。」

井村は手紙を取返して、惜氣もなく破いてまるめて捨てた。

その手紙は誰のしわざだらうと云ふ事は、みんなの頭に浮ぶ興味だつた。輕い嫉妬をまぜて、いろんな人間の顏を、あれかこれかと想ひ出してみた。

富美子は側で見たり聞いたりするだけでも、顏があかくなつた。前に居た貯蓄銀行でも、いろんな事を見聞きしたから、男女間のあさましさは知らない事は無かつたが、一度も自分が體驗し

ない事なので、何時迄たつても、たゞたゞ恥しくばかり思はれるのであつた。未だほんの子供のやうな井村が、なんの羞氣もなく、寧ろ得意さうに人前に手紙を出して見せたのも、それに對する高岡達の面白さうな態度も氣に食はなかつた。どうして斯う世の中の人はみだらな事が好きなのだらうと、腹立たしく思はれるのであつた。

誰の口から漏れたのか、井村の机の抽出に艶書が入つて居たと云ふ事は、直ぐに社内一般の噂になつてしまつた。それがかへつて、若い者の心をそゝつて、一層井村を光り輝くものにしてしまつた。

それから五六日たつた日の夕方、薔薇色に焼けた空の美しさに、井村と富美子はお堀に添つて歩いて歸る約束をした。日比谷の角迄來ると、簿記會計課の次席の鳥羽が、薄色のセルの背廣の脊の高い姿で、細身のステツキを腕にかけて、電車を待つやうな風をして佇んで居るのを見た。

二人が近く迄行くと、鶯茶の中折をとつて、にこにこして挨拶した。

「いやな奴。」

井村は眉をひそめてさゝやきながら、さつさと通り過ぎようとした。

「今御歸り？」

鳥羽はつかつか寄つて來て、井村の前に立ちふさがつた。富美子は何か怖ろしい事が目の前に起るやうな氣がして、思はず知らず擦り抜けて三四間先に行つてしまつた。けれども、友達を捨てゝ行く可き場合で無いと思つて、ふりかへつて見ると、自分と一緒に逃げようとしてゐる井村を追ひかけて、鳥羽は無理に何かを手渡したところだつた。さうして、恰度動き出した電車の方に身をかへすと、小走に追ひついて、手際よく飛乘つた。車掌臺から此方を向いて、もう一度笑顏で帽子をとつて挨拶した。

「いやな奴つたらありやあしない。」

井村も流石に顏を染めて、汗ばんだ額に半巾（ハンケチ）をあてゝまぎらして居た。

「どうして、何か云つて。」

「此間の手紙は讀んでくれたかつていふのよ。あたしも屹度あの人に違ひ無いと思つて居たら、果してさうだつたんだわ。」

「あんた、なんていつたの。」

「破いて捨てたつて云つてやつたわ。さうしたら、又こんなもの寄越して、是非返事を下さいつていふのよ。見て頂戴。」

汗ばんだ手に握らされて居た、此の前と同じ封筒に入つてゐるのを、そのまゝ富美子の目の前に突出した。
「まあ、隨分ね。」
受取る手が震へるやうに感じながら、相手が讀んで見ろといふので開いた。
桃色のカアネーションの君よ。先日差上げた御手紙は御讀み下さつたでせう。私は決して色魔的の男ではありません。靑春の樂しさを、あくまでも享樂する爲めに淸き御交際を求めるのです。詳しい事は御目にかゝつて御話し度いのです。どうぞ私の言葉の眞實さを信じて下さい。そして此の次の日曜に日歸りで稻毛に行きませんか。松林の中の逍遙、海邊のやすらひ――あゝ、それは如何に樂しい事でせう。必ず御返事下さいませ。
「いや、いや、いや――あたし、あんなバナナ見たいな人嫌ひよ。」
井村はだゞつ兒のやうに頭を振つた。
「そんな手紙捨てゝ頂戴。手にするのもけがらはしいわ。」
さういつて、わざと步度を早めて步き出した。富美子は其の手紙を手にしたまゝ、追かけて肩を並べた。

「あたし職業婦人はいやになつちやつたわ。いつそ小說家の御弟子にならうかと思ふの。」

會社員といふもののいやな事を話してゐるうちに、何時の間にか好きな方面に話を引張つて行つて、井村は鳥羽の事なんかけろりと忘れてしまつた樣子だつた。

別れ際に、富美子は處分に困つて懷に入れて置いたのを取出して、

「井村さん、この手紙どうするの。」

と訊いて見た。

「あら、あんたまだ持つてゐたの。うつちやつちまへばいゝのに。」

「だつて……」

「そんならあんたに上げるわよ。」

よく響く聲で笑つて、そのまゝさつさと行つてしまつた。むろん冗談に云つた言葉には違ひないのだが、富美子はすつかり侮辱された氣になつて、目頭が熱くなつた。

再び勤めに出るやうになつてから、親子の間には、氣まづい事がなくなつた。母親は以前の通りいゝ母親だ、稼人(かせぎにん)の娘をいたはり、尊敬するやうになつた。一家の生活の資を働いて得て來る者に對して、貧しい親の感謝は深かつた。一日うちにゐる母親と、一日外にゐる娘とは、何は無

くとも差向ひで夕餉の箸をとるのが樂しかつた。その後では、役所の歸りに夜學に行き、遲く歸つて來て一人で飯を食ふ欣一を待ちながら、母親は好物の煙草をふかし、娘は雜誌などを讀んでゐるならひだつた。

しかし、其の晩は、富美子は胸が穩かでなかつた。一人奧の部屋に入つて、鳥羽が井村に與へた手紙を繰返して讀んで見た。なんといふ臆面のない事だらう。あかるい往來で、女に手紙を渡すなんて。さう思ふ底から、若しか井村が此の手紙に應じて、次の日曜に稻毛に行つたとしたら如何だらうといふ想像もした。人氣のない松林の中を、二人きりで歩く姿から、遂には吾ながら恥かしい場面さへ不覺にも考へた。そんな事を考へる自分をたしなめながら、その考へを振り捨てる事は出來なかつた。人生の樂しさといふのは、そんな男女にのみ惠まれるのでは無いかといふ心持も湧いて來るのであつた。

## 七

鳥羽は商業學校出身で、會社に入つてから未だ三四年にしかならなかつたが、仕事は何をさせても早く、讀み書きそろばんと一口にいふ事務員の資格は立派に備へて居た。長身に、何時も形

の崩れない背廣を着た、人にすぐれた氣取屋だつた。色の白いのと髮の黑いのが自慢で、房々磨くやつを後に撫上げ、素通しの眼鏡をかけた好みが、男同志には氣障としか見えなかつたが、女の中には其の樣子に引きつけられる者もあらうといふ型だつた。井村が「バナナ見たいな男」と云つたのは、色白でつやつやした柔かさうな感じと、太過る鼻の形から來た嘲罵だつた。

此の男が、二度までも井村に手紙をやつた事は、井村自身の口から先づ女の仲間に知れ、それから直ぐに男の中の、斯ういふ方面に鋭い興味を持つて居る連中に知れた。「バナナ」といふあだ名は、忽ち一般的のものとなつた。仕事が冴えて居るので上役のうけはよく、拔擢されて居る位だつたが、その拔擢に對する嫉妬も加はつて、同僚からは氣障な奴、いやみな奴、おべつかつかひ、女たらしといふやうな、あらゆる輕蔑の言葉を浴せられて居た。それでも本人は平氣なもので、畢竟自分の才能が勝れてゐるので妬まれるのだと考へて居た。結局誰ともつきあはない、たつた一人の人間となつてゐた。其處で、彼が厚かましくも女事務員に艷書を送つてはねつけられたと云ふ噂は、最も痛快な事件だつた。時こそ來れと待つて居た連中は、多分の面白づくを加へて、社内の風紀をみだる人間だとして、庶務人事課長の取締の手ぬるさを非難する段取となつた。

「ふうん、あの鳥羽君が井村に手紙をやつたつて。まあ、さう燒くなよ。ものになつたら僕が仲

人になつて夫婦にしてしまふ。この位御目出度い事はありやあしないぜ。」

人に對し、事件に對し、自分の遣口はすべて圓轉滑脫だと自信してゐる篠原は、そらとぼけた様子で答へて、大口を開いて笑つた。

「あの井村なら誰が見たつて惡くない。當節はあゝいふタイプに限るよ。」

相手のたじろいたのを見て、益々得意になつて、更に追擊の一言をもつてした。

その癖、困つた事が持上つたなと、內實は心配して居た。几帳面な支配人は、男女間の間違ひの起る事を嫌つて、長い間女事務員を雇入れなかつた位だから、今度やうやく採用する事になつても、取締は嚴重にしなければならないと、口癖のやうに云つてゐた。篠原にとつては、さゝ自分に責任をしよはされたやうな氣持がして、支配人の命令は迷惑千萬だつた。子供ではあるまいし、いゝ年配の男どもと、それにからかはれ度がつて居る女達を、どういふ風に監督しろといふのだらう。年中見張つて居る事は不可能だし、殊に會社がひけてからの取締なんか出來るものか、さう腹の奥底ではきめてかゝつて居た。他人がくつつかうとくつつくまいと、當人どもの勝手ではないかと、本來の彼の性質もたかをくくらせた。けれども多年の勤人根性から、それが上役の耳に入る事だけが怖かつた。

篠原は誰にも知れないやうに、井村を別室に呼んだ。

「誰か、あなたに妙な手紙を上げた者はありませんか。若しあつたら、私にだけは訴へ出て貰ひ度かつたのです。決してあなたの迷惑になるやうな處置はしない。會社では、社内の風紀を保つ事が第一となつて居るのですから、なまじかくして置くとかへつてよくありません。」

篠原の眼には、井村はまるつきり子供としかうつらなかつた。自分の長女と同年位の小娘を、追つかけ廻す奴が居るのかと思ふと、不思議な氣持がして、特別の興味も湧いて來た。

「誰かゞ手紙を寄越したかつて仰しやるんで御座いますか。」

物を言ふ時に首をかしげる癖を見せて、井村はちつとも臆した色もなく、持前の早口でき丶かへした。

「さうです。若し差支へがなければ、一應拜見したいのですけれど。」

「あら、そんなもの破いてしまひましたわ。何も變つた事なんか書いては御座いませんでしたの。つまらない事なんですの。」

上半身をくねらせながら、袂の先をいぢくつて居る。白粉を濃く塗つた顏の、目のふちから頬へかけて紅をさし、わざと癖をつけて波をうたせた髪で額を狹くした耳かくしの娘の、表情たつ

ぶりの所作を、篠原は面白がつて見て居た。
「一體その手紙を寄越した人間は誰なんです。わかつて居るでせう。」
「いゝえ、わかりませんの。」
「どうしてわからないのです。名前が書いてあつたでせう。」
「名前なんてありませんでしたわ。花守よりと書いてあつたばかりですの。」
「花守より。」
篠原は思はず吹き出しさうになつたが、あやふく堪へた。
「もし何でしたら江川さんに御訊き下さい。あの方がよく御存じですから。」
「いや、それには及びません。たゞ、今後もない事ではありませんから、さういふ場合には直ぐに私に届けて下さい。萬一間違ひでもあつては、あなた方のお父さんやお母さんに申譯がありませんから。」
それで其の場は打切つたが、篠原の好奇心は俄に勢を増して來た。一體此の頃の若い者の艶書といふのはどんなものか、のぞいても見たかつた。ほんとに破いて捨てたかどうかも疑はしかつた。みんなが相手は鳥羽だと云ふのに、當の女がかくして居るのは、かばひ立てする積りなのだ

らうかと考へると、何か探索して見たい欲求が湧いて來るのであつた。いつそ、ぶつつけに烏羽を呼びつけて泥を吐かしてやらうかとも思はないでは無かつたが、それよりも事を荒立てずに、又相手にしても手ごはく無い女の方がいゝと考へて、井村にはその必要は無いと云つたが、矢張り江川富美子を呼ぶ事にした。

「貴方と同じ課に居る井村芳枝さんですね。あの人はどんな人だか御存じですか。」

「どんな方つて、未だ御一緒になつて間も無いものですから……」

何事が起きたのかと胸をとゞろかせながら、相手のけしきをうかゞつて居た。うつかりした返事をして、飛んだ事になつてはならないといふ用心があつた。

「一寸面白くない噂を聞込んだものだから。」

「面白くない噂で御座いますつて。あの方無邪氣な面白い方だと思ひますけれど。」

「なあに詰らない事なんだが、實は彼の人に社内の誰かから附文(つけぶみ)をしたと云ふ話だが、あなたは始終一緒に居る人だから、よく御存じかと思つたのです。その手紙の事は知りませんか。」

「いゝえ、そんな事もありましたやうですけれど……」

「あなたは其の手紙を見たでせう。誰から寄越したかも知つてるでせう。」

たゝみかけて篠原は訊いた。井村を呼出した時は、多少からかふやうな面白さもあつたけれど、此の醜い女に對しては、早く事實を知り度いと思ふばかりで、訊問を樂しむ餘裕が無かつた。

「いゝえ、存じません。」

富美子は一瞬間思ひ迷つたあげく、震へる聲で答へた。どんな事があらうとも、自分の口から彼の人だとはいひますまいと決心した。

「さうですか。知らないのなら仕方がありません。」

すつかり不機嫌になつてしまつた篠原は、自分の方が先に席をたつてしまつた。

若し、もう一歩進めれば、どうしても鳥羽を呼びつける外に途は無かつたが、これとても口を開かなければ手のつけやうはないのだから、暫時様子を見る事にして中止した。此儘うやむやに濟んでくれゝば、かへつて好都合だとも考へられた。

八

社内の者が、一際變な眼つきで自分を見て居る事は、鳥羽自身も夙に氣がついてゐた。けれども、そんな事位平氣だつた。井村に對しては、今迄とちつとも變らない態度で口をきいた。一番

おきやんで、派手好みの、調子の浮々して居る井村こそ、難なく手に入るものと考へて居たのだが、いざぶつかつて見ると、文學好の戀りもので、一寸あたりがつかなくなり、周圍の形勢も不安なので、暫く機會を見る事にした。彼は、間もなく方針をかへて、城川秀子に接近して行つた。

或日、何時も一緒の井村は其の日休んだので、富美子は一人で歸らうと、會社の玄關を出て、次の通の角迄來ると、其處に鳥羽と城川が立話をしてゐた。城川は素早く富美子を見つけて、

「江川さん、あなたも御一緒にいらつしやらない。鳥羽さんがアイス・クリームをおごるつて仰しやるのよ。」

城川は一人で困つてゐた樣子で、富美子の袂をつかまへて放さなかつた。

鳥羽は冷靜な態度を裝つて、強ひて微笑を浮べて居たが、厄介な奴をしよひこんだと云ふ顏色はかくす事が出來なかつた。

「江川さんもいらつしやい。そこいらで冷いものでも飮みませう。」

薄い絹の手袋をはめた細長い手を擧げて、日比谷の方を指しながら、鳥羽もつかつか寄つて來て、口では愛想よく誘ふのであつた。

「ね、江川さん、來て頂戴よ。あたし一人ぢや困るわ。」

甘つたれた樣子で、城川はぴつたり體をくつつけて、富美子の肩に手をかけて步きだした。
「だつてあたし、變だわ。」
男と親しくした經驗のない富美子は、自分の身近に並んで步く鳥羽を憚つて、胸が穩かで無かつた。
「二人一緒なら、何も變な事なんかありはしないわ。」
城川は一層寄添つて、どうしても放さなかつた。男の社員に誘はれて、アイス・クリームを食べに行くのが、嬉しさうに見えた。富美子は往來の人の見る眼もあるので、強ひて拒むわけにも行かず、氣弱く引張られて、やまかん橫町のちひさなカフェに連れて行かれた。
狹いバラツク建の土間の一隅に席を取ると、直ぐに女給が來て、鳥羽とは馴染らしく、椅子の背中に近々ともたれかゝつて、註文をきいた。鳥羽は何かあつらへて置いて、又別に女の耳に口を寄せてさゝやいた。
「いやあな鳥羽さん。覺えてらつしやい。たゞぢやあ濟ませませんよ。」
わざと頓狂な聲で云つて、鳥羽の背中をどやしつけながら、城川と富美子の方に、からかふやうな素早いながしめを投げた。

「アップル・パイお三つ、アイス・クリームお三つ。」

料理場の方に甲高い聲を送つて置いて、帳場の蓄音機にレコオドをかけた。

富美子は斯ういふ場所に足を踏入れた事が無いので、すつかりあがつてしまつた。行儀よく膝に手を置いて、卓子の下の自分の足ばかり見て居た。そんな事には一向構はない鳥羽は、富美子の存在なんか忘れてしまつたやうに、頻に城川に話かけてゐた。音樂は好きかとか、芝居は舊派が好きか新派が好きかとか、活動寫眞は西洋物がいゝか日本物がいゝかとかいふやうな事を、話のために話してゐるのであつた。

「私も日本物は見る氣になりませんよ。伊太利や獨逸の藝術的なのもいゝが、矢張り亞米利加物にはかなひませんね。あなたも西洋物が好きだつていふのは賴母しいや。今度一緒に行きませうか。」

鳥羽は正面から相手の美しい顏に見入りながら、頻に此の次の手を考へて居た。

「あら、あたしと。井村さんの間違ひぢやないんですか。」

城川は含みのあるいろつぽい聲で逆襲して、さも面白さうに笑つた。

「おや、變な事を伺ひますねえ。井村さんがどうかしたんですか。」

冷（ひや）かされても平氣なもので、寧ろ冷かす位の相手だつた事が滿足さうだつた。こいつは存外くみし易いぞと云ふやうな、未來に樂しみのある心持がうづうづ持上つて來た。

「かくしたつて駄目よ、ねえ江川さん。」

應援を求められて、富美子は赤面した。此の人達は何といふ厚かましい人間なのだらう。其處にゐる女給も聞いて居るのに、いやらしい事をいひ合つて。さう考へると、其の場に居る自分迄も墮落してしまつたやうで、なさけなかつた。何とも答へる事が出來ないで、僅かに苦笑するばかりだつた。

「おい、お春さん。私に麥酒（ビール）下さいな。」

鳥羽は、すつかり自分の思ふ壺にはまつた相手の調子に氣を許した。

「城川さんも麥酒つきあひませんか。」

「あたし麥酒なら頂けるわ。こつぷに半分位。」

「偉い。」

仰山に感嘆して、

「江川さんも少しならいゝでせう。——なま三つだよ。」

と追ひかけて註文した。
「あら、あたし頂けません。」
富美子は泣出しさうな當惑した顔をして、
「あたし御先に失禮させて頂きます。遲くなるとうちがやかましう御座んすから。」
それだけの事をいふにも一生懸命だつた。
「まあいゝぢやありませんか。」
「江川さん、もう一寸居て頂戴よ。」
雨方から引止められたけれど、此處でしつかりしなくては後がどうなるかわからないと思つたので、いきなり椅子をはなれると、泣出しさうな顔をして、夢中で外に出てしまつた。どきんどきん動悸がして、あんな所に連れて行かれた自分の愚かさが、腹の立つ程なさけなかつた。面白さうに話をして居た二人の側に、自分は何をして居たのだ。自分の受持つた役目は何だつたのだ。さう思ふと堪らなかつた。豚カツの皿に添へてある馬鈴薯のやうな自分の姿が、何時迄も悔となつて殘つた。
その癖、日がたつても、鳥羽の色の白い顔や、注意の行屆いた服裝が、妙に心にとまつてゐた。

城川のやうに平氣で、あゝいふ場所であゝいふ風に、あゝいふ男と口のきけるのは羨しいとも思つた。決して一圖にいやらしいとばかりは思ふ事が出來なかつた。

そのうちに、鳥羽と城川が歸りを待合せて、一緒に歩いて居る姿を見かける者が多くなつた。日比谷公園の池のほとりで見たと云ふものがある。楠正成の銅像の下で立話をして居るのを見たと云ふものがある。銀座の上海亭（しやんはいてい）で一緒に御飯を食べて居るのを見たと云ふものがある。目黒キネマで見たと云ふものがある。いろんな噂が、それに伴ふやきもちと、みだりがましい想像をつけ加へて、社内の評判になつた。

「城川つて女は凄いね。上品ぶつた顔つきをして居るけれど、あいつはたゞ者ぢやあないよ。」

「あの眼つきが物を言つてらあ。」

そんな風に、人々の見る眼が絶えず光つて來たが、本人は一向頓着なく振舞つて居た。

「あたし驚いちやつたわ。」

女の方でも、すぐれてきりやうのいゝ城川に對して、女らしい反感を持つて居たが、殊に露骨に其の心持をあらはすのは、萬事につけて競爭者の位置にある井村芳枝だつた。

「此間の日曜に城川さんのところに遊びに行つたのよ。お出でなさい、お出でなさいつて云ふも

んだから、行かないのも悪いと思つて行つたのよ。さうするとね、あの方の兄さんで、何處かの會社に勤めてらつしやるんださうだけれど、その人とあたしと仲よしになれつて、城川さんが勸めるの。きやうだいで、よくもあんな事が云へるものだと思つて、あたしいやになつたから、ぷういと立つて歸つて來てしまつたわ。」

井村は、自分に眼をつけて居る社員の少くない事を密かにほこりとした位で、城川の兄に交際を求められたと云ふ事も、みんなの前にさらけ出して、滿足を得なければ納まらなかつたのだ。

「城川さんの兄さんならいゝ男でせう。きつと。」

變な笑顔をして高岡がからかつた。

「知らないわよ。」

井村は赤くなつて、高岡をぶつ眞似をした。

「城川さんたらね、一日たりとも戀が無くては生甲斐が無いんですつて。」

「おゝララ。」

高岡は舌打ちして、みんなを笑はせた。

小說家志願の井村は、強い發表慾を持つて居た。折角自分の觀察して來た事や、聽込んで來た

事を、默つておなかの中にしまつては置けなかつた。
城川は自分の美貌を十分意識して居て、それを利用して戀愛を弄ぶ事が、惠まれた特權であると口外して憚らない。井村にむかつても、その若さと美しさを存分にいかし切らなければいけないと云ふ。小學校を出るか出ない頃に、近所の中學生に熱烈に戀されてから、城川には自分を戀する人間がなくては寂しくて堪らないのであつた。寫眞帖に貼つてある澤山の男の寫眞は、曾て彼女にまじはりを求めた人間である。さうして最も新しいところに鳥羽の寫眞が貼つてあつた。
城川はそれを輕蔑した態度で、指さきでこつんこつん彈いて、
「こんな一人よがりの人間が一番面白いのよ。あんたのやうに手ひどくやらないで、からかつてやるのが功德だわ。」
と云つて笑つた。
「隨分ねえ、こんなに多勢。」
寫眞帖をふせて、井村が冷かすと、
「みんなおもちやよ。うぬぼれさせといて、からかつてやるの。それつきりだわ。こつちから戀したりなんかしちやあ馬鹿々々しいわ。」

と自分の立場を明かにした。井村はさういふ話を、少からず誇張して、みんなに聞かせたのである。

# 九

或日、是非とも直々に重役に面會したいと云つて、一人の新聞記者がやつて來た。受附の老人は、柄の惡い相手と見て、自分が取次ぐから、用件を承り度いと云つたが承知しない。どうしても重役に逢はなければ、話の要領を得ない、はつきりいへば、重役一身上の問題なのだと言ひ張るのである。老人は一筋繩ではいきさうもない相手に辟易して、庶務人事課長に訴へ出ると、日本一と自稱する新聞社の社員だとある肩書に對して、一應應接室へ通せといふ事だつた。

篠原が出て見ると、記者は矢張り重役に逢はせろと繰返して要求した。しかし結局逢へないとわかると、漸く用談に取りかゝつた。第一の質問は、城川秀子といふ女事務員が此の會社に勤めて居るかといふ、全く意外なものであつた。

「實は、その女が此の會社の重役と怪しからん關係があるといふ記事が、明日か明後日のうちの新聞に出る事になつて居るのです。そこで、それが事實であるかどうか、念の爲め確めて置き度

いと思つて來ました。萬一眞實の記事で無いとすれば、吾々の社としては出し度く無いのです。信用にかゝはりますからなあ。」

他人の信用なんかどうでも構はないが、自分の方の信用にかゝはるのが困るのだといふやうな、記者獨特の口吻だつた。平生あんまり脅かされてばかり居るので、新聞記者と見れば、ゆすりかねだりだと、頭からきめてかゝるのが會社員のならひだつた。しかし其の大新聞は、常に上品を賣物にして居る柄のいゝ方で、それ丈怖ろしく無く、又つひぞ斯ういふ種類の記事は出した事が無いのだから、篠原は存外平氣だつた。此奴僞者かもしれないと考へると、徹頭徹尾強硬に出てやらうと肚をきめた。

「成程、城川といふ女は確に居ります。今から五六箇月前に入社しましたが、重役と云々といふやうな事は、全然事實無根です。こちらでは風儀は殊にやかましいので、絶對にそんな事はないと斷言します。一體そんな出鱈目の記事は何處から出たのです。」

「いや、出所は話せませんよ。しかし、確かな筋から出てゐる事だけは間違ひありません。」

「何と云つても、ありもしない事を事實だとは言へませんなあ。あなたの方の社のやうな模範的の新聞で、そんないゝ加減な艶種を出すのは、かへつて信用にかゝはりますぜ。」

多年うるさい相手を引受けて來た篠原は、自分の方に分があると思ふと、揶揄する丈のゆとりがあつた。

「よろしい。それでは、記事は二三日中に出るものと思つてゐて下さい。野暮な眞似はし度くないけれど仕方がない。」

記者と稱する男は、それから露骨にねだり始めさうな樣子に見えたが、此處が先手のうちどころだと見て取つた篠原は、いきなり席を立つてしまつた。

「それは御隨意に。今日は少々たてこんで居ますから失禮します。」

さういひ捨てゝ、さつさと自分の方が引上げてしまつた。

けれども、篠原には多少の不安があつた。まさか重役にそんな事は無いだらう。第一城川を見た事もあるまい。若し關係があるとすれば僅かばかりの日給取なんかさせて置くまい。何處かに圍つてしまふであらう。どの點から考へても嘘に違ひ無いが、どうして何處から出て來た話なのだらうと思ふと、其處に一脈の懸念があつた。おまけに相手は嘘でもなんでも無責任に出す新聞の事だから、場合によつては適當の手段を取らなければならない。

さう考へると、彼は直ぐに新聞社に電話をかけて、今來た男が果して其社の記者であるかどう

かを訊いて見た。すると、そんな男は居ないといふ返事だつた。それですつかり安心して、ゆすりを追ひ歸した手柄話としてほこり度くなつた。彼は冗談口調で支配人に話した。
「勿論嘘だよ。うちの大將にそんな事があるものか。」
支配人は一笑に附したが、ふと氣が付いた事があつて、眼鏡の下の凹んだ眼が嶮しくなつた。
「しかし、その城川といふ女はどんな女だね。」
「それが事務員なんかには惜しいやうな、ちよいとした女なんです。」
「事務員に別嬪なんか不必要ぢやあないか。」
支配人は不機嫌な顏付で、きつぱり云つた。
「なほ一應本人の素行なども調べまして、萬一よくない評判でも御座いましたら、適當の處置を致します。」
案に相違した篠原は、すつかり恐縮してまかり下つた。
下らない話なんかしなければよかつたと、不平に思ひながら、篠原は改めて城川秀子の履歴書を取出して見た。本籍は本所區綠町、現住所は麻布區本村町、年齢は二十二才、女學校を三年で退學して、貯金局に勤め、次には或る百貨店に勤め、その又次には火災保險會社に勤め、そこを

やめて一年ばかりたつて、大正商事に來た事になつてゐる。

最初めみえに來た時から、事務員なんかにして置くのは惜しいと思つた位で、篠原にしても一層深く印象されて居たのだから、今度の事は嘘に違ひ無いとしても、何かうしろ暗い事のありさうな人間に想はれた。さう疑ふと、一層艶めかしさを增すものがあつた。

直ぐに、城川が前に勤めて居たといふ火災保險會社に電話をかけて見た。こちらは大正商事であるが、元そちらに勤めて居た婦人を、今度こちらで採用する事になつた。それについて、當時の勤務振、退職當時の給料額、退職の理由、又本人の性行に關して何か知つてゐる事があるなら、差支への無い限り承り度いと申入れた。

先方の答は、城川秀子は營業課の事務員で、一人前の仕事をした。日給壹圓拾五錢、退職の理由は家庭の都合で、本人の性行については特に知る所が無いといふのであつた。當然過ぎる回答であるが、篠原は不滿足だつた。何か會社の方にもかくして居る事があるのでは無いかと、筋の立たない事を根に持つた。

下澁谷に住む彼は、會社の歸途に二つ手前の四之橋で電車を下りて、わかりにくい本村町の細道に入つて行つた。二三箇所で訊いて、やうやく目ざす番地のところに出た。城川の家は格子づ

くりの二階家で、その近所並のていさいだつた。何氣ない顔をして通り越して、角の煙草屋で敷島を二袋買つた。暑さの折柄、店番の女房は、胸をはだけて子供に乳を飲ませて居た。篠原は燐寸を借りて煙草に火をつけて、わざとゆつたりと煙を吹きながら、城川の家の事を訊いて見た。
「お父さんて方は中風で、たしか二三年前になくなつて、今ではお母さんと息子さんと娘さんの三人暮しです。近所の人ともあんまりつきあひはなさらない方ですから、よくは知りませんけれど、息子さんていふのは電氣の會社とかに勤めてゐなさるさうです。」
無表情な顔付の女房は、飾氣も無く答へるのであつた。
「それから、きれいな娘さんがゐるでせう。いゝや、私は一寸人に頼まれてね。」
篠原は、あまり立入つて怪しまれはしないかと思ひながら、二本目の煙草を口に持つて行つた。
「えゝ、おいでになりますよ。矢張り何處かの會社に出てゐるつていふ事で、毎日朝出かけて、夕方歸つて來ます。今日も、つい今しがたうちの前を通りましたつけ。そりやあいゝ女ですよ。」
「その娘さんについて、何か噂はありませんか。噂つていふとをかしいが、つまり身持の上で、近所の評判になるやうな。」
「さうですねえ。評判なんてあてになりませんけれど、さういやあ無い事もござんせんね。」

一寸考へ迷ふ様子で、篠原の顔を、うさん臭さうに見た。

「何もこちらに迷惑になる事ではないのです。實は縁談の事でね。」

祕密探偵なのだと云つて見ようかとも考へたが、それにも及ぶまいと思ひかへした。

「へえ、左様でござんすか。」

縁談だといふと、俄に好奇心とやきもちで夢中になつた。洋服着の篠原を見て、いゝ縁づき先に違ひないと思つた様子だつた。

「そんな事を云つちやあいけないかも知れませんけどね、面白くない評判があつたにはあつたんで御座いますよ。なんですか私共では知りませんけど、もう先勤めて居た會社の社長さんの御目にとまつて、お妾さんになつたつていふ噂がありましてね、地震前ひと頃、うちに居ませんでしたよ。赤坂の溜池とかに圍はれて居たのが、矢張り燒出されたんださうでしてね……」

調子に乘つて喋り出した女房は、ふいにどぎまぎした様子を見せて口をつぐんだ。そのびくついて居る視線の方角を、ふりかへつて見た篠原もぎよつとした。竹細工のちひさい籠に石鹼や手拭を入れたのを手に持つて、此の店先を通り過ぎたのは城川だつた。向ふでは此方に氣がついたかどうだかわからなかつたが、篠原はすつかり面喰つてしまつた。

「今のがさうなんでございますよ。」

通り過ぎたのを見すまして、女房はさゝやいた。

「ふうむ。」

篠原は女房の手前も具合が悪く、半身往來に乘出して見送つたが、もう見つかりつこはないと思ふと、あわてゝ女房に挨拶して、城川の行つたのとは反對の方角に急いだ。

十

その翌日、篠原は一部始終を支配人に報告した。煙草屋の女房に聞いただけでは物足りないので、何から何まで精細に、すつかり脈絡を整へて話した。火災保險會社に勤めて居た時、好色者の社長の目にとまつて、赤坂の溜池に圍はれて居たのが、九月一日の地震の時に燒けて、商賣柄社長もひどい打擊をうけ、妾を圍つて居るどころではなくなつたので、お拂箱になつたのだと、自分自身で承知し切つて居るやうな口ぶりだつた。

「又會社に勤めるやうになつたのも、いゝ鳥が引かゝるとでも考へて來たのかも知れません。」

「まさか、さうでもあるまい。」

支配人は苦笑したが、忽ち鋭い眼つきに變つて、
「兎も角も、そんな經驗の女は面白くない。社内の風儀を亂されては困るから、卽時に出してお
しまひなさい。」
強い語調で云つて、人に命令する時の癖で、相手の顏を何時迄もぢいつと見詰めてゐた。
「早速取計らひます。そんな女とも存じませんで雇入れましたのは、全く私の不行屆で、重々申
譯御座いません。」
「何も君の不行屆といふわけでは無い。雇つたのは爲方が無いが、身性のよくない女だとわかつ
た以上は、そのまゝ置いて置く事は出來ないといふのです。」
「は。」
篠原は、何時迄も自分の上にそゝがれて居る支配人の目の屆かない廊下迄、恐縮した姿勢を保
つて退出した。
彼は、斯うなつた以上は、一刻も早く城川を解雇するのが、支配人に對して僅かに面目を保ち
得る唯一の途だと考へた。さう考へると、素早く處分してしまつたと云ふ點で、手腕を見せたい
と思ふ欲求が、むらむらと強くなつて來た。どんな事でも、迅速にさばくのが出世の要領だと常

々考へて居るので、何の躊躇も無く、別室に城川を呼びつけた。

「まあおかけなさい。」

道具だての整つた、近まさりのする相手に對して、いざとなるとひどくひけ目を感じた。昨日密かに取調に行き、煙草屋の店頭で女房の話をきいて居るところを、通りかゝつた城川に認められてゐやあしないかといふ弱味があつた。その上に、もう一歩深く考へると、若し城川が美人で無かつたら、わざわざ本村町まで調べに行きはしなかつたかも知れないのである。女好きで、その爲めには時々內しよのしくじりもやつてゐるので、此の事も心をとがめた。心なしか、城川の濡色の瞳が、嘲笑を含んでゐるやうに思はれた。

そんな事では駄目だぞと、自分をたしなめてから、やうやく口を切つた。

「實は妙な事を伺ふが、あなたは此の會社に來る前は火災保險會社に居たのでしたねえ。履歷書に書いてあつたと思ふが。」

「はあ、城東火災に居りました。」

「社長は誰でしたつけ。」

「西山吾朗とおつしやる方です。」

「あゝ、あの男爵の。」

何んの爲めにそんな事を訊くのか、いぶかしさうな目をして、城川は課長のつやつや光つてゐる鮪色の顏を見守つた。

「そこをやめた理由は。」

「家事の都合でやめました。」

「それで、やめてから暫くうちに居たのですか。それとも何處か近所に行つて居たのですか。」

最初こそは少し閉口したけれど、對談が長くなるに連れて、年長者で、上役で、且男子だといふ自覺が肚を据ゑさせた。こんな綺麗な顏をして、あの女好で有名な男爵の妾になつて居たのかと思ふと面憎かつた。女の肉體の恰度いゝまるみが、夏のうすい着物を通してあからさまなのも忌々しかつた。

城川も流石に緊張した態度に不安の色を添へて、暫時は返事をしずに篠原を見詰めて居たが、微かに冷笑するやうな表情を見せて、

「それはどういふ御質問なので御座いますか。」

と、度胸を定めた語調できゝかへした。

「まあ、私の訊く事に答へてくれゝばいゝのです。」
おつぷせるやうな調子で篠原は云つた。
「約一年ばかり、あなたは自分のうちには居なかつたでせう。赤坂の方に住んで居たのではありませんか。」
二人の眼は、敵意でいつぱいになつた。城川は、侮辱されたのだと感じると、目頭が熱くなつて、堅く引締めた口尻がひきつるやうな氣持がした。それを見ると、篠原はすつかり勝ほこつてしまつた。
「その赤坂に居た時のあなたの生活、つまり其間あなたが何をして居たかといふ事を伺ひ度いのです。」
「存じません。」
城川は血の氣の消えた脣を震はせた。
「そんな事を、あなたにお答へする必要は御座いません。」
さう云ひ切ると、つと椅子を離れて立上つた。一刻も早く、此の場を去らなければならないと云ふ氣勢だつた。

「いや、あなたの方に必要はなくても、私の方には大にある。あなたは西山男爵の世話になつて居たのではないのですか。ちやあんと、わかつて居るんですよ。」

ふゝんと鼻で笑つて、卓の上に半身乗出した。美しい顏に、動搖した心持のいたいたしい程あらはれて居るのを、激しい運動の後の休息のやうな、痛快な爽かさで見た。

「まあ、そんな事を探る爲めに、昨日はうちの近所迄いらつしやつたんですか。」

ヒステリツクな聲で、城川は無理に笑つて見せた。あく迄もそんな事で閉口するものかと云ふ強いところが見せ度かつたのだ。

篠原はぎくりと胸にこたへた。意外に手ごはい相手の權幕に、壓倒されさうな氣持だつた。

「誰の世話にならうと、大きに御世話です。」

城川は、すつかり度胸を据ゑて、捨ぜりふを殘しながら、足早に室の外に出て行かうと、扉に手をかけた時、篠原も立上つて、興奮した聲で呼止めた。

「お待ちなさい。此の會社では、身持のよくないものを社員として置く事は出來ません。今日限り解雇するから、その積りで御いでなさい。」

「勝手になさいまし。こんな會社に誰がゐるもんか。」

もう一度嘲笑を残して、城川は手荒くあけた扉の外に出て行つてしまつた。

## 十一

城川秀子が解雇された事は、さまざまの動揺を、人々の心に引起した。新聞記者と稱する男が、何處からどうして聞き込んだのか、前に勤めてゐた會社の社長との關係を、現在の事と間違へてゆすりに來た事は、假にも重役に關する事柄なので、篠原も口を緘して誰にも話さなかつたが、以前人の姿だつたと云ふ一事で、解雇の理由は十分だと思つた。面と向つて探し出した種をつきつけたら、さぞかし驚くだらうと思ひの外、寧ろこつちがやつつけられたやうな具合に、強い態度を示した相手が忌々しかつた。それに對して、鬱憤をはらしてやらうと云ふ肚もあつて、彼は頻にゐなくなつた女を罵つた。

烏羽とあやしいと云ふ噂が、殆んど疑ふ餘地の無かつた爲め、解雇の話を聞き知つた社員は、ざまあみやがれと云ひたい快感を喚起されたが、同時に、社内第一の美人を失つたのを、殘念に思ふ心もあつた。痛烈に解雇の申渡しをしたと得意がる篠原に對して、反感を持つ者もあつた。

「矢張りクレオパトラが居なくなると寂しいねえ。少くとも目の保養だつたからなあ。」

あからさまに、そんな事を口にする者もあつた。會社全體に、何となく寂寞を感じたのは事實である。

女事務員同志の中には、城川の及びも無い美貌に對し、又その美貌の爲めに男の社員が、外の者とはけじめをつけた扱ひをし、口のきゝ方も柔かく、おべつかをつかひ、親切に見せるのに對して反感をいだいて居たので、城川その人に對していゝ氣味だと思ふばかりで無く、男の社員に對してもいゝ氣味だと思ふのであつた。自分達は、あんな女とは違ふのだといふ事を、はつきり見せつけてやつたやうな氣もした。

尤も井村芳枝だけは、文學少女らしい一面から、

「妾なんて奴隷の眞似は、女性全體の恥だけれど、それだつて會社に關係した問題では無いと思ふわ。たつたそれつきりの理由で解雇するなんて横暴だわ。」

などゝ、頻に云つては見たけれど、誰も取合はうとはしなかつた。さうして、井村自身も、明に自分よりも美しい城川のゐなくなつたのは、頭をおさへてゐた物の取除かれたやうな、晴々した心持だつた。今では自分が此の會社のスタアだと云ふ滿足があつた。

誰の見る目も鳥羽の上に落ちた。兎も角も噂にのぼつた二人だから、城川の解雇事件の投げた

陰影が、彼の態度にどう反映するかは、閥燐運の興味となつたのだ。
しかし、本人の鳥羽は平氣だつた。冷々として顏色も動かさず、常に變らず出勤し、勤勉に、敏活に、上役の御覺え目出度く働いて居た。

十二

夏休みとして、めいめい二週間づつ休む事は內規で許されて居たが、その年度に入社した者には此の特典が無かつた。女事務員は不平をこぼしながらも、日給を差引かれる爲め、毎日汗臭くなつて通つた。出勤時間の滿員電車に、やつとの思ひで割込んで一安心すると、むうつと蒸された人いきれが鼻をつく。前からも後からも、なま温く汗に濡れた他人の體が、此方の體の汗と着物を通してぴつたりくつついて、何處から何處までが自分の體だか、わからない氣持になる。柔かい女の肉體に、わざと接觸を求めて、押つけるやうにもたれかゝる者もある。
會社に來るとほつとして、直ぐに化粧室へ驅込む。折角出がけに刷いた白粉は、汗で斑に浮いて居るので、叮嚀にそれを直さなければならない。晝の食堂へ出る前にも、もう一度化粧室へ行つて顏を直し、食事が濟んでお茶を飮むと、又汗になるので、それを氣にして化粧室へ入る。四

時のひけ時近くなると、もう一度歸途の爲めに、白粉を濃く塗り直す。おつくりを爲直すと氣力が出て、晝間働いた様子もなく、いきいきと會社の外に出るのが何よりもいゝ心持だつた。

わけても井村は第一のお洒落で、我儘だつたから、庶務人事課長から、あんまり化粧の爲めに時間を費し過ぎるやうだから、各自愼んで貰ひたいと、女事務員一同に注意が出たにも拘らず、人一倍濃いお化粧に、時間と手間をかけるのであつた。その上に、缺勤も井村が一番多かつた。

「あたし駄目よ。朝九時から午後四時迄、機械的の事務員生活なんか性に合はないわ。今日やめようか、明日やめようかと考へるばかりよ。まだしもカフヱの女給かなにかになつた方がましだと思ふわ。」

話相手として、何の異論もさしはさまない富美子をつかまへて、規則正しい職業婦人の生活にあきた事を嘆じたが、それよりも、くすんだ事務室で、あかるい喜びの無い事がいやだつたのである。自分の若さと容姿に、十分自信があり、又文筆の野心を持つて居るだけ、堅苦しい仕事なんかして居る氣にはなり兼ねるのであつた。殊に名譽心の強いたちなので、新聞や雜誌の口繪に、閨秀作家の顏などが出てゐて、それが大概不美人なのを見ると、淺しさと共に、若し自分の寫眞も斯ういふ風に出たらどうだらうと、優者の感で胸がいつぱいになる。さういふ時には、自分の

同僚の女達が、滿足してこつこつ働いて居るのが、殊に意氣地なしに思はれて、ついつい馬鹿にし度くなるのである。城川のゐなくなつた後で、男の社員に一番もてはやされ、女の仲間に一番嫌はれるのは井村だつた。

烏羽は又井村に接近しようとして來た。井村が小說きちがひだと知つたので、頻に其の方面の話題を提供し、時には新聞などに誇大な廣告の出る、忽ち數十版を重ねたといふやうな本を持つて來て、讀めと勸める事もあつた。

「駄目よ。そんな通俗小說。」

まるつきり相手を馬鹿にし切つて居るので、憚りも無くいひ切つて痛快がつた。烏羽は苦笑しながら、

「井村さんはどんなのがお好きか知らないけれど、これがアップ・ツウ・デートの小說なんですよ。出版して半年にもならないのに、何萬といふ賣行なんですからね。」

「賣れる賣れないなんて問題ぢやあなくつてよ。藝術的に價値があるか無いかゞ問題なんだわ。」

相手の弱點を握つて居るので、あく迄も手きびしくはねつけるのであつた。

あんまり始終口癖に、藝術々々といふので、かげでは井村の事を「藝術さん」と呼んで、新らし

がりの變物だときめてしまつた。

「あゝ、いやだいやだ。どうして月給取つてものは、みんな違つた顏つきをしてゐながら、同じ事ばつかり話してるんでせう。頭の惡さつたらないわねえ。」

みんなが自分を變物扱すればする程、反撥的にその連中を輕蔑した。

實際話といへば、物價の高い事、生活の苦しい事、誰某は金をためたといふ噂、自分にはたまらないといふ嘆息、政治は新聞の記事通りに論じ、笑ひ話といふときまつて助平つたらしい事に限つて居る。贅澤をする餘裕は無く、一生涯毎日々々同じ仕事をしながら上役の機嫌を取り、年に五圓か拾圓の增給を夢みながら、年をとつてしまふ。さうして頭腦が古くなり、働きが鈍くなると、會社からはもてあまされ、後進には馬鹿にされ、あげくの果てがくびになる。その退職手當さへ老を養ふ丈の額は無く、隱居と同時に、今迄よりも一層つましい暮しをしなければならない位の端金なのだ。それが此の階級の運命なのだ。

會社員では無かつたけれど、薄給の月給取だつた父親を持つた富美子は、あんまり井村が月給取を罵倒すると、それが眞實だとは思ふけれど、眞實だと知つてゐるだけ強く、自分自身も侮辱されるやうな痛い氣持がして、氣まづくなるのであつた。請負師の娘として、贅澤に育てられた、

我儘勝手な性分の井村とは、その點でまるつきり考が違つて居た。それでも井村はしつつこく、富美子を自分の唯一の相手とし、又時にはおともののやうに取扱つた。

「江川さん、遊びに來て頂戴よ。」

鼻を鳴らして幾度も引張られて、或る日曜に、富美子は輕い手土産を持つて、四谷坂町の井村の家を訪ねて行つた。ちひさいながらも二階家で、路地裏の自分の家などとは比べ物にならなかつた。

「あら、あんたお土産なんか持つて來たの。いやんなつちやふわねえ。」

そんな口をきゝながら、喜んで自分の部屋に引張つて行つた。母親といふ、昔はさぞかし綺麗だつたらうと思はれる小柄な粋な人が、お茶道具を運んで來て、娘の同僚を珍しさうに、しげしげと觀察してゐたが、娘に邪魔がられて引込んでしまつた。

「あたしのお母さんなんて、まるつきり駄目よ。全然無理解よ。」

机の上には、女學生好みのインク・スタンドやペンが亂雜に置かれ、本箱には小說本がいつぱい詰つて居た。壁には外國の映畫俳優の繪葉書が、無數に鋲で打止めてあつた。それがみんな男優ばかりだつた。

「あたし、バアセルメスとても素敵だと思ふわ。」

富美子の知りもしない名前を云つて、中でも一番澤山ある寫眞の男を指さした。活動寫眞の話や、小説の話を一人で面白がつて話した。さういふ事は、富美子にはよくはわからなかつたが、井村が見せて呉れた彼女自身の書いた小説には驚いた。

「駄目なのよ。ほんとにうまくないのよ。」

さうはいひながら、先方から進んで原稿を見せてくれた。富美子は、賀川豊彦とか、吉田絃二郎とか、倉田百三とかいふやうな、女受けのいゝ作者の書いたものを、人に借りて讀んだ程度で、まつたく批評眼を持つて居なかつた。井村の書いた小説を、五つまで讀まされたけれど、うまいのかまづいのか、ちつともわからなかつた。たゞ、こんな年の若い、しかも女が、よくも小説なんか書けたものだと驚いた。自分なんかには到底及びもつかない事を、樂々としとげた事を感心した。しかし、それよりもなほ驚いたのは、其の小説に描かれて居る事柄だつた。どれもこれも作者自身らしい若い女が出て來て、どれもこれも戀愛ものばかりである。しかも中には隨分際どい場面もあつて、讀んで居るうちに羞しい程呼吸が荒くなり、顏が熱くなるのを覺えた。此の人は、もうこんな事を經驗して居るのかしらと思ふと、怖い氣もするのであつた。

「こんなに上手にかけたら面白いでせうねえ。」

それつきりで、外に批評の言葉を知らなかつた。

「さう單純に面白いつてものではないのよ。一種の苦痛もあるわ。」

「だつてこんなにすらすら書けてゐても。」

創作の苦心について、文壇の大家の話などを讀んで知つてゐる井村と、全然知らない富美子とは、會話をうらづける心持にそぐはない事が多かつた。

「どれ一つい丶ものはないけれど、あんた讀んでみて、どれが一番ましだと思つて。」

「あたしにはわからないわ。けれど偉いわねえ、小說が書けるなんて。」

富美子は上氣した顏を上げて、感心したといふ言葉を繰返すばかりだつた。

「偉くもなんともないわ。上手にかければ偉いけれど、たゞ書いたつていふばかりぢやあ爲方が無いわ。」

さういひながらも中の一つを膝の上に取上げた。

「あたし、自分では、これが一番氣に入つてるのよ。」

「あ丶『處女を失ふ日』つていふの。」

富美子はうつかりその標題を讀んで、ふと顏があかくなつた。たつた今見たその小說の一場面には、文壇の大家の門を叩いて弟子入りした少女が、殆んど暴力をもつて純潔を奪はれるところが、精細に描いてあつた。

「井村さん、こゝに書いてある事、みんなあんたの事。」

胸をどきつかせながら、思ひ切つて訊いてみた。

「あら、いやだわ。さうぢやあないわよ。」

井村も流石に面を染めて否定したが、

「だけど、あたしなんか空想で書くんだからいけないのよ。體驗が無いんですもの。」

と、しばらく考へてからつけ足した。何かしら人生の冒險を試みたくて堪らないといふ樣子だつた。

十三

最初から、月に四日や五日は屹度怠けるのがおきまりで、係の課長から注意された事も再三あつたが、近頃になつて井村の缺勤は益々はげしくなつた。

「江川さん、あたしの小說ね、もう直き雜誌に出して貰へる事になつたのよ。」

あなた丈に話すので、外の人には喋つてはいけないと念を押して、さも一大事のやうに聲をひそめた。

自分で書いてしまつて置く丈では滿足出來なくなり、たうとう文壇の或大家を訪問して見て貰つたところ、大變ほめられて、その大家の推薦で、第一流の雜誌の秋期特別號に掲載される事になつた。その爲めに愈々乘氣になり、一倍力を入れた大作に取りかゝつたので、夜も眠らない事もあるし、そんなこんなで會社に出る氣になれないと云ふのであつた。

殊に其の大家に一度面接して、すつかり崇拜してしまひ、この後は度々訪問を重ね、其家に集る他の文士とも知合ひになつた。

「矢張り藝術家はいゝわねえ。月給取なんかとは種族が違ふんだわ。」

その人々の會話の豐富な事、機智に富んで居る事、情味のある事、心持も生活も自由な事――ひとつひとつ數へ立てゝ讃美した。さういふ話をする時、井村の顏には一層いきいきした輝きが加はるのであつた。

女事務員は缺勤が多くて困るといふ非難が、社内に高くなつた。その方では隨一の井村を別と

しても、野邊地も高岡も屢々休んだ。入社以來一日も休まない富美子だけが、例外だつた。

「ちえつ、面のまづい奴程缺勤が少いや。」

と、毎日出勤簿を調べる人事課の若い社員が口小言を言つた。缺勤屆には、病氣とか、家事の都合とかきまり文句が書いてあるが、病氣屆を出した井村を、銀座で見たといふ者もあつた。本當に病氣で休む事も勿論あるが、中には父が病氣だとか、母が病氣だとか、兄弟姉妹が病氣だとか、男の社員とは違つて、口實が多かつた。

支配人は、最初から懸念してゐた女事務員の不成績に、すつかり機嫌を惡くしてしまつた。金持の我儘娘を妻にして、家庭では年中頭の上らない境遇から、自然と生れて來た女性觀で、こんな始末の惡いものは無いと思つて居た。女性自身の自覺などといふものは無い。何でもかんでも、女にもてようとする男が主唱した事で、男女能力平等論なんかも、馬鹿な男が女の爲めに親切を見せたものに過ぎない。ずるがしこい女は、さも自分達が自覺したのだといふやうな口吻で、かり物の言説を弄んで居るのだ。職業婦人にしても、元來女には獨特の強味があるのに、それとは反對の仕事に從事するのだから、到底一人前の働きは出來つこない。待遇が惡いから爲方が無いといふけれど、規律が無く、責任感がなく、組織的の頭腦が無く、連絡のある分業動作の出來な

いものに、どういふ待遇が與へられるか。賃銀が安いといふ以外に取得は無い。しかも、賃銀の安いといふ事も、能率と比較して考へると果して安いかどうかも疑はしい。結局高いものについて居るかもしれない。それにも拘らず、何處でも澤山の女事務員を雇つて居るのは、要するに流行物で、又男が例の弱點から、事務員の中にも色彩が欲しいといふ根性に根ざすのだと、支配人は苦々しく考へるのであつた。一度に十人位は雇ひ度いと云ふ庶務人事課長の意見を排して、試みに五人に止めて採用したのは、まだしもだつた。その五人の中から、解雇しても、辭職する者が出ても、決して補充なんかするものかと、しつかり肚をきめて居る。

それで、缺勤勝の者なんかは、斷然處分してしまつても構はないと申渡した。篠原は、特に勤務振のよくない井村を呼びつけて、注意を與へた。

「藝術さん」は手のつけられない怠け者として名高かつたが、その怠け者が小說を書き、雜誌の秋期倍大號に出ると知つた時は、大正商事の社內の驚きは一通りで無かつた。文壇一流の大家と並んで、無名の少女の第一作が世に出たのだ。雜誌社の誇大な廣告には、斯う書いてあつた。

文壇の驚異。新しき時代は遂に來れり。作者は年十八、艶麗花の如き女性。文壇の某大家は、一葉女史の再來なりと激稱し、又他の某大家は、吾等の時代は過去となりたりと嘆じたり。

眞先にこれを發見した男は、文字通りに信じて、頻に社内を觸れ廻つた。
「おい、井村藝術女史が小說を書いたさうだ。あいつ、とつても天才なんだとさ。」
雜誌を買つて來て讀む者があると、それを借りて又讀む。賣藥の廣告は信用しないけれど、出版物の廣告には疑をさしはさまない連中だから、俄に自分達よりも遙かに偉い人間が出現したやうに感じるのであつた。普通の商用作文さへ滿足に書けない有樣だから、最も難かしい仕事だと考へて居る文章を書き、しかもそれが印刷されたといふ事は、全く驚異に値する出來事だつた。その上に、標題から「處女を失ふ日」といふ小說の內容が、十分彼等を喜ばせた。
「とつても猛烈だぞ。」
「あいつ處女かと思つたら、さうぢやないんだね。馬鹿にしてやがんなあ。」
小說といへばつくり物だと考へたのは昔の事で、今では必ずいきたモデルがあるか、作者自身の事を書くものと信じてゐる。文學志望の少女が、師事する大家に汚され、しかも汚れた事を悔まずに、二人の關係を肯定して、其處に自由の境地を見出すといふ一篇は、どうしても井村芳枝其人を描いたものと考へるのであつた。厚化粧の、活潑過る位活潑な、まだ子供氣の失せない女の肉體に、みだらな想像を加へて、社員は互に變な笑をかはした。

女の連中は、更に強烈な嫉妬心で、あからさまにいやがらせを云つた。殊にふだんから仲のよくない高岡は、

「あんた偉いのねえ、いよいよほんとの藝術家よ。文學史に名が殘るわ、きつと。」

そんな事をいふかと思ふと、

「あの小說あんたの事なんでしよ。それでなければ、あゝほんとらしく書けるわけがないわ。」

などゝ云つて置いて、直ぐに男の社員にむかつて、

「矢張り井村さん自身の經驗なんですつて。驚くわねえ。よく恥しくないわねえ。」

と、誇張した表情で、眉をしかめたり、首をすくめたりして見せた。

もう一つみんながはじめて得た知識で、驚いたのは原稿料だつた。

「一流の大家でなくても、一枚三圓とか五圓とか取れるんださうだ。」

「ぼろい商賣だなあ。趣味で書いて、何の苦も無く金になるんだから。」

文筆上の勞苦などは、あらうとも思はない事務員は、たゞたゞ原稿料の額に驚いた。そろばんはお手のものだから、即座に胸算用で、「處女を失ふ日」を金錢に換算した。

井村の得意はかくし切れなかつた。何時からか願つて居た日が、存外わけなく來たので、すつ

かゝり自信を強めた。日給九十錢の、たゞの女事務員だと思つて居た會社の連中に、自分の才能のなみならぬ事を、はつきりと見せてやつたのが嬉しくて堪らなかつた。いゝ年をした課長級の男が、十幾年もかゝつてやうやく其處迄上つた月給以上のものを、たつた一篇の小說で得る事が出來るのも嬉しかつた。缺勤が多くて不埒だとか、お化粧ばかりして居て仕事の能率があがらないとか、うるさい小言を云つた男達を、完全に輕蔑してやる事が出來ると思つた。誰かこんな會社なんかに居るものかと、すつかり肚をきめて、何の躊躇も無く退職屆を書いた。さうして、それを課長の前に差出した時は、何ともいへない快感で胸がいつぱいになつた。

## 十四

城川が去り、井村がゐなくなつて、會社はめつきり寂しくなつた。口數の少ない野邊地と富美子は、只管仕事に勤勉だつた。少し色艶がよくないのと、髮の薄いのが缺點だつたが、野邊地涼子は優しい感じにつゝまれた女だつた。城川も、井村も、富美子も父親に死別れたのに、野邊地はのんだくれの父親があつて、生みの母にはちひさい時に死なれた。連子のある繼母の爲めに苦勞したといふ事も、此の人の寂しい影を深くしたのであらう。井村がゐなくなつてから、富美子

と仲がよくなつて、身の上話をする事もあつた。

父親といふのは大店の通番頭だが、酒精中毒にかゝつて居て、朝飯前から冷酒をコップで飲まうと云ふ人物だつた。もとは相場師につれ添つてゐた後妻は、茶屋奉公をした事もある氣丈者で、亭主に負けてゐないばかりで無く、自分も盛に猪口を手にして、醉ふと三味線を彈いて、亭主の相手をする方だつた。連子の男の子は銀行の見習社員になり、その妹は電話交換局に通つてゐた。二人が貰つて來るものも、涼子の稼ぐ給料も、みんな酒代になつて消えるのであつた。それよりも繼母に困らされるのは、繼母の兄の息子で、鐵工場の職工をしてゐるのに、涼子をめあはせようとする事だつた。

「いゝお金を取るんだから、その人のおかみさんになればしあはせだつて、母はいふんですけれど……」

野邊地はつくづくなさけなささうに、聲をうるませて、富美子の同情を求めるのであつた。

けれども、此の氣の毒な身の上の人にも、富美子が妬ましく思つたのは、父方の親戚のもので、醫學校に通つて居る青年が心から同情してくれて、何から何迄相談相手になつてゐるといふ事だつた。その事を話した時は、野邊地の蒼白い頰にも、薄く血の色がさした。

「現代的の活氣は無いけれど、野邊地さんの純日本式も惡くないなあ。」

城川や井村にかげながら大騷ぎをした若い社員は、もともと野邊地にも目をつけて居たのだが、冗談を云つても微笑するばかりで取合はないので、物足りなくは思つても、外にめぼしいのがゐない爲め、自然と話題にのぼるやうになつた。

「鳥羽つて奴は不思議だねえ。此の頃は野邊地さんを追かけ廻してゐるさうだぜ。」

「野邊地さんなら大丈夫だ。あの人は良妻型だからなあ。」

そんな無駄口ばかりきいて居る連中には、高岡仙子がいゝ話相手だつた。夏の間こそ、手製の洋服を着てゐたが、秋風が立つと又和服になつた。

「高岡さん、もう洋服はやめたの。君のやうなお尻の大きい人には、洋服の方が似合ひますよ。」

口の惡いのがからかふと、

「えゝ、あたしもさう思ふんだけれど、冬服は高いでしよ。外套も買はなくちやならないし、日給九拾錢ではやり切れないんだもの。」

なあに男なんかに負るものかといふやうな大口をあいて、自分が眞先に笑ふのであつた。野邊地と口をきゝ度くても相手にされないので、止むを得ないとあきらめた者は、高岡と舌戰を鬪は

す事が面白かつた。

「高岡さんなんか、いろいろ面白い事をして來たんだらうなあ。」

小學校の教員をしてゐる時、男教員と密會の現場をつかまつたといふ風評を知つてゐて、にやにや笑ひながら冷かすものもある。

「えゝ、あらん限りの事をしつくしちやつた。もう男なんかこりこりだわ。」

「さうでもないだらう。給仕を可愛がり過ぎるつて、專ら評判ですよ。」

これでもかと云ふやうに一歩を進めると、

「あんた方のやうな女郎買をしたり、淫賣にひつかゝつたりするのより、無垢の子供は可愛いわ。」

と平氣で答へる。

「それを無垢でなくなしちまひさうだから心配してるんですよ。」

どこ迄もと追かけていやがらせても、相手はちつともへこまなかつた。かへつて、傍を通る給仕をつかまへて、人前で抱きつく眞似をして見せるといふ風だつた。

地震の後のから景氣も、忽ち不景氣のどん底に落かゝり、會社の營業狀態も香ばしくないので、

此の暮には又人べらしがあるのではないかと、面白くない噂が誰からとも無く傳はるやうになつた。年末の賞與の割合も、減りはしないかといふ心配もあつた。さういふ心配が社員を緊張させ、かへつて勤勉にした。どうかして同僚よりも働きのある事を上役に認めて貰ひ、馘首になるのを免れ度いといふおもひで夢中だつた。決算期の近づくと共に、凱旋道路の銀杏の葉も、日毎に秋の色が深くなつた。

或朝、久しく何事も無かつた大正商事に、社員の好奇心を極度迄引起すニュースが傳はつた。それは、今朝のある新聞に、新進の女流作家井村芳枝と、井村を文壇に紹介した大家との情事が、大きな標題で書立てゝあるのを發見したのだ。頭髮をもじやもじやに延ばし、さも藝術家らしく、世の中がつまらなさゝうな顏をして、頰杖をついて居る文士の寫眞と並べて、井村芳枝の白い歯を見せて笑つてゐる寫眞が出てゐた。何から何迄現場を見屆けたやうな書方で、新聞が面白づくに報道するところによれば、「處女を失ふ日」を發表して、忽ち其の才を認められた井村は、推薦者たる大家と戀に落ち、大家は妻子を捨てゝ戀仲同志は郊外に新居を構へてゐると云ふのだつた。それを例の新聞特有の、戀の三角關係だとか、互に共鳴したとか、二人の世界を發見したとか云ふ文字を用ゐて書いたのである。

「やりやがつたなあ。あいつ年は十八だつていふ事だつたけれど、十分熟してゐたからねえ。松井おすまと藝術はげみつてやつだぜ。」

八木節の文句をあてはめて、おちを取るものもあつた。

一枚の新聞を引張りあつて、幾十人が口々に、猥談に及びさうな氣勢を見せて、罵つたり、はやしたてたりした。

「文士なんて怪しからんもんたなあ。女房子もあるつていふんぢやあないか。」

「他人の女房とくつついて、ばれないうちは道德家づらをし、ばれて困つて心中する時にも、勝手な熱を吹く。そいつを又讚美する奴があるつていふんだから、此の位なのはあたりまへかも知れない。」

何時迄も罵り足りない心の中には、自分達の手近のものを、まんまと文士づれに盜まれたといふやうな口惜さがあるのだつた。三人の女事務員も、人々の間にまじつて、驚きの目をみはつて居た。

「あの小娘、あれでなかなか曲者だつたからねえ。」

田舍訛まる出しで、高岡は忌々しさうに舌うちした。氣の弱い野邊地と富美子は、互に顏を見

合せて嘆息したが、お互に心の中では、さまざまに身に引くらべて考へてゐた。

## 十五

十一月に入つてから、野邊地はふだんよりもなほ顔色が悪く、仕事をしてゐても苦しさうに見えた。どうかしたのでは無いかと富美子が心配して訊いても、別段どうもしたのでは無いと答へるばかりだつた。家庭に面白くない事の多い人だから、何かくさくさする事があつて、氣分が勝れないのだらうと同情してゐた。

月末の或る寒い日に、晝の食堂で、その日の御菜（おかず）は薩摩汁だつたが、茶碗のふちをあふれさうに盛つたのを、口の側迄持つて行つた野邊地は、あわたゞしくそれを下に置くと、半巾（ハンケチ）で鼻と口をおさへて卓を離れた。

「どうしたの、野邊地さん。」

向きあつてゐた富美子が後から聲をかけたけれど、逃（にげ）るやうに食堂の外に出て行つた。

「どうしたの。」

「氣分が悪いんでしよ。」

富美子は直ぐに追かけて行かうとしたのだが、高岡に聲をかけられて立端を失つてしまつた。食事を濟ませて事務室に行つて見たが、野邊地の姿は見えなかつた。二階も階下も地下室も一廻り探して、平生古い書類をしまひ込んで置く物置の一隅に、床に膝をついてうづくまつて居るのを發見した。

「どうして。野邊地さん。」

まあるくなつて居る背中をかゝへるやうにしてのぞき込むと、一層からだを引締めて、すゝりあげて泣出した。

「お腹でも痛むの。」

と訊いて見たけれど、微かに頭を横に振つてゐる。兩肩に手をかけて、引起さうとした時、むうつと物の腐つたやうな臭ひがした。兩手でうけてゐる半巾の中に、何か吐いた樣子だつた。

「胸が惡いんでしよ。お冷水持つて來てあげませうか。」

やうやく頷いたのを見て、富美子はかけ出さうとした。

「待つて。江川さん。」

力の無い聲で呼止めて、

「誰にもさういはないでね。」

と云つて訴へるやうに顔をあげた。涙に濡れた額や頬邊に、おくれ毛がぴつたりへばりついてゐた。

冷水を飲ませて背中をさすつてゐると、野邊地はやつと元氣を回復した。

「ありがたう。なんでもないのよ。今朝から胸が惡かつたので、やめようと思つたんですけれど、食堂に行つたら急に變になつて……」

もう大丈夫だといふところを見せる爲めに、蒼ざめた顔に強ひて微笑を浮かべた。後は自分から課長に斷つて置いてあげるから、お歸りなさいと勸めて、無理に納得させた。

「たゞ氣分が惡くて歸つたつて云つといて頂戴。それつきりよ。」

二度三度同じ念を押して、こつそり歸つて行つた。

翌日は平氣な顔をして出て來たが、四五日して、又頭痛と吐氣に惱んで、早びけで歸つた。

「野邊地さんは變よ。しよつちゆう吐氣があるらしいわ。姙娠ぢやあないのかしら。」

冗談めかして云ふのではあつたけれど、高岡の言葉には意地の惡い強さがあつた。

「ひどいわ、そんな事云つて。」

あんまりひど過る言ひ分だと思つて、富美子は心から腹が立つたが、その辯何となく、それがほんとではないかしらといふ不安があつた。まさか、あんなおとなしい人にとは思ふけれど、父方の親類の醫學生の話を聞いてゐるので、それと結びつけて考へられて爲方が無かつた。

間も無く、又同じ場面を見せられた。眞蒼になつて我慢して、人の居ない例の物置の方に急いで行く後から、富美子は心配してついて行つた。此の前に發見した時と同じく、崩れるやうに兩膝をつくと、ひとたまりも無く吐いた。苦しさうに首を差延ばしてゐるのを、靜に背筋をさすつてやると、しばらくして氣を取直したが、吐く苦しみを忘れると同時に、富美子の手に縋つて泣き出した。

「あたしね、あたしね……」

むせかへつて言葉は途切れたが、

「たゞのからだでないのよ。」

とやうやく云つて、一際はげしく歔欷(すゝりなき)し始めた。波のやうに背中の起伏する度に、富美子の手に熱い涙が感じられた。

野邊地が泣きながらの話では、繼母からうるさく鐵工のところに行けと云はれた時、おもひ餘

つて醫學生の下宿に助けを求めに行つた事がある。その夜不覺にも泊つてしまつたのであつた。
「母にはいはれないし、その人に話すと、墮胎してしまへつて藥迄くれるんですもの。あたし自分で死んでしまつた方がいゝと思ふわ。」
野邊地は、身を震はせて富美子に縋りついて、何時迄も泣いてゐた。

十六

それつきり野邊地涼子は會社を引いてしまつた。健康勝れず靜養を要するものと認むといふ、醫者の診斷書を添へて、退職願が屆いた。高岡は頻に姙娠らしいと云つたけれども、平生おとなしい野邊地の事なので、誰もさうとは信じる者も無かつた。
「どうも弱さうだと思つた。胸の病氣でもあるのぢやあないか。」
「あゝあ、段々いゝのは居なくなつて、あとは高岡さんと江川さんか。」
「篠原さんは美人三人と、不美人二人を選拔したつていふが、これで事務員には、美人は不適當だといふ事が證明されたわけだね。」
口さが無いのが勝手な事を喋りあつたが、內心から寂寞を感じてゐた。

「篠原さん、大分女の人が減つたやうだが、もう補充しないんですか。」
など丶、冗談らしく訊く者もあつた。
「素晴しいシャンをつれて來て、君達を喜ばせてやらうと思ふのだが、何分支配人は極端な女事務員嫌だから、今のところ先づ見込みは無いね。殘つてゐる二人だつて、出て行つて呉れるものなら出て行つて貰ひたい位なんだ。」
憚もなくいふのが、何時とはなく二人の女の耳にも入つた。
富美子はつくづく女に生れた不幸をはかなんだ。殊に、自分は外の人とは違つて、一日も缺勤しずに、朝も誰よりも早く來て、熱心に仕事をし、男の社員には負けない積りでゐるのだが、ふしだらな同僚と一緒にされて、ゐてもゐなくてもいゝやうな扱ひを受けるのは口惜しかつた。十二月の取締役會には、社員の昇給の決議があるといふ噂だけれど、此の分では自分なんか見込みがありさうにも無い。若し一生獨身で、事務員を勤めたとしても、殆んど出世の途は開かれさうもない。よぼよぼのお婆さんになる迄、僅かな日給しか貰へないのであらう。そんな生涯に何の樂しみがあらうか。矢張り女はお嫁に行く外爲方が無いのかしら――と考へると、ふきりやうに生れた自分の不幸が、何よりも強く身を責めるのであつた。相變らず出勤はするもの丶、仕事に

も張合ひが無く、會社の空氣が息苦しく感じられて來た。

その矢先に、或日はゞかりの壁の落書の中に、かんにん出來ないのを發見した。男女の肉體の一部を描いたのだの、猥褻な會話だの、ふだんから見馴れたものにまじつて、鉛筆で書いた歌のやうなものがあつた。

美しき女は二人三人去り
　やがて不美子や一人殘らん

富美子はそれを見ると、憤りで胸がいつぱいになつた。力任せに書いたと見えて、唾をつけて拭くと、鉛筆の色は消えたが、白壁に喰ひ込んで居る痕は消えなかつた。涙が目頭に滲んで來た。やめてしまはう、やめてしまはう。今度こそはほんとに女中奉公をしても、會社勤なんかはしますまい。母親が何と云はうとも、うちのくらしに響かうとも、決してこんな侮辱をうけるやうな所には顏を曝しますまい。殊に、愚圖々々してゐるうちに、若しも高岡もやめるやうな事にでもなれば、最後にたつた一人殘る自分のみじめさ加減はない。その時こそは、愈々邪魔もの扱ひにされ、誰も彼もふきりやうな女として輕蔑するだらう。

永年事務員をしてゐたなさけなさには、つい目の前に迫つてゐる年末賞與の事も、ちらと頭を

かすめたけれど、そんな考へはいさぎよく振捨てた。

やめてしまはう、一刻も早くやめてしまひませう。さう決心した時、富美子は曾て心から面白いと思つた事は一日も無い此の人生を、一層忌々しく思つた。いつも自分は正しい道を踏んで來て居るのに、きまつていやなおもひをしなければならないのだ。それもこれも、ふきりやうに生れついた此の身の不運なのだと、堅く脣を嚙んだ。(大正十三年八月十八日)

兇刃

「けれども、喜の字の祝を機會に老朽者を馘首にするなんて、どう考へても理窟に合はないよ。社長が長壽の御祝をするんなら、食ふや食はずで永年働いて、無駄に年をとつた社員は、一生飼殺しにしたつていいぢやあないか。それをむざむざ馘首にするなんて……」

「しかし、退職手當がうんと出るんなら、やめられたつて惡くないぜ。毎日々々齷齪働いて、二十五日の月給日を待兼て居るよりは、樂隱居で釣でもして居る方が結構だぜ。」

「そりやあ樂隱居が出來るんなら勿論結構さ。けれども、うちの會社ではそんな事は望めないからなあ。」

「だつて、今度は特別の場合だから、まさかふだん通り給料積算額の一割なんて事は無いだらう。何とかいろをつけてくれるだらうぢやあないか。ねえ坂倉さん、さうでせう。」

まだ年の若い二人の社員は、先刻から仕事をそつちのけにして喋つて居たが、もともと雙方とも根據の無い想像に過ぎ無いのだから、結局鳬がつかなくなり、おまけに上役の思惑も氣になるので、一番部屋の奥の隅つこに机を据ゑて居る課長に聲をかけた。何とかして仲間に引入れて、

話題になつて居る退職手當の問題に據所（とりどころ）を與へて貰ひ度いと思ふのと、もうひとつには、成る可く仲間を多くして、怠けて居るのは自分達ばかりでは無いといふ安心を得たかつたのである。

「え、退職手當？」

庶務課長坂倉伴次郎は、猫背を一層まるくして、机の上の書類を檢査して居たが、苦々しさうな顔をあげて振かへつた。

「退職手當なんかどうだつて、君達若手には關係の無い問題ぢやあないか。それよりも職員錄の校正をはやく濟ませ無いと印刷が間に合はないぜ。」

持前の力の無い嗄（しやが）れた聲で釘をさして、又背中をまあるくして机の上に顔を伏せ、さも忙しさうに書類に目を走らせた。二人の下役は顔を見合せて苦笑したが、これもめいめいの仕事にとりかゝつた。

無雑作に下役の口をふさいでしまつたが、坂倉も實は聞耳を立てゝ居たのであつた。馘首になる社員に對する手當の問題は、他人事（ひとごと）では無かつた。此の幾月の間、彼の心を惱まし續けてゐる切實な問題だつた。

越後の片田舍から天秤棒（てんびんぼう）をかついで出て來て、一代のうちに此の國の富豪番附の三役に坐り、

銀行保險倉庫等を主な事業として、財界に素晴しい勢力を張つて居る川北平太郎も、七十七歳の祝をすると同時に隱居する事になつた。働きの荒いのと、辛抱強いのを特色とする北國人の中から、其地方色を強めた英雄型をつくれば、此の人こそ其の典型といはれて然る可きであらう。あらゆる慾望を、強い意力で抑壓し、たつたひとつの目的である貨殖に全精力を集中し、働いて儲けると云ふ一事に固い信念をもつて一生を捧げつくした。つぶれかゝつた銀行や保險會社を買收し、一度其の經營が自分の手に移ると、それ迄に築き上げた偉大な財力を背景とし、極端な經費の節約を斷行して、見事に自家の有利な事業の一つに加へる手腕は、到底他人に眞似の出來ないものだつた。自分自身數千萬圓の資産のあるじとなりながら、未だに綿服の外は身に着けず、物見遊山は一度たりともした事も無く、成上者には珍しく妾を置く道樂もしなかつた。彼にとつては、日に日に殖えて行く自家の資産を、多年机の上から放した事の無い手馴た算盤で、幾度となく當つて見るのが唯一無二の樂しみだつたのだ。

すべて其の徹底した彼の主義は、事業の上にも日常生活にも、明瞭にあらはれて居た。自分の經營する會社銀行には、一切專門學校出の者は雇はなかつた。算盤は彈けず、商機には暗く、大ざつぱで、頭が高く、一文にもならない理窟ばかりいひ度がつて、何の役にも立たない上、月給

は最初から高いのだから、川北平太郎の目から見ては、單に無用であるばかりで無く、全く邪魔ものに過ぎなかつた。何故世間の事業家が、あんなものを使ふのか了解出來なかつた。たつた一つ學校出の取得は、滅多に公金費消のやうな悪い事をしない丈だが、それも大きい算盤を彈いて見ると、たまに悪い事をする者が出るにしても、關係事業に從事する幾千人の給料の安いといふ事と比較すると、多寡の知れたつかひこみや拐帶位は何でも無かつた。あくまでも算盤の上から見て、給料の安い小僧上りに、學校出よりも得だつた。

二人の男の子も、甲種商業學校丈でやめさせて、それぞれ自家經營の銀行會社に勤めさせた。長女の婿だけは法學士だつたが、次女も三女も丁稚上りの社員にめあはせた。川北老人にとつては、娘が或家の園遊會で見染めた其の法學士の婿が、誰よりも一番氣に入らなかつた。學校の成績もよく、秀才だ秀才だと他人はほめるけれど、仕事をさせては何の役にも立たなかつた。溫良な人物で、讀書好きの婿は、もともと金儲をする人間では無かつたのだが、老人にして見れば、すべて人間の値打は儲ける事がうまいかまづいかできまるのだから、無駄な本ばかり讀んで、二言めには使用人の待遇改善が能率增進のもとだといふ人間なんか、顏を見る丈でも腹立たしかつた。十幾年間、不滿ながら銀行の常務取締役として働かして置いたが、歐羅巴の大戰爭が始まつ

て、不測の好景氣時代の出現した時に、あまりといへば臆病で、儲け得可き機會が如何に動きつつあるかを知らないのが忌々しく、遂に老人は婿を隱居させて、自分自身一切の指揮に任じ、巨萬の富を更に數倍にした。五十代の婿はそれつきり世の中に顔を出さず、大磯の海岸に日蔭の身をもてあつかふやうになつたが、七十餘歳の老人は、引續いて今日迄活動して來た。川北平太郎はさういふ人間だつた。

それが今度は喜の字の祝を機として愈々隱退し、事業は息子達二人の手に任せるといふのだ。どういふきつかけでさういふ氣になつたのか、事の經過を他人に話す事は一切しない老人の事だから、誰にもわからなかつたが、川北銀行、川北倉庫、川北生命保険、川北火災保険、川北同族會などの社員は、上は取締役の名前丈貰つて、實際は何の權能も與へられず、物質的にも酬いられるところの極めて少いのを不平に思つて居る連中から、下は昨日今日（きのふけふ）入社した若い社員、女事務員、小使給仕迄が、社長の隱退を心からよろこんだ。

永年、精力絶倫で、支配人級の仕事迄一手にやつてのけて居た老人は、自分の手足になつて働く人間の値打を、殆んど認めてゐなかつた。自分一人さへしつかりして居る間は、どんな人間だつて同じ事だと考へる事もある位だつた。從つて、月給も賞與も、他所（よそ）の銀行會社とは比べもの

にならないひどさだつた。その待遇が、老人の隱退と同時に、俄に改善されるであらうと、社員は何れも強い希望をいだいたのであつた。

殊に去年の暮頃から、誰がいひ出したのか、社長の喜の字の祝には、特に一般社員にも臨時賞與が出るといふ噂で、一同元氣づいた。寄ると觸ると、その臨時賞與が月給の何箇月分に相當するだらうといふ樂しい想像が一座を賑かにした。

川北老人の誕生日は、ほんとは十二月の末なのだが、寒い折柄殊に一年中の決算月に、隱居の披露でもあるまいといふので、年があけた三月の中旬に催す事に決定した。御殿山の邸宅で園遊會を催し、三日間劇場を借切つて多數の人を招待しようと云ふのであつた。その祝賀會の二日目には、社員も招かれるといふ事が、一層みんなを喜ばせた。永年の間、そんな催し事などは一度も無かつた丈、めいめいの期待は大きかつた。

ところが、最近になつて、社長の隱退と同時に、古手の社員の淘汰が行はれるといふ噂が又廣まつた。同族會の庶務課長坂倉伴次郎が、我身の事を考へて、安からぬおもひに惱まされてゐるのも、もとより此の馘首の噂の爲めであつた。

早く父親に死別れて、貧しく育つた坂倉は、高等小學を卒業すると直ぐに、川北銀行の見習に

雇はれた。あつちからもこつちからも呼びつけにされて、くるくる追使はれて居る傍、神田の商業夜學校に通ひ、卒業すると月給三圓の辭令を貰つた。見習で入つた時から勘定すると約四十年の俸給生活をして來た。永い間現金方として、銀行の窓口で指尖をなめながら札束の勘定をして居たが、つい數年前に同族會が設立されて、直接營業に關係の無い一切の事を取扱ふやうになつた。多年私心無く盡した効によつて、拔擢されて庶務課長に任ぜられたのだが、それは坂倉にとつてはよしわるしだつた。銀行部の會計ならば朝から晩迄札の勘定をして居ればよかつたが、同族會の庶務になつてからは、氣疲のするうるさい仕事が多かつた。市内の各所に持つてゐる川北家の地所家作の管理丈でも、なみならぬ仕事だつた。借地人でも借家人でも、圖太く構へてごてる奴が勝を制する世の有様となつて來ては、その苦勞は堪らなかつた。喧嘩面で無理をいふ奴のうしろには、弱者の味方をするといふ口實のもとに、いくらかにしようとする者もある。後日市會や區會の議員の候補者にうつて出る時の爲めにしようとする奴もある。そんな者の主張に一歩でも讓れば、老社長の怒りは忽ち彼の頭上で破裂した。さうかと云つて先方のいふ事に耳を貸さなければ、事務室でも應接室でも店頭でも構はずに怒號し、時には窓硝子の一枚二枚叩き割つて行く奴もあるのである。

新聞記者も苦手だつた。何時でもあだをする機關を持つて居る強味から、づうづうしさの止度が無く、廣告だつきあひだと入替り立替り押寄せて來る。無下に斷れば、きつとありもしない悪口を揑造して書立てるし、さうなると又社長の激怒を買はなければならないのだ。そんなら先方のいふまゝに金を出せばいゝかといふと、その時は一層手きびしく社長に叱責されるのである。

もう一つ彼の惱まされるのは物貰ひだつた。この方は新聞とは違つて、三圓五圓やる丈で充分なのが多かつたが、一錢たりとも無駄づかひを許し難しとする社長にとつては、太いステツキで脅したり、空涙で泣落したりする物貰ひは、硬派だらうが軟派だらうが、一切門前拂ひを喰はす可きだつた。働いて儲けるならば、どんな手段を用ゐても差支へ無いと云ふ信仰を持つて居る老人だから、働かないで他人の金で食はうとする者は、人一倍憎んだのである。世の中の一切の慈善事業をさへ、老人は心底から嫌つた。

さういふいろんな相手に對して、正直生一本で通して行く坂倉は、始終社長の御機嫌を損じ勝だつた。役柄もよく、直接社長から言葉をかけられる地位となり、月給も昔に比べると格段の相違となつたが、しかもなほ、汗臭い札の束を日に幾つとなく數へ數へて日の暮れる銀行の窓口の方が戀しかつた。學問こそ無いけれど、仕事ならば誰にも負けないと云ふ自信を持つて働いて居

た昔が忘れられないのであつた。それにひきかへて、今では勤人としての自分の値打に、深い疑を持ち始めた位である。

その矢先に、老朽馘首の噂が廣まつたので、五十を越した彼が、先づ我身の上かと怖れたのは無理も無かつた。若い社員が面白がつて口にする其の噂をきく度に、自ら顔に迄あらはれる不快の色を、かくす丈の意地も無かつた。今も今とてその不愉快な問題を聞かされて、坂倉は胸が暗くなつたのである。

「課長さん、此の方が是非とも社長さんに面會し度いと云つて、いくら斷つても歸りません。」

新參の兵隊上りの受附は、氣をつけの姿勢で、しかもひどく興奮した様子で、一枚の名刺を差出した。

面會人ときくと、すべての神經が變に震へるやうな氣のする坂倉は、暗い顔を一際暗くして名刺を受取つた。大型の安名刺には、護國立憲本黨幹事、日本皇道發揚會副會長、勞資提携協會顧問、社會政策卽時實行會委員、雜誌「正義」編輯長などゝいふ肩書をずらりと並べた神崎眞平といふ者だつた。坂倉は額の八の字を深く寄せて、

「困るなあ、こんな者を取次いでは。」

輕く舌うちしながら、健康さうにつやつやした赤ら顏の、融通のきかなさうな受附を見た。

「この名刺を見れば、物貰ひだといふ事はわかつてゐるぢやあないか。どうせ風ていもよくないのだらう。」

「はあ、社長さんは御出社になつて居りませんと斷りましたが、俺は物貰ひでは無い、國家の爲めに社長の意見を聞きに來たのだ、留守ならば出て來る迄待つて居ると云つてきゝません。太いステツキを持つて亂暴もしかねない男でして……」

「困るなあ、そんな奴を……」

亂暴もしかねない奴だからこそ玄關で追拂はなければならないのだ、それが受附の役目ぢやあないかと、無理な小言だとは知りつゝも、結局自分が應接しなければならない不愉快を思ふと、理も非も無く腹が立つた。

「爲方が無い、今行くから待たして置きたまへ。」

さう云つて受附を追拂つて、もう一度舌うちした。別に差迫つた用事があるわけでは無かつたが、何となく直ぐに立つて行くのは輕々し過る氣がしたので、机の上の書類を積み直したり、抽斗をあけて何か探すふりをしたりして、稍手間どつてから席を離れた。

一つのビルディングの右翼は銀行、左翼は保険會社が使用し、二階から上は貸事務所になつて居て、その管理も同族會の仕事だつた。坂倉の執務する部屋は一階の突當にあつた。扉をあけて廊下に出ると、玄關の受附のところに立つて居る大きな男の姿が見えた。坂倉はそれが癖で、胸の邊で揉手をしながら、つとめて愛想よく應對しようと様子には見せて居たが、心の中では不安心で動悸が高かつた。

「お待たせ致しましたどうぞこちらへ。」

相手が肩をいからして、さも怒つたやうな風をして居るので、なんでも叮嚀に扱ふのが一番いいのだときめてかゝつた。

まがひ大島の襟の汚れたのに、セルの袴を穿き、黒木綿の紋つきの羽織を着た男は、服装には似合はない雪駄ばきで、自然木の太いステツキをついたまゝ、横柄にうなづいて、導かれるまゝ應接室へ通つた。

「社長に御面會といふ事で御座いますが、生憎今日は出勤して居りませんので、御用件は私が代理に承つて置きます。」

いんぎんに椅子をすゝめて、坂倉も腰を下した。

何が何でも、社長にあはせないのを怒つてゐるのだと見せなくてはならない相手は、高い所から下の方をのぞむ時の昂然とした態度で椅子に背をもたせかけながら、

「社長が出社してゐなければ、出て來る迄待ちませう。」

と、寂のある太い聲で、多少嘲りの調子をふくめて云つた。

「ところが近頃少々不快で、鎌倉の別荘の方へ行つて居る事が多いものですから、果して今日出社致しますか致しませんか……」

「はつはつはつはつは」

たしかに不自然な誇張――たとへば芝居の荒事に類するやうな昔からのあり來りの型で――した態度で全身をゆすつて笑つた。

「そんな極り文句はよしたまへ。出社するかしないか、別荘に行つて居るか居らんか、本宅へ電話をかけてきけばわかる事だ。又果して別荘に行つて居るのなら、こつちから鎌倉迄行つても構はん。」

單に聲量丈でも、嗄れた咽喉の細い坂倉は、力のある相手の聲に對抗する事が出來なかつた。つとめて平氣をよそほひながら、内心自分の足下の脆さに參つて居た。うつかりした事を云ふと、

愈々やつつけられさうな形勢なので、思はず伏目になつて沈默したが、その氣まづさを紛らす爲めに、衣囊から朝日の箱を出し、一本ぬいて火をつけて、卓の上の厚硝子の灰落しを、相手の方へ押してやつた。

相手の男も袂からバツトを取出して、莫大小のシヤツの汚れた手首をあからさまに、大きく煙を吹いた。しばらく、二筋の煙が室内に立昇つてゐたが、何時迄たつても切りがないので、

「いかゞでせう、私も役目として御話を承つた以上は、間違ひ無く社長へ傳へますから、御用件を一通り伺はせては頂けますまいか。」

と坂倉は腫物に觸る氣持で口を切つた。

「いや、直接社長に面談しなければ要領を得ない事です。國家の爲めに、又社會民衆の爲めに、我國の大富豪川北平太郎翁に一肌脫いで貰はなければならんのです。」

吸ひ盡した煙草を灰落しには入れず、リノリウムの敷いてある床に叩きつけるやうに捨てゝ、荒々しく蹂躙つた。一度口をきけば、必ずさういふ激越な調子になるのであらう、目を光らして威たけだかになつた。

社長でなければ話なんかしてやるものかといふ氣勢を見せはしたものゝ、思はず乘出して喋り

出した自分の調子に引入れられて、自然と要求を切出した。
　それによると、此の男の同志が豫々國家社會の爲めに身命を賭して盡さうといふ目的で結束した社會政策即時實行會が、愈々積極的に活動しようと云ふのである。最近帝國內外の狀勢を見ると、外には日米問題支那問題があり、露西亞は革命の爲めに帝政が覆へされ、しかも東洋の諸國を赤化しようと旺んに運動し、我國內にも勞農露國かぶれの國賊があらはれて來た。內には資本家と勞働者の間にわだかまる闘爭があり、富者と貧者の生活のあまりに甚しい懸絕が、人心を益々荒ましめた。これを救濟する爲めの社會事業に、識者は一致して盡力すべきであるのに、しかも熱情をもつて事に當る人間は一人も無い。其處で社會政策即時實行會は、先づ蹶起して、安閑として長夜の眠をほしいまゝにして居る富豪を說いて覺醒させ、國家の爲めに淨財を寄進せしめようといふのだ。
　あらん限りの新聞語をつかつて、社會政策即時實行會委員と稱する男は、國家の危機を力說した。
「今日此の危急の秋に際し、富豪にして先づ目覺めなければ、日本は第二の露西亞となる外はない。」

演説口調の自分の聲に醉つて、毛もくぢやらの拳骨をかためて卓を叩いた。

坂倉は、何時暴行を働くかもしれない相手の權幕に少なからず辟易しながらも、かういふ種類の脅かしで金錢を強請する遣口には幾度も出喰してゐるので、肚の底には存外くみし易しとする心持もまじつて居た。せいぜい天下國家の救濟策を喋らせて置いて、あとで二圓か三圓包んでやればいゝのだと思つて居た。たゞ其の結着に到る迄に、亂暴を働かれるのが怖れるところだつた。

「其處で貴方がたの御計畫は。」

「計畫は大にある。先づ失業者救濟の目的で職業紹介所を開設しなければならん。哀れなる勞働者の爲めに宿泊所を提供しなければならん。無料診察所、人事相談所の設置、又將來の國民の士氣を涵養する爲めには柔劍道の道場も必要です。計畫は此通りあまりあるが、たゞ之に要する資金が一文も無い。はつはつはつはつはつは。」

椅子の背にもたれかゝつて、全身に波を打たせて哄笑した。

「つまりは天下の富豪連中に贊成を求め、振つて出金して貰はうといふのだが、吾々の目して最も頑冥度す可らずとなすのは卽ち川北平太郎其人だ。一代にして數千萬圓の富を致しながら、曾て百圓千圓の寄附金さへした事は無いだらう。吝嗇貪慾私利私慾を事とする我利我利亡者だ。惜

むべし、今日の時勢を知らん。今にして反省せざれば、何時何時天誅が下るかもしれんぞ。はつはつはつはつは。」
又しても卓を叩いて哄笑した。
坂倉は、役目としても一刻も早く此の男を歸さなければならなかつた。社長はほんとに出社してはゐないのだが、この大きな聲で傍若無人にまくし立てられると、萬一支配人の耳に入つても、自分の手腕の無い證據にされて、愈々御覺えが目出度無くなるだらう。彼は又馘首の問題に結びつけて考へても見た。さうすると、川北翁を罵倒する相手の言葉にも多少同感出來るところもあるやうな氣もした。ほんとにあれ程吝嗇な人間も少いものだと思つたのである。
「いや、お說は一々御尤もです。」
坂倉は二本目の煙草を枷にして、煙に顏をしかめながら、いくら位包んでやつたらおとなしく歸るだらうかを考へてゐた。
「社長が出社致しましたら、必ず御來訪の主意は傳へます。」
「主意を傳へるばかりではいかんですよ、大に出して貰つてくれなくては。けちんぼの川北平太郞一世一代といふやつをね。」

「さあ、それがむづかしいんです。御承知の通りうちの社長は自分の事業に沒頭しきつてゐる人でして……」

「それがいかんのだ。單に私腹を肥す爲めの事業が何んだ。」

凄い目つきをして、坂倉を叱咤する態度を見せた。

「吾々は金を貰つて自分の腹を肥さうなどゝいふ考へは毛頭無い。國家社會の爲めに盡さうとする誠意の外に何も無い。いくら說いても覺醒しない富豪の如きは、吾々の命を賭しても懲罰してやる。」

激越した調子の聲が震へて、その男は涙を流しさうな樣子に見えた。坂倉はあわてゝなだめるやうに、

「いや、私も出來る限り社長を說得しませう。」

と、狂人のやうな態度もある相手にびくびくしながら云つた。

「しかしその出金は大凡どの位致せばよろしいのでせう。」

五十圓と云つたら五圓、百圓と云つたら十圓もやつて追拂はうと思つた。

「さあ吾々にとつては多い程結構だが。少なくとも百萬圓は出して貰ひ度い。」

「百萬圓？」

事も無げにいふ相手の調子に一層吃驚して、坂倉は順序立てゝ物事を考へる頭を失つた。何といふ出鱈目な事をいふ奴だらう、貧乏浪人の空理窟で社會や國家が救濟されて堪るものか、そんな大法螺に對して金を出したところが、どうせごろつきの酒代になつてしまふ丈なのに、いくら大きく吹かけるのが手だとはいへ、百萬圓では突飛過ぎて返事も出來ないと思つた。彼は默つて相手の顏を見守つた。

「百萬圓がなんだ。川北平太郎の身代から見れば吾々の懷の一圓にも當るまい。既に日本の富豪でも、百萬圓を投じて學校を建てたものもある、美術館を建てたものもある、慈善病院を建てたものもある。未だに何等の善行美擧の無いのは川北平太郎唯一人だ。」

又卓を叩いて、國家の危機と富豪の義務を說かうと、大に氣構へたところに、扉をあけて給仕が入つて來て、坂倉に耳打ちした。

「よしよし、今直き行くから一寸待つて貰つて呉れ。」

ほんとは何の用事も無いのだけれど、風のよくない面會人があつて、餘り長引く時には、さも急用がありさうに給仕を寄越す手筈になつて居るのであつた。

「甚だ相濟みませんが外にも一寸面會を要する人がありますので……」
坂倉は、給仕が突然入つて來た爲めに氣勢をそがれた形の見える相手の隙に乘じて、手取早くかたをつけようと思つた。
「いづれ社長にはぢきぢき申傳へますが、それにしても百萬圓では一寸話のしやうがありませんですなあ。」
如何にも冗談めかした親しさを見せて、相手の景色をうかゞつた。
「はつはつはつは、貴方の目から見れば百萬圓は大金かもしれんが、川北家の財産の十分の一にも足りんのでは無いですか。殊にその金も吾々が貰つて吾々が使ふのでは無い。國家社會の爲めに、死金を活かしてやらうといふのだ。一體君はいくらあつたら有効に社會事業を實行する事が出來ると思ふのだ。」
「さあ、さう云はれると申しやうもありませんが、その事業の費用全部を出すといふ事は難かしい話と思ひますから、何とか相談をして、是非とも多少の事をして、資金の一部に加へて頂く丈の事は私が取計らひませう。」
「ふうん、多少といふのはどの位ですか。」

相手は明かに嘲弄の語調できゝかへした。

「私一存では申兼ますが二十圓か三十圓の事なら、何とかなるかと思ひますが……」

「何んだと。二十圓か三十圓だ？　馬鹿ッ。」

坂倉は頭上で爆發するやうな怒罵を聞いて目がくらくらした。とたんに相手は立上ると、卓上の厚硝子の灰落しをつかんで力まかせに床の上に叩きつけた。すさまじい音をさせて、粉微塵に砕けた。

夕方、坂倉は浮かない顔色で、毛糸の襟巻に細い顎を埋めて會社を出た。二月初旬の冷い風は容赦なく眼と鼻に沁みて、涙や水鼻の出るのが愈々氣を腐らせた。

「俺もたうとうくびきられるのか。」

と、坂倉は丸の内のひけ時の人ごみの中を、肩身の狹いおもひで歩いて居た。

考へれば考へる程今日の出來事は馬鹿氣て居た。國家だ、社會だ、民衆だと、大げさな法螺を吹いたあげくに、殆んど問題にもならない金額を強請し、返答か氣に喰はないと云つて滅茶々々

にあばれ出した。窓硝子を突破り、椅子を踏折り、しかも大手を振つて立去つた。餘り勢のはげしさに手のつけやうも無く、さりとて自分の身をかばつて逃出す丈のゆとりも無く、部屋の一隅に立すくんで居た。物音に驚いて、外の事務室から馳つけて來た澤山の社員も、あつけにとられて見てゐた。衆人環視の中で、社會政策即時實行會委員と名乗る神崎眞平は、得意の豪傑笑をして、肩で人々を押分けて廊下に出た。西日にあかるい玄關から、裄の短い紋つきの後姿は、眞直ぐに往來へ出て行つた。

坂倉は直ぐに支配人室へ呼びつけられて、一部始終を質問された。相手は如何にも手のつけやうの無い暴行者なのにも拘らず、支配人は應接者の落度として咎めるのであつた。庶務課長の任務から、平素如何なる種類の人間に接しても、圓滑でなければならない事をくどくど說いて、斯ういふ亂暴を働いたのも、要するに此方の態度にも行届かない點があつたからだと云ふのであつた。

「殊に常とは違つて、社長の隱退と同時に、多少社員の淘汰も行はれる筈になつて居る矢さき、何事にも落度の無いやうに心懸けて貰はなくてはならない。第一君の一身にもかゝはる事だから。」

最後に云つた支配人の言葉が、止をさすやうにこたへたのであつた。

風と埃が入つて涙の出る目の中に、四十年の辛抱が、忌々しく映つた。詰襟の服を着て、通達簿を抱へて事務室の中を馳廻つて居た十四五の頃の事から、一生に一度は百圓の月給取になり度いといふ事と、どうかして千圓の貯金をし度いと云ふ願望をもつて、人一倍身を惜まず働き、一年に二圓上り、二年に三圓上るやうな乏しい月給生活の長い過程を踏んで來た半生が、口惜しい程はつきり回顧された。三十三の時にめとつた妻との間に五人の子供が生れ、母親は今も達者で來々年は七十七になる。むかしに比べてはとり高も多く、百圓の月給取といふと此上も無いぜいたくが出來るものと思つてゐたが、遙かにそれよりは收入は多いけれど、物價の上り方は更に著しく、子供達を學校に通はせる丈でも大變なかゝりだつた。稼ぐ人間はたつた一人で、飯を食ふ人間の數は多いのだから、つひぞ氣樂に月を越した覺えも無い。生來の引込思案で、人づきあひもしないし、何の贅澤をする氣も無く、儉約々々と年中夫婦が心懸けながら、それでも貯金らしい貯金も出來なかつた。それが月給取のあたりまへだと云つてしまへばそれ迄だが、それを辛抱して來るには、華々しい事はなくても一生職にはなれる事はあるまいと云ふ期待があつての事なのだ。それなのに、つひぞ今迄は無かつた社員淘汰が行はれて、自分のやうな古手の社員が馘首

になるとすると、たとへ多少の養老資金を貰つたからつて、これから先の生活は立行かない。もう此の年齢になつては、他所では雇つてくれないし、商賣を始める才覺は無いし、つまり居食ひで食ひ減らすばかりであらう。たつた一人の息子が銀行に四十年も勤めてゐると云ふ事を唯一の誇としてゐる老いたる母親の事も、坂倉には一通りならず考へられた。もう直き七十七になるとはいふもの〻、今年七十七の祝をする社長と比べて、何たるみじめな事だらうと思つた。そして又自分自身の老い果てた姿は、一層悲慘なものとして想像された。うまい酒さへ、飲めなくなるのだと思ふと、身にしみて世の中は寒かつた。彼は足早に、酒の香をおもひながら歩いた。

大酒の爲めに早死をしたと云はれて居る父親の子と生れて、坂倉がたつた一つの樂しみは、盃を手にする事だつた。それとても餘裕の無いくらしの中だから、毎晩晩酌を傾けるといふのでは無く、飲み度いと思ふ心を抑へて、一週間の終りの土曜日の晩に、二合か三合うちで飲むか、稀には小料理屋の暖簾をくゞつて、陶然とする位のものだつた。今朝もうちを出る時に、晩には行きつけのうちで飯を濟ませて來ると斷つて來た。ところが思ひもかけない騷動が起つたので、樂しい酒の味が害された氣もしたが、又一面からは、こんな氣の腐つた時には酒に限ると考へて、結局神田迄歩く事にしたのだ。

二三年前に人に連れられて行つてから、時折一人で出かける飮屋があつた。小川町と須田町の間の細い路地の中で、狹い土間に緣臺を据ゑ、いさみな亭主とおとなしいかみさんが甲斐々々しく働く、飮心地のいゝうちだつた。坂倉は其處の緣臺に腰を下ろして、初めて安樂な呼吸をする事が出來た。

「よう、いらつしやい。」

一段高い板場で、先客の爲めに刺身をつくつて居た亭主は、豆絞の手拭で向鉢卷した角刈の頭を一寸下げた。

「坂倉さん、どうしたんです。ここんとこ暫く來てくれなかつたねえ。」

「貧乏ひまなしさ。」

ありふれた挨拶をしながら、常連として言葉をかけられたのが惡くない氣持だつた。

「お待遠さま。何に致しませう。」

丸髷のおかみさんが、お銚子を持つて來てあつらへを訊いた。

「おさしと蠣酢。」

「おい來た。」

と亭主が受けて、物凄い程脂肪の乘つた鮪に刺身庖丁を入れた。

時節柄鍋の御客が多く、貝類の煮詰まる匂と、火氣のほてりで、むうつとしたところに、一杯二杯酒がはひつたので、忽ち襟巻も外套も邪魔になつて來た。餘程からだのいゝ時で、やうやく四本を定量とする坂倉は、二本目のなかばを過る頃は、晝間の不愉快な出來事もすつかり忘れて平生黃黑い顏もぽうつと紅味を帶びて來た。

さうなると側の緣臺で、さかんに蛤鍋を突ついて居る小商人風の二人連が、面白さうに芝居の話をして居るのさへ羨ましかつた。しきりに舊派の芝居と澤正一座との優劣を論じて居た。若い方のは、時代の好尙の移りかはりを說いて、中車や羽左衞門の芝居よりも、勇壯活潑なる澤正の芝居の勝つて居る事を、醉拂ひ一流のくどい調子で繰返して居た。もう一人のは喋る事が不得手と見えて、舊派の方が格段に立派な藝だといふ堅い信念は持ちながら、舌戰では始終壓され氣味なので、脂肪の浮上つた赤い顏を坂倉の方へ向けて、

「ねえ旦那、羽左と澤正を比べて御覽なさい。灘の生一本と地酒の違がありますさあ、ねえ。」

と應援を求めた。坂倉は生れてから芝居といふものは、銀行の係々で催す忘年會の時、その當時の係長がきちがひで、たつた一度見たきり二度と足踏みした事も無かつたから、まるつきり何

もわからなかつた。しかし、その時の氣分で、
「そりやあ灘の銘酒と地酒とは比べものになりませんよ。」
と酒の方を受けて答へた。
「はゝゝゝこいつあ弱つた。矢張いけねえかなあ。」
澤正贔屓はいゝ機嫌で、廣い額を叩いた。
三本目のお銚子も殘り少くなつた頃は、坂倉は常にも増して醉つた。醉ふと眠くなる癖が出て、ふらふらしては又氣がついて盃をなめて居た。その間の無念無想ともいふ可き境地が、此の世の中の彼が樂しむ唯一のものであつた。
「おかみさん、もう一本貰ひませうか。」
もう十分だとは思ひながら、やめられないで、空の德利を振つて見せた。
「坂倉さん、もうよした方がよござんすよ。大分虎だぜ。」
亭主は心安だてに口をはさんで、かみさんの方に手を振つた。
「いゝよ、もう一本きりだから。」
坂倉にとつては、亭主の止めたのが嬉しくて、どうしても欲しかつた。

四本目の御銚子が來て、とくとくと盃についだのを、口のところ迄持つて行つた時、入口の障子をあけて、はひつて來た男があつた。一目見て坂倉は、手にした盃を取落しさうになつた。黑木綿の紋附の肩を怒らして、ステツキで土間を突ついて立つて居るのは、晝間亂暴狼藉を極めた社會政策卽時實行會委員に違ひ無かつた。坂倉は身をちゞめて、盃の上に顏を伏せた。

「滿員か。一杯飲まして貰ひ度いのだが。」

濛々と湯氣の立昇るのを見ながら、躊躇した樣子だつた。

「そこんとこにかゝりますよ。」

何も知らない亭主は、坂倉の腰かけて居る眞向(まむかふ)の緣臺を指さした。

「相濟みません。」

おかみさんは坂倉に挨拶して、新客の爲めに食臺を淸めた。

「やあ、失敬します。」

忘れもしない寂のある太い聲で、食臺にまともに向つて坐つた。

「酒を熱くして呉れんか。それから靑柳(あをやぎ)だ。」

下地がはひつて居るらしく、物腰の愈々荒いのも、坂倉を畏縮させる事であつた。

「お待遠さま、お熱いの。」
「いかん、いかん、こんなちひさな物ではいかん。コップを貸して吳れ。」
とくとくとくと、熱燗の酒をなみなみとついで、一息に飲干した。
「うまい。かはりをくれ。」
とんとコップを臺の上に置いて、大きなげツぷをした――とたんに、彼は坂倉を認めたのであつた。
「いよう、課長さんですな。」
聲をかけられて、今迄ちらちらと上目づかひに形勢を盜見てゐた坂倉も、默つてはゐられなくなつた。
「先刻程は……」
と低い聲で云つて苦笑した。最初此處にやつて來られた時は、自分の後を追かけて來て、亂暴の續きを演じるのではないかとびくびくして居たのだが、存外上機嫌な相手の樣子を見て安心した。
「先刻程はか。はつはつはつはつはつ。」

すべての客が振向いて見た程の高笑ひをした後で、第二のコップを干した。

「いや、失敬しましたよ。許してくれたまへ。何も課長さんに對して憤るところは無い。君としては忠實に役目をつとめようといふ外に他意無いのだから爲方が無い。たゞ我輩の不滿に堪へんのは、天下の富豪川北平太郎が、曾て有益なる公共事業に、一厘一文も不淨の富を割かん事だ。」

例の激越した調子で滔々とやり始めて、幾度となく拳骨で食臺を叩いた。さうして、又國家の危機に目覺めないで、徒らに私利私慾に沒頭して居る富豪の怪しからなさを、全くの演說口調で述べたてた。

「ヒヤヒヤ、贊成々々。」

外の食臺にゐた醉拂が、冷かすやうに拍手した。

「どうです、斯ういふところで、相ともに手をとつて酒をくむも亦快ならずやさ。」

すつかり悄氣て、冷めたくなつた盃を御義理でなめて居る坂倉に、又飲干したコップをさした。

「いえ、私はもういけません。第一そんな大きな物では堪りませんよ。」

「そんならその盃で飲んでくれたまへ。我輩がお酌しよう。」

いきなり德利をさしつけられて、坂倉は拒む事が出來なかつた。たらたらと溢れる迄つがれた

のが無駄に散るのを怖れて、あわてゝ盃に脣を持つて行つた。

「さあ、靑柳が煮えましたぜ。ひとつ共食ひとやつて下さい。はつはつはつは。」

自分が先づ頬張つて、こつちにも食へと勸められると、坂倉は矢張拒めなかつた。うつかりいやだとでも云はうものなら、忽ち鍋が飛び德利が割れる騷動が起りさうでしかたが無かつた。あたりの客も段々減つて、何となく更けた感じがして來た。機會があつたら逃げよう逃げようと思ひながら、すゝめられると斷れない盃を重ねさせられて、いつたん醒めかゝつた酒が、又全身に湧くやうに廻つた。怖ろしい奴だと思つてゐた相手も、全く他意無く上機嫌なのだとわかると、それ程びくつく事も無くなつた。坂倉は遠慮無く先方の馬鹿鍋に箸を突込み、此方から盃をさしてもやつた。

「愉快だ。大に愉快だ。敵の端くれだと思つてゐた奴も、一緒に飲んでみれば友達だ。兄弟だ。共に陛下の赤子なんだ。さあお互に握手しよう。」

節くれ立つた手を差延ばして握手を求めた時、袖が引かゝつて、未だ滿々と酒を湛へたコップが、ひとたまりも無くひつくりかへつた。

「しまつた、おかみ、折角のやつをこかしてしまつた。直ぐにかはりをくれ。」

「もうよした方がよかありませんか。」

客の注文が途絶(こだ)えたので、自分も一杯ひつかけてゐた亭主が、いやな顔をして口を入れた。

「おやぢ、まあそんな事をいふなよ。俺は嬉しくつて堪らないんだ。いゝか。今日の晝、此の課長さんのところへ、此の俺が金のむしんに行つたと思へ。型の如くお斷りだ。そこで一寸荒つぽい手を見せてやつた。いゝか。その二人が、此處にかうして酒を飲んでるんだ。愉快ぢやあないか、嬉しいぢやあないか。」

彼は坂倉の手を無理に握りしめたが、感極まつたのか、凄い眼の中に涙がいつぱいたまつて、相好が柔和になつた。

坂倉は手のつけやうが無くなつて、衣嚢(かくし)に煙草を探つた。朝日の袋の揉みくちやになつたのが出て來たけれど、一本も中身は殘つてゐなかつた。

「煙草ですか。これでよかつたら喫(の)んで下さい。」

バットの箱を二つ鷲づかみにして差出した。

「難有(ありがた)う。」

さう云つて受取つた時、箱と箱の間にはさまつて居た皺くちやの紙片が落ちた。

「おや、こんなものがありましたよ。」

「なんだ、これは。」

受取つて開いて見たが、

「はつはつはつはつは、洲崎の女郎から來た戀文だ。讀んで御覽なさい。これ亦可憐ですぜ。」

叮嚀に皺を延ばして、是非とも讀めといふやうに、坂倉の目の前に突きつけた。

お寒さの折柄おんもと様にはいかゞおくらし遊ばされ候や御伺申上候、近いうちに是非々々一度來て頂き度戀ひしく戀ひしく御待申上參らせ候

それから今度來る時には此間お約束の品きつと忘れないでね、忘れると承知しないとさ先は萬々お目もじの上あらあら可祝

花子拜

眞さま御前に

否應無しに讀まされて、坂倉は苦笑した。

「英雄色を好むですか。」

「いや、恐縮々々。」

相手は益々相好を崩して笑つた。

「お約束の品つていふのが何んだか知つてますか。それがメンソラタムつていふ藥なんだ。鼻が詰つて氣持が悪いといふから、そんならメンソラを塗るに限るつて敎へてやつたら、今度來る時持つて來てくれといふんだ。」

すつかり悅に入つて、拳骨で食臺を叩いて、

「花子拜も愉快でせう。本名ですぜ。」

と心底からをかしさうに哄笑した。

貰つて吸つた煙草の口元迄灰になつたのを捨てるきつかけで、坂倉は一足先に歸らうと思つた。

「おかみさん會計。」

洲崎の女からのだといふ手紙をかへして、

「私は御先に失禮します。」

と多少びくびくしながら云つたが、相手は意外にも、

「さうですか、それは殘念だなあ。」

とおとなしく承知した。

自分丈の勘定を拂つて、もう一度挨拶をして坂倉は緣臺の腰を上げた。

「課長さん、待ちたまへ。」

障子をあけておもてに出ようとすると、後から呼止めて、危ない足つきで立上つた。

「まあ、おあぶなう御座いますよ。」

おかみさんはどうなる事かといふやうな心配皺を額に寄せて、倒れさうなのを支へた。

「大丈夫だ。お見送を兼ねて小便をして來る。」

振切つて坂倉の後からついて出た。

「課長さん、僕を忘れてはいかんぜ。もう二度と君に迷惑はかけない。今後は斷然社長に直談判だ。はつはつはつは。」

と例の笑聲を路地いつぱいに響かせながら、他所の家の塵芥箱に音高く放尿し始めた。

「左樣なら。」

坂倉は口の中で云つて、逃出すやうに足を早めた。路地の出口でふりかへつて見たが、大男は未だ暗い中に立ちはだかつて、小便をしてゐた。

翌日の日曜は、宿醉の氣味もあつて、坂倉は縁側の日當りに寢そべりながら新聞を讀んで居た。土曜の晩に酒を飲むのと同じく、日曜は終日新聞を讀暮らすのが永年の習慣だつた。

朝飯もうまく無く、變に體が疲れて居た。霜解の小庭から縁側へかけて、陽炎の立つぽかぽかした暖かさに、うつらうつらして居たが、午後になつて日ざしが弱ると、急に底冷の氣味になつた。部屋の中に引込んで火鉢に噛りつかうかなと思ひながら、身を起すのがものうくて愚圖々々してゐた。

おもてに威勢のいゝ號外賣が、やかましく鈴を鳴らして怒鳴つて來た。

「あなた、號外買ひますか。」

臺所で何かしてゐた妻が、甲高い聲で訊いた。

「あゝ、どうでもいゝよ。」

どうせ下らない號外だらうとたかをくゝつて、不精な返事をした。

「買はないでもいゝんですか。買ふんでせう。」

新聞好のふだんを知つてゐるので、妻は念を押しながら、子供をおもてに出してやつた様子だつた。餘計な事をしないでもいゝのにと、坂倉はあくびをかみしめて居た。

「あなた、大變ですよ。」
間も無く、血相を變へた妻が濡れた手に號外を持つて馳けて來た。
「社長さんが殺されたんです。今朝……」
あまりの事に坂倉は、飛起る程緊張した心持にはならなかつた。ほんとだと思はないで、仰向に寢たまゝ、妻の手の號外を取つた。「川北平太郎翁刺さる」と大きい活字で組んで、「今日午後一時自邸にて卽死、犯人美事に割腹」と小標題が置いてあつた。
それによると、近く七十七歳の祝をしようといふ老人は、偶々面會を求めて來た見知らぬ男に社會事業の爲めに出金を強請され、之を拒んだところ、相手はやにはに短刀を拔いて、たゞ一刺に突殺し、自分も其場で割腹して死んでしまつたといふのである。坂倉が驚いたのは、その犯人は社會政策卽時實行會委員神崎眞平だつた。
號外は、詳細を夕刊で報道すると書いてゐたが、最後に犯人の袂から出たなかみの乏しい財布の中から、女の手紙のあらはれた事を記し、約束の品を持つて來てくれといふのを見ても、遊與費に窮した結果の強請であらうと附記した。
坂倉は茫然として、號外の上に落した目を見張つたまゝ動かなかつた。いろいろの事が、ごち

やごちやに頭の中をかけ廻つた。昨日の事はまるで夢のやうだつた。神崎の存在も、自分自身の存在も、現實のものとは受取り惡い事のやうに考へられた。大それた事をやつた男と、盃のやりとりをし、一つ鍋のものを突つき合つて食べた光景は、どうしても我身の上の事では無かつた。

「あなた、どうなさる。御殿山の御邸に行かなくてもいゝんですか。」

傍の妻に聲をかけられて、俄に氣が付いて起上つた。

「兎に角直ぐに出かけよう。」

「では靴を磨かなくちやあなりませんねえ。」

妻は、亂れた足取りで、玄關の方へかけて行つた。心の平靜を失つて、自らかけ足になるのであつた。

「いつたい銀行や會社――川北家の事業は如何なるだらう。」

洋服に着かへながら、坂倉は矢張り平生の自分の生活を支配してゐた事に考へ及んだ。喜の字のお祝もおじやんになつたのかと思ふと、それにつゞいて老朽淘汰の取沙汰も、共に立消えになるだらうといふ考へも浮んだ。

「何しろ斯ういふ時にはおちつかなくてはいけない。」

自分で自分をいましめながら、妻が靴を磨くのを待つ間と、衣嚢に手を突込んで煙草を出した。すつかり忘れてゐたが、昨夜神崎の持つてゐた二箱の中の一つを貰つたものと見えて、それは彼がふだんは用ゐないバツトだつた。なんとなく薄氣味の惡い氣もしたが、一本ぬいて火をつけた。（大正十三年十一月二十一日）

# 鳩——おとぎばなし——

「うちには鳩が二羽ゐるんですよ。」

博士は時々人しれず、此言葉を口の中でつぶやいて微笑し度い心持になる。それは年若い二度目の妻の口から聞かされた最初の言葉だつた。

その時は、あんまり思ひもかけなかつた事だつたので、ちよつと意味がうけとれなかつたが、全く手飼の鳩の話をして居るのだとわかつた時、いきなり子供らしい顏を兩手で引寄せて、ちひさい割に厚ぼつたい苺のやうな脣を吸つてやらうかと思つた。しかし博士には、それを行爲にあらはす丈の若さが失はれて居た。びつくりして身を縮めるのを、無理にもぎゆつと抱締めて、恐らくはこれが最初の接吻を強ひてやつたら、あの苺の脣は、更に濡色を增すだらうと想像しながら、濃い葉卷の香を樂しんだばかりであつた。

最初の妻に捨てられてから、十五年の完全な獨身生活を續けて來た博士が、もう一度結婚しようといふ氣になつたのは、四十を越してから、俄かに孤獨の寂しさを深く感じて來た爲めであつた。亞米利加のギツディングス教授に直接教を受けた社會學專攻の學者として、淺からぬ學識は

認められて居ながら、天性名利に淡いのと、文章を作る才能を缺いて居る爲めに、世間的には名の聞えない方であつた。文章が下手だといふのは、頭腦の中には與へられた問題について有餘る材料を持ちながら、それを限られた紙の上に、整然と記述する技能を持合せて居ないといふ事である。歸朝當時、二三の新聞や雜誌に頼まれて發表した論文も、勘所のぴたりと來ないもので、徒らに冗長な印象を殘したばかりだつた。自分でも此の弱點を知つて、それつきり學識を示す場所を講壇に限つてしまつた。

世間的にははなばなしい名聲を擧げず、うちに居ては讀書以外の何事にも感興を持たない良人にあきたりない心の寂しさから、夫人は家に出入する學生の一人と、たゞならぬ關係に陷つた。學生に對する戀といふよりも、良人に對する不滿の結果だといふ方が當つて居る。夫人は悔いた。しかし、學生の方は眞劍に熱情をもつて迫つて來る。夫人は、何も知らない良人に對して、ゐたたまれなくなつた。二人は逐電したのである。

年と共に、博士の身邊は暗くなるばかりだつた。一週間に三日學校へ通ふだけで、その外は一切外出しなくなつた。役人を勸めて、局長級迄出世した父の殘した財産は、とるにも足りない學校の俸給を補つて、安樂に暮して行けるだけあつた。けれども、衣食住一切の事に何の好みも無

い人間の生活は、みすぼらしい迄簡單だつた。家事を切廻す婆やには、何をしても喜びもしなければ苦情も云はない主人の無關心が物足りない位だつた。朝は麵麭（バン）と珈琲ですませ、二食主義者なので晝の世話は無く、夜は一杯の葡萄酒を藥のやうに用ひるばかりで、分量さへ必ず二ぜんときまつて居るのを、默々として食べた。着物は大概洋服を用ひ、むかし外國で作つたモオニング・コオトを、今も平氣で身につけて居た。一日中洋風の書齋に籠つて讀書し、時折庭に出る事があるばかりで、學校へ行く日の外は、門の外に出る事は殆んど無かつた。のんだくれの亭主に散々いぢめられたあげくに、子供にも先だゝれて、絕望的に浮世をあきらめてしまつた、ひねくれ者の婆やは、主人の生活の一切を、冷かに、嘲笑をさへまじへて默視して居た。

　親類の者も何時の間にか足踏をしなくなり、訪れる客も殆んど無かつた。此の數年間に、時折たづねて來るのは、同じ學校で四十年一日の如く英語を敎へて居る老いたる講師だけだつた。老講師は旣に七十近い年配で、永年病身の妻と、不良少年の息子と、藪睨（やぶにらみ）の娘の爲めに苦しんで來たが、妻は死に、息子は滿洲に渡つたきり消息が無くなつて以來、靑山墓地のはづれにある金魚屋の離（はなれ）室を借りて、人並で無い娘と乏しい生活を送つて居た。明治初年に學んだ英語で、例へば Understanding をウンデルスタンディング、Function をフンクションと發音する式で、若い

學生には馬鹿にされ、學校當局には厄介視されて居た。博士も中學時代に、此の老講師に英語讀本を學んだ事があつた。それが同じ學校の教員室で落合ふ事になつたのである。誰にも相手にされない敗殘者の老講師には、むかしの教子の中から博士號を得た人間を出したといふ事が、はかない自慢だつた。

人にたづねて來られる事を嫌ふ博士も、此の老いたる講師だけは喜んで迎へた。長時間對座してゐても、博士の方から話材を提供するやうな事は全く無く、多くは老人の回顧談か、身の不幸をかこつ繰言を、默々として聽いて居た。行方不明の息子の方は、夙に思ひ切つたと云つて居たが、娘の行末は愚痴の種であつた。母親に似て體は弱く、その上に藪睨なので、誰も嫁に貰つてくれまいと、心底から苦勞にして居た。

その藪睨の娘を、博士は後添に迎へる事になつた。どうしたものか、ひどく朝夕が寂しく思はれて來たのである。氣の毒な老講師に同情する心持も勿論あつたが、それよりも矢張自分の寂しさが先だつた。博士は幾度も冷靜に考へて見たが、つひぞ見た事も無い娘の、殊に藪睨だといふ事も、とつくに四十を越した自分としては、寧ろ當然の事のやうに思はれた。はで好きで、毎日の生活に色彩を求めて止まなかつた先の夫人に懲りた昔の事も、もとより忘れはしなかつた。

博士が、その娘を後添に貰ひ度いと云ひ出した時の老講師の驚きといふものは無かつた。娘の病弱と、藪睨と、貧困の爲めに、女學校にも通はせず、人づきあひもうとかつたので、全く世間智を缺いて居て、到底博士の夫人たる資格を備へて居ない、不釣合な縁は不幸であると辭退したが、意外に博士が熱心なので、遂に申出を受けた時は、老人は深い感動に涙を流した。

初めて老人が娘をつれて來た時、十八と云つても柄がちひさく、もつと若く見えるのが寧ろいたいたしかつた。藪睨ときいて、流石に想像のしやうも無く不安を持つて居たが、それは一掃された。目の見當こそをかしかつたけれど、道具だての可愛らしい顏立で、柔かいまるみのある豐かな頰と、くゝりあごの引締つたのが特徴で、目の見當の惡くない方から見ると、人にすぐれた美しい横顏であつた。

結婚といつても、親子と博士とが、婆やの手料理の食卓を共にした丈で、外には何の儀式も無かつた。最愛の娘に別れる悲しさと、人並で無い娘を無事にかたづけた安心と、いりまじつた感慨で、一人で喋りながら、老人は手酌の酒に醉つてしまつた。繰返しよろこびを述べた後で、車で送らせるといふのを固辭して、あぶない足取で歸つて行つた。

三月末の、うすら寒い宵だつた。書齋の暖爐に近く、博士は新妻と椅子を並べて居た。口の重

い性分なので、老人の居る間、つひぞ一度もむすめと口をきく機會が無つた。今、差向になつても、博士は所在無さに苦しめられた。たつた一枚の餘所行らしい古びた藤色縮緬の紋つきの羽織の肩の寒むさうなむすめの、伏目勝のちひさい顔を見守りながら、これが唯一の道樂の香の強い葉卷を吸つてゐた。妻を迎へた心持は全く無く、精巧なおもちやを手に入れたやうな好奇心が強かつた。

「うちには鳩が二羽ゐるんですよ。」

突然むすめは顔をあげて、藪睨の爲めの癖であらう、少し首をかしげて云つた。それが此の若い妻の、良人にはなしかけた最初の言葉だつた。

ふいに話しかけられたので、その事柄をとらへ兼たが、全く鳩の話をして居るのだとわかつた時、あんまり思ひもかけなかつた相手の無邪氣な樣子に、博士の瞼は熱くなつた。いきなり子供らしい顔を兩手で引寄せて、ちひさい割に厚ぼつたい莓のやうな脣を吸つてやらうと思つたのは其の時である。

それは、もう幾月か前の事になつたが、博士は時々人しれず、

「うちには鳩が二羽ゐるんですよ。」

とつぶやいて、微笑し度くなる事がある。

二羽の鳩は、翌日から博士の家に引取られた。金網の張つてある古びた丸籠の中に、ちひさい雌雄の白鳩は、身をすりつけて、寂しみを含んだまるみのある聲で啼きかはした。

「トムちやん、ネリちやん、よく來てねえ。今日から此處がお前達のおうちなんですよ。」

日あたりの窓に据ゑて、透きとほる聲で鳩に話しかけて居るむすめを、博士は少なからぬ好奇心をもつて見て居た。老講師がつけたといふ西洋名前が、ひどく心地よく響いた。

鳩は、普通寺院などの庭に群つて居るのよりは二廻もちひさく、姿かたちのほつそりした純白のゐので、嘴と脚は桃色で、くるくると敏感に働く目は眞紅であつた。クツクウクツクウと絕えず啼いた。むすめは、我子のやうに可愛がつた。籠から出して胸に抱いたり、頰擦したり、嘴に接吻したりした。博士が讀書して居るのにも頓着なく、傍の椅子にかけて、二羽の鳩に、かはりばんこに口をきいて居た。あやしたり、からかつたり、まるつきり人間相手のやうであつた。

最初の晚、書齋につゞく洋風の寢室に、むかし先夫人の用ひた寢臺でむすめは寢にくがつて居

たが、次の日は何時迄も讀書して居る傍に、睡さうに腰かけて居るのを博士が促して、先に寢かしてしまつた。その癖、いつもはもつと遲く迄勉強して居るならはしの博士も、寂しがりのむすめが一人寢床に横たはつてゐる樣子を想ふと、久しい間冬眠に入つてゐた人の慾が、ほのかに燃えて來るのを覺えた。それは、むかし先夫人を迎へた頃のやうな惱ましい一本氣のものでは無くかすかに好奇心をまじへた、ゆとりのあるものであつた。讀みかけの分厚な本を閉ぢて暖爐の火を消し、跫音を忍んで次の室の扉をあけて見た。うす紫の覆のかゝつて居る電燈は、むすめの顏に柔かい光を落して居た。起きて居る時こそ藪睨だが、堅く目をつぶつて居ると、正しい美しさを持つて居る顏であつた。

　博士は靜かに寢衣に着換て、ふたゝびむすめの寢臺に近づき、身をかゞめて額に接吻しようとした時、物の氣勢に驚いてむすめは身を守るやうに起上つた。とたんに夜着の間から、二羽の鳩が一時に飛立つた。ハタハタハタ博士の顏を翼でうつて、雌雄の鳥は飛ばうとしたが、籠に生れて籠に育つた身の思ふに任せず、白い脫毛を夥しく散らして床の上近く徒らに羽ばたいた。

「トムちやん、ネリちやん、いけません。折角だつこしてねんねさせてやるのに、どうしたのです御前達は。」

兩手を擴げて名を呼ぶと、鳩は我家に歸るやうに、安心した姿で寢臺に飛上り、先を爭つてむすめの兩方の掌に羽をやすめた。

「驚いた。鳩を抱いて寢て居たのか。」

博士はゆたかな心持で、無邪氣なむすめの樣子を見下した。

「だつて、うちに居る時しよつちゆう一緒に寢て居たんですもの。」

あまりの子供らしさを恥るやうに顏を紅らめて、胸に抱いた鳩にかはるがはる頰擦りした。

「ふとんの中に入れて寢たりすると鳩が弱つてしまふだらう。」

「いゝえ、だつこして寢かしてやらないと、寂しがつて可哀さうなんですよ。」

「雄と雌と一緒に居ても寂しがるかしら。」

「えゝ寂しがりますよ。あたしをお母さんだと思つて居るんでしよ。」

博士はふと胸許に湧ぐましさがこみあげて來さうな、つひぞ無いあつたかい感情を覺えた。

「さう、そんなら一緒におやすみなさい。」

輕く肩を叩いて、先づ自分が寢床に入つた。うすく目をつぶつて、此の無邪氣なむすめを、自分のやうに年をとつた者が、妻として取扱つていゝものだらうか、何か濟まない惱ましさがあつ

た。

隣の寢臺では、二羽の鳩を寢かしつける、いいむすめの守唄がしばらくの間聞えた。

いいむすめは毎朝早く起きて、婆やと一緒に拭掃除をし、庭を掃き、それから新しく餌を入れた鳩の籠を、清々しい東の窓にかける。鳩は日光を浴びながら、クツクウクツクウと啼くのである。家事には熱心に、氣まめに働くのであつたが、その外の事には一切無智であつた。文字を讀む興味は全く無く、新聞紙さへ手にも取らなかつた。年が年中本を讀んでゐて倦きない博士に對しては、妻が良人にもつ心持は微塵も知らず、只管偉い人として尊敬して居た。學校のある日には、何と無く寂しい氣もするけれど、留守の間は婆やを相手に暮らして、婆やの方では、藪睨の、少し足りない娘なんか貰つて來た主人の物好きが馬鹿々々しく、どう考へても取るに足りない小娘を、此家の主婦として、取扱ふ氣にはなれなかつた。事毎に意地の惡い皮肉な態度を取つたが、いいむすめの方は何の氣もつかず、平氣で友達のやうに馴染んだ。

荒れるがまゝに荒れて居た庭の雜草をむしり、細かく土をふるつて、幾種類かの草花の種子を

蒔いたのもむすめであつた。トムとネリは、終日その御相手をつとめた。籠の下に椅子を据ゑ、鳥には理解出來ない言葉で、のべつに話かけた。言葉こそわからなくても、情愛は深く感じるものと見えて、鳩もむすめの跫音がすると、首を揃へて嘴で、籠の金網をコトコト叩く。時には籠の外に出して、しめ切つた室の中で、自由に步かせる事もある。普通の鳩よりもちひさく、幾代か狹い籠の中で、人工的に養はれて來た習性が強くなり、高く飛翔する丈の力ある翼を持つてゐないので、机の上や椅子の下を、雌を追ふ雄が嬉々としてかけ廻つた。

或時、學校から歸つて來た博士が、何の氣もつかずに書齋の扉をあけて入ると、しめ切つてむつとする室内の溫氣（うんき）に汗ばんだむすめが先頭に立つて、おいち、二ツ、おいち、二ツと號令をかける後から、首に赤いリボンを結んだ二羽の鳩が、めいめいチョコレエトの紙箱で作つた車を引張つて、トコトコくつついて步いて居た。博士の姿を見て吃驚したむすめは、袂で顏をかくして長椅子の上に笑ひ倒れた。子供らしい自分のしうちの羞しさに、何時迄も顏をあげず、肩に波をうたせて笑つて居た。

　二月三月たつても、むすめは來た時と少しも變らなかつた。父親を見舞ふ事と、父に訪はれる事の外には、門の外との交渉は無く、婆やの手助をして家事に從ふ外には、別段博士との交渉も

無かつた。夜は必ず二羽の鳩を兩わきに抱いて眠つた。

博士は事毎に此の新妻を、夜更かしで、朝寢で、はでづくりで、外出好で、歌を詠み、社會問題を論じた先夫人と比べて考へた。殊に、性分としても、體質としても、到底夫人の熱情を滿足させる事の出來なかつた自分を顧みた。それとは反對に、子供らしいむすめは、何の負擔もなかつたかはりに、子供を持つた經驗の無い者が他人の赤坊を抱かされたやうな、どう取扱つていゝかわから無い當惑が、日毎に深くなつて來た。中でも一番博士の思考の問題となるのは、むすめが來た時のまゝのむすめで、未だ曾て完全なる自分の妻で無いといふ事だつた。病身の爲めか、年齡に比べて發育は遲れて居るが、肩や腰のまるみも女らしく見えるのに、とし頃の女の持つ感情の僅かに一部しか持合せて居ないやうだつた。總て學び得た知識の鍵で物事を判斷する癖になつて居る博士にとつて、まるつきり無學で、無智なむすめの心理狀態は、想像する事も出來なかつた。白痴なのでは無いかと思つた事もあつたが、知識慾こそ缺いて居るけれど、日常の家事には決して人に劣らない能力を示して居た。針仕事や編物のやうな手わざは、寧ろ普通よりも勝つて居た。

博士が最後になした斷定は、世間の狹い老教師の手に育てられ、しかも藪睨といふひけめの爲

めに、我家以外には一歩も出なかつたので、天性素直な性質なのが、子供の時の心のまゝに成育したのに違ひ無いといふ好意的のものであつた。家は貧しく、妻は病み、男の子は家出をし、たつた一人頼りになる娘は藪睨だといふ氣の毒な老講師を思ふと、溺愛の結果、世間人としての教養を、全然與へなかつたのも無理では無いやうに考へられる。當惑の底に微笑を湛へて、博士は此のむすめの、鳩を抱いて安心して眠つて居る夢を破り度くないと思つた。

いつたい十七八にもなつて、夫婦の間にどういふまじはりが行はれるかを、全然知らないものがあるだらうかと、最初のうちこそ疑つたが、日を經るに從つて、何ら人生の祕戲を知らないで、此の年齢迄育つたものを珍重し度い心持にまで移つて行つた。

一日、博士は面白い光景を目撃した。日光の強烈な夏の眞晝であつたが、あけ放した窓のところに籠を据ゑ、その側でむすめは編物をして居た。あつたかい身内のぬくみに、うつらうつら居睡をして居た鳩が、クツクウクツクウとしきりに啼き出したと思ふと、稍形の大きい雄は、かぼそい雌の背中に乘つて、押伏せるやうにハタハタと羽叩き始めた。博士は不圖、彼には珍しい鳩の交歡に目を引かれた。

「叱ソ、叱ッ、いぢめちやあいけない。」

編物の棒を振上げて、むすめは金網の上を叩いた。その爲めに別れたのか、鳩は上下の棲木に別々になつて、やるせなさゝうな聲で鳴きかはした。

「トムはおいたでしかたが無いんですよ。ふだんは可愛がつて居るくせに、時々ふいにいぢめるんですもの。」

博士の方に顏を向けて、むすめは自分が喧嘩を靜めた手柄を誇るやうに笑つたが、鳩が靜かになつたのに安心して、又編物の手を動かし始めた。

おとなしく首を並べて餌をついばんで居た鳩が、又さかんな羽ばたきをして重なり合つた。

「トム、トム、お前は何故いふ事をきかないのです。ネリちやんをいぢめて可哀さうぢやありませんか。こらつ、叱ッ、叱ッ。」

むすめは編物を床の上に捨てゝ、いきなり籠の扉をあけると、ひとつづゝ兩手につかんで、膝の上に抱取つた。

「おゝ、おゝ、可哀さうに、いたづら兄さんにいぢめられたのかい。」

まんまるい頭に頰擦りしたり、うす桃色の嘴に接吻したり、雄の方の頭をぐいと下げてあやまらせたりした。

「さ、お前はおあやまりなさい。只今は相すみませんでした。これからは決しておいたは致しません。」

あまりの事のをかしさに、博士は椅子を離れてむすめの肩を叩いた。

「それは喧嘩をして居るのでは無いだらう。」

「いゝえ、いぢめるんですよ。此の方は根性がよくないのです。」

と眞顔で答へた。その顔つきには、全く鳩が交歡の悅びを味はうとしたものとは思はず、力の強い方が、かよわい方をいぢめるものと信じて居る色が明かにあらはれて居た。

「さうでは無い。そんな事をして邪魔するから子供が生れないのだらう。」

「いゝえ、ネリはお產が下手なんです。いつも卵を生むには生むのですが、あつためてやらないで割つてしまふんです。ほんとに、雛がかへるとどんなにいゝかしれないんだけれど。」

博士は、鳩に頰擦して居るむすめの細い首を上から見下して居たが、

「人間の子供はほしくない？」

としばらくして云つて見た。自分の質問の眞の意圖が何にあるかを顧みて赤面しながら。

「ほしいわ、あたし子供大好き。」

むすめはひどくいきいきした顔を振仰いで、藪睨の眼をみはつた。
「今に生れるよ……」
博士はふと、「鳩と一緒に寢なければ」といふ言葉を咽の際迄持つて來て、しかも少からぬ努力をして呑込んでしまつた。何となく、卑怯な氣がしたのである。顔の火照るのをごまかす爲めに、卓子の上の葉卷を取つて火をつけた。
「うちには鳩が二羽居るんですよ。」
初めて此のむすめの口から聽いた、無邪氣でしかも眞實をこめた言葉を思ひ出して、濃い紫の煙を吹きながら、博士は室内を歩き廻つた。

秋の初に、學校の講堂でめまひを起して、金魚屋の離室に送られて來た老講師は、再び教鞭をとる身にはならなかつた。輕い腦充血といふ事だつたが老齡の爲めにめつきり弱つてしまつた。博士の好意で、看護婦も一人附添つたが、むすめは毎日竹籠に果物や玉子を入れたのを肱にかけて見舞に通つた。博士も促されて、一緒について行く事もあつた。二人揃つて見舞に來てくれ

る事は、何よりも老人の喜ぶところであつた。老眼に涙を浮べて感謝した。

老人の壽命は永く續かなかつた。少しく囘復して來た喜びに、足馴らしの積りで、金魚の池のふちを杖をついて歩いて居るうちに、足を踏みすべらしたのか、めまひがしたのか、水銹の浮いた泥の深い池の中に陷つた。倒れる拍子に、金魚をねらふ五位鷺を追ふ鳴子の繩につかまつた爲め、何事かと飛んで出て來た家人に助けられはしたものゝ、老人は遂に意識を囘復せず、短からぬ生涯を終つた。

むすめの悲歎は博士を當惑させた。無智なるものゝ悲みのいかに深いかは、死んで行く事をさへ科學的に考へようとする博士などの、想ひ及ばないものであつた。青山墓地の、日の光も當らないやうな隅つこに埋められた父を想つて、絶えず涙ぐんで居た。母親よりも父親に多く育てられた爲めか、或は母親よりも後迄殘つて居た爲めか、その悲みは一層深かつた。鳩を相手におしやべりをする銀鈴のやうな聲も、しばらくは聞かれなかつた。

手づから蒔いた秋草の花も末になりかけた花壇にのぞむ窓によりかゝつて、遠方の空をぼんやり見て居る事もあつた。たゞさへ物事が、人の心に沁々感じられる時節で感傷は愈々深かつた。

墓參に行つた日の事である。夕方歸つて來て、一足先に家の中に駈込んだむすめは、何ともいへないけたゝましい叫聲をあげて博士を呼んだ。

「トムちやん、トムちやん。」

と泣聲を出して、裸足のまゝ庭に走つて行つたむすめは狂人のやうだつた。

「猫が、猫が……」

呼吸ぎれがして滿足に物もいへず、藪睨の目はひきつつて、そのまゝ裏庭から往來の方へ驅けて行つた。

書齋の窓の鳩の籠は、扉が半開きになつてゐて、雄鳩の姿は見えず、雌鳩はぐつたり横たはつて居た。雪白の胸には、紅く血が滲んで居た。室内の絨氈の上にも、柔い羽がぬけて散つて居た。

博士は庭下駄をつつかけて、裏の方へ廻つて行つた。

ポツポウ、ポツポウと、竹垣の外の往來から、鳩を呼ぶむすめの聲が聞えて來た。門のところ迄出て行つて見ると、むすめは足袋裸足のまゝ往來のまんなかで、あても無く四方を見廻しなが

ら、今にも泣出しさうな聲で、鳩の啼音を眞似して居るのであつた。屋敷町の事ではあるが、往來で遊んで居る子供達は、けげんな顔つきをして次第に集つて來て居た。博士は自分が赤面しながら、むすめの側に寄つて肩を叩いた。

「あとで婆やに探して貰ふから、おいで、みつとも無いよ。」

藪睨の目からほろほろ涙をこぼしながら、首を横に振つて居るのを、しまひには無理につかまへて連れて戻つた。

首筋を深く傷けられたネリは、間もなく死んでしまつた。段々冷くなつて行く鳩の死體を手に据ゑて、むすめは聲をあげて泣いた。菓子箱の大きいのに納め、廻りには庭の草の花を摘入れて、花壇の側に埋めた。

それからは毎日、むすめは庭から家の廻りから往來迄、トムの行衞を探した。婆やの智恵で、近所の子供達にも頼んで見たが無駄だつた。それでも窓には、鳩の居た時と同じやうに、綺麗な水と充分の餌を入れた籠を釣して、何時かは歸つて來るものと信じて居た。朝早く目が覺めると、直ぐに窓際に飛んで行つた。住み馴れた籠を慕つて、夜のうちに戻つて來さうな氣がするのであつた。

「あの鳩は高くは飛べないと云つて居たでは無いか。きつと猫にとられてしまつたのだらう。爲方が無い。又別のを買つて來るさ。」

あんまり歎き悲しんで居るので、博士は早くあきらめさせようと努めたが、本人はなかなかあきらめなかつた。

「いゝえ私の見た時に、猫は御隣の塀を越してあつちの方へ逃げ、トムはこつちの垣根の上を往來の方へ飛んで行きました。ふだんは高くは飛べなくても、一生懸命になつたので、どうにか飛べたのだらうかと思ひます。きつと何處かに迷子になつて居るに違ひないんです。」

と堅く信じてゐた。

十日ばかりたつた日の事、臺所に來た魚屋の御用聞が、こちらの鳩とそつくりのが、他所の邸に迷つて來て居ると告げた。それを婆やから聞いたむすめは、夢中になつて臺所にかけて行つた。魚屋の話では、あまり遠くない或る富豪の家で鳩を飼つてゐるが、その鳩小舍で見かけたのが、曾て此の家で見たのに寸分違はず、聞いて見ると何處からか迷つて來たものだといふので、もし

やと思つて注進に及んだといふのであつた。その邸の話をして、奥さんをおつれしませうと約束して歸つた。

その日の夕方、魚屋は又やつて來て、先方では何時でも來て構はないと云ふから、今からお伴しませうと促してむすめと連立つて出て行つた。

その話を聞いた時、博士はひどく面白がつたが、出かけて行つたむすめは、日が暮れても歸つて來なかつた。夕餉の支度も出來たので、婆やが迎へに行つて漸く連れて歸つた。むすめのいふところに據ると、たしかにその鳩はトムに相違無いが、いくら呼んでも鳩舍の屋根から下りて來ない、放飼の鳩といつしよになつたので、惡い智恵をつけられてしまつたのだらうと云ふのであつた。どうしてもつかまへて歸るといふのを、婆やが無理に引張つて來たので、又次の日行く事にきめてゐた。

次の日、魚屋は又迎ひに來て、むすめは婆やをつれて行つたが、矢張鳩は屋根から下りて來ない。鳩舍に梯子をかけて、魚屋が上つたけれど、つかまへる事は出來なかつた。

「可哀さうに、外のにいぢめられて居ると見えて、なんだかしよんぼりして居ましたわ。」

むすめは寢る時迄、その日の樣子を忘れずに口に出した。

その又次の日も、勿論自分で行く積りでゐたところ、どうしてつかまへたのか、魚屋が懷へ入れて來た。

「トムちやん、トムちやん、よく歸つて來てくれたねえ。」

いきなり兩手にうけとると、ひしと抱締めて頬擦りした。

「トムちやんが歸つて來ましたよ。」

博士のところへも持つて行つて、擦りつけるやうにして見せた。魚屋は心附を貰つて、いかに危ないおもひをして鳩をつかまへたかを、得意になつて喋つた。

つかまへられた鳩は籠の中に入れられて、がつがつ餌をついばんで居た。全身純白で、目は紅く、嘴と脚は桃色で、それは確かにトムと同じだつたが、全體の大きさも違ふやうに思はれ、時時咽喉の奥の方で啼く聲も太く寂びてゐたし、擧動も著しく粗野に見えて、博士には別の鳩のやうに考へられた。

「これは違やしないかしら。トムよりも餘程大きいではないか。」

むすめが夢中になつて話しかけて居る籠をのぞいて、博士は自分の意見を云つて見た。

「いゝえ、トムちやんですよ。廣々としたところに暫時(しばらく)居たので大きくなつたんでしよ。婆やも

魚屋もさう云つてゐました。」

あまりの無智に博士は吹出しさうになつた。

「だつてあの鳩は普通の鳩よりもちひさい種類なんだらう。」

「えゝ、ですけれども婆やも魚屋もトムに違ひ無いつていふんですもの。」

たゞをこねる子供のやうに、論理を辿らずに自說を守つてゐる。博士は、常識では理解しにくいむすめの心持を忖度する味に耽つた。

鳩はたしかにトムにしては大き過る。幾代か籠の中で、人爲的に小型に作られたのが、いかに野放しになつたからと云つて、忽ち大きくなるわけは無い。第一聲も違ふではないか。子供の時分から鳩を飼ひ馴れて居るといふ此のむすめに、どうしてわかり切つた事がわからないのだらう。たゞ婆やと魚屋が、それに違ひ無いと云つたといふ事に論據を置いて、何の疑もさしはさまない單純の美しさが、博士の心に觸れた。此のむすめは人を疑ふ事を知らないのだ――其處迄考へを辿つて行つて滿足した。

それで信じてゐられゝば幸ひだ、信じさせて置く方がいゝと思つた。

ところが博士の其のおもひやりを、かき亂す事が直ぐに起つた。それは數時間後の事で、博士

は讀書の中休みに葉卷をくはへて、椅子の背に全身の重味をもたせかけて居た。むすめは鳩の籠の側で、あきもしずに他愛も無い一人言をいつてゐた。

其處に夕餉の支度の相談に婆やが出て來た。婆やは、まるつきり子供扱にして居るむすめに對して、何時もからかふやうな調子で話しかけるのであつた。博士はそれが嫌ひだつた。まるつきり世間並をはづれて居るむすめが、無理解な他人に馬鹿にされるのは堪へ難かつた。

「今日から又あなたの旦那様が御歸りで結構で御座いますねえ。」

婆やはわざとらしく籠の中をのぞき込んで云つた。

「けれどもねえ、此の鳩トムちやんぢやあないつておつしやるのよ。トムちやんにしては大き過るつて。」

むすめはいゝ味方を得た積りで、怨言めかしく云つた。

「そんな事があるもんですか。魚定だつてトムちやんに違ひ無いと云つて居ましたもの。」

「放飼にしてあつたので肥つたんだわねえ。」

「左様(さう)ですとも、もつとつかまらずに居たら、どんなに大きくなつたかわかりやあしません。鵄のやうに、鳶のやうに……」

婆やは博士の方を顧みて、大きな口を開いて笑つた。

その言葉にも、笑にも、博士は充分の惡意を感じた。又臺所にさがつて行く婆やの、世の中を馬鹿にしきつたやうな後姿を、憤りの目をもつて見送つた。人間の世の中のいやな事が、ひしひしと彼の胸を打つた。

「馬鹿ッ。」

口の中で叫んで、葉巻を捨てゝ身を起した。どうしてもトムでは無いと知りながら、いゝむすめの無邪氣な心持を傷つけまいとして、ほんとの事でないのを許してゐた自分迄が、婆やに嘲笑された氣がした。

日が沈んで、しかも未だ暮れ切らない時刻だつた。晩秋の爽かな空氣の冷い窓に立つて、しばらく籠の鳩を見てゐた。

「この鳩はねえ、どうしてもトムではないよ。からだは大き過るし、啼聲も違ふし……」

いゝむすめは藪睨の目をみはつて、博士の言葉をあやしんで居た。

「トムやネリは大きくならない種類だと云つて居たゞらう。それから高く自由には飛べないと云つて居たゞらう。放してごらん、此の鳩はきつと平氣で飛んで行くよ。籠をあけてためしてごら

ん。」

「でも、みんなもトムちやんに違ひ無いと云ふんですもの。」

訴へるやうな甘つたれるやうな態度だつた。

「それはみんなが間違へて居るんだ。ためしに籠をあけてごらん。」

「それでも、若しもほんとにトムちやんで、又そこいらに飛んで行つて、今度こそ猫にとられたらどうしませう。可哀さうだわ。」

「それでは此の窓をしめて、室の中で放してごらん。若しも上手に飛ぶやうだつたら、トムでは無いのだから逃してやらう。何處の鳩だかわからないものを、うちの籠に飼つてゐるのはよくない。此の鳩にだつて、お父さんやお母さんがあるかもしれない。おかみさんが心配して居るかもしれない。子供達が待つてゐるかもしれない。」

博士は自分でも興奮した心狀にある事を識りつゝ、手づから玻璃窓を閉した。むすめもそれ以上は爭はなかつた。そして籠の扉は博士の手で開かれた。

鳩はけゞんさうに小首を傾けて、二度三度扉口から首丈出して樣子をうかゞつて居たが、ひよいと一飛びに飛んで出ると、ハタハタと羽を鳴らして飛立つた。狹い室内の事とて、充分に翼を

うつ事は出來ないのだが、トムやネリのやうに身の重いのとは違つて、力のある羽音を立てゝ、天井に頭をぶつける程の勢はあつた。白い柔毛(にこげ)が、ふはふはと脱けて落ちた。正に鳩違ひに相違なかつた。博士は自分の主張をたしかめた滿足で、

「ね、違ふだらう、他所のうちの鳩なんだよ。」

さういひながら、窓の扉を押開いた。ハタハタハタハタハタ鳩は四方の壁に突當つて居たが、間も無く玻璃窓の開かれたところから、廣い世界に出て行つた。むすめと博士が立並んで、窓から半身乘出して見て居ると、庭木の梢をかすめて舞上つたのが、方角を定める爲めであらう、一廻二廻ゆるく輪を描いたと思ふと、流星のやうに一筋に、夕映の空に高く遠く、見る見るうちに消えてしまつた。

「ね、トムでは無かつたらう。あの鳩も逃(にが)して貰つて、どんなに喜んで居るかわからない。」

何時迄も鳩の見えなくなつた大空を見詰めてゐるむすめの目には、涙がいつぱい溜つてゐた。母に別れ、父に別れ、今又鳩に別れた悲しさを新たにして、沁々孤獨に堪へなくなつた時、涙は堪性(こらへしやう)も無く、止度(とめど)も無く頰を傳つて落ちて來た。

博士はその兩肩に手を置いて、まんまるくふくらんだおでこに接吻した。むすめは堅く目をつ

ぶつたきりで動かなかつた。博士の手の力が籠つて、おのづからその胸に抱かれてしまつたが、たつた一人此の世の中で頼る可き人と思つたであらう、そのまゝ輕く取縋つた。博士はその涙に濡れた頰に接吻し、やがて其の苺のやうなちひさく紅い脣に接吻した。（大正十四年三月二十九日）

# 素人小説家の經驗

## 一

嵯峨欣三は會社員で、傍ら筆名を山野井涼三と稱する小說家である。否、傍ら小說を書くと云つては本人が承知しまい。彼は常々、自分は小說家で、衣食の爲めに會社勤をして居るのだと公言して居る。

私立大學の商科に籍のある頃から、投書雜誌の寄稿家としては、拔群の技倆をあらはして、懸賞小說の選に入る事も度々あつたが、生來弱氣で――その癖他人に對しては、その弱氣を見透かされまいとして、わざと強氣らしく振舞つて居るが――自分の樣なものが、作家として獨立した地位を保つて行かれるかどうか心許無く、且衣食の心配もあるので、卒業すると間もなく、現在の會社に雇はれたのである。爾來十年、相當勤勉なる事務員として、文書課次席となる迄、大體順調に進んで來た。

その間に、彼の文學生活も、ひどく花々しい事も無いかはりに、存外手堅い作家として、兎に

角一家を成すに至つた。恰度會社に入つた翌年、大阪の新聞の懸賞小説の一等に選ばれたのがきつかけになつて、一般の雜誌からも依頼され、一枚いくらといふ原稿料を得る身になつた。此の時初めて會社の方では、嵯峨が山野井と稱する小説家だといふ事を知つて、支配人も課長も、一時はひどく毛嫌ひして、何か落度があつたらやつつけてやらうといふ考を起したが、間も無く勤勉は認められて、別段昇給を延ばされる程の事も無くて過ぎた。但し未だに、何かへまな事をやると「どうも小説家なんてしかたの無いものだ」といふ蔭口を浴せられる事は、彼自身充分感づいて居た。

それがいやなので、仕事の方はつとめて勵んだ。小説を書いたからつて、會社に迷惑さへかけなければ差支は無いと自分で自分にいひきかせて居たが、流石に腹の底では、それが出世の邪魔になるやうな心配が無くもなかつた。

作家としても、會社員として月給を貰つて居る事が祟つて、卑怯なる二重生活者だといふ惡口を、毎度叩きつけられて居る。彼はそれに對して反駁した。衣食住の保證を得る爲めに月給取となるのは止むを得ない事で、それよりも藝術の制作に精進せず、氣組を下げた通俗小説などを書いて原稿料を稼ぐのが二重生活なのだ。生活が二重かどうかといふ事は、單に筆ばかり持つてゐ

れば一重で、筆とそろばんなら二重だといふやうな皮相な區別では無く、心にたるみの來る仕事をするのが二重生活なのだと、むきになつて繰返してゐた。

しかし、一度誰かゞ大きな聲で叫ぶと、是非の別無く物眞似をして、之に雷同するのが文壇のならひだから、彼の正論はかへりみられないで、二重生活者、傍系作家といふ輕侮の意味をたつぷり含ませた言葉で、一言の下に斥けるのが常識となつてしまつた。

「矢張り會社員の小說ではないですか。」

「常識以上の何ものでも無いですなあ。」

と云ふやうな批評は、一頃はやつた合評會に顏を出す程の文士の、一樣に口にするところだつた。

それにも拘らず、丹念な寫實派の筆致で、現代の世態人情を描いてゐた。殊に約一年の月日を費して書上げた長篇「丸の內」は、男女の勤人の日常生活を如實に描寫したものとして、さういふ階級の人の間に、多くの讀者を見出した。

勿論文壇の批評はよくなかつた。會社員の內職小說で藝術的香氣が無く、凡人の常識以外に一歩も出てゐない、感覺が眠つてゐる、冗長だ、愚劣だ、素人だといふやうな、大ざつぱなものが

多かつたが、特に或作家が批評して、丸の内の職業婦人を描く意圖を持ちながら遂に新時代の女を描く事が出來なかつた、女はすべて舊い型に墮してゐる、七三耳かくしの新しい女を描かないで「丸の内」と題するが如きは時代遲れであると叱咤した。

此の批評が機緣になつて、七三耳かくしの女を描くと云ふ事が、一時文學雜誌や新聞の文藝欄を賑はして、旣成作家には新時代の女は描けないとか、なあに俺が描いて見せるとか、とりとめも無い議論が百出したが、當の作家山野井涼三は何時の間にか問題では無くなつて、居るのか居ないのかわからない傍系作家の地位に復歸してしまつた。

小說「丸の内」が一番人氣を呼んだのは、いふ迄も無く當の作者の勤めて居る會社であつた。今迄の彼の小說と違つて、會社の重役だの、支配人だの、老朽の課長だの、下級社員だの、小使だの、給仕だの、女事務員だの、交換手だの、丸ビルの女賣子だの、靴磨きだの——すべて出て來る人物は每日周圍にうようよして居る連中と同種類で、又その場面も、自分達がいやになる程踏んづけて居るところばかりだから、今更めいめいの生きて居る世界を見せつけられた感があつた。むつつりやの嵯峨欣三にして、どうして斯ういふ場面を知つて居るのかと不思議に思はれる程、男女の社員の戀愛遊戲や、女賣子が待合入りをするところや、社長がタイピストを口說き落すと

ところなどが、精細に描いてあるので、驚きもし、怪しからないとも思つた。流石に作者はモデルを社内にはとらなかつたが、讀む方では勝手にモデルらしい人間を探し出して、ひそかにうなづく興味を持つて居た。今に自分達の事を書かれはしないかといふ不安が、作者を憎む心持をもそゝのかして、此處でも刺のある言葉を浴せられる事になつた。

それでも、彼の作品に異常な興味をもつて、手紙を寄越す熱心な讀者も少くなかつた。さういふかくれた愛讀者が、世の中の何處かに居るといふ事は、會社に於ても文壇に於ても、兎角繼子扱ひされて居るものにとつて、內心ひどく嬉しい事だつた。その讀者の中に、一人の女性を發見した。

若い頃には多量に持つて居た感傷癖を、人知れぬ努力で壓殺して、今では油の切れた感じのする迄地味な手法になつてしまつた爲めか、とんと女の讀者といふものは無かつたが、桃色の封筒に紫インキで認めた一通を、會社の事務室の机の上に見出した時は、長い冬が過ぎて春光を浴びたやうな心地を禁じ得なかつた。

おもてには會社氣附山野井涼三先生とあつて、うらには丸ビル內草葉虹吉と認めてあつたが、そのぬしが女だといふ事は、桃色封筒に紫インキといふ型にはまり過ぎた好みと、文學少女好み

何食はぬ顔で開封した。彼は机を並べて居る連中の目をはゞかりながら、何食はぬ顔で開封した。

突然御手紙差上るぶしつけ御許し下さいませ。

私は御近所につとめる名も無き一少女で御座いますが、かねがね先生の御美しき御筆にハアトの底からチヤアムされて居りますの。

長篇「丸の内」は何と素敵なんで御座いませう、先生の御皮肉な御目にうつつた吾々職業婦人の描寫！　とても素敵ですわ、素敵々々！　私は讀終つた時、思はず知らず絶叫して、母に笑はれました。

實は私も何時迄も事務員などはして居ないつもりなんです、先生御笑ひになつてはいやよ、私も將來女流作家として立ち度いんです、つきましては先生に私の拙ない作を見て頂き、御指導頂き度いのですが、いけませんでせうか？

いやだとおつしやつても原稿御送り致しますわ、私こんなやんちやものなんで御座いますの。

この御手紙御宅の方へ差上げようと思つて、御會社に電話をかけて交換手の方に御住宅は承りましたが、若しかして奥さまが御怒りになると大變だと思つてやめました。

會社に御手紙差上げてはいけなかつたでせうか、さうでしたら私いくらでも御詫び致します。

私の名は………まあ申上げないで置きませう、たゞ草葉虹吉とのみ、おほゝゝゝでは左様なら。

讀終つて、何となく顔の赤くなるのを感じながら内がくしにしまはうとする時、今迄ちらちら横目で見て居た同僚が、輕薄な聲をかけた。

「山野井先生、フェイア・セックスからのレタアですか。」

「え、いゝえ……」

どぎまぎして一層顔をあかく染めて、てれかくしに机の上の他の書類を手に取つた。

「小説家つてものは其方面の役得があるつていふぢやありませんか。原稿料がとれて女が出來ると來ちやあ、こんなうまい商賣はないなあ。」

室内の誰にも聞える高聲で云つて、しかも小説家全體を嘲るやうに笑つた。

彼はそれには答へなかつた。目と手は机上の仕事に勤務振を示しながら、心はさまざまの空想でいつぱいだつた。

毎朝毎夕、丸の内界隈の勤人は、男でも女でも、大概往復の途上でゆきあふ顔がきまつて居る。その中の幾人かは、特別の印象を殘して、目をつぶつてもはつきりと姿を想ひ浮べる事が出來る

し、時には羞しい夢に見る事もある。さういふ女の五人や六人は、彼の場合にも勿論ある。氣輕に口をきいて見れば、先方でもおいそれと友達になつて吳れさうな連中だし、往來や電車の中で友達を求めて成功した實驗談は數限りも無いのだから、ひとつやつて見ようかなと思ふ事は度々あるが、それには少し年齡をとり過ぎて分別臭くなつてしまつたし、又勇氣にも乏しかつた。

さういふゆきずりの女で記憶に殘つて居るのを、手紙のぬしだと空想するのも樂しく無い事もなかつた。殆んど毎日電車に乘合せる凄い程目の美しい女も、何時もきまつて日比谷の交叉點ですれ違ふ肉づきの豊かな洋裝の女も、馬場先で下車する脣の紅過る程あかい女も、女優のやうに派手づくりの耳かくしも、素晴しく美人なのに瘰癧の痕のひどいのも、丸ビルの店々の賣子の誰彼迄、順々に考へて見た。いや、左様では無い、今迄見知つて居る女以外の女に違ひ無いとも思つた。その方が一層空想の及ぶ限りを廣くした。鶴の子餅のやうに柔かく、白粉の濃い女の顏がぽうつと目に浮ぶと、蒸せるやうな香料迄も漂ふやうなやるせなさを感じた。

午後の郵便が配達されると、その中に虹吉作の小說の原稿があつた。彼はそれを胸に抱いて歸宅した。往來でも電車の中でも、若い女さへ見れば、みんな虹吉のやうに思はれた。

虹吉作の小說「昇降機」は、書馴れない爲めに、冗長なところや妥當で無い文字使は目に餘る程

あつたが、しつかりした觀察と、大膽な描寫と、力強い表現には驚かされた。文字こそ若々しいが、人生を見る目の鋭さは、男まさりだつた。少女だなど丶云つてゐるが、いろんな經驗のある、餘程年をとつた女では無いだらうかとも考へられた。丸ビルの昇降機をあやつる美少年が、不良少女に誘惑されて童貞を失つてから、相手の美醜を問はず、身近に來る女といふ女をものにする小說で、丸ビル內の女事務員や賣子は勿論、買物に來る夫人、令孃、女中、藝者——あらゆる年齡と、あらゆる階級と、あらゆる種類の女にモオションを起して、どれもこれも思ふまゝになる場面が、際どいと云つては當らない程大膽不敵に描いてあつた。何等作者の羞恥といふものゝあらはれが無かつた。一體に際どい場面を描く時は、いつぱし大家と稱される作家でも、多少羞しさうなところか、或はどうだ思ひ切つたものだらうと云ひ度さうなわざとらしさがあるものだが、此の作にはそんな氣持は全く無い。親と子が話をして居るところを描いたやうに、馬が車を引張つて行く姿を描いたやうに、何ら心の動きを見せないものであつた。これは名だたる不良少女ではあるまいかと思つた程である。

四五日たつと、會社へ電話をかけて來た。卓上の受話器を耳にあてると、交換手は、

「草葉さんといふ方からで御座います。」

と、心なしか、何時もよりも叮嚀に、その癖言葉のかげにはからかふ調子を含ませて取次いだ。
「はあ、私は嶢峨です。」
周圍の同僚、殊にやかましやで有名な課長の存在をはゞかりながら、上ずつた聲で答へた。
「山野井先生でいらつしやいますね。」
「えゝ、さうです。」
「先生、あたくしおわかりになつて。」
「はあ、わかります。」
「突然御手紙なんか差上げて御怒りになつてらつしやるんぢやないかと思つて居ましたけれど……
…」
「いゝえ、どう致しまして。」
「あのう、あたくしの下手な小説見て頂けたでせうか。」
「えゝ拜見しました。」
「とつても下手で御羞しいんですけれど……」
「いゝえ、結構です。」

「あら、とつても先生御人が悪くてゐらつしやいますわねえ。」

そこで女は輕く笑つた。いつたいに、聲變りの完全にしきらないやうな冴えない聲だが、笑ふ時も妙に咽喉にからんでゐた。

「だつてあたくし初めて書いたんですもの。どういふ風に書くものか、先生に教へて頂かなくちやあ見當もつきませんわ。」

「…………」

「ほんとにあんな風に書いて構はないんでせうか。」

「えゝ構ひませんとも。」

「まあ嬉しい。ほんとですか先生。實はもうひとつ出來上りましたの。昨夜も一昨夜も徹夜しちやつたんです。では、それも御送りしてよろしう御座いませうか。」

「えゝ、どうぞ。しかし前のは何處に御返しすればいゝのでせう。」

「いゝえ、返してなんか下さらなくたつてよござんすわ。あんなもの、うつちやつて下さいましな。とても價値の無いものなんですもの。」

「…………」

雄辯にしやべる相手の言葉が、附近の同僚に筒ぬけに聞えるやうな不安で、顏から汗が出て來た。何といはれても、一番簡單な言葉を擇んで返事をする外に途の無い立場だつた。
「では、今度のも御送り致しますわ。御機嫌よろしく。では左樣なら。」
電話の切れた時は全くほつとした。
第二の作「侮辱される男性」は間もなく彼の手許に屆いた。或る大きな百貨店の賣子が不良少女團を組織して、同じ店の男の店員、係長、支配人、重役を初めとし、店に買物に來る男の客などを片端から誘惑して、一度丈は身を任せるが、決して二度とは要求に應じない。その上甲の目の前には甲の友達の乙といちやついて見せ、丙の目の前では丙の同僚の丁とふざけて見せるといふやうな筋立てゞ、おもひを募らせた男性が徹頭徹尾意氣地無く侮辱されるところに力點を置いた小說である。
第一作と同じく、男性的な力強い文章で、相變らず何の羞氣も無く、男をたぶらかす女と、女にたぶらかされる男との出會のいろんな場面が描いてあつた。隨分大きな構想だ、量からいつても堂々たるものであるが、寫實の筆で押して行つて別段たるみの無いところは、どうしても若い女性の作品とは想はれない。果して若い女だとすれば、愈々不良少女に違ひあるまいと思つた。

本來ならば、不良少女といふものに對する多少の浮いた興味も起るべきであるが、餘りに大膽な描寫で成立つて居る小說の、あなどり難い力量に壓迫されて、薄氣味惡く感じられた。たしかに、「昇降機」も「侮辱される男性」も、文壇の水平線を遥かに越えてゐる。新感覺派などゝいふ呼聲が起ると、材料は自然派以來のありふれたものなのに、文體にばかり奇をこらして、さも新しい感覺を持つて居るやうに見せかけようと模倣する同人雜誌の作家などゝは、比べものにならない大きさを持つて居る。彼は知合の雜誌社に紹介しようと思つたが、殘念な事には大部分を伏字にしなければ發表出來ない内容である。自分一人で讀んでは惜しいと思ひながら、二度三度繰返した。

相手は不良少女に違ひ無いと薄氣味惡く思ひながらも、無資產の身の餘儀ない獨身生活を續けて來た彼には、矢張り無關心では居られなかつた。往來でゆきあふ女にそゝぐ注意も、一段と銳くなつた。いきなり目の前に「私が草葉虹吉です」と名のつて出て來さうな氣がして、ぼんやり空想しながら、あぶなく自動車に突飛ばされさうになつた事もある。會社の机にむかつて居る時も、今にも卓上の電話がチリチリ鳴つて、虹吉の聲變りの中途のやうな冴えない聲が聞えて來さうな豫感に惱まされた。永い間下宿住居をして居たのが、靜かに本を讀んだり物を書いたりし度いといふ願ひから、やうやく一軒借りて婆やを雇つて暮らしてゐる我家に歸つても、机の抽斗にしま

つてある虹吉の原稿を取出して讀みながら、その作者を想像し、その想像の女と自分との交渉迄空想して、何事も手につかないさういふ日が數日つゞいた。

今か今かと待つて居た電話のかゝつて來たのは一週間もたつてからだつた。

「先生、あたくしの今度の小説御覽下さいまして？」

「えゝ拜見しました。」

彼は又同僚の耳や目つきが氣になつて、折角の電話を、充分樂しむ事は出來なかつた。

「いかゞでしたでせう、あれは、どうせとても下手なんですけれど。」

「いゝえ、結構ですよ。」

「結構だなんて、先生は何時でも同じ事をおつしやるのねえ。」

「だつてほんとに結構でした。」

「おほ……先生は御眞面目なのねえ。」

女は、彼が語氣を強めて結構を繰返したのを、さもをかしさうに笑つた。

「あたくし、先生つて方どんな方なんだらうと思つて、此間の夕方五時頃、御會社の前に立つて見てゐましたの。」

「………」

「あたくし隨分馬鹿でせう。だつて社員の方は多勢ゐらつしやるんですもの。ぞろぞろぞろぞろ出て來ても、誰が先生だかわかる筈がありませんわ。」

「………」

彼は全くうけこたへが出來なくなつて、受話器をもちあつかひながら、へどもどして居るばかりだつた。

「あたくしたゞ結構だなんていふんではいやですわ。どこがいゝとか惡いとか指摘して頂くんでなくては滿足出來ませんわ。」

「でも……」

電話では駄目た。多勢意地の惡い奴が旣にあやしみの視線を集中してゐるのだと云ひ度いのだが、もとよりそれは云へなかつた。

「あたくし一度御目にかゝつて、いろいろ敎へて頂き度いのですけれど、御宅へ伺つてはいけないんでせう。あたくしみたいなものが伺ふと、奧樣が御怒りになるんぢやあないでせうか。」

「いゝえ、そんなものは無いんですよ。」

彼はすつかり赤面して、同僚の方を横目で見ると、おもひなしか皆手を休めて、聞耳を立てゝゐるやうだつた。
「あら、御冗談でせう。御きれいな御優しい方がゐらつしやるんでせう、先生。」
「いゝえ、ゐやあしません。」
ひとりきりですと、はつきり云ひ度いのが、これも憚らなければならなかつた。
「あたくし、とても信じられませんわ。」
「ほんとなんです。」
「嘘でせう。」
「いゝえ……。」
その時電話はふいと切れてしまつた。
「話中ですよ、話中ですよ。」
と云つてみたけれど、それつきりになつてしまつた。殘り惜しいやうな、安心したやうな氣持で、受話器を掛けた。同僚はあらためて、疑深い目つきをした。

## 二

日曜は、勤人にとつては何よりの樂しみである。殊に嵯峨欣三のやうに、此の日を小說執筆の書入日としてゐる者にはお正月を待わびる子供の心持であつた。花時の、しかも晴渡つたうらゝかな日であつたが、彼は靑山も澁谷に近い新開地の粗末な家で、朝から机にむかつて居た。以前の下宿の世話で來た婆やは、晝飯を濟ませると豫々約束のひまを貰つて、三河島の方にかたづいて居る娘の家に、孫の顏を見に出かけた。

「なあに、晩には蕎麥を食ふから支度には及ばない。出て行く時にかけを二つ五時頃に持つて來るやうに云つとくれ。」

いそいそして、心はとつくに遠方へ行つてる癖に、自分丈遊びに出ては濟まないとか、夜食の支度をしなければ困るだらうとか、くどくど云つてゐるのを促して出してやつた。結局一人きりの方が心がおちついて、仕事をするにはよかつたのである。

果して仕事ははかどつた。一枚々々書上げる原稿紙の嵩高になつて行くのは、何よりも嬉しかつた。今迄に例の無い事だが、一氣に一篇を完成してしまひさうな意氣組だつた。ところへ、お

もての格子の鈴が、響いて來た。物貰ひか、押賣か、ちえつうるさいなと思ひながら、しびれの切れた足を引摺つて、玄關の障子を手荒く開けると、意外にも目の前には色彩の強烈な若い女が立つてゐた。

「先生でゐらつしやいますか。あたくし先日原稿を見て頂きました……」

「あゝ草葉さんですね。」

「突然うかゞつて御叱りをうけるかとも思ひましたけれど……」

「いゝえ、そんな事があるものですか。どうぞ御上り下さい。」

「ほんとに御差支御座いませんか。」

「えゝ、構ひませんとも。」

つひぞ見馴れない若い女の姿を、格子の外の往來から、近所の女房や子供達が、珍しさうに見てゐるので、内心ひどくてれながら、さも平氣らしくつとめてゐた。

座敷も書齋も兼帯の六疊の明るい緣側に近く女は坐つた。彼は書かけの原稿の乘つてゐる机を砦(とりで)のやうに頼みにして、ふだんの席を動かなかつた。

「あいにく婆さんが遊びに行つてしまつて、滿足には御茶も差上げられません。」

眞直に自分の方を見て坐つてゐる相手を、胸をどきつかせながらも觀察してゐた。年齡は十八九か、かつら下地のやうな感じの束髮、細く剃つてしかも濃く引いてゐる眉毛、悍りも無く眞白に塗つた白粉――それが第一の強い印象だつた。目が細く、鼻と口が少し大き過ぎ、もみあげの著しく長いのが、多少みだりがましい色つぽさを見せたが、兎に角誰の目にも美人として映る事は疑ひ無かつた。

「しかし、變に淫猥だな。」

矢張り不良少女だつたのかと、ひそかに肚の底に力を入れて用心もした。

女の方でも正面から、しげしげと觀察の目を向けて居た。

「あたくし、先生つてどんな方だらうと、隨分いろいろ想像してゐましたわ。」

「さうしたら、想像と違つて驚いたんでせう。」

容貌に自信の無い彼は多少心を傷つけられた。人並より低い自分の鼻の尖がくすぐつたかつた。

「全くさうなんです。あたくし先生つて、もつとおつかない方では無いかと思つてゐましたの。」

「どうしてゞす。」

「だつて御書きになるものを拜見すると、とても御皮肉なんですもの。殊に女性に對して。」

「皮肉っていへば、あなたの方が餘程皮肉ですよ。殊に男性に對してね。『侮辱される男性』なんて、標題が既に猛烈ぢやありませんか。」

「實はあたくし、先生の『丸の内』を拜見して、あんまり癪に障つちやつたから、復讐してあげようと考へましたの。男の意氣地の無いところをさらけ出してやれつて氣になりましたの。」

此の年頃の女に似合(にあは)ず、相手の顔をまばたきもしずに見つめながら、例の冴えない聲變りの途中の聲で、ざつくばらんを得意とするやうなあけすけな調子でいふのであつた。彼は次第に壓迫される不安を、消す事が出來なくなつた。

「先生、御驚きになつたでせう。あたくしつて、こんな人間なんです。でも、あたくしを御覧にならない前は、どんな女だと御想像遊ばして？」

「不良少女だらうと想ひました。」

此處で弱味を見せてはいけないと思つて、彼も負けない返事をした。

「あら、隨分ですわ。まるでひどいわ。」

だだつ兒のやうにからだを振つて、乘出して來た。何時の間にか、肉づきのいゝ膝が開いて、紅白の市松(いちまつ)の長襦袢がはみ出してゐた。

「だつて、あの作品を見れば、誰だつてさう思ひますよ。」

彼は抽斗から虹吉作の小說二篇を取出して、最も露骨な描寫のあるところを開いた。

「斯ういふ素晴しい智識を持つてゐるんですからねえ。」

二人はひとつの原稿を間に置いて、雙方から、頭を突出してのぞき込んだ。其の小說に大膽に描いてある男女のもつれあふ場面を指示して、それが如何しても普通の若い女には、よしんば知つて居ても描けない情景だといふ事を說いた。それから、自分の好きな描寫論に及んで、第一作も第二作も素晴しい出來榮ではあるが、斯う迄人間の慾情を露骨に描かれては、とても印刷に附して廣く世間に讀ませる事は不可能である。若しほんとに文壇に出ようとするなら、もつと人間生活の他の方面を描いて見てはどうだと勸めた。近々と女の肉體の熱氣を感じ、白粉と香水の強い匂に鼻孔を刺戟されながら、彼は聲が震へ出しさうで爲方が無かつた。

「ですけれど、あたくしは世の中の眞相を赤裸々に描くのが價値のある仕事だと思ふんですが、さうでは無いでせうか。」

「さあ、なんて云つたらいゝかなあ、つまり、あんまり猛烈でない景色を描くんですねえ。人間だつて、此の方面ばかりに活動して居るわけでは無いのだから、何か外の生活もあるでせう。」

「あたくし、人間なんて、みんなそんなものぢやあないかと思ひますの。ブルでもプロでも、あくせく働いたり、お金をためたり、出世しようとしたり、親切ぶつたり、正義ぶつたりするのも、詮じつめればみんな同じ事ですわ。いやだいやだ、人間なんてほんとにいやだ。」

笑ふと一層細くなる目に微笑を浮べながら、言葉丈は不愉快さうに言つて、はげしく首を左右に振つた。

「まさか、さうでも無いでせう。しかし貴方の年配で、さういふ極端な人間観を持つて居るのには何かわけがあるんですか。」

「わけといひますと。」

「たとへば失戀したとか、男にだまされたとか……」

「おゝいやあだ。あたくし男なんか大嫌ひですわ。女だつて好きぢやないけれど。」

「さうすると厭人主義ですか。」

「さうでも無いの。あたくしのは人間嫌ひでは無くて、人間がすました顔をしながら、直きとけだものと同じ心を起すのがいやなんです。だから戀なんて眞平ですわ。」

「人間だつて生物ですからねえ。」

「えゝ、徹頭徹尾けだものゝやうに振舞つてゐるのなら痛快ですわ。上邊(うはべ)はさうで無い樣に見せかけてゐるのがいやなんです。」

「ひどく嫌はれちやつたなあ。」

「でも、一人や二人は好きな人間があつてもいゝと考へてゐますの。戀なんて生溫(なまぬる)いんぢやなくて、たゞ好きだつていふのを。」

「つまり犬か猫のやうに可愛がつてやらうといふんですか。」

「えゝ、そんな事かもしれないんです。」

咽喉にひつかゝつたやうな特色のある笑聲を、仰山に響かせたが、笑ひが止むとぢいつと彼の顏を見ながら、

「あたくし、先生が好きになつちまふかもしれませんわ。」

と顏色も變へずに云つた。

彼は、はぐらかす事も出來ないで、狹い庭の方へ目を反らした。何時の間にか、永き日も傾きかけてゐた。竹垣の外を、豆腐屋の喇叭が、ものうく通り過ぎた。

臺所へ蕎麥屋の來たのをいゝ機會に立上り、婆やのあつらへて行つたかけ二つを受取つて、追(おつ)

かけて天ぷら蕎麥を二ついひつけた。

「今日は留守番だから、蕎麥で濟ませようと思つてゐたんですが、貴方もつきあひませんか。」

なかなか歸りさうもない相手の樣子に、彼はそれを座敷へ持込んで、ひとつづゝ分ける事にした。

「あら、先生の召上るのを取つちまふんですか。」

「後から直ぐおかはりが來ます。」

遠慮とか、はにかみとかいふものを生來持合せてゐないのか、意識して振捨てたのか、此の女にはさういふわづらはしさも、風情も無かつた。

「頂きますわ。」

と一緒に箸を取上げて、男のやうに音を立てゝ、するすると啜込んだ。間も無く來た天ぷらも、うまさうに食べた。僅かに女らしい樣子を見せたのは、脂肪の浮いた顏を直すために、懷中鏡と紙白粉を取出した時だけだつた。

暮切つてもおちついて、身の上の事を雄辯に話した。草葉虹吉は、本名を戸波勝子と云つて、今年十九になる。父親は東京市の役人だつたが、收賄事件に引かゝつて罪を負ひ、そんな事が元

になつて精神に異狀を呈し、自らくびれて死んでしまつた。兄は私立大學を出て或商會の大阪支店に勤め、勝子は女學校の卒業間際に父の死にあつて中途で退學し、最初は百貨店に勤めたが風儀の悪いのに驚いてやめてしまひ、今は丸ビルのなかの或會社の計算係をして、おひとよしの母親と二人で東中野に住んで居る。兄からの仕送はあるけれど、それも澤山ではないし、いくら男の社員に負けないやうに働いても給料にも賞與にも差別はあるし、後々出世する途も開けて居ないので、女の月給取では一生獨立した生活は出來ない。其處で、好きな道を選んで小說家になつて見ようと決心したのであつた。それから書出したのが「昇降機」と「侮辱される男性」で、何れも百貨店と丸ビルで見たり聞いたりした事をもとにして、それを極端に色どつたのであつた。

如何に男の社員といふものが、女の事務員を物にしようとするか、如何に女の事務員が男の社員を物にしようとするか、小說に描いたよりも一層はげしい實例を擧げて話した。

「ですから、あたくしの描く事は、毎日目の前に起る事件の記錄に過ぎませんわ。あゝ、いやだ、いやだ。ほんとに人間はいけ好かないわ。」

それが癖なのであらう、身を揉んではげしく首を左右に振つた。

「そんなら貴方なんか隨分男の社員に騷がれるんでせう。」

「えゝ、うるさい事が多ござんす。あんまり下らない事をいふ奴があると、あたくし横面を張飛ばしてやりますの。」
手をあげて張飛ばす形をして見せた。
「えらいなあ。」
「えらござんすとも。」
男だつて女だつて何も違ふ事は無いといふのが自分の主張なのだと云ふ。性的偏見を捨てゝ、スタアトさへ同一にしてくれゝば、女だつて男に負けるものかといふ氣勢を見せた。
「しかし、先天的に區別があるぢやありませんか。」
「女は子供を生んで、男は生まないつていふんでせう。そりやあ子供なんか生む女は別ですわ。」
何のこだはるところも無く云ひ切られて、嵯峨欣三は二の句がつげなかつた。理窟ではなく、理窟を無視した強さとでもいふ可きものが、彼の咽喉をふさいでしまつた。
遲くなつて、婆やが歸つて來た時も未だ女はゐた。
「只今。」
といつて襖をあけた婆やは、思ひがけない女客にびつくりして、主人の顏と客の顏を見比べて

二度も三度もおじぎをして、臺所へ引込んでしまつた。

「それではあたくしもおいとま致しませう。どうも長々と御邪魔致しました。」

とあらたまつた挨拶をしたが、直ぐには立上らなかつた。

「先生、又うかゞつても構ひませんでせう。あたくし先生が好きになつちやつたんですもの。」

笑ひながら、それを捨ぜりふのやうに殘して歸つて行つた。

「あの方はどなた様で御座いますか。」

玄關迄見送つて出て、さて引込まうとするところへ、今迄聞耳を立てゝゐたらしい婆やが、うさん臭さうな顔を出した。

「小説家になり度いと云つて突然たづねて來たんだ。」

「へえ、女の癖に小説なんか書けるんで御座いますかねえ。」

腑におち兼る樣子で、婆やは疑深い白眼で主人の顔を見上げた。その眼の中には、自分にひまをくれて置いて、女を引入れたのだなといひ度がつてゐる氣配が、はつきりと感じられて、嵯峨欣三は顔が紅くなつた。

三

草葉虹吉事戸波勝子からは、殆んど毎日電話がかゝつて來た。卓上の電話の呼鈴が鳴ると、社員は一齊に目を見合せて笑ふやうになつた。上役の思惑を考へて、彼はひどく困つて居たが、その癖電話のかゝつて來るのを待つ心持も充分あつた。電話がかゝつて來ると云つても、第三の創作にとりかゝつたとか、今日も省線電車の中でいやな奴にあつたとか、會社の庶務係の若い社員か手紙を寄越したから皆の前で讀上げてやつたとか、そんな事をさも面白さうに喋つて居るばかりで何のとりとめも無いのであつた。

女の態度が、從來彼の頭の中にあつた概念の女と著しく變つてゐるので、何となく不氣味なところはあつたが、ふてくされとも思はれる言動の中に、何か動かし難い覺悟だか信念だかを宿して居るやうにも感じられて、むげにおとしめる氣にはならなかつた。それよりも氣にかゝるのは、女が處女かどうかといふ事だつた。これは彼にとつての力強い興味だつた。

隨分露骨な事でも平氣で話し、男なんか何とも思つて居ない樣子で、ふてぶてしく見えるが、それが過去の經驗から來て居るのではないらしく、自分一人できづきあげた人生觀の爲めらしい。

氣まりが惡いとか羞しいとか云ふ樣子などは無視して居て、寧ろ厚かまし過るやうにも見え、同時にたゞもので無くも思はせる。何にしても十八九の女としては、一徹ながら自己の考を持つてゐるのが、萬一不良少女だとしても、たゞの不良少女では無いに違ひ無かつた。

そんなら、何の爲めに自分に近づかうとしてゐるのだらう。文壇には、自分なんかとは比べものにならない大家がゐる。自分なんかとは比べものにならない人氣のある作家もゐる。若くて、金廻りがよくて、男ぶりのいゝのも居る。それなのに自分が擇ばれたのは、同じ丸の內界隈の勤人だから近寄り易いといふ以外に理由は無さゝうだ。

一切男女關係は否定するといふのだから、自分に對してもたゞ小說を見て貰ふといふ外には意味は無いのかしら、それにしても毎日電話をかけて來るのはどういふわけだらう。矢張友達がほしいと云ふ程度かな。それとも犬か猫のやうにおもちやにしようといふのかな。どつちにしても或點迄は此方も面白づくで相手になつて居てもいゝ。あれが七三耳かくし、卽ち新しい女の典型かしらん。彼はふと、創作「丸の內」に對して浴せられた「新時代の女性を知らない」といふ批評をおもひ出して、ひそかにうなづく所があつた。

その週間の土曜日の午後、會社のひける間際になつて、電話がかゝつて來た。

「先生、あたくし是非御目にかゝつて御はなしし度い事があるんですが、明日又御宅へうかゞつてはいけませんでせうか。」

「さうですねえ、明日は一寸先約があるんですが。」

先約なんてありはしないのだが、婆やの存在をはばかつて、うちに來られるのは防ぎ度いのであつた。

「それでは今日御歸りに何處かで御目にかゝれないでせうか。」

「さうですねえ、何處で。」

何時もながら周圍の人間が邪魔になつて、はつきり口をきく自由を持つて居なかつた。

「何處でもよござんすわ。日比谷でも銀座でも。」

「私も何處でもよござんすが……」

日比谷公園は人目が多くて困るのだが、聲に出してはいへないので、ぐつと呑込んでしまつた。

「それぢやあ銀座の千疋屋の二階で御待ちして居りますわ。よござんすか。」

「承知しました。」

顔が火照(ほて)つて、胸はわくわくしながら電話を切つた。

つひぞ無い經驗だが、逢引に行く人間の心持はこんなものかと想はれる。人目のはゞかられる、しかもいそいそしたおちつきを失つた態度で、晩には靄の深くなりさうな夕景を銀座へ急いだ。いろいろの草花の咲揃ひ、いろいろの小鳥の鳴いて居る千疋屋の二階に上つて行くと、ちひさく區切つてあるしきりの中の卓に肱をついて、女は雜誌を讀んで居た。

「まあ、よく來て下さいましたわねえ。」

「感心でせう。」

「感心。」

そこいらの人が振かへつて見る程大きな聲で云つて、仰山に笑つた。

やかましく囀る鳥の眞似をしたり、額に立皺を寄せながら、曹達水を麥藁で飲んだと思ふとあぶくを吹いて見たり、はらはらする樣な事をしては、一人ではしやいでゐた。無邪氣と云つていいか、脫線と云ふ可きか、何としても人前では迷惑な事だつた。

「あたしお腹が空いちやつたわ。」

と帶の上を叩いて見せもした。

「そんなら何か御食べなさいな。」

「頂くわ。」
直に女給を呼んで、サンドウイツチを注文した。
ハムの脂肪でぬらぬら光る脣は、一層紅味を増した。
「あたし御酒飲めるんですよ。」
「へえ、どうぞ御遠慮なく。」
「先生は？」
「私は猪口に一杯飲んでも醉拂(よつぱら)つて、頭が痛くなる方です。」
「まあ、面白いわねえ、先生を醉拂はしてあげようかしら。」
又自分で女給をよんで、コクテイルを二ついひつけた。
「プロヂツト。」
新劇團の舞臺からでも覺えて來たしぐさであらう、相手の杯にかちりとあてゝ、一息にぐつと干した。
「あら、先生、乾杯よ。」
一寸脣に觸れたばかりで下に置いたのを見ると咎めるやうに云つた。彼は笑ひながら、思ひ切

つて半分ばかり飲んだが、口あたりのいゝにも似ず強烈なので、忽ち噎せてしまつた。

「あゝ苦しい。」

といひながら半巾を取出さうとすると、女は先刻から指先でもてあそんで居たへりに縫取のしてあるのを投げて寄越した。ヘリオトロツプの濃厚な匂が、酒の香にも增して鼻をついた。

女は愈々面白さうに、目のふちをほんのりさせて、他愛も無い事を喋つてゐたが、彼は半分のコクテイルに全身眞赤になつて、頭の中は狂つた時計のぜんまいのやうになつてしまつた。

「ほんとに先生は弱蟲ねえ。」

何と云はれても返事をするのものうくて、彼は卓の上に兩肱をついて休息してゐた。

「そんならあたくし頂いちまふわ。」

半分殘つてゐる杯を奪つて、見事に飲干してしまつた。

「駄目よ、先生。あたくし未だ肝心の御話しないんですもの。」

ぼんやりして居てはいけませんと云ふこゝろで、頰杖をついて居る手をぐつと引いた。なま溫く汗ばんだ女の手につかまれた指先から、全身に微かな震へを感じた。

その手を力強く握つたまゝで、肝心な話といふのを始めた。先づ第一には、今勤めて居る會社

をやめて、專心創作を勵む事、とはいへ矢張多少の收入は欲しいから、せめては之も筆に緣のある新聞社に勤める事、幸に或新聞社で婦人記者を求めてゐるから、此の方は直ぐに決心すれば不可能で無い事等を、聲變りの中途のやうな特殊の聲で、立てつゞけに喋つた。

「もうあたくし決心しましたわ。どうしても文筆勞働で身を立てようと思ひますの。」

「駄目ですよ、新聞記者なんかになつては。ほんとに創作をやらうといふのなら、今の御勤めの方がましでせう。なまじ文章をつゞる記者なんかになると、かへつて藝術的良心は痲痺してしまふでせう。」

彼は存外熱心に反對した。それは平生自分が文壇で、二重生活者だと云つて罵られて居る事に對する忿懣の念も勿論手傳つてゐた。

「それでも今の會社はほんとにいやなんですよ。いやだいやだと思ひながら引摺られて行くのは正しい事ではありませんわ。兎に角新聞社の方が、もつと自由で廣い世界があると思ひますわ。あたくし、母とも別れて、ほんとに身輕になつて働いて見度いんです。」

大阪にゐる兄が近いうちに嫁を貰ふ事になり、今迄の下宿住居をやめる事になつたので、新居の手傳かたがた、母親を下阪させて、自分は下宿してゞも一人で暮らし度いと云ふのであつた。

「女性特有のロマンテイシズムですか。」

「えゝ、それでも男性特有の功利主義よりはましでせう。」

「しかし、貴方のやうな若い人が、まさか一人で下宿住居も出來ないでせう。」

「自分の意志さへしつかりして居れば平氣です。たゞあたくし、ほんとは下宿なんて好きぢやあないのです。」

細い目を大きくみひらいて、彼の顔を眞當面に見つめて居たが、又ぐつと強く手を握りしめて、

「先生、あたくし一人ぼつちになつたら、先生の御宅へ置いて頂けないでせうか。」

といひ切つたが、卓子の下の彼の靴のつま先は、その時女のフエルト草履で、しつかり踏みつけられた。

彼は答へる言葉を知らなかつた。驚いて女の顔を見ると、媚笑でも浮べてゐる事か、ひどく生眞面目な堅い表情をして居るので、かへつて壓迫されてしまつた。しつかりと握られて居る手は汗になり、踏まれてゐる靴の中は蒸されるやうに感じた。胸の鼓動が高くなり過ぎたり、全くとまつてしまつたやうな氣がして、不見目にへこたれたまゝ、何時迄も默つてゐた。

「おほゝゝ……」

女は突然身をもんで笑ひ出した。手を放し、爪先を後に引いて、

「先生、誤解してらつしやるんだわ。あゝ、可笑しい。先生みたいな方でもさうなんですもの、ほんとになさけなくなつちまふわ。」

心の底から可笑しくて堪らないといつた風に、笑つたが、笑ひ止んだと思ふと、目の前のコクテイルの杯の底に殘つてゐる櫻ん坊の紅いのを、指でつまんで口に入れた。

「先生も矢張り、すべての男の人が考へるのと同じやうに御考へになつたんでせう。いやだ、いやだ。想像する丈でもいやだわ。」

そんなら男の手を握つたり、足を踏んだりしたのは如何いふ積りなんだと、詰問してやり度かつたが、すつかり先手を打たれて居るので、それまでの勇氣は出て來なかつた。彼も爲方無しに、もう一つの杯に殘つてゐる櫻ん坊をつまんで口に入れた。

「あたくし、先生を誘惑しようなんて思つちやあゐませんわ。賴まれたつて、願はれたつて御免です。あたくし、先生ならうるさい事やいやな事無しに、御友達になつて行けると思つたもんだから、さう云つて見たんです。づうづうしい事はづうづうしい事なんですけれど、先生の御宅に

置いて頂ければ、どんなにしあはせだらうと考へました。共同生活だなんて御考へになつてはいやですわ。同じうちにゐさせて頂くだけで、先生は先生、あたくしはあたくしなんです。それつきり何も無いのです。おほゝゝ……いくらこんな事を云つても、先生は信用なさりはしませんわねえ。」

「私ばかりぢやありますまい。誰だつて信用しませんよ。」

かなりの努力で、やうやく口をきく事が出來た。女のいふ事が、みんな出鱈目か、或はこつちが手に乘らなかつたので、はしたない自分のしわざをごまかしてしまはうとするのだらうと思つた。

「だからなさけないんです。男も女も、いやらしい事なんか微塵も無くて、一緒に遊んだり一緒に暮らしたり出來たら、どんなに面白いだらうと思ふんですけれど。」

「そんな相手はいくら探してもみつかりますまい。第一不自然ですよ。神様が許しませんよ。」

彼は少しばかりゆとりを取返して、相手の夢想を說破してやらうといふ氣になつた。

「不自然ですつて、今の世の中に不自然で無い事なんかありやしませんわ。それよりも人間が、不自然たらうがなんだらうが、もつと面白い事を作り出さなければならないんだと思ひますわ。

こんないやな世の中なんかどうなつたつて、ちつとも惜しかありません。そんな事に構はずに、めいめいが途方もなく奇抜で面白い生活を考へなければ、退屈してしまふでせう。先生も矢張り話せない方でしたわねえ。」

ひどく張合のぬけた調子を籠めていひ終ると、さも疲れたといふ様子で、はゞかりもなく大きなあくびをした。

四

それつきり、暫く電話もかゝつて來なかつた。冷靜に考へて見ると、あらゆる點が彼の好みには適はない女であつたが、あれつきりで失つてしまふのは心殘りだつた。もつとゆつくりつきあつて居るうちに、まともな人間にしてやる事が出來るやうな氣もした。まるで自分を釣りに來て、釣落すとそのまゝ行つてしまつたやうな露骨な態度は忌々しかつたが、少くともあの小說はかなり立派なものだつた。眞面目に勉强すれば、まだまだ延びるうでを持つてゐる。少し脫線過るけれど、磯松風やマシマロのやうなふはふはした女よりは、味があるやうな氣もした。昨日も今日も待つて居た電話がかゝつて來ないと、こつちからかけて見度い程心寂しかつた。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そんな事を報告したゞけで、話は濟んだ。

けれども其の電話の話は頭にこびりついてしまつた。直ぐに喫煙室に備へてある新聞の綴込をひつくりかへして、「銀座の店々」を特別の興味でもう一度讀んだ。あなどり難い觀察はあるが、こんな記事を書かせて置くのは惜しい氣がした。新聞記者になつてしまつたといふ事が、とりかへしのつかない事のやうに思はれた。

その翌日、彼は會社の歸りに銀座を散歩した。毎日銀座の目ぼしい商店を廻つて居るといふ女の言葉が、彼を唆した事はいふ迄も無い。方々の勤人のひけ時だから、わき見も出來無い雜沓だが、その人波の中であの女に出あひさうな氣持がした。既に『銀座の店々』の中に描出された新築の百貨店だの、尾張町の角のカフヱだの、大繁昌の食料品屋だの、高價な物ばかり賣る貴金屬商などは、特別の注意を向けた。機械仕掛で動く玩具や、鷄の雛子を賣る露店商人の前に集る人數の中にもまじつたが、それらしい人には出あはなかつた。元より出あはないのが當前なんだとあきらめて、

「千疋屋にでも行かうか。」

と思ひながら、ひどく疲れた氣持で歩いてゐた。

「嵯峨さんぢやありませんか。」

呼止められて氣が付くと、目の前に學校時代の友達が立つてゐた。化粧品だの、裝身具だの、その他の唐物も賣るし、洋服部も、美髮部もある名代の贅澤屋から出て來たところで、厚紙で包んだ買物を、大事さうに抱へてゐた。

「しばらくでしたねえ。買物ですか。」

「えゝ、此處の主人は知合ひなものですから。」

「不景氣々々々といひながら、斯ういふ贅澤屋が繁昌してゐるんですねえ。」

「ところがちつとも儲からないさうです。この頃は暴力團が毎日ゆすりに來るさうだし、新聞記者は洋服をあつらへて金を拂はないさうだし、とてもやり切れないといふ事です。」

金持の息子で、おやぢの作つた會社の重役になりすましてゐる友達は、他人の迷惑なんかに頓着なく、さも面白さうに笑つた。

「へえ、新聞記者は洋服代なんか拂はないんですかねえ。」

「女の記者でも拂はないさうですよ。又店の方でもうつかり請求してあだをされるのが恐いから、何處のうちでも年貢を納める氣でゐるんださうです。」

そんな不用意な話と、屈託の無い笑を殘して、友達は別れて行つた。

嵯峨欣三は、何の張合も無い心持で、千疋屋の二階に上つて行つた。手近の空席に腰をかけると、それを待構へてゞも居たやうに、

「ニツポーンバンザイ」

と直ぐ頭の上の鸚鵡が叫んだ。

つい此の間、女と此處で待合せた時の事などは、考へるのも忌々しかつた。彼は淡い曹達水を飲み乍ら、夕刊を讀んで居た。

其處に、棕櫚竹や歯朶の葉の蔭になる階段を上つて來た二人連があつた。女の洋裝に目を引かれて、新聞を置いた彼は眞向から竹刀を受けたやうに驚いた。長身の、胴のあたりの思ひ切つて締つた薄色の服、赤皮の靴にスパツツを穿き、絹の手袋と一緒に細身のステツキを手にした男と並んで、樺色の羅紗地の極端に裾の短い洋裝の女は、まぎれも無い戸波勝子だつた。ふとり肉のふくらはぎの形のよくないのが、鼠色の絹の靴下をぴつたりと吸ひつけてゐて、著しく目立つた。

「あら、先生。」

女も流石にびつくりした樣子で、連の男をうつちやらかして、つかつか寄つて來た。

「お一人？」

わかり切つた事をいひながら、向ひあひの椅子に腰を下した。何時鋏を入れたのか斷髪で、眼のふちには墨を刷き、小鼻の横には黑子を描いてゐた。

「どうです、新聞社は面白ござんすか。」

彼は、女の突飛な樣子を、苦々しく思ふと共に、自分などゝは比べものにならない、すつきりした男と手を組んで來た事で、すつかり機嫌を惡くしてしまつた。みなりも容貌も整ひ過ぎてゐる男は、遠くの卓子から、ぢいつと此方を眺めてゐる。それにひき比べて、彼は自分の男ぶりのひきたゝない事を、腹立たしく思つた。

「別に面白いつて事もありませんけれど、先の會社なんかとは比較になりませんわ。自由で、社の肩書のある名刺さへ持つて行けば、何處に行つたつて頭を下げないで濟むし、それに收入だつて惡くないんですもの。」

「それで、お母さんは大阪の方へ行つてしまつたんですか。」

「えゝ、あたくし只今此處に居りますの。おもに西洋人の居るホテルなんです。」

南京玉のぴかぴか光る手提袋から名刺を取出して、山の手の或ホテルの所と名を鉛筆で書いて

くれた。

「一人でゐるんですか。」

「あら先生、又變な風に考へてゐらつしやるんでせう。あたくし、先生でさへ駄目だつたんですから、もう男の人と一緒に暮す事なんか不可能だと思ひましたわ。」

もともと表情には苦心してゐたのが、洋裝の爲めに一際工風を凝らしてゐる樣に見えた。

「おつれの人は？」

彼は女のいふ事があんまり出鱈目らしいので、愈々憎らしくなつて來た。

「あの人！　あたくしと同じホテルにゐる方よ。」

「それぢやあ、貴方一人つきりではないぢやありませんか。」

「先生、後生ですから、そんな事いふのはやめて頂戴。あの人はあの人で一室借りてゐて、あたくしはあたくしで一室借りてゐるんですわ。」

折柄そばを通りかゝつた女給を呼止めて、女は飲物をあつらへた。

「あとで、あちらで一緒に拂ひますわ。」

男のゐる卓子の方を顎で指して、直ぐに麥藁で吸ひ始めた。

その男といふのは越後の大金持の息子で、或大學を卒業して、何もしずに東京で遊んで居るのだか、たまたま女か新聞社の命令で、舞踏場の探訪に出かけた時知合ひになつたといふ話だつた。

「お人よしで、ちつと足りない方なのよ。」

とつけ足した。

そんな話をしながら、ちゆうちゆう音をさせて飲料を吸つて居るのを見て居ると、横面を張飛ばし度いやうな氣がした。口から出まかせな事をいひながら、此の女は彼の男とくつついて居るんたらう。何か深い考へのありさうな口はきいて居るけれども、要するに恥知らずなんだ。たゞのづうづうしい女なのだ。これが新しい女なら、總ての新しい女といふのは恥知らずだ。鐵面皮だ。さう思ふと同時に、此の鐵面皮こそ、現代に處する唯一の道かといふやうな氣もした。何と云つても女の強氣には、はむかふ力量を持つてゐなかつたのだ。

コップの底迄吸ひ盡した女は、はでな手巾で口を拭き、懐中鏡を出して顔を直しながら、

「先生、こんな風御嫌ひなんでせう。」

とすました顔つきで云つた。

「だけど、方々步き廻るのに和服ではとてもたまりませんわ。裾は切れるし、電車の乘り降りに

は不便たし、矢張り洋服は便利ですわ。それにホテル住居だとなほさら。」
「さうでせうとも。」
彼は額にあらはれる癇癪皺を消す努力もなくなつて、
「それは最新流行の型なんですか。△△屋調製とでもいふ……」
つい先刻友達から聞いた話を不圖想ひ出して、その贅澤屋の名前を云つてみた。
「まあ、どうして御わかりになつて。先生も隅には置けないわねえ。」
流石に冷かされたとでも思つたのか、立上つて、行かうとした。
「だつて△△屋では、新聞記者の注文が殺到して大弱りだつていふ話ですから。」
非常な努力でいひ切ると、彼の脣は乾いて震へた。
「まあ、先生。」
向直つて屹となつたが、どうしたのかつひぞ無い事で眞紅に顔を染めてうつむいた。つとめて何か返答をしようとしたが、羞しさに壓倒された様子で、一瞬間ためらつた後で輕く頭を下げると、向ふの卓子に待つて居る男の方へ歩いて行つた。
嵯峨欣三は、飲殘しの曹達水を一息にぐつと干した。一寸の間、ひどく痛快な氣もしたが、間

も無く平靜な心にかへつた。ほんの一瞬間に過ぎなかつたけれど、羞恥の念に顏を染めてうつむいた時、女は何時もよりも遙かに美しかつた。彼は氣の毒になつて、はしたない自分を悔いた。あれ程迄にづうづうしく、男と女の關係などもあけすけに口にして憚らず、自分の如きものにも積極的に振舞つて來て、それが見込が無いと見極めをつけると、直ぐにあんな男と一緒になつて平氣でゐる女――その事をそれとなく冷かしても微塵も心の動搖を見せなかつたものが、洋服をこはもてにこしらへさせて居る事に對しては恥を感じたのか、やつぱり正義の念だけは失はないのだなと思つた。

「いやさうでは無い。」

彼は自分の重苦しい考へ方をうつちやるやうに首を振つた。

正義感で赤面したのではないかもしれない。男女關係や、その他あらゆる問題に對して、むかしの教を捨てゝしまひはしたが、何よりも大事なきものだけは、彼等の羞恥心を包んでゐるのかもしれない。きものきもの――新しい女も、きものの事になると、まだまだ目覺め兼てゐるのかもしれない。

近頃はやるコントの結末のやうな價値の無い駄洒落をおもひ浮べて、彼の心は輕くなつた。

「ニッポーンバンザイ」

と頭の上で、雪白の鸚鵡が鋭く叫んだ。（大正十四年七月五日）

# 果樹

相原新吉夫婦が玉窓寺の離家を借りて入つたのは九月の末だつた。殘暑の酷しい年で、寺の境內は汗をかいたやうに、晝日中、いまだに油蟬の聲を聞いた。

ふたりは、それ迄は飯倉の烟草屋の二階に、一緒になつて間もなくの、あんまり親しくするのも羞しいやうな他人行儀の失せ切れない心持でくらして居た。ひとの家の室借をして居ると、何かにつけて心づかひが多く、その爲めに夫婦の間に夫は妻に對し、妻は夫に對して、あたりまへ以上の遠慮があつた。

田舍の商業學校を卒業して、暫く役場に勤めて居たけれど、將來の望も無く、もともとあととりの身の上では無かつたから、東京に出て運をためして見ようといふ氣になつて、新吉が故鄕を出てから十二年になる。小學校では級長をつとめた事もあるし、商業學校でも何時も平均點は甲だつたから、若しも學資が豐かならば、大學迄行き度いのだつたが、それは許されない望だつた。鄕里の先輩で、相當の地位の役人をして居るのに口をきいて貰つて、現在勤めて居る銀行の最下級の行員となつて、夜は神田の私立大學に通つた。東京に行きさへすれば、うで次第でどしどし

偉くなれるやうに考へたり、級長だつたといふ丈の事で人に勝れて居るやうに思ひ込んで居たのなどは、夢よりもはかなく消えてしまつた。いゝ學校と悪い學校の區別も無く、大學といふ名前の魅力に誘はれて、大したものゝやうに想像して居たところも、いたつて無責任なものであつた。三年間の夜學を卒へて免状を貰つた時も、これで明日から苦しいおもひをしず、銀行がひけさへすれば樂々と手足が延ばせるといふ安心があつたばかりだ。別に學力が增したとも考へられなかつた。それでも銀行の方は人一倍眞面目につとめ、おとなしい正直な事務員として上役にも目をかけられ、毎年三圓五圓と昇給して、僅かながらも貯金も出來た。いつたいに辛抱のいゝ方でその間六年間烟草屋の二階に居た。

朝は早く、夕方はきちんと歸り、夜遊などは一度もした事がなかつた。月々の雜誌を二三冊とつて、始めから終まで丹念に讀むのが樂みのひとつで、日曜祭日にも郊外を散歩する位がせきのやまだつた。烟草屋のお婆さんは、いかに新吉が眞面目で勉強家で身持が正しいかを隣近所に吹聴して廻つた。お婆さんには息子が一人あるのだが、或保險會社の臺灣支部に勤めて居た。孫の顏も見られない寂しさから、新吉を我子の樣に可愛がつた。新吉に妻を世話したのもお婆さんだつた。

おときはお婆さんの念佛友達の、近所の菓子屋の隱居の遠緣の者の娘だつた。うちは日本橋の裏通のちひさな下駄屋で、女學校には三年迄通つたが、生意氣になつては困るといふ兩親の意見で、學校をやめて大名華族の邸に行儀見習にやられた。十六の年から二十迄つとめたが、病氣をして宿に下つてからずるずるになつて、母親の手助をしてゐた。菓子屋の隱居が何かのついでにおときの話をした時、烟草屋のお婆さんは直に新吉と結びつけて考へた。最初のうちこそ未だ早いとか、二人になつては暮しが樂でないとかうぢぐくして居たが、お婆さんが借りて來て見せた寫眞はまんざらで無く、みすくく斷るのは惜い氣がした。どうせ一度は貰ふものならと云ふ氣になつて、案外手取早く話はきまつてしまつた。それを機會に一軒うちを持ち度いとも考へたが、先方でも當分は二階借で結構だといふので、その儘烟草屋の二階の六疊に、不自由ながらも樂しい日を送る事になつた。それが今年の春の事だつた。

最初のうちはお婆さんも、自分のうちに嫁が來たやうなもの珍しい喜びを感じたが、それは長くは續かなかつた。二階の二人が自分を邪魔にして居るといふ疑念に煩はされるやうになつた。

「うちの相原さんも先の頃とは變りましたよ」

などと近所の者にも告口するやうになつた。

ほんとに新吉の生活も、以前とは少しは變つた。たまには二人で活動寫眞を見に行つたり、新吉の銀行の歸りをおときが途中で待うけて、何處かで御飯を食べて來る事もあつた。それがいち〳〵お婆さんの氣に入らなかつた。

二階の二人も、室借の窮屈に惱んでゐた。殊に新吉は、六年間お婆さんの親切には心から感謝して居たのに、俄にいやな事ばかり目に立つて、しみ〴〵他人の家の狹さを思ひ知つた。

それでも長い間世話になり、もと〳〵おときと一緒になつたのもお婆さんのおかげなのだから、結婚して間も無く出て行くのは心がとがめていひ出せなかつた。その點にかけてはおときの方は、さほど世話になつたと云ふ考も深くは無いので、どんな裏長屋でもいゝから一軒構へ度いと年中せがんで居た。せがまれると、おときを喜ばせ度い心が強くなつて、新吉もいつそ思ひ切つてさうしようかとも思ふのだが、生來のおとなしさと、人一倍義理や恩義には堅い方なので、愚圖々々に一日々々延びて居た。

ところが幸ひな事に、臺灣に行つて居たお婆さんの息子が突然本店詰になつて引上て來る事になつた。いづれは別に一軒構へる事になるかも知れないが、當分の間お婆さんと一緒に住むといふ事で、新吉夫婦はお婆さんのいやな顏を見ずに引越す事が出來るやうになつた。

いざ探すとなると、貸家も思ふやうには見つからなかつた。新聞の廣告欄を見たり、周旋屋の前に貼出てある掲示に足をとゞめたり、日曜には二人であてもなく山の手を歩いたりしたが、結局銀行の同僚が、白金の寺の離家があいて居ると教へてくれたので、夫婦で行つて見てきめてしまつた。

御寺は高臺の崖に臨んだところにあつた。古川をさしはさむ町々を見下し、雜木の多い麻布臺と向あつて居た。たいして大きな寺では無かつたが、庭は廣く、貸家の目的で建てた離家は、六疊と四疊半と三疊といふさゝやかなもので、普請も粗末だつたが、日當も風通もよく、樹木や草花の夥しく植てあるのを我ものにして、夫婦二人きりの住居には此上も無く思はれた。今迄居た飯倉の烟草屋の二階では、障子をあけると目の下の神谷町から西久保へかけて亞鉛葺の屋根の照返しが強く、息の詰るおもひをしたのに比べると、籠から逃げた小鳥の氣持だつた。他人まぜずの朝夕を迎へて、二人はほんとの夫婦の情愛を初めて知つた。

少しづつ所帶道具を買ふ樂みも深かつた。三田の緣日の晩に、豫々欲いと思つて居た長火鉢を買つた時は、新吉もおときもすつかり興奮して、歸途はお互に話す聲も高くなり、人通の少いところでは固く手を握合つた。雙方から感謝し度い感激で胸がいつぱいだつた。次の日、新吉が銀

行から歸ると、留守の間に屆いて居た長火鉢に鐵瓶をかけて、おときは赤坊に御湯をつかはせる母親のやうに、殆んど抱きかゝへる形で、大事に大事に布巾(ふきん)をかけて居た。

二人にとつての苦手は、お寺の梵妻(だいこく)のしつつこい程口數の多い事だつた。六十近い和尙と、先夫の子だといふ十六七の娘と、たつた一人の弟子坊主を意のまゝに動かして居るしつかり者で、自分の目から見れば世間馴ない夫婦を、指導してやらうとする心持が露骨だつた。未(ま)だよそゆきらしい夫婦仲を、先輩が後輩にのぞむ態度で面白がつて居た。

無口で羞しがりのおときは、まるつきり威壓されて、梵妻と顏を合せることを避けよう避けようと努めてゐた。晝間新吉の留守に、裏の井戸端で洗濯してゐる時などは、向(むか)ふも退屈しきつて居るので、下駄をつつかけて來ては側でおしやべりをして居た。和尙は門番の寺男と年中碁を打つて居るし、娘は女學校に通ひ、弟子坊主も四角い帽子をかぶつて宗教大學に通つて居るので、梵妻は話相手に飢ゑて居た。諸式が高くなつてお寺の經濟の苦しい事、和尙がぼけてしまつて賴りにならない事、此の前離家を借て居た小學教員夫婦の惡口などを繰返してきかされるのはまだしもだつたが、新吉夫婦にかゝはる內輪の事を、根掘葉掘訊(き)かれるのには、おときもよわり切つて居た。何時、どういふ風にしていつしよになつたかとか、新吉の月々の收入はどの位だとか、立

入つた質問を受けると、おときは顔をあかくしてうなだれる外に活路を見出せなかつた。

「あたしお寺の奥さんにはほんとに困つてしまふのよ。あなたの月給はいくらだなんて訊くんですもの。」

新吉が歸つて來ると、救はれたやうに氣強くなつて、おときは晝間梵妻にしつこく惱まされる事を訴へるのであつた。つい言葉に力が入り過ぎると、御寺の離家に住むのを厭ふやうな口ぶりさへ漏らした。

「そりやあひどいな。だけど其位の事は爲方がないよ。こんな借家は一寸ないぜ。僕は飯倉に居た時に比べると、頭腦はやすまるし食慾は旺盛になるし、めきめき健康がよくなつたやうに思ふ。」

「そりやさうですけどね、だつてあんまりなんですもの。」

さうは云ふものゝ、新吉と差向で晩飯を喰べ、日がかげると俄かに涼しくなる頃の縁側で、虫の聲の外には何の物音もしない廣い庭から、崖の下の町に灯のともる景色を見て居ると、湯治場にでも行つたやうなゆたかな心持になる。

「銀行の連中で、こんな廣い庭を持つてる人なんかありやあしない。先づ頭取と支配人丈たらう。

僕は田舎に育つて、子供の時分植物や昆虫の興味を先生に吹込まれたが、久しぶりでかうしたところに住むと、樹や草を見るだけでも氣が清々する。それにしても飯倉はひどかつたからなあ。」

烟草屋の二階の窓に据ゑて置いた朝顔の鉢は、引越の時に持つて來て縁先に置いたが、今では花もすがれてしまつた。はかない其の一鉢さへ、亞鉛屋根の景色を背景にしては、毎朝開く花の色に相當深い愛着を持つたのであつた。

「あたしは騷々しい町の中で生れたので、木の名なんか何も知らないんですよ。」

「だつて邸に居た時は、廣い庭があつたらう。」

「そりやあ何千坪つていふんですから、廣いには廣いんですけれど、たゞ立派な御庭だと思つただけでしたわ。よく御庭掃除のぢいやさんが、あの松一本でも千圓の値うちがあるなんて云つてましたけれど。」

「此の御寺には珍しくいろんな樹がある。僕がひとつひとつ敎へてやらうかな。」

「えゝ敎へて頂だい。」

二人は縁側に並んで腰かけて、たそがれた庭に向つて居た。

「あの門を入ると直ぐ右手の樹は知つてるだらう。」

「あれなら知つてるわ。ぎんなんの樹でせう。」

「そんなら本堂の前のは。」

「さるすべり。」

「たかなか知つてるぢやないか。それではあすこに見える一番脊の高いのは。」

「あゝ。あの澤山鳥の來る樹ですね。わからないわ。」

「榎さ。」

すつかり夜になつて、こほろぎの聲のしげくなる迄、あきずに植物や虫や鳥の話をした。

新吉は、殆んど何も知らないと云つてもいいおときに對して、自分の知識の豐富なのが嬉しかつた。おときにしても、何を訊いても知つて居る新吉が、たよりがあつて嬉しかつた。

それがきつかけになつて、新吉はいろいろの樹や草や鳥や虫の名を、おときに教へるのが樂みのひとつになつた。寺の地面うちだけでも、松杉楓(かへで)銀杏(いてふ)などの外に、椎(しひ)樫(かし)榎(えのき)椋(むく)橡(とち)朴(ほほ)槐(ゑんじゆ)などの大木にまじつて、櫻梅桃李(すもゝ)ゆすらうめ栗枇杷(びは)柿などの、季節々々の花樹や果樹があつた。草花には萩桔梗菊芒(すゝき)雞頭(けいとう)などの秋のもの丶外に西洋種も多く、今はサルビヤが眞紅に咲きほこつて居た。

榎の高い梢には鵯が群つて來た。銀杏のてつぺんで百舌の高啼く日もあつた。竹むらにからまる烏瓜をつつきに來る鴉、緣側の上迄寄つて來る雀、庭木の細かい枝をくぐる鶸や四十雀の姿も目に止つた。

　おときは新吉の指さす樹の枝に、可愛らしい小鳥の姿を見つけた時などは、聲をあげて喜んだ。さういふ事に喜ぶ自分といふものを初めて知つた。自分が喜べば、夫が滿足する事も一層嬉しかつた。全く今迄知らなかつた興味が、野原にも藪の中にもある事がわかつた。

　けれどもおときが弱つたのは虫の多い事だつた。蚊帳の用意が無かつたので、十月のなかば迄難澁した。蚊ばかりではない。名も知らない虫が、あかりを慕つて來る。蝶々蛾の類に屬するもの、うんか、かまきり、金ぶんぶんなどはおときの顔にぶつかつたり、髮にとまる事もあつた。仰山な聲を立て顔色を變て逃廻つたが、新吉は平氣で指でつまんで緣側から捨てた。彼は決して殺さなかつた。

「虫なんてそんなに怖いものぢやあない。よく見てごらん。みんな素晴しく巧妙に出來て居る。僕なんか、可愛らしくて堪らないな。小鳥だの金魚だの、あゝいふものを可愛がるのと同じやうに、こんなちひさな虫も可愛らしいと思ふ。」

さう云つて、吹けば飛ぶやうな虫を手の平に乘せて、長い間見て居る事もあつた。羽を微妙に震はせたり、脚を擦合せたり、目玉をくるくる動かして居るのを、新吉はおときにも見せて面白がつた。

「いくらあなただつて、かまきりは憎らしいでしよ。」

「あいつはいい奴だよ。大きな時代遅れの武器を持つて威張つて居るくせに、何處かにへうきんなところがある。虫でいやなものは先づないなあ。」

「あらいやだ。あたし蛇を見るとぞつとするわ。」

「蛇は綺麗だ。地面を火の波のやうにうねつて行くところなんか、人間のダンスなんかより餘程いいや。」

「あなたつて變な方ねえ。」

おときは全く理解出來ないやうに云つたが、心の中では夫の何事にも細かい觀察を忘れないで、面白味を見出すのは廣い心の故だと思つて感心した。

「相原は不思議なんで御座いますよ。植木だの草花が好きなのはわかつてゐますけれど、ちひさな虫まで可愛がつて決して殺すやうな事は致しませんの。」

何時も向ふから話かけられて、うけこたへばかりして居るおときもひそかに自分の夫をほこる心持をまじへて梵妻に話した。

「蝶々や蜻蛉ならよござんすけれど、蛇だの百足だの金ぶんぶん迄お友達かなんかのやうに思つて居るんですもの。」

「まあ蛇ですつて。いやだいやだ、あたしなんか聞いた丈でもぞつとしますよ。」

梵妻はうすい眉毛を寄せて、おびえた表情をして見せた。それがおときに、ひどく勝ほこつた氣持を與へた。

「いたゞくものにしましても、お魚や肉よりも野菜の方が好きですし、お菓子なんぞには手も出しませんが、果物は大好物でしてねえ、自分は山家育だから、なんでも土に近いものが好きだなんて申して居りますの。」

新吉にきいて初めて知つた樹や草の名前を口にしたり、指して示す時は、すくなからず得意だつた。

十月もなかばを過ると　落葉の早い碧梧桐朴櫻などは殆んど散盡し、外の樹木も枝がうすくなつて、透いて見える秋の空がくつきりと高かつた。

夫婦が借て居る離家の前の、黄ばみ始めた雑木にまじつて、見事な柿の木が一本あつた。鈍重(どんちよう)な感じのする大きな厚い葉に、夏中は日光が鋭く照返したが、今はその葉も艶と光を失つて、黄色く乾いたのは力無く土に落ち始めた。そのかはり葉かげにかくれて居た柿の實は色づいて、枝は重さを支へ兼るやうに撓(たわ)んで來た。

「あの柿の實が毎日赤くなつて行くのを樂みにしてゐましてねえ、朝雨戸をあけると、きつと縁側に立つて見て居りますの。」

故郷の家の背戸(せど)によく生(な)る柿の木があつたので、目の前に柿の實の赤らんで行くのを見て居ると、子供の頃の事迄思ひ出すと云つて、新吉は朝日に光る梢をなつかしさうに仰ぎ見て居た。おときはその柿の木を指さして、此の寺内(じない)に果樹の多い事が、如何に自分達夫婦の心を樂しくさせるかを梵妻に話した。

「へえゝ、相原さんはそんなにも植木が御好きなんですか。それでもあの柿は見かけばかりで澁柿なんですよ。」

梵妻も、西日にてらてら光つて居る柿の實の鈴生りに生つて居る梢を見上た。

「まあ、あんなに大きな見事な柿が澁いんですか。」

あれ程赤く熟したのが澁いとは全く思ひもかけなかつたので、おときは何のわだかまりもなく目をみはつた。

「えゝほんとに見かけ倒しなんですよ。澁いの澁くないのつて。」

「おやおや、それぢやあ喰べられないのですか。」

「喰べられるもんですかね。」

梵妻は現在口の中が澁くて堪らなさうに、大きな先の太い鼻を中心にして顔中をしかめた。その樣子が眞に迫つて居ると云つて、おときは背中を車海老のやうにして笑つた。

その日新吉が歸つて來て、差向で樂しい食事をした後で、何時もの通り緣側に蒲團を並べて茶を飲みながら、おときは庭前の柿が澁柿だといふ事を傳へた。

「さうかしら、僕はさうは思はなかつたがなあ。」

新吉は腑に落ちない樣子で、暮殘る空に柿の實のつぶつぶ數へられるのを見上て、首を傾けた。

「だつて今日の御晝、お寺の奥さんがさう云つてゐましたもの。あの人つたら、こんな顔をして、ほんとにをかしかつたわ。」

おときは梵妻がして見せた澁い顔を眞似して、自分でをかしくなつて吹出してしまつた。

柿の實は、その葉が黄色く枯れて散れば散る程赤さを增して、晩秋の空に、いかにも日本特有らしい風情を見せて居た。新吉は、それが澁柿だらうとなからうと、何のかゝはりも無く、晴れた日の空の色と、ちつとも曇の無い柿の實の光と、脫俗した枝ぶりとを愛した。

寺の門の外の往來からも、その梢の赤い實は、土塀を越て見えた。近所の空地に集る子供達の冒險と慾張とのまじつたいたづら本能は、その爲めに刺戟されたものと見えて、眞晝間、ひつそりした寺内の樣子をうかゞつて、鼬鼠のやうに注意深い目を四方にくばりながら、竹竿を持つて忍び込んで來た。石を投るもの、竹竿で叩き落さうとするもの、みんなが狡猾な顏つきをして、緊張した手足を迅速に動かして居た。寺の者は氣がつかなかつたが、緣近い日あたりで縫物をして居たおときは、子供達の狼藉をいちはやく認めた。

「そんな事しちやあいけませんよ。」

相手は小學生だとは思つても、それ丈いふのがせいいつぱいだつた。いつてしまつてから、自分の顏のあかくなるのを感じた。不意に聲をかけられたので、子供は一齊にふりかへつて、一時は一寸ためらつたが、おときの氣勢を見て取ると、相手によつて現金に變る子供特有の圖太さで、平氣で又竹竿を振廻した。實際の重量よりも重たい響を立てゝ、眞赤な柿が土に落ちる。

「かまふもんかい。」

「やれやれ。」

流石に聲はひそめながら、お互に唆かしあつて、ばらばら石つぶてを打つ者もあつた。おときは膝の上の物を疊に置いて、縁側迄出て行つた。

「およしなさいつたら、叱られますよ。」

一生懸命でもう一度聲をかけたが、何の甲斐も無かつた。子供達の素振には、馬鹿にし切つて居る色が明かだつた。

「あんたがたそんなものとつたつて喰べられやしないのよ。澁柿ですとさ。」

「うそだい、喰べらあ。」

一人の奴は懐に盜んでしまつてあつたのを取出して、いきなりがぶりとかじりついた。

おときは自分の意氣地のないのをなさけなく思ひながら、途方にくれて、子供達の暴虐に枝をふるはせて居る柿の木を、いたいたしく眺めて居た。相手は大人には違ひ無いが、聲も顔つきも優しい女なので、いたづらつ兒はすつかり呑んでかゝつて居た。咎める人の目の前で平氣で柿を叩き落してやるのが、自分達の勇氣を示す事のやうに痛快に思はれた。何のはゞかりも無く、か

け聲をして、柿の枝をばさばさ打つた。

「こら、何をする。」

突然庫裏（くり）の方から、聲を震はせて梵妻（だいこく）が現はれた。手に鍬の柄のやうな堅い棒を持ち、肥つた體を不恰好に波うたせ、血相かへて來た。その勢にすつかり脅えて、子供達は干潟（ひがた）の寄居蟲（やどかり）のやうにあわてゝ逃出した。

梵妻は何處迄もと追かけて行つたが、子供の方が素早くて、忽ち門の外にちりぢりに散つてしまつた。

「鬼婆あ。」

「とつたぞ、とつたぞ、柿六つ。」

塀の外でふしをつけてはやした奴があつた。

「とつたぞとつたぞ柿八つ。」

今度は獲物の數をふやして、二三人聲を合せてからかつた。その合唱をしつつこく繰返したがら、子供達は遠くへ逃げて行つてしまつた。

「畜生、育ちの惡いがきつたらありやしない。」

未練らしく往來の方を振かへりふりかへり、せいせい呼吸をはずませて、梵妻は漸く戻つて來た。

「まあこんなに荒して行つてさ。」

柿の木の下に立つて、落散つた杈や葉を忌々しさうに見ながら、ぶつぶつ云つてゐるのが、おときにとつては自分の監督不行屆を叱られて居るやうに感じられた。いつたん部屋の中に入つて、障子もしめてしまはうかと思つた程だつたのが、殊更縁側へ出て、自分の方から聲をかけないでは濟まされなくなつた。

「ほんとにひどいんですよ。いくらあたしがいたづらしてはいけないつて云つてもきかないんですもの。」

「そんなこつてきくもんですかね。今度來たらひつぱたいてやるから。」

何時迄も、寂しくなつた木の梢を見上て、誰にでも當りちらしたい肚の中をあからさまに、きびしい事を云ふのであつた。

「子供つて爲方の無いものですねえ。あたしがそれは澁柿だから、取つたつて喰べられやしないつて云つたんですけれど、がりがりかじつて見せたりして。」

おときはいひわけがましく、氣の弱い事を繰返して、心の中ではなさけなく思つた。

新吉が歸つて來ると、待構へて居て、その日の出來事を話した。

「だつて、いかにもあたしが意氣地が無いから柿を盜られたんだつて云ふやうな口ぶりなんですもの。あの梵妻さんも隨分だわ。」

味方を得た嬉しさで、しきりに自分の辯護と、梵妻のどぎつい態度を非難した。ふだんはお寺の奥さんと呼んでゐたのが、梵妻さんだの梵妻だのと云つた。

「子供は爲方がないなあ、すつかり葉の落盡した骨のやうな枝のさきに、熟し切つたあかい奴の鈴生りになつてゐる景色が秋の風情なんだがなあ。」

あく迄も自分の目を樂しませ、心をなぐさめるものとして、たつかしがつてゐたのだから、子供の暴虐のあとを、わざわざ庭に出て見屆けて來た。

「なあに、それ程の事はないよ。たかゞ五つか六つ落された丈だらう。」

さも安心したらしい樣子で家の中へ引返して來た。

「澁柿なんか少し位とられたつていいぢやありませんかねえ。」

梵妻の態度が何時迄も心に殘つて居て、樂しい食事の間にも、おときは口惜がつて居た。

その頃、おときは初めて自分の體にただならぬ變化の起た事に氣がついた。末の妹の生れる時、産褥で母のあさましく苦むのを見たり、その後もひよわくて年中兩親に心配ばかりかけて居るその子の事を思ふと心配だつた。何といふ事もなく、夫に大きな負擔をおはせてしまつたやうな氣がして、濟まないと思ふと、いひ出し惡くかつた。それでも默つても居られないで、

「あたし、子供が出來たのかと思ふの。濟みませんが……」

と夫の顏色をうかがひながら切出すと新吉は上機嫌で、

「濟みませんとは何の事だい。僕は子供は大好だ。」

と云つてさも面白さうにおときの言葉を笑つた。さうきくと、おときは自分の體內に夫の愛情が形になつて宿つたやうな氣持がして、俄かに我身がいとしくなつた。

「あなたに似て利巧だといゝわねえ。」

などと云つて、心から樂みに思ふやうになつた。夜が寒くなつて、たゞさへ人肌の戀しい頃、妻がたゞならぬ體になつたといふ事が、夫婦の仲を一層こまやかにした。

子供達が最初に柿を盜みに來てから四五日しかたゝないのに、二度目の冒險を企てゝ、又忍び込んだ。その時は幸ひに、いつもは裏の墓地で草をむしつて居る門番のぢいやがたまたま追拂つ

た。急をきいて駈けつけた梵妻は、又してもおときの耳の痛くなるやうな聲を張上て、いたづらつこを罵つた。自分の心持からも多少神經質になつて居るおときは、それをひどく氣にした。

「あなたみたやうに眺めて樂む氣もないくせに、どうしてあんなに惜いのでせう。澁くて澁くて喰べられないつていふのに。」

たかだか柿を盗みに來る子供のいたづらに、和尙も弟子坊主も娘も寺男も呼集めて、いきり立つ梵妻を、をかしがる丈の餘裕は無く、自分自身が罵られたやうに忌々しかつた。誰も知らないうちに、子供達がみんなとつてしまへばいゝなどと、腹の中では考へて居た。

その日、寺の者は柿の木の下に集つて、しばらく評議して居たが、やがて弟子坊主と寺男は梯子をかついで來て、若い方が學生服のズボンにシヤツといふ姿になつて高い枝に登つた。下では梵妻と娘が茣蓙の四隅を持ち、上からちぎつて落す柿を受けて居た。老僧も監督するやうな形で、懷手をしながら日向に立つて眺めて居た。

おときはかかりあひになるのを惧れて、障子の中で針仕事をしながら、時々隙間からのぞいて見た。餘程たつて、何かがやがや話しながらみんなの足音が入まじつて庫裏の方へ引上て行つた後で、障子をあけて縁側に出て見たら、無數に赤く日に光つて居たのが、ひとつ殘らず、もぎと

られて居た。

銀行から歸つて來た新吉は、寺の門を入ると直に、柿の梢の荒らされたのに氣が付いた。時が來て、熟し切つて土に落たのとは違つて、人間の手が無理にもぎとつた爲めか、一層いたましく見えるのであつた。

「どうしたんだらう、みんな柿をとつちやつたのかしら。」

出迎へたおときの顏を見るや否や、面白くない樣子で訊いた。

「えゝ、又子供達が荒らしに來たものですから、お寺の人が總出でとつてしまつたんです。若い坊さんがてつぺん迄登つて、枝なんか惜氣も無く折つて下に落して居ました。」

いひつけ口をする時の早口で、おときは晝間の光景をつぶさに描寫して見せた。

「澁をぬいて喰べる氣かなあ。これからすつかり葉の落盡した眺めが何よりいゝのだが、惜い事をしてしまつたなあ。」

暮かゝる縁側で、枝の折口の生々しく見える柿の木をいたいたしさうに、未練な事を云つて居た。彼の心には、村中に柿の木が澤山あつて、秋の今頃の美しい故鄕の景色が、繪よりも鮮かに映つて來た。

その鄕里の家からは、烟草屋の二階に室借をして居た獨身時代にも、時々林檎や柿を寄越してくれたが、今年は初茸と濕地茸を送つて來た。きのこを炊込んだ御飯は、新吉が子供の頃の好物だつたと嫂が代筆した母の言葉を書添へてあつた。

「まあ、あたし初茸御飯なんて初めてゞすわ。どんなでせう。松茸ならおいしいと思ひますけれど。今晩直に炊いて見ませうか。」

粗い竹籠の中からあふれるやうに出て來たのを手にのせて、おときは珍しさうに見て居た。十一月の初めの、時雨の降つた後の寒い日であつた。たきまぜの御飯の香は殊になつかしく思はれた。

「そりやあ松茸のやうにうまくは無いさ。くにの方にはそんな上等なものはありやしない。初茸飯か、久しぶりで田舍に歸つたやうな氣がする。御豆腐の御つゆがほしいな。」

新吉には、いかにも晩の食卓が樂みらしく、勤に出て行くにも張合のある姿だつた。おときはそれが嬉しかつた。格子の外に出て、鋪石の上に靴の音が聞えたが、新吉は又戻つて來た。

「あの初茸たの濕地茸ねえ、隨分澤山あるから御寺の人にも分けてやらうぢやあないか。くにから來たものですつて。」

わざわざ云ひに來て、おときのうなづくのを見て行つた。

夕方新吉は、

「あゝ今日程忙しい事は無かつた。すつかり疲れて御腹も減つてしまつた。初茸御飯が待遠しいな。」

靴を脱ぐ間もそんな事を云つてゐたが、さう直ぐとはいかないときくと、手拭をさげて湯に出かけた。

めつきり日脚も短くなり、かなり遠い湯屋から歸つて來る道では、湯上でも肌寒く感じるやうになつた。晝間仕事のたてこんだ爲めに、すつかりくたびれたのが、湯に入つて一層空腹を感じた。宵闇の中を歩きながら、塒に騒ぐ鳥の聲を聞いて、此の季節に著しく感じる澄んだ寂しさが腹の底迄沁みるのを知つた。うちのあかりの障子に映るのを見た時は、新吉の心は喜びに震へるやうだつた。

あつたかい初茸飯の湯氣の立つのをふうふう吹きながら、故郷の秋のあわたゞしく暮れて、早い初雪が來て冬籠の季節となる頃を、涙ぐましい程なつかしく思ひ出した。

「あたし初めてゞすけれど、おいしいわねえ。」

おときも、初茸の淡い香、滑かなやうでしやきしやきする齒ざはり、噛みしめると何處かに土のつめたさを含む味をほめた。

「今朝出がけにさう云つた通り、お寺の人にも分けてやつたかい。」

「えゝ、御寺の奥さん大變喜んで居ました。それでね、おうつりのしるしだつて、柿を持つて來てくれましたよ。」

「柿。」

「それがをかしいんですよ。庭の柿なんですつて。あんなに澁い澁いと云つて居たのに如何したんでせう。あたし達が盗るといけないとでも思つて、そんな事を云つたんぢやないでせうか。」

「さうかもしれない。」

「なんて憎らしいんでせう。そんな事云はなくたつて盗りやしませんわね。」

此處に引越して來て以來、何べん梵妻の口づから聞かされたかわからないのを思ひ出して、おときはしきりに忌々しがつた。

「あゝ食つた食つた。久しぶりで實にうまかつた。初茸飯なんて田舍めかしいものを食ふと、おやぢやおふくろの顏が目に見えるやうな氣がするなあ。」

番茶の焙じた香ばしいのをすゝりながら、新吉は滿腹して重たい體をもてあつかふやうに、食卓にもたせかけ、おときの顔を見て笑つた。すべての事にみち足りた時、おのづから浮んで來る微笑だつた。

「あたしもほんとに頂けちやつたわ。まぜごはんは食が進むと思つて、今日は餘計に炊いたんですけれど、この通りですわ。」

おはちの蓋をとつて傾けて見せると、中はからからになつて居た。

臺所でおときが食事のあとしまつをして居る間に、新吉は縁側の雨戸をしめ、銀行の歸りに買つて來た夕刊を丹念に讀んで居た。水底のやうに冷く青い月の夜で、庭の樹々は心あるものが強ひて沈默を守つて居るやうな靜けさで、蕭々と空に裸の枝を延ばして居た。その靜けさは雨戸をしめ切つた室の内までも沁みて來た。

臺所で水を流す音や、瀬戸物の觸れあふ音が耳に入ると、新吉は讀んで居る新聞の記事が頭に入らなかつた。其處で働いて居るおときのお腹の中に子供が生育しつゝあるといふ事が、妙に頭にこびりついて居た。一人の女が自分によつて子供を生むといふ事が、不思議の念をまじへた期待で心の底をくすぐつて居た。

「あなた、うたゝ寝なんかして風邪を引きますよ。」

何時の間にかこくりこくりやつて居たのをおときに起されて、新吉は嚔（くしやみ）をしながら身を起した。

「ほら御らんなさい、もう風邪を引いてしまつたんですよ。」

とたしなめて、長火鉢に炭をつぎながら、おときは眉をひそめた。

「今日はしんが疲れたんだなあ。こんな時は早寝にしよう。ほんとに風邪なんか引いては馬鹿々々しいや。」

「それがいいわ。夜はすつかり寒くなりましたからねえ。」

二人は長火鉢を両方からさしはさんで手をあつためた。何氣ないふりをして、新吉は妻の柔い手に自分の手の甲をちよいちよい觸れて見た。ほんの僅かな浮いた心が、ひつそりした秋の宵の澄んだ心境の表面にさゞ波をたてた。

「あなた、柿めし上つて見ない。」

「お寺でくれたのかい。喰べて見ようか。」

「ほんとに澁くなかつたら、隨分をかしいわねえ。」

おときはいそいそと臺所に立つて行つて、塗盆の上に四つのせてある柿に庖丁を添へて持つて

來た。艶々した果實の肌は、あかりの下にくもりの無い色を光らせた。するするとおときの指輪の光る指の間から、細く長い皮が垂下つて、水氣のある肉はあからさまになつた。それを四つに切つて新吉にもすゝめ、自分も口に入れた。澁い澁いときかされて居たので、初めは用心深く齒をあてたが、直ぐに甘い汁が舌を浸した。

「どう？　ちつとも澁くはないわねえ。」

「うまいや。いゝ甘味だ。」

齒に沁みる冷い甘さを嚙みしめながら、二人は笑をとりかはした。

「矢張あたし達が盜つて喰べると思つて、わざと澁柿だなんて云つてたんですわねえ。」

馬鹿々々しい梵妻の淺智惠を忌々しく思ふのを通り越して、わだかまりのないをかしさを感じた。

「うまいなあ。」

それには返事をしずに、新吉は自分で庖丁をとつて別の一つをむき始めた。

四つの柿は、すつかり皮と種子になつてしまつた。二人の舌には果物のみが持つ清々しい味が殘つて居た。何の不滿足も無い瞬間だつた。妊娠して居るといふ事實が心を咬る爲めか、此頃妻

の姿體が俄かに艶(なまめ)かしさを增して來たやうに思つて居たが、今もその感じが鋭く襲つて來た。新吉は火鉢の上で、妻の兩手を輕く握つた。火氣の爲めに掌は直ぐに汗ばんだが、霜の多さうな夜で背中や膝はつめたかつた。

崖の下の町の方で、しきりに犬が吠えて居たが、それが聞えなくなると、しんとした雨戸に月の迫るのを感じるばかりだつた。何處で啼くのか、風邪(かぜ)を引いて居るやうな蟋蟀(こほろぎ)の聲が聞えた。何時も此の室に並べて敷く二つの蒲團を、ひとつにし度いやうな夜であつた。新吉があくびをすると、おときも、つい誘はれて、なるべく口を大きくはあくまいとつとめながら、たうとう堪(こら)へきれなかつた。目のふちをあかくしながら、夫の顏を見て首をかしげて微笑した。（大正十四年十一月八日）

# 命の親

「あなた、みなにはほんとに困つてしまふんですよ。」

奥さんは血色の冴えない額から顎迄微かに震へるのを無理に堪へ、つとめて甘つたれる心持を見せながら訴へる。あんまり度々なので、又かと云はれるのを少からず怖れては居るのだが、何とかして夫に同情して貰ひ度い、わかつて貰ひ度いといふ心持は日ましに強くなつて來た。

「だつて今朝なんかどうでせう。しん一人に働かせて、自分は應接間の長椅子に寝ころんで雜誌を讀んで居るんです。あんまり憎らしかつたから、お前氣分でも惡いのかいつて訊いてやつたんですよ。さうすると、まあなんていふんでせう。二人で働いても一人で働いても同じだから、おしんさんに頼みましたつて平氣なんです。それが、あたしの目の前で、足を投出したまゝ未だ雜誌を讀んで居るぢやありませんか。かりにもあたしはお前の主人なんだよつて云つてやつたら、かりにもあたしは女中なんですつて云つて、舌を出してげらげら笑つて居るんです。あたしもうなさけなくつて……」

息をはずませて、たゝみかけて訴へた。

年齢の違ふ爲に、何時迄も奥さんを子供あつかひして居る主人は、無關心な態度を見せて夕刊を讀んで居たが、かりにもあたしは女中なんですには、思はず釣込まれて妻の顔に目をうつし、持前の嗄れた聲を笑に出した。女中の不規律に惱まされ、自分の力では如何とも爲方がなく、胸をわくわくさせて夫に賴りになつて貰はうとして居る妻の、何から何までかぼそい道具だての顔が目近く來て居るのを、まゝごとの夫がまゝごとの妻に對するやうな感じで見守つた。

主人の、此一二年愈々深くなつた目尻の小皺を、奥さんはじれつたい位不滿に思つた。何時でも笑を用意して居る表情に見えるのである。これ程事をわけて話して居るのに、どうして乘氣になつてくれないのだらうと思ふと、常々夫が自分を可愛がつてくれても、それが子供扱に過ぎなくて、夫婦の情愛ではないといふ物足りなさを持つて居るのまであはせて、つくづく自分の身が賴りなかつた。奥さんは涙ぐんで、あらぬ方へ目をそらした。

たゞならぬけしきに氣のついた主人は、讀かけの新聞を食後の卓の上に投げて、

「そんなに困るなら出してしまへばいゝぢやあないか。」

と親身に相談に乘る樣子を見せた。

「ですけれどねえ。」

奥さんは半巾(ハンケチ)で鼻をかんで、うるんだ目を主人に向けた。
「あなたのおつしやるやうにかんたんにもいきませんわ。」
たつた今の自分のはしたなさをまぎらす微笑を強ひて浮べた。
「地震の時に助けてくれた命の親だといふのだらう。」
「それもありますけれど、そればつかりでもありませんわ。第一あなたは奉公人を出す事なんかお嫌(きらひ)なんでせう。」
嫁に來た當座に聞かされた事が、何時も念頭を去らなかつた。長い間獨身生活をして居た主人は、何でも人手を借りずにやつてのけるのが好きで、奉公人には何の期待も持つて居なかつた。頑丈な越後者の女中に家事一切を任(まか)せて、他人が見ては不自由な生活を、ちつとも不自由とも思はずに過して來たのだつた。奥さんよりも先に居ついてゐる女中は、年の若い主婦には苦手に違ひ無かつたが、主人はそのおもひやりはありながら、自分は奉公人の性質の缺點や少しのをちどは大目に見度い、辛抱して使ひ度い、僅かな給金で働いてくれるのは感謝していゝ事だと云ふ意味を新妻に話した。それが結婚第一夜の事で、新生活に輕い恐怖をまじへた緊張した覺悟でのぞんだ奥さんには、自分の夫となつた人のひろやかな心のあらはれとして、おろそかならず聞かれ

たのであつた。
越後の女は、臺所の知識の無い體の弱い年下の主婦に對して、時折は意地の悪いしうちに出る事もあつたが、奥さんは大概は我慢して、主人には何もいはずに濟ませて居た。其のうちに郷里に縁談があるといつて先方からおひまを願出たので、もつれた絲をほどいたやうに安心して、主人の定めた手當の外に、奥さんは着物や裝身具を分けてやつた。
もう〳〵、自分よりも年上の女中なんかこり〳〵だと、里に長く奉公してゐた者の世話で、上高井戸の百姓の娘だといふおつとりしたのを雇入れた。
「何時迄も女中任せにして居ては一生何も覺えませんから、今後は若いよくいふ事をきくのを使つて、自分で何から何迄して見ますわ。當分の間召上りものもおいしくは出來ませんけれど、我慢して下さいますか。」
非常な決心で、あやぶむ顔色の主人に同意させた時は、悲壯な感激で胸がいつぱいだつた。今迄の此家の遣口は、すべて越後者の定めた節度に服して居るのだ。あれもこれも、物の置場所までも改めなければ、ほんとに自分達の家庭の氣持は起らない。奥さんは、年齢の違ひ過る夫の冷淡な感じのするのさへ、忽ちあらたまるやうに思つた。新米の女中にも新しいエプロンをかけさ

せて、臺所に出る時は、さまざまの希望で心の底迄明るかつた。

けれども、生れつきかぼそい體は、いふ事をきかなかつた。ちひさい時からひよわくて、育つか育たないか親の心配の絶えなかつた位だから、編物とか縫取とか坐つて居て樂める事は好きだつたが、臺所の事などは、學校で教はつた割烹の知識以外に何も無かつた。やつてやれない事は無いとあまく見て居た燒物のむづかしさに、何度泣きさうになつたかわからない。その上、上高井戸から來たしんが、御飯を炊ぐのがやうやくで、おみおつけさへ人並には出來なかつた。氣だては優しく、何をいひつけてもはいはいと素直にやる氣はあるのだが、いつたいに氣轉がきかなくて、頓狂な事が多かつた。自分からいひ出して年の若いのを雇つたのだから、苦情の半分も云へなかつたが、それでも、

「しんはいゝ人ですけれど、どうしてあゝ氣がきかないのでせう。」

などゝそれとなく云つてみる事もあつた。

「矢張少し年をとつた女の方がよくはないのかい。」

何氣なく主人はいふのだが、奥さんは自分の弱點をつかれた氣がして、

「いゝえ、そんな事はありませんわ。あたしが意氣地なしだからいけないので、あたしさへしつ

かりして居れば若い人の方が使ひいゝんですよ。」

とあわてゝ取消すのであつた。

或特殊銀行の相當の地位になつて居る主人は一風變つて居た。交際嫌で、つひぞ宴會めいた席には顏を出した事も無く、芝居でも活動寫眞でも、すべて人の集る場所は好まなかつた。酒も煙草も嗜まず、食物の好みなども全然無かつた。和服でも洋服でも、はたから注意しなければ、何時迄も同じ物に手を通して平氣で居た。何が樂みかといへば、十數種の新聞を、隅から隅迄丹念に讀む事だつた。さういふ性質だから、奧さんが煮過ぎたり燒過ぎたりした食物でも、何もいはずに食べた。奧さんにとつては物足りない、張合ひの無い事だつたが、成功するよりも失敗する日の方が多いのだから、焦くさいお芋の煮ころがしなどを平氣で食べてくれるのを見ると、ほつとする事もあつた。そんな調子で、どうにかかうにか小女を指揮して家政をやつて居たが、何よりもいけないのは、何時の間にか家中が不整頓になり、埃つぽく見えて來たばかりで無く、買物が下手なので目に見えて家計費が膨脹してしまつた。瓦斯の使用料丈でも、越後女の頃に比べると法外に嵩んで來た。

そのうちに奧さんの體には變化が來た。赤ん坊の生れる事は何ともいへない喜びだつた。奧さ

んの一生にとつて此上もない大きな事柄なのに、主人は相變らず嬉しさうなけしきもなく、さりとて迷惑な樣子も見せない無關心で、それが賴りなく思はれゝば思はれる程、自分のお腹の中のものにはげしい愛着を感じた。ほんとに自分の血を分け、自分の心を心とするいとしいものが、やがて此世に生れるのだと思ふと、初產の不安よりも、その喜びは遙に大きかつた。

けれども、先づ第一に惡阻の苦みが母體をさいなみ始めた。血を吐くよりも惱ましく、全く頭を持上る氣力も無くなつて、長い間寢こんでしまつた。それ程の苦みをしたにも拘らず、大事の胎兒は流產してしまつた。その上に奧さんの健康はすつかりそこなはれてしまつた。

「この御體ではもともと妊娠するのが無理なのです。」

將來再び繰返せば、母體も共に失はれるだらうと、醫者は主人に密かに告げた。

なかなか病床を離れる事は出來なかつた。夏のかゝり迄ぶらぶらして、やうやく起るには起きたものゝ、衰弱がひどく、暑さに向ふ頃の事とて、自分の心持丈でも參つてしまつた。始終頭が重く、體はだるく、外光の刺戟にも堪へられないで、不機嫌な日が續いた。

醫者も勸め、主人も長い間の病人相手にくさくさして居るので共々に贊成し、轉地させる事になつた。かねて怖れて居る胸の病氣が出ては大變だといふ理由もあつた。土曜から日曜にかけて

主人も出かけられる場所といふので鎌倉が選ばれ、或百姓家の離家を借る約束をした。

百姓家といつても、土地のならひで、夏場の室貸で儲けるのを一年中の書入にして居るのだから、母家とは少し離れた別棟で、粗末ながらも一軒の家のていさいは備へて居た。田圃を埋めた脆弱な地盤で、垣根の際に申譯ばかり白粉草や百日草が生えて居るばかり、日蔭の乏しい難はあつたが、縁側に出る迄も無く、前の空地を距てゝ二軒並ぶよその別荘の屋根の間に眞青な海の見えるのが、いかにも廣々とした景色と、すがすがしい空氣を想はせた。大家の百姓の世話で、小坪の漁師の娘で十七になるのを雇つた。その小女がみなだつた。

みなは脊は低かつたが、一人前の女になりかけの、何處で發育がとまるか心配になる迄健全に脂肪の乘始めた體だつた。目鼻立は惡くないのだが、ひどい縮毛で、ひつつめの外には手のつけられないのを束髮にして後頭部にのせて居るのが頓狂だつた。血溜りの濃い頬邊は赤く、執念深さうな面皰が廣い額に散在して居た。肩幅が廣く、幼い時からの不自然な勞働の結果は、腰の邊を不均衡に發育させて、姿を醜くしてしまつた。

働く事はよく働いた。奥さんは自分のその頃と比べて、此小娘が一人前に御飯を炊いたり洗濯をしたりするのが、只々感心の外なかつた。人が何か云ふと、眞當面に相手の眼を見ながら返事

をするのは氣の強い者の特徴だが、奥さんはみなの正視には氣負がして爲方が無かつた。一口にいへば、ちつとも可愛氣のない女だつた。家には六十を越した祖母が居て、それは一度尋ねて來た事もあつたが、みなの母親は夙くに死に、今の繼母には三人の子供がある。その繼母には年中虐められたから、何時か仇を返してやらなくては氣が濟まないと、不圖した話のきつかけから、眞劍に訴へた事があつた。訴へたといふよりも、報復の宣言をしたやうな氣概を示した。あんまりほん氣過るので、奥さんは氣味が惡くなつた位だつた。

「いくら繼母だつてそんな事をいふものではありませんよ。」

とたしなめてみたが、

「いゝえ、あんな奴親でもなんでもありません。だつてあたしをぶつたり叩いたりするばかりで無く、おばあさん迄ひどいめに合せるんですもの。」

と上ずつた聲で口惜しがつた。

強情で負嫌で、自分にをちどがあつても謝まる事はしないで、何かその落度には不可抗の原因があつたといふいひわけを口にしなければ承知しなかつた。又もう一つの特徴は、時々ひどくはしやいで、雄辯になり、極端に粗野な諧謔を連發する事だつた。

鎌倉の生活は、奥さんにはひとつの發見だつた。年齡の相違もあるにはあるが、つひぞ新婚者らしい情愛を示したり示されたりした事の無い夫婦だつたのに、別れて住んでみると、矢張夫が戀しかつた。土曜日の夕方に來て、月曜の朝歸る夫を待つ間の焦躁は、健康の囘復につれて深くなつた。その日は朝から薄く化粧をし、夕方には必ず停車場迄出迎へた。濱邊を歩く男女の、互に寄添つて手をつないで行く姿が不思議に羨しく、自分もさういふ樂しさうな逍遙を渚の景色の中に描出してみたかつた。しかし、主人はかゝさず土曜には來るといふ以外にこまやかな愛情を形にあらはしてくれなかつた。折角夜風の涼しい室で食卓を差はさんで坐つても、うまいともまづいともいはずに年中定量の三ぜんの御飯を食べてお茶になつた。食事の分量迄きちんときまつて居るといふ事も不自然に思はれた。

月のいゝ夜の濱邊に出ても、妻の體に風が障りはしないかと心配する親切はあるが、よその夫婦のやうに誰憚らず情愛を見せ合ふ程いきいきした心のあらはれが無かつた。奥さんはあたりに人氣のないのを見定めて、肩と肩と觸れる迄體を寄せて歩いてみたが、主人は何の氣もつかないらしく、無關心に正面を向いてのろのろ歩いてゐた。日曜の一日こそは樂しく暮し度いといふのが奥さんの念願だが、主人は町から新聞を買つて來て寢轉んで讀んで居るばかりで、ちつとも相

手にならなかつた。奥さんは、折角東京から來てくれるのさへ、毎日の銀行への出勤と同じお勤なのではないのかしらと疑ふ事もあつた。しかし、少くとも夫と自分との間のそんな風な交渉を、ゆつくりと考へる自分を見出した丈でもひとつの發見だつた。

六月七月八月と、三月の間何の變化も無い日が續いた。病氣前よりも血色も勝れて來たので、月末には引上て歸り度いといひ出したが、主人は殘暑のきびしい東京へ歸るのは月の半にするがいゝと云つて、折角元氣のよくなつた妻の健康を再びしくじる事を惧れてゐた。避暑地の夏の終は目に見えてうつろに、昨日迄海の中にも砂の上にも群つて居た人數は何時の間にか見えなくなり、海の色も褪め、風は白くつめたくなつた。くさむらに鳴く虫の聲にも東京が想はれたが、主人の言葉に從つて次の月の半迄ゐる事になつた。その爲めに奥さんは命を失ふ際迄行つた。

九月一日は蒸暑く、恰度土曜日だつたから夕方には夫が來るといふ樂みはありながら、奥さんは頭痛に惱んで横になつてゐた。みなが晝の支度を訊いたけれど斷つて、夕方迄に爽かな氣分になり度いと、そればかり念じて居た。少しうとうとしたところへ地震が來た。突然疊ごと持上られ、同時に下に落されたと思ふとたんに、はげしい震動にひとたまりもなく家はつぶれて、半身起した奥さんの姿は天井の下に押伏せられてしまつた。地鳴の外に、世界中の人の立騷ぐやうな

物凄い氣配が遠くに聞えたが、それは別の世界の事で、自分は既に地面の下に葬られてしまつたのだと思つて居た。

どの位の時間がたつたのか、ひどく長いやうにも思はれたし、おそろしく切迫して居たやうにも思はれたが、何ともいへない異樣な音響が海の方から襲つて來た。はげしい浪の音ともろともに、隙間も無くつぶれた家の何處から侵入して來たのか、忽ち一面の海になつた。

奥さんが意識を囘復したのは海嘯の引いた後の畑の泥土の中だつた。まばゆいばかり日輪は輝いて居たが、すべてが暗かつた。その暗い中で、縮毛の頬邊の赤いみなの顏が圓光をうしろにして居る尊い人の姿のやうに認められた。奥さんはひしと縋つて泣いた。

由井ヶ濱附近で死んだ人も澤山あつた。奥さんはつぶれた家と一緒に水の力で裏の畑迄押上げられ、不思議な命拾ひをしたが、それとてもみなの力がなければ助からなかつたかもしれない。

此小女は、地震の時眞先に臺所から飛出して、一時は夢中で町の方へ逃げたが、家がつぶれて奥さんが出て來ないのを見ると、生來の氣丈でとつて返し、手當次第に屋根板をめくつて居た。其處に海嘯が押寄せたので、胸迄水につかつたが、不圖目の前の材木の間に奥さんの無慘な姿を見ると、一心こめて引擦り出した。そして、水の引いた後で、潮と泥土の悪臭の入まじつた畑の眞

中で介抱して居たのであつた。
みなは氣力の全くない、死人のやうな奥さんをおぶつて、崩れた家の間を拔けて山手へ逃げた。山腹の松林に避難して居る町の人達の中に、母家の百姓夫婦を見出した。
奥さんは手足を擦りむいたばかりで無く、こめかみからも血を流し、泥水に濡れた浴衣の片袖のちぎれた姿で、地べたにつつぷして動かなかつた。
百姓夫婦とみなが何處からか才覺して來た茣蓙を敷いて奥さんを横にした。直ぐ隣の草の上に大家の別莊から逃げて來たらしい大人數の一團が、見兼て浴衣を二枚めぐんでくれた。みなは其一枚を奥さんに着せ、自分も着替た。奥さんは地べたに手をついて禮を云つたが、その人々の眞中に、浴衣の上に單衣羽織を着た若い貴婦人型の人が、懷中鏡を出して牡丹刷毛で顏を叩いて居る姿を見た時は、何としたのか熱い涙が咽喉をつまらせて、惠まれた着物の袖に顏を埋めた。
絶間無く餘震は襲つて來たが、松林の中は無事に夕暮になつた。日の沈んだ後の海の上の空は、薄紫に晴れて居たが、それを見て居ると、今日來る筈だつた夫の身の上ばかり考へられた。東京は如何したらう。存外無事だつたかも知れない。此方よりももつとひどかつたかも知れない。あゝもかうも想像され、夫の生死さへ心配だつた。

次の日、何の異變も無かつた顏をして朝日は海から上つて來た。みなが役場で貰つて來た玄米の握飯を、無理に勸められて半分口にしたところへ、思ひもかけない主人の姿があらはれた。夜を徹して東京から來たのであつた。おむすびを投捨て、奥さんは人目も憚らず夫の胸に全身を任せた。

「よく無事だつた。」

「みなのおかげです。みなは命の親です。」

といひながら、感激を止める事が出來なくて嗚咽した。

其日から奥さんは、二言目にはみなは命の親たといふのが口癖になつた。若しもみなが居なかつたら、あの時死んだに違ひ無いと心の底から信じて居た。命の親といふやうな言葉のいひあらはしに伴ふ誇張などはちつとも無く、全く感謝を籠めて云ふのであつた。

震災當時のみなの甲斐々々しい働振は、よその人の目にもはつきり映つた。小坪の實家がつぶれたか流されたかわからないのに、それについては一言も口に出さず、無氣力な奥さんの身邊を守つて一歩も去らなかつた。

「みなのうちは如何したらう。みんな無事かしら。」

由井ヶ濱から左手に見える岩壁の下にある漁村だから、崖崩れにも海嘯にも一番ひどくやられさうに思はれた奥さんは、何處かにうちみの殘つて居る身内の痛みに惱みながらも、しきりに氣にして訊いてみたが、

「つぶれたらつぶれたで仕方が御座いません。」

と不自然な笑顔をつくつて答へるのであつた。二日目の朝には、みなの父親だといふ目の爛れた漁師が娘の安否を氣づかつて、やうやく探しあてゝ來た。みなを可愛がるおばあさんも、みなが何時かは復讐してやると云つてゐる繼母も無事だつたが、その繼母の三人の子供の中二人迄、海で遊んでゐて溺れて死んだ。

「金太もおろくも海嘯でやられたあよ。」

とおやぢは鼻をつまらせたが、みなはにやにや微笑を見せて、何の悔みも述べなかつた。それが繼母への天罰の一種だといひ度さうな様子だつた。

一時途絶した汽車が復舊して、主人夫婦が歸京する事になると、みなはどうしても東京へ連れて行つて貰ひ度いと熱心に願出た。繼母のそばへは歸り度くないと云ふのであつた。奥さんは二人の女中を使ふのは贅澤だとは思つたが、何と云つても命の親だと云ふ強い感謝が先に立つて、

そのかはりには自分の着物もこしらへて貰はないでもいゝなどゝ誓つて、主人を納得させた。

東京に歸つてからも奥さんは身内の者や知人の顏を見る度に、鎌倉で遭遇した地震と海嘯の危難から不思議に助かつた話を繰返した。其時以來一層神經質になつて、何でもない物音にも脅の色迄變へて地震の再來だと脅える癖がつき、當時の話をする時は聲も上ずつて、目の前にはあさましい泥土の中に死なうとした自分の姿がはつきりと浮ぶのであつた。それ丈強く、命の親のみなの働きを、感謝を籠めて人々に語つた。

流産の後の衰弱した體は、一夏の海邊の養生で餘程盛返したが、地震と海嘯に脅かされた神經は全く病的になつて居た。年中鋭く尖つて居るのでは無く、何かの時に理非もわからない程興奮したり、突然涙を流したりするのである。自然と家政の煩はしさなどにかゝはる氣が失せて女中任せになつてしまつた。

しんは十八で、みなは十七だつた。ぼんやり育つたしんは、大柄な體をもてあまして居るやうに、すべての智慧が鈍かつた。何かいひつけられても判斷が遲い爲め、素ばしつこいみなの方が先に用事を片づけてしまつた。片方は無口で、片方はおしやべりだつたから、いひあひをしてもかなはなかつた。年こそ上だし、此家には先に來て居るのだが、一箇月とたゝないうちに、しん

はみなのいひなり放題に動かされるやうになつてしまつた。
殊にみなは、此家の客にも商人にも、奥さんの口から命の親だと云ふ言葉で紹介されてゐるし、あく迄も賴母しがられて居る事がはつきりわかつて居るので、一段と氣が強かつた。地震の時になくなして可哀さうだといふ理由で、奥さんの着物を仕立直したり、新しいのを買つて貰つたりして、みなりもぐんとよくなつた。それも奥さんの感謝のあらはれだつた。
「あんまり二人の待遇にけぢめをつけるのはよくないよ。」
と、ふだんはちひさい事には干渉しない主人が注意した程目に立つた。
そんならみなの働振が奥さんを滿足させたのかといふと、さうではなかつた。鎌倉で、一人で臺所をやつてくれた時のやうに、がせいには働かなかつた。働けば働けるのに、自分よりも能力の劣るしんを目安に置いて、しんの働く程度に自分の働きを止めてゐた。
「あれは存外根性が惡いわ。」
奥さんは困つた發見をして眉をひそめる事が度々あつた。朝暗いうちに起きて、火を起したり水を張つたりするのは、みんなしんがした。みなは一時間遲く起きて、箒とはたきを持つて、四角い室をまるく掃いた。主人の靴を磨くのもしんの負擔だつた。

その主人の出かけた後で、みなの態度は一層惡くなつた。殊に奥さんの眉をひそませたのは、女中部屋にゐる時でも、臺所で立働いて居る時でも、のべつにうたをうたつてゐる事だつた。鎌倉にゐた頃も、小學時代の唱歌をうたふ事はあつたが、今は往來の流行唄を聞覺えて、ストトン節などをはゞかりも無く口にした。武雄が端艇に移る時浪子がどうしたとか、下り藤に百合の花が何したとか、十五夜お月樣雲の中お染久松くらの中とかいふいかゞはしい文句をきくと、奥さんは耳朶迄紅くなつた。

時々ひどくはしやいで、止度なく冗談をいふのも最初は愛嬌だつたが、段々無遠慮になつて來ると、神經に觸る事が多かつた。おひとよしで、つまらない冗談にもげらげら笑ふしんを笑はせて面白がる爲めに、漁師の言葉を眞似して「さうだんべい」だとか「いやだあよ」を連發したすと、しまひには奥さんにもその調子で返事をした。呼んでも返事をしないので、

「みなはゐないのかい。」

と女中部屋の障子を開けると、

「こけえ居るだあよ。」

などゝいひながら、縮毛の頭を突出すやうな眞似もした。

ふつくりと色の白い、笑ふと消えてしまふ細い目、眞紅なちひさい脣を持つしんは、美人とはいへないが優しい一方の可愛らしさをもつて居るので、御用ききの若い者が冗談口をきく事もあつた。さういふ時、みなは自分のきりやうのよくない事を痛切に感じるらしく、からかはれて意氣地なく赤くなつてゐるしんを輕蔑し、冗談口をきく男達を罵つた。

「男つて奴あ、どうしてそんなに助平たんだらう。」

などゝ怒鳴つて居る聲は奥迄聞えた。

男は大嫌だと、奥さんの前でも宣言した。村の若い衆達が娘達を追かけ廻す醜體だの、自分のおやぢが自分の母親が死ぬと直ぐに、今の繼母を引擦込み、おばあさんや自分がそいつに虐められても知らん面をして居る腑甲斐なさなどを實例として、

「あたし男なんて大嫌だよ。おしんさんは好きなんでしよ。」

といやがらせを云ふ事もあつた。一生嫁になんか行かないと繰返して言つた。

さういふ風に考へて居る爲めか、お給金なども大概は奥さんに預けてあつた。奥さんは近所の銀行に預金してやつて、通帳を本人に渡した。月々その金高の殖るのが、みなの唯一の樂みだつた。

主人の發意で、月に一回は休日を與へる事になつて居た。しんは實家に歸つたり、親類をたづ

ねたり、活動寫眞を見に行つたりしたが、みなはお小遣の減るのを恐れて外出しなかつた。それはそれでもよかつたが、自分が休みの貰へる日には、朝から晩迄女中部屋に寢そべつて居て、どんなにしんが忙しがつても手助をしないばかりで無く、玄關に客が來ても取次にも出なかつた。

一度は特別に小遣をやつて、二人を一緒に出してやつた事もあつたが、歸りは別々だつた。先に戻つて來たしんの話では、日比谷公園から銀座に出て、三越迄行つて來たが、みなは電車賃がもつたいないから歸りみちは歩くと云つて別れてしまつたといふのであつた。

さういふ一種の性格の強さが、誰の目にも餘る程はつきり認められた。縮毛で、頬邊が眞赤で、がつしりと肥つて居る外見と、奥さんの命の親だといふ事をつつくるめて、すべてが不思議な印象を與へた。

みなにとつては、萬事が自然に其處迄導いて行つたのである。無學文盲の兩親を持ちながら、小學校では何時も副級長をつとめた。勝氣で、先生にも餘り可愛がられなかつた。級長は別莊の子だから級長なのだといふひがみが、みなの頭には年中あつた。小粒ながら頑丈で、村のいぢめつ子も手を出し兼ねた。誰にも負けるものかといふ根性は持つて生れたものだつたが、母親が死んで繼母が乘込んで來てからは、一層それが強くなつた。三崎で酌婦をして居た事もあるといふ

繼母も、亭主を完全に顎で指圖するえら物だつたから、一から十迄敵慨心を見せつけるみなを可愛がる道理が無かつた。いふ事をきかない、返事をしない、道草をくつたと云つては髮の毛をつかんで引擦倒したり、横面をひつぱたく。みなも負けては居ないで、血相かへてむしやぶりつく。とめに入る年寄迄、嫁の打擲を受けなければならなかつた。恨みはみなの心に根深かつた。自分の家に火をつけて、繼母やその子供を燒殺してやらうと考へた事もあつた。

食べる物もろくに食べさせず、朝から晩迄こきつかはれる不平に、家を飛出して何處かに稼ぎに行かうと思つた事もあつた。奉公に出たいと云ふ希望がやうやく父親に容れられて、病氣保養の爲めに鎌倉に行つた今の奥さんの所へ出た時は、長い間呼吸苦しい世界に住んで居たのが、のびやかで明るい世の中に放たれた氣がした。奥さんの目から見ると、たつた十七の小娘が、よくも一人で臺所が出來るものだと感心されるのであつたが、みなにとつてはたつた一人の主人の爲めの日常の勞働などは、今迄に比べてわけもない事だつた。麥飯に鹽をかけて食べたり、あんまり食過ると云つて叱られたりした今迄と違つて、三度々々白い御飯が食べられる丈食べられるのも難有かつた。東京へ來てみれば、二人きりの主人に二人の女中で、體はひまだつた。朝寢をしても別段ひどく叱られる事も無く、粗相をしてもきびしく咎められはしないのだから、人を怖れ

てびくびくして居る事は無かつた。主人は口をきくのも面倒臭さうに、年中新聞を讀んで居るばかりだし、奥さんは自分を命の親だと云つて、かへつて向の方が遠慮する氣ぶりを見せて居る。朋輩のしんはおひとよしで、何を云つてもげらげら笑つてゐて、斯うしろあゝしろと云へば、その通り働く。みなは奥さんに對しては自分の方が氣性の強さで勝り、しんに對しては總ての智慧才覺に於て遙かに優者である事を、自然と意識してしまつた。

「みなはほんとにしやうが無いわ。」

と奥さんが胸をいため出したのは、秋もそろそろ寒くなる頃からだつた。

鎌倉でくりくり働いた時分とはうつて變つて、床離が悪くなり、時には奥さんも主人も起きた後で、やうやく臺所へ顏を出す事さへあつた。八疊の日本座敷に絨毯を敷いて、椅子卓子の置いてある應接室は、南向で暖かかつたが、主人が銀行に行つてしまふと、其長椅子に仰向に寢ころんで居るのを、屢々奥さんは發見した。最初のうちはみつかつた事を恥て、こそこそ逃て行つたが、しまひには何か云はれる迄平氣で寢て居た。

奥さんは度々苛々させられるので、餘程主人にいひつけてやらうと思つたが、震災の時命拾ひをしたのはみなのおかげなのだ、少しの事は辛抱して許してやらなければならないと思ひ返して

胸をさすつた。奥さんの態度には、何か正當な事を主張し得ない時に人の感じるやましさがあつた。祕密をいだく人のやうなうしろめたさを感じた。奥さんの方が、みなの目をはゞかる地位に居た。

何から何迄しんに押つけて怠けて居るので、これはみなに賴みますよと、奥さんは自分の弱い心を勵ましていひつけて見る事もあつたが、後になつてみると、矢張りしんが働いて、みなは涼しい顏をして居た。

「あら、これはみなに賴んだんぢやないの。」

「えゝ、でもおしんさんの方が上手ですから。」

みなはすまして答へるのであつた。あんまり平氣な態度のきつさに、奥さんは二の句が續かなかつた。

大概の事には氣が付かず、氣が付いても默つて居る態度をよしとする主人の目にも、みなの傍若無人の振舞が映る事もあつた。

「あれは行儀が惡いばかりで無く、人を馬鹿にしてサボつて居るのぢやあないか。する事が亂暴で爲方がないね。」

「えゝ、まるつきり田舍の人ですから、ちつとは亂暴ですけれど、段々なほりましよ。あたしのしこみが悪いんですわ。」

奥さんは自分が罪を引受けてかばつた。主人は何かしら奥さんの言葉のうちに不純なものを感じはするが、追及する程の必要も無い事だし、自分の性格から云つても、物事をしつつこく聞糺すのは嫌ひなので、その儘にしてしまふのであつた。

みなは段々他人の指圖を嫌ふやうになつた。お惣菜も勝手に自分で擇んで、どしどし御用きゝにいひつけるやうになつた。自分の物となると一錢たりとも出費を惜むくせに、人の物、殊にみなの目から見ると何でも思ふ通りになる生活をして居る主人の物ならおかまひ無しだつた。使に行く時に奥さんの下駄を穿いて行つたり、鏡臺の化粧品を無斷で使つたりする位は當前の事に考へて居た。

自信が強くて、何でも自分の判斷で處置する事が好きだつた。或日奥さんは應接間の小卓の上に飾つてあつた和蘭の花瓶の見えなくなつて居るのに氣が付いた。先年乘組艦と運命を共にした兄の訪歐記念の品だつた。

「誰かあの應接室の花瓶を何處かにしまつたかい。」

何となく胸騷ぎを感じながら訊くと、
「はい、壞れてしまひました。」
とみなが卽座に答へた。
「こはれたつて。どうしたの。」
「お掃除をして居る時につい落したら、首が缺けてしまひました。」
「何時。」
「昨日です。」
「何故あたしに直ぐ云はないの。持つて來て御覽、つげばつげるかも知れないから。」
「首が落ちてしまつたものですから、もう駄目かと思つて掃溜にうつちやつてしまひました。」
「首がもげた位なら大丈夫よ。こなごなになつたんではないでしよ。拾つて來てごらん。」
奥さんはすつかりせき込んで、聲に震へを帶びて居た。みなもたゞならぬ奥さんのけしきに、少したじろいだ形はあつたが、あく迄も平氣らしく答へた。
「今朝がたごみ取人夫が來て持つてつてしまひました。」
「まあ、どうしたつていふんだらう。あれはなくなつた兄樣のおかたみたのよ。支那人のやきつ

ぎやにでもつがせればよかつたのに。」
奥さんは口惜しさに涙で咽喉が詰つた。何故粗相をしたら直ぐにあやまりに來ない、何故器物に損傷があつたら持つて來て見せない、さう詰問してやらうとは思つても、言葉が脣迄出て來てくれなかつた。默つて應接室へ戻ると、昨日迄花瓶の載つて居た小卓の上に上半身を伏せて、袂に顔を埋めて泣いた。

此時ばかりは奥さんも我慢が出來なくなり、形の有るものがなくなつたのだから、どうせ何時かは知れるのだ、かくす丈無駄だと思つて、主人が歸つて來ると直ぐに訴へた。

「ふうん、亂暴だなあ。あれは亂世の英雄だ。」

奥さんをなだめるやうにおだやかに微笑した。

いやだいやだと思ひながら、奥さんはみなの横着を許して置かなければならなかつた。夜中に微震でもあると、熟睡して居る夫を起して頼りになつて貰はなければ安心出來ない奥さんは、晝間主人の留守には、みなが第一の力だつた。或時は相當の強震に、茶の間に居た奥さんは庭に飛出さうとしても足が立たず、あけた障子につかまつたまゝ喘いで居た。それを、素早く庭に出てゐたみなは、裸足のまゝ馳込んで來て、手をとつて連出してくれた。地震が止んでも奥さんは血

の氣を失つて、僅かに立木に縋つて身を支へ、蒼ざめた額から冷い汗を流して居たが、傍ではみなが、物差を持つたまゝ逃げたしんの姿が可笑しいと云つて、何時迄もげらげら笑つて居た。さういふ場合にはしんは何の賴りにもならないで、みなが奥さんの力となつた。

みなの態度は時々來る里の母親の目にもついて、注意をうける事もあつたが、奥さんは矢張りかばつてやつた。

「いくら命の親だつて、あんまり主人を主人とも思はない爲方ぢやないか。さう何時迄も恩にきる事はありやしない。こつちだつて隨分よくしてやつてゐるのだから。」

その言葉は、奥さんにはいかにも身勝手に聞えた。こつちがよくしてやるとかやらないとかは別の事で、あゝいふ危急の際に、逃出さないで助けてくれたものを、さうやすやすと追出せるものでは無い。九月一日に目に見、耳に聞いた物凄い景色や物音をまざまざと再現しながら、母親の言葉を聞流した。

年が變つても奥さんの地震に對する異常な恐怖は拔けなかつた。春になつて、主人が地方へ出張を命ぜられ、半月ばかり留守になつた時なぞは、一層神經を尖らせて、みなとしんを奥へ呼んで一室に寢る事にしたが、それでも眞夜中に地震の來さうな想像に惱まされた。健康な顏をして

床に入ると直に熟睡してしまふ二人が憎らしい程羨しかつた。

怖いのは地震ばかりで無い。地震の時に或種の人間が暴動を起したといふ流言に脅かされ、又實際その直後には風の悪い物貰ひが來たり、誰ともしれず二箇所迄も町内に放火した事實もあつたので、夜は堪らなくいやだつた。そんたら犬を飼ふとい丶と、動物好の里の母親の勸めに從ひ、自分も子供の時分手がけた事があるので、主人の同意を得た。主人は早速銀行の同僚の愛犬家に賴んで、黑白二毛の更紗のセツタアを貰つて來た。流産したと云ふ事を、さもさも自分の落度のやうに云ふ妻の、子供の無い寂しさを多少なりともまぎらすよすがとなるなら幸だと思つて居た。生後百日に滿たない小犬は母親の乳に別れた心細さで、夜も晝も、人の姿を見ない限りは泣き止まなかつた。奥さんは萬事を放擲して犬の世話に夢中だつた。胸の薄い體質のものに特有の細い聲を高く張つて、スタア、スタア、スタアと呼ぶのが隣近所迄聞えた。全身に滲み出したやうな細かい斑のあるのを、星に見立て丶主人の命名したものであつた。晝は終日奥さんと子犬は日向で遊び、夜は軒下の小舍で眠る筈のが、寂しがつて泣いて泣いて泣き止まないと、雨戸をあけて抱入れて、自分の床の中で眠らせた。

しんは小犬を可愛がつたが、みなは大嫌だと云つて手も觸れなかつた。干物をして居る足下な

どにじやれつくと、下駄をあげて蹴飛ばした。きやんきやん悲鳴をあげるのに驚いて飛んで來る奥さんが、

「どうしたんです。ひどい事をしてはいけないよ。」

と甲走ると、みなはぐつとおちついて、

「でもあたくし嫌ひなんで御座います。」

と反抗的な語氣を示した。

「嫌ひだつてそんなにひどいめにあはせなくたつてよくつてよ。」

小犬を抱上て頰ずりをしながら、犬をいたはる心持がまじつて言葉が弱くなる。

「あたくし、畜生は大嫌ひで御座います。」

みなはあく迄も自分を肯定して、一段と強い言葉を使ふのであつた。もつと何かいへば、何といひ出すかわからない氣勢に吞まれて、奥さんは自分が悲しくなるのであつた。

「あたし御犬様に奉公してるんぢやないんだもの。」

間も無く臺所で、聞えよがしにしんに話して居るみなの聲が聞えた。

その頃から、奥さんのみなに對する不快はぐうつと深くなつた。子供の喧嘩に親が出るやうに、

犬を罵るみなに對して、我を忘れてしまふ事が多かつた。

「あたし、みなにはほんとに困つてしまふんですよ。」

と奥さんが蒼白い額に皺を寄せて、夫の同情を求めるやうになつたのは其頃からだつた。はしたないと思ひ、あれ程迄に人々の非難がましい言葉に對してかばつてやり、又眞實命の親だと云ふ感謝で、どんな事でも出來る丈の事はしてやり度いと思つて居たのだが、幾度も幾度も堪へたあげくに、夫に縋らなければならなくなつた。自分で考へても、踏堪へ切れなくなつた形で、みつともなかつた。全く自分の意氣地の無い爲めに敗北したのだと、一層胸をいためて居た。けれども、

「そんなら暇を出すさ。」

と何の雜作もなく主人に返事をされると、奥さんは又ぐつと詰つた。折角人が眞劍になつて救を求めて居るのに、何といふそつけない返事だらう。奥さんは涙ぐんで言葉を濁してしまふのであつた。

「ですけれどねえ、あなたのおつしやるやうに簡單にもいきませんわ。」

「地震の時に助けてくれた命の親たといふのだらう。」

「それもありますけれど……」

此問題に就いての二人の態度は何時も同じだつた。奥さんは玆に來て、押て行く力を失つてしまふのであつた。

そんな事には頓着無く、みなは年頃でもあるし、うちに居る時よりも食物はよし、勞働は過激でなかつたから、一年のうちに愈々肥つた。暑がりで、夏の日中は肌脱で晝寢してゐた。奥さんもほとほと愛想をつかして、自分でいふ不愉快を避けてしんを呼んで注意すると、間も無く女中部屋で、

「ヒカーン。」

と大きな聲で云つて、げらげら笑ふのが聞える。それは新聞の漫畫に出て居る間抜な人間が、何時でも失敗しては頭を掻いて悲觀する時の叫聲なのである。漫畫家の惡洒落は存外受けて居ると見えて、年中同じやうな仕組の連續畫の最後は「ヒカーン」で結んであつた。何時覺え込んだのか、みなは何かしくじつたり、奥さんに注意を受けたりすると、必ず小聲で「ヒカーン」と云つて舌を出した。そのをかしさにはしんも釣込まれて、疊につつぷして笑ひ止まなかつた。此のおひとよしは舌が長過て涎の垂れさうになる口を大きく開いて「シカーン」などゝ眞似をした。

「みな、ちよつと。」

奥さんは堪り兼て茶の間へ呼びつけ、あんまりみつともない悪ふざけはいけないと、努めておだやかに說得した。

「あたしだからいゝけれど、旦那樣の前なんぞで、癖になつてヒカーンなんて云つたらどうして。」

「それこそヒカーン致します。」

自分の頓智をほこる樣に、わざとすました顏をして云つてのけた。

「冗談ぢやあないんですよ。人が居ようと居まいと、行儀よくしなくてはいけないのです。お前がそんな悪ふざけをするものだから、しん迄が此頃はろくでも無い眞似をして困つてしまふわ。」

なさけ無さに蟀谷がづきづきした。

「さ、わかつたらあちらへいらつしやい。」

さう云つて立たせてやると、襖の外へ出るや否や、

「ヒカン、ヒカン、ヒカン、ヒカン、ヒカーン。」

と聲は忍んで居るけれど、はしやいだ調子でうたひながら女中部屋へ下ると直ぐに、げらげら

止度なく笑ひ出した。

あんまり腹が立つて、奥さんは頭が痛んだ。いくら自分で自分をなだめても、口惜しくて口惜しくて涙が止まなかつた。自分で床をとつて、枕に顔を埋めて忍び泣いた。

主人が歸つて來る迄に起きて、こんないやな事は知られないやうにしようと努めてはみたものゝ、氣力が足りなかつた。

「どうしたの。何處か惡いのか。」

醫者がするやうに額に手を當てゝ顔をのぞきこまれると、口惜しさと悲しさは又新しくなつて、不覺にも涙を見られてしまつた。

「少し頭痛がするのですけれど、大した事はありません。ほんとに意氣地が無くて濟みません。」

といふのがやつとのおもひだつた。

其晩主人は、晝間何か變つた事でもあつたのではないかと、何時になく心配してきゝ度がつた。奥さんもかくし切れずに殘り無く話したばかりで無く、今日迄に主人には祕して居たいろんな心痛迄うちあけた。

「さうだらう。どうもあれは、よくない所があると思つて居た。地震の時の働に對しては充分禮

をする事にして、早く暇を出した方が雙方の爲めだ。」
「でも、みなばかり咎める事も出來ないのです。あたしが馬鹿なものですから、あんなになつたのかも知れません。」
主人が親身になつてくれたのが嬉しくて心が弱くなり、泣けて爲方が無かつた。矢張夫は親切なのだ。自分を愛してくれるのだと思ふと、夫以外の人は一人も居なくてもいゝやうな氣がした。
「いゝよ、いゝよ。みなにはよく話して、うちに歸つて貰ふから。」
まるつきり子供を扱ふ樣にいひなだめた。奥さんも其日、愈々みなに暇を出す決心をした。
翌日になつて、前の日の不快な記憶が薄らぐと、又してもみなを追出すのは道で無い氣がして來た。何とかして自分が我慢すれば、そんな事をしないでも濟むのだと己を責る方に心が傾いて行つた。けれども、主人は意外に斷乎たる態度を示した。
「いつたいうちなんかで二人の女中は贅澤過るのだから、斷る理由はある。わたしが自分で話してやる。」
「いゝえ、そんな事をあなたに御願しては濟みません。それはあたくしのつとめですもの。たゞ九月一日が過ぎてからにし度いやうな氣がするんですよ。迷信かもしれないけれど。」

愈々みなに暇を出す日の近い事を知つて、震災當時の有様を明瞭に想起した。

「それはそれでもいゝけれど、九月一日にかかはりは無いぢやあないか。わたしは斯うときまつたら早く片づけた方がいゝと思ふが。」

「それでは今月の十五日迄としてあたくしが話します。いゝえ、あなたにそんな事をおさせしては申譯ありません。」

暫くして、奥さんは覺悟の爲めに固くなつた態度で、自分でも氣になる程切口上で云つた。

「ですけれど御手當は充分にしてやつて下さいね。」

「それはさうさ。命の親だもの。」

主人は話を打切る積りで冗談を云つて笑つたが、奥さんは顏の色を變へて心苦さに悩んでゐた。

八月の初だつた。月の半迄にして暇を出すときめたものゝ、何時その宣告を與へていゝか奥さんは獨り胸にたゝみ切れないで、今年も暑氣に當りさうないやな氣持になつた。一週間位前にいひきかすのが一番よからうと云ふ主人の意見だつた。

來るな來るなと念じて居た日が忽ち來てしまつた時、奥さんは胸の動悸に參つてしまつたが、今更主人に云ふ可き言葉も無いので、たうとうみたを應接室へ呼んだ。此家の經濟として二人の

女中は贅澤過るし、もともと自分さへ體が丈夫なら、しん一人で濟ませた筈なのだから惡く思はないでくれと云ふ意味の事を、しどろになり勝の拙さで、やうやく云つてのけた。望み通り主人の出してくれた多分の手當に水引をかけた一封の外に、主人にはないしよで、少し地味過るには違ひ無かつたが、未だあまり手を通してゐない御召の着物を添へてやつた。

みなは奥さんの話して居る間、それが持前で、面と向つて相手の顔を見ながら、流石に固くなつて聞いて居たが、心中の不平はかくせなかつた。強ひてそれを柔げる爲めに浮べる微笑が、冷笑としか見えなかつた。

「決して御前に落度があつて暇を出すのではないから、お前のお父さんの方へも此方から手紙で詳しく云つてやります。ほんとに一年間よく働いてくれたので、あたしも殘念だけれど……」

相手のきつい眼ざしを避けながら、心にも無いいひわけをした。

みなは何も云はなかつた。心の中の忿懣は完全に嚙殺してしまつた。けれどもそれから一週間まるつきり何の仕事もしなかつた。拭掃除は勿論の事、手を叩いても返事をしなかつた。忙しく働いて居るしんをつかまへて、ふてくされた事を云つて居た。

カフェの女給になると月に五六拾圓から、多いのになると三百圓以上も貰へるとか、死んでも

繼母の居る家になんか歸らないとかいふのは、わざとの樣に高聲で喋るので、茶の間の奥さんの耳に入つた。その度にゐたゝまれない程冷りとした。主人とも相談して、おやぢに迎ひに來てくれといふ手紙を出した。

みなが居なくなると、奥さんは肩の凝が落たやうに樂になつた。自分も又臺所に出てしんと一緒に働くのが面白かつた。何故もつと早く、みなに暇をやらなかつたのだらうと悔んだ。

「みながうちへ歸る時、何か云つて居やあしなかつた。」

つゝしみに缺ける氣はしたが訊いてみた。

「あたしの事か何かさ。」

しんが腑に落ない顏をして居るので附加へた。

「はい、いゝえ。」

おひとよしは返事を濁して顏を赤らめ、もぢもぢして居た。その樣子を見逃さなかつた。

「かくさなくたつていゝぢやないの。あたし氣になんぞかけやしないんだから。」

さう誘はれると、しんは舌たらずの口でぺらぺら喋つてしまつた。

みなは此家を呪つて行つた。殊に奥さんを呪つて行つた。人を命の親だなんていひながら、勝

手に暇を出したりなんかして、今にもう一度ひどい地震が來ると、きつと家はつぶれるに違ひ無いと、何か信じる所のある強さで言ひ切つたさうである。奥さんは眞蒼になつて震へた。
傳へ聞いた主人は笑つて取合はなかつたが、奥さんの心には暗い陰影がはびこつてしまつた。何といふ怖ろしい女だらう。繼母を恨んで何時か仇を返してやると誓つてゐたが、自分に對しても報復の手段を講じはしないだらうか。あゝいふ性質の女が一心になると、どんな事でもやつてのけるに違ひ無い。奥さんの頭には、出刄剃刀のやうな刄物の光や、放火の氣配などが一時に湧いて來た。殊に不安に思はれるのは呪の一念で、又しても九月一日には前よりもひどい地震が來るのではないかと云ふ恐怖だつた。
一日一日がいやな不安を伴つて來た。
「九月一日に又大地震があると豫言した人があるさうですが、ほんとでせうか。」
「誰がさういつたつて。」
「新聞に出てゐましたわ。」
「そんな事がわかるものか。よしんばあつたつて、此處いらは地盤がいゝから怖い事はない。」
近頃益々病的に物に脅える妻を安心させる爲めに、前の年の地震にも何とも無かつた我家附近

の安全を說いた。

「でも怖いのは地震ばかりではありませんわ。家は倒れないにしても、又方々からよくない人達が押寄せて來るやうな事がありはしないでせうか。」

「此前だつて噂の方がひどかつたので、ほんとはそれ程の事も無かつたのだ。苦い經驗をなめてゐるのだから、今度は秩序は失ふまい。」

成る可く動じない態度を見せて話題を打切らうとするのだが、奥さんはそれからそれと追及して、心配の種をつくらなければ承知しなかつた。鎌倉で見聞した事は勿論、當時人から聞いた流言蜚語、たとへば何處其處では何十人數珠つなぎにされて竹槍で突殺されたとか、日本刀の刃が鋸のやうになる迄試斬をした男があつたとか、暴民に汚辱された女は無數だとか、それからそれと想ひ出しては煩ひのもとにした。

夜は寢衣に着替るのをいやがつた。萬一夜中に地震があつた時、みつともないなりをして逃るのはいやだと云ふのである。枕許には羽織と帶と足袋と、鼻紙手巾などを風呂敷に包んでいざと云ふ時の用意に置いた。それ程恐怖は念頭を去らないのだ。安眠出來なかつた。雨にも風にも驚いて目をさました。人の足音が家を廻つて終夜聞える事もあつた。

「あなた、あなた、誰か歩いてゐやあしませんか。」
微かに鼾をかいて眠つて居る夫を揺起す。
「そんな事があるものか、氣のせゐだよ。怪しい奴が來ればスタアが吠えるから大丈夫だ。」
それはさうかと思ふのだが、夜番の犬さへ却て神經をたかぶらせる事もあつた。若いスタアは、他の犬が庭先にまぎれ込んだり、猫が塀の上を通つたりすると、自分自身が脅かされて、すさまじく吠る。風の晩には、闇に騒ぐいろ／＼の物音にむかつて遠吠する事もある。さういふ時に奥さんは目を覺まして、夫の睡を中斷しなければ安心出來なかつた。
強盜竊盜殺人放火、いろ／＼の兇惡な人間にまじつて、縮毛で頬邊の赤くづんぐり肥つたみなの姿が、夢にも想像にも執念深く現れた。地震で家が倒れて壓死したり、海嘯で海の遠く迄流されて鮫に喰はれたりする夢もあつたが、咽喉をしめられる斷末魔の苦しい中にも、自分を膝で組敷ながら、滿足さうに笑つて居る小女の顔を見る事もあつた。
怖れに怖れて居た九月一日は無事だつたが、奥さんは前の晩から二日の朝迄一睡もしずに何時逃出しても差支無い服裝をして、すつかり頬のこけた顔に眼ばかり光らせて正坐して居た。いくら主人が安心して寢ろと云つても承知しなかつた。

極度の神經過勞から、健康はめつきり衰へてしまつた。主人が氣の持ち様を變へなければいけないとか、下らない事にくよくよするなと云ふやうな注意をすると直ぐに泣いた。手がつけられなかつた。震災の時家の下敷になり、ひどく頭でも打つたのではないかと主人は考へたが、醫者は地震の際の極度のショックに原因する神經衰弱たと診斷した。何處か溫泉場にでも行つて保養しては如何だと勸めても、一人で旅に出て地震にあつたらどうしようと云つて拒んだ。

「いゝえ、あたし病氣ぢやあないのです。」

と無理をして起きてゐても、疲れた身心はいふ事をきかなかつた。月の半分は寢るやうになつた。

或日、使に行つたしんの歸りが遲く、奥さんは苛々して居ると、やうやく歸つて來たのがあわたゞしく、

「奥さま、おみなさんにあひました。」

と息を切つて云つた。奥さんも胸がどきんとして、

「何處で。」

ときゝ返す呼吸が迫つた。

「大通の郵便局の前であひました。うちを逃出して來たのだつて云つて居りました。」

しんは一大事の報告をするやうに、廻りの遲い口で話した。使に行つた歸途、ふいに後から呼止められて振返るとみなだつた。みなは父親に連られてうちに歸つたが、暫く顔を合せなかつた丈繼母との折合は一層惡く、毎日喧嘩ばかりして居たが、一度東京の味を覺えたので、とても辛抱出來なくなり、たうとうこつそり飛出して、つい五六日前桂庵の手で下宿屋に住み込んだ。朝は早くから起されるし、晩は遲く醉拂つて歸つて來る客があつて、樂に眠る事も出來ない。其上御飯を澤山食ると云つてやかましく云はれる。おまけに止宿人の誰がいひ出したのか、住込んだ翌日から唐もろこしと云ふあだなをつけられた。

「おい、唐もろこしなんて呼ぶさうでして、書生程憎らしい奴はないとおみなさん怒つてゐました。」

しんは縮毛のみなの頭を想ひ出して笑つた。奥さんは笑ふ心などはちつとも無かつた。みなが元の主人の家の近くに來たのは、其界隈しか知らないからだつたが、奥さんはめあてをつけて來たのだと思つた。朝に晩に、隙があれば自分に仇をしようと云ふ一心に凝つて居るのではないかと疑つた。どんな様子をして居たか、以前と變つた所は無かつたか、根掘葉掘きたゞし、しん

の返事ののろまなのに腹を立てた。

「あたしの事何か云つてやしなかつた。」

しまひには我慢が出來なくなつて、はしたない事迄訊いた。

「いゝえ。」

としんは答へたけれど、その返事の眞實は信じられなかつた。

みなが近所に居るといふ事は、又奥さんの恐怖の種となつた。晝間でもつか／＼侵入して來さうな心持があつた。まして夜は、押の強い小女が壁の隅にも天井にも、時には自分の夜着の中にも潜んで居た。

「みながうちを逃出して、つい近所にゐるさうですよ。」

と奥さんは異常に緊張した目をみはつて主人に傳へた。

「一度東京に住むとみんなさうなる。都會は怖ろしい磁力で人間を吸寄せてゐる。」

主人は奥さんの心の中がわからないので、何氣なく聞流さうとした。

しかし奥さんはそれでは承知しなかつた。其後も度々みなの事をいひ出した。

「あたしみなに濟まない氣がするんですけれど。」

といひにくいのを押切つていつて見た。
「何が濟まない、何も濟まない事はないさ。」
主人は病氣で冴えない妻の顏を齒がゆさうに見返した。奥さんにはうるさがつて居る主人の心持が鋭く反射した。
「たつて假にも命を助けてくれた人を、自分の我儘で追出してしまつたのですもの。どうしても氣が濟まないのです。」
一層蒼ざめた顏面筋肉をこはばらせて、涙で頰を濡らして居た。
「さういふ風に神經をつかふから體に障るんだよ。みなの方では何とも思つてゐやしないさ。うちに歸る時は過分の手當もやつたのだから、寧ろ難有がつて居るだらう。」
「いゝえ、あたしの云ふのはお金を澤山やつたからいゝと云ふやうな事ではないのです。そんなお金なんか……」
人の心の奥底に動く微妙な感情を、金で計量して安んじて居る夫なのかとひがんで、脣が震へて物がいへなくなつた。
「どうしたんだ。そんなに興奮して。」

主人は驚いて靜めようとしたが、奥さんは身をもだえて泣出した。

「よし、それならお前の氣の濟む樣に父みなをうちへ連れて來るがいゝ。あゝいふ性質の女だから、身近に居ればきつと面白くない事が起るに違ひ無いが、それで氣がやすまるならものはためしだ。」

流石に宏量の主人も手がつけられなくて嘆息した。

數日後に、主人はみなの實家に宛て、みなが近所の下宿に奉公して居るが、それに就いて折入つて相談があるから來てくれといふ手紙に汽車賃を封入して送つた。娘が無斷で家出をし、行衛がわからないで心配してゐたところだから、父親は直にやつて來た。主人の口から詳しい話を聽き、もう一度みなに此家に來て貰ひ度いと云はれると、疊に額をつけて喜んだ。今度は自分からとつくり云ひきかせ、決して我儘な眞似はさせないと誓つた。

其日のうちにみなは父親に連られて來た。繼母の居る家の嶮しさ、牛馬の樣にこきつかふ下宿の不人情にこり〳〵して居たので、持つて生れた氣性から少からず屈辱は感じたが、奥さんの方からもう一度是非來てくれと云つて來たと云ふ事には、勝ほこり度い心持をそゝられた。

氣分が惡いと云つて寢て居る奥さんの蒲團の裾に兩手をついて、

と殊勝な挨拶をした。奥さんは怖いものを見る様にちらと視線を投げたが、熱い涙があふれて來たので、夜着の襟に顔を埋めて堪へた。

その晩は久しぶりで安眠した。朝、稍秋めいて來た日光につゝまれた茶の間で主人と食事をしてゐると、臺所ではみなとしんが何が面白いのか賑かに笑つて居たが、突然みなの聲で、

ストトンストトンと通はせて

今更いやとは胴慾な

いやならいやとはじめから

と無心でうたつて居るのが聞えた。まあいやだといふ表情をして奥さんは主人の顔を見ると、目尻の深い皺を一層深くして、それ見た事かといひ度さうに苦笑して居るのであつた。（大正十五年二月十六日）

# 花束

靜枝は生れて初めて受取つた月給を帶の間に納めて、嬉しいやうな羞しいやうな心で會社を出た。古ぼけたセルのコオトを着て居ると、何となく胸の邊がふくらんで居るやうな氣持は消す事が出來なかつた。

時々、敷石の上つ面(つら)を濡らして過(すぎ)る雨は、止む後から乾いて、暮春の空は西の方からうつすりと明るくあがりかけて居た。傘をさす程の事も無い名殘の雨が、頭や鼻の先をひやりとさせたが、靜枝は一刻も早く我家へ歸り度くて、眞直に電車へ急いだ。自分のやうなものに會社の仕事が勤まるかどうか、何か取返しのつかない失策を人中でやりはしまいかと、心配ばかりして居たのが、たつた今會計の年寄の手から狀袋入の給料を受取つた時、すつかり安心に變つた。みんなは其の場であけてなかみをあらためるのだが、それは羞しくて出來なかつた。人目の無い片隅へ行つて胸をどきどきさせながら調べて見た時の自分の姿を、はつきりと思ひ返した。

「おい。」

低い聲で呼びかけられて、一歩下(さが)つた目の前に、思ひもかけない健次が立つて居た。

「まあ。」

静枝は顔が紅くなつた。會社の近くだから、誰かに見られはしないかと云ふ不安があつた。何時に變らぬ自分の夫の、うす汚いみなりが、一層羞しさを強くした。

「待つて居たんだ。」

鐵縁の眼鏡の下で、そればかしは昔の若々しさを殘して居る切れの長い眼が、からかひ面で笑つて居た。

「どうなすつたの。」

電車を待つ雜沓の人の眼が、みんな二人の上にそゝがれて居るやうな、いはれの無い惧れで、静枝は吾ながら機嫌がよくなかつた。

「どうもするもんか、待つて居たのさ。」

あくまでも本氣で無い、いたづらも度が過ぎて、いやがらせに近い、静枝の嫌ひな健次の癖だつた。

「今日はもう社の方の用事は濟んだのですか。」

「濟んださ。だから此處に待つてゐたんぢやないか。」

「さう、そんなら歸りませう。」
往來中で、冗談口をきくものの相手になつてゐる氣は無かつた。恰度來かゝつた電車の方へ、促し立てゝさつさと步き出した。
「おい、待てよ。」
附近の人の振返る程大きな聲で呼び止められて、靜枝の足は進めなくなつた。
「お歸りにならないの。」
爲方なしに引返して來て、出て行く電車を未練らしく見送つた。
「久しぶりで銀ぶらでもしようぢやないか。」
そんな事は幾年にも聞いた事が無いので、愈々不眞面目に思はれた。
「だつて詮一がうちに待つてゐるぢやありませんか。」
「待つてゐたつていゝさ。お土産でも買つてつてやれば。」
「だつて御飯を喰べさせてやらなくては可哀さうですわ。一人つきりでは如何にもしやうがありませんもの。」
今年學校へ入つたばかりの子供のある事は、會社勤めをしなければならなくなつた時も、一番

強く決心を鈍らせた。留守の間は近處の女の子に來て貰つてゐるのだが、子供がどうして居るかといふ心配は、始終心を去らないのであつた。

「たまには飯位食はせなくたつていゝんだ。俺達だつて、ろくに物も食はずに稼いでゐるんぢやあないか。」

「でも子供は可哀さうですわ。」

どうしても同意しかねたが、人中(ひとなか)で夫(をつと)と爭ふはしたなさを怖れて、つい健次の歩く方へついて行つた。

「どうして待つて居たか知つてるかい。」

先に立つて歩いてゐたのが振返つて訊いた。

「お前の懷に月給があるからなんだ。いつぱいおごれよ。」

下卑(げび)た笑方をして肩をすぼめた。人のゆききの多い處で、あんまり卑しい男が自分の夫であると云ふ事を恥ぢて、靜枝は赤面した。その次の瞬間には心が寒くなつた。ほんとに自分の月給を待つて居たのかしら。せめては子供に丈でもおいしい物を食べさせ度いと思つて居たのに、酒を飮むとだらしがなく、無闇に氣が大きくなつて、梯子をかけて飮廻る健次にかゝつては、一箇月

の苦勞が生んだ月給も、むざんに費はれてしまふに違ひ無い。賑かな銀座を眼の前にひかへて、靜枝の心は暗くなつた。

「あなた、うちに歸りませうよ。」

ふと足をとめて呼びかけたが、健次は一寸振返つたばかりで、その儘電車路を横切つて向側へ渡つて行つてしまつた。靜枝はその後を追かけた。

「坊やが待つてるでせうよ。」

ともう一度云つて見たが、健次は何の返事もしなかつた。

靜枝は久しく夫と一緒に歩いた事が無かつた。結婚の當座にはよく斯うして散歩に來たが、それと今とは餘り違ふ姿だつた。死んだ兄の學校友達で、しかも庭球のパアトナアだつた關係から、年中家に出入するうちに、これも女學校の庭球選手だつた靜枝と戀に落ちた。東京育のお坊ちやんの兄とは違つて、早熟で才子肌の健次は悧巧に見えた。賴母しかつた。不成績は運動家につきものだが、健次は何時も級の上席に居て、學生の委員に擧げられ、內外に名が聞えてゐるばかりで無く、萬事はきはきしたとりなしが、初心な少女の胸に清々しく燒きついた。物堅い陸軍々人の家庭に育つた靜枝は、唇を許す事さへ恥と考へるやうなところもあつたが、一方には強い意

志を持つて居て、兩親の反對にも拘らず遂に一緒になつてしまつた。父達の反對の理由は、他に上官の息子で且自分の隊附の若い士官から懇望されてゐたのと、健次の鄕里の家柄がよくないと云ふこともあつたが、それよりも二人が親の知らない間に愛し合つて居たのがいけなかつた。さういふ身内の者の反對が、かへつて二人を堅く結ぶよすがとなつた形で、思ふに任せぬ新所帶も樂しかつた。子供が生れて月日はたつたが、その間に思ひもかけない變化が容赦なく襲つて來た。學校を出ると直に勤めた會社で面白くない所爲があつて、健次が馘首されたのが第一の原因だつた。新たに就職口を探しても、前の會社をやめられた理由が、公金を遊興に流用した事にあるので、何處でもていよく斷られた。半年一年經つうちに、もともと貯蓄も乏しい所帶だから、靜枝の身の廻のものも見る間になくなつた。性格もがらりと變つてしまつた。年中苛々して、うちに居れば怒鳴りちらし、外にでたと思ふと、何處で醉つて來るのか前後もわからなくなつて歸つて來る。歸つて來るならまだしもだが、歸つて來ない夜も多くなつた。自分の落度は咎めもしないで、やたらに世間を罵つて止まなかつた。郊外の何處かに看板をかけて、市中の銀行會社商店を脅かして廣告料をとつて居る勞資共榮新報とかの外交社員になつてからは、一段と粗暴になつた。同僚だといふ長髮のうす汚い男が時折たづねて來て、ひそひそ話したあげくに、太いステツキを

ついてでかけて行くのが彼の此頃の姿となつた。生計の苦しさに、靜枝も意を決して會社勤めの身となつた。靜枝はゆくりなくも、むかし熱烈な戀をして父母にも背いた二人の姿がこれなのかと思はないわけにはいかなかつた。久しぶりで連立つて歩く銀座が寂しかつた。

兩側のはなやかな商店、歩道を押合つて歩く男女、總てが自分達のみすぼらしさをはつきりさせる爲めの存在に外ならなかつた。靜枝は月給のしまつてある胸に傘を抱いて、浮かない姿で、自分の知つてゐる人に逢ひ度くないといふ事ばかり念じて居た。

數限りも無い人出だが、その中で靜枝の心に觸れたのは、四辻に花を賣る外國婦人とそのいとけない娘だつた。時候はづれの色の褪めた外套を着たのが、大型の帽子の下の血色の冴えない、そばかすだらけの顏に無理に微笑を浮べて、道ゆく人に花を勸めて居るのだ。短い袴と靴下の間に眞白な二つの膝子をむき出しにして居る娘も、人の袂に縋るばかり、追かけては花束をつきつける。

「十錢。どうぞ。十錢。」

と覺束ない日本語を繰返す。落魄して知らぬ他鄕の街頭に救を求める親子の身の上を、靜枝は他人事とは思はなかつた。母親の方こそ、いくら笑顏をつくつても、貧苦と不安にさいなまれた

面影は消せなかつたが、娘の青い瞳には清淨な童女の魂が宿つて居た。靜枝を追かけて來て、花束をさしつけながら、仰ぎ見て訴へる可憐な姿を見ると、うちに待つて居る詮一の事が、俄に胸にこみあげて來た。靜枝は振切るやうに顏をそむけて夫の後を追つた。

「何を愚圖々々して居るんだ。」

「あの西洋人可哀さうですねえ。露西亞人でせうか。」

「亡命客といふやつさ。帝政時代に勝手な眞似をした役人の女房どもだらう。むくいが來たのだ。」

健次は不機嫌な樣子で、事毎に癪に障る救はれない心持を、もつとはつきりさせる爲めに、ぺつぺつと唾を吐いた。

「おい、腹が減つた。何處かで飯を食はう。」

「でも遲くなるでせう。あたしはうちで坊やと一緒に頂きますわ。」

「何を云つてるんだ。初めて月給を稼いだお祝をしろよ。」

まるつきり取合はないで、いきなり暗い路地の中へ曲つてしまつた。

「あたしいやですよ。これをつかつてしまつては。今月はほんとに困るんですもの。」

後から外套の裾をつかんで引止め度い位だつた。狹い路地の中は、今朝からの時折の小雨に濡れて居た。足場の惡さに、靜枝はぬかるみに踏込んで足袋を汚してしまつた。

「けちな事をいふなよ。そんなら俺がおごつてやらう。今日は此方だつて持つて居るんだ。」

とかへりみて胸を叩いた。

「だつてあなたの方は二十八日が月給日でせう。」

靜枝はちやんと知つて居た。

「馬鹿。たかのしれた月給なんかあてにするものか。今日は鴨が引懸りやあがつて、しこたま寄附させてやつたんだ。」

どすをきかせた低聲で答へて、狡猾な忍笑をした。

汁粉屋鮨屋珈琲店などの並んで居る中に、小料理江戸つ子といふ看板を出した繩暖簾があつた。健次は其處に入つて行つた。

「さつさと來ないか。」

逡巡して居る靜枝を強ひて閾をまたがせた。

「來たな。」

いきなり大きな聲をかけられてすつかり參つてしまつた。たつた一つ細長い脚の高い食臺があつて、それを差挾んで緣臺が並べてあるのを見下しながら、向鉢卷をした瘦こけたぢいさんが、眞魚板にむかつて刺身庖丁を手にして構へて居た。外にはそのぢいさんの娘が孫らしい女が一人お燗番をして居る丈だつた。緣臺に腰かけたばかりで、長年沁込んでゐる酒の臭が、むうつと靜枝の鼻をついた。

「刺身とお椀で一本つけてくれ。」

健次はまんまと靜枝を連込んだ得意を示して目尻で笑つて居た。

「よし來た。」

瘦つぽちのおやぢは鉢卷をしめ直して、大きな鮪の肉塊に庖丁を入れた。その樣子がいかにも芝居がかりで、靜枝にはあざとく思はれた。

「愉快だ。」

健次はおやぢの威勢よがつて居るところが氣に入つて、いつぱいの酒が咽喉を通ると、板場を見上て媚を賣つた。

「おやぢ、お前んとこはうまい物を食はせると豫々聞いて居たが、こいつは凄い刺身だねえ。外

に何か出來るなら賴むぜ。」
「何にしよう。其處に書いてあるものしか出來ねえんだ。」
わざとつつけんどんな口をきくのを賣物にしてゐるのは明かだつた。
「さよりわさび、蟹三ばい、入道酢か。入道は驚いたなあ。」
靜枝にも、つけ木を見せて笑つた。
「何でもいゝから、うまいものをくれ。」
「そんな無理を云つちやいけねえよ。俺んとこにはうまくねえ物はねえんだ。」
おやぢはすつかりいゝ氣持になつて、手もとの茶碗酒をあふりながら、愈々むつつりした顏を見せた。
「やりやあがつたな。そんなら入道だ。」
「よし來た。そつちのおかみさん食ふかい。」
「あたし。あたし入りませんわ。」
自分などの來可き場所でないと思ふと、靜枝は箸を手にする勇氣も無く、あわてゝ健次を控へさせたが、

「いらねえつて。まあ食つて見ろよ。まづかつたら代は貰はねえから。」
おやぢの一言におつぷせられてしまつた。
健次は二本目の德利に手をつけて居た。
「うまいぞ、食はないのか。へん陸軍中將のお孃さんだとおつしやいますつてね。」
少しは酒氣も顏に出てゐたが、それよりもおやぢの意氣に調子を合せようと努めてゐるのだつた。陸軍の將官の娘を妻にして居るといふ事は、昔から彼の得意とするところで、知らない人間にもどうかして知らせようとしたものだつた。おちぶれてからは、自嘲の色彩を加へて屢々口にした。
「何を。少將なら大磯の女郎だとよ。」
直ぐに受けて、おやぢは吐出すやうに云つてのけた。
何時迄も箸をつけないわけにも行かないので、靜枝もつめたくなつたお椀に口をつけた。
「どうだい、うめえだらう。」
うぢうぢして居るのが癪にさはつて居るらしく、おやぢは意地惡く又聲をかけた。靜枝は折角口に入れた鮪の刺身が嚙みきれなくなつて、こつてりした脂肪が口中に漲つてしまつた。

健次は益々上機嫌で、しきりにおやぢの人を食つた態度を稱讃し、又酒のかはりを命じた。

「そんなに召上つていいんですか。」

充分目に物を言はせて肱をつかんだが、

「なんだい、まだ三本目ぢやあないか。」

と大きな聲で振切られて、それつきりうつむいてしまつた。

「俺んちの酒ならいくら飲んだつて平氣だ。頭に來るやうなしろものたあ違ふんだ。」

おやぢにとつては靜枝の所作が一々氣に食はないらしく、あてつけがましい事を云つて嘲いてゐる。無理に愛嬌や笑顔を壓殺して、への字に口を結んで苦り切つてゐるのが、靜枝には惡玉としか思はれなかつた。それに調子を合せてゐる健次の態度もいやだつた。靜枝は膝に手を置いて、我家に寂しく殘つてゐる子供の事を心配してゐた。

日が暮れかゝると客足は繁くなつた。馴染らしいのがぞくぞく入つて來て、狭い土間は忽ち滿員になつた。みんなが靜枝の姿を無遠慮に見る。誰も彼も酒のみで、見る見るうちに食臺の上には德利が林立した。自分では氣の付かないうちに、何時の間にか度はづれになる酒のみ特有の高調子で話は入り亂れ、醉つてゐない者には面白くもない事に迄笑聲が湧くのであつた。無規律自

墮落な有樣が靜枝には堪へられなかつた。誰憚らぬ猥談が續出する。たつた一人の女客を意識に入れて、わざと聞えよがしに喋るのだつた。健次もその仲間に入つて、見ず知らずの人とあられもない閨中の話をして居た。靜枝の全身が其の場にゐたゝまれなかつた。

「あたし一足先に歸りますわ。坊やが可哀さうですから。」

「まあ待てよ。こいつを飲んだら飯にして歸るから。」

健次はとろんと坐つた眼を嶮しくした。低い聲でさゝやいたのに、高調子で受けられたので、一座はぴたりと話をやめて、一齊に二人の方へ視線を集注した。靜枝は又手も足も出なくなつてしまつた。

「いよう、珍しいぢやあないか。」

突然暖簾を分けて入つて來たのが、大袈裟に聲をかけた。

「こいつあいゝや。此間君がひどく推稱して居たから試しに來たのだ。」

「どうだ氣に入つたらう。」

「氣に入つた。おやぢの意氣が面白い。」

健次は差向の腰かけに割込んだ相手にすぐさま盃をさした。

「おい大將。お前の意氣が氣に入つたとよ。何かうまいものをおごつてくれ。」

その男は下地があつて、體全體がふらふらして居た。一生懸命で巻舌を使つても、お國訛はかくせなかつた。

「氣に入つて貰はなくたつていゝや。」

おやぢは一段とむつつりした顏をして、愛想氣なく言ひ放つた。

「畜生、そこがいゝんだ。」

健次は拳骨で強く食臺を叩いて叫んだ。

二人はさかんに盃をとりやりしてゐたが、相手の男は靜枝の存在が氣になるらしく、露骨な目まぜで健次にきいてゐた。

「あゝさうか。女房だよ。」

相手の目顏をなかなかさとらなかつた健次は、其處で初めて紹介した。

「社の松永君だ。」

「僕松永。小山田君とは肝膽相照す呑助です。」

と云つて全身をゆすつて豪傑笑をした。その笑方さへ、靜枝とは違ふ世界の人間だつた。

靜枝の氣持は何時か反抗的になつてゐた。最初のうちこそ自分などの來べき處で無いと思つてちひさくなつて居ても、尙且(なほかつ)居場所の見出せない心持だつたが、今は輕蔑して觀察の眼を向ける事が出來た。第一に此の家のおやぢが、不機嫌無愛想つつけんどんを賣物にして、しかもそれが充分客にはいゝ印象を與へて居ると承知しきつて居る態度、家號に迄江戸つ子とつけた淺い魂膽(こんたん)迄はつきりわかつた。その魂膽がどうして此の男達にはわからないのだらう。誰も彼も、おやぢの態度を是認し、稱讃し、殆んど尊敬して居るのだ。靜枝は、健次を中心として此の場の人間のすべてを見くびつてやり度かつた。

そんな事とは知るよしも無く、隣の二人はしきりに何か話してゐたが、

「何、貳拾圓ふんだくつたつて。」

といふ健次の聲がはつきりと耳に入つた。

「百兩が鐚(びた)一文缺けても受取らないと大きく出てやつたが、何分二度目の事だから先方もさう易々とは出さないや。廣告は出さなくてもいゝから寄附金として受けてくれと貳拾兩出しやがつた。今日で一週間も足を運ばせやがつたから、萬一すかを食はせやがつたら、あの庶務の野郎ぶん毆つてやらうと思つて居たんだ。」

松永は大得意で話した。それは彼等の新聞を種にして何處かの會社から金をねだつて來たのだと、靜枝にも直ぐわかつた。健次の勤めて居る新聞といふのがそれ專門のものだつた。何といふあさましい事だらう、新聞と云つたところで、何の新しい報道も無く、別段面白い讀物も無く、たつた四頁の月四回發行といふのだが、廣告だ寄附金だと云つて脅喝し、あまつさへ人前で公言する面の皮の厚さを、靜枝は心から憎んだ。

「うまくやつたなあ。しかし俺も凄いところを見せたよ。」

松永一人を得意がらせては置けないと云つた風に、健次も酒の充分しみ込んだ上半身を食臺の上につんのめらせ、

「あの丸の内の保險會社なあ。一度だつて器用に出した事のねえ奴だが、今日は社長の自動車を玄關で待伏せしてふんづかまへ、たうとうこれ丈ひつたくつてやつた。」

片手を開いてみせびらかした。

「五兩か。」

「馬鹿。痩せても枯れても小山田健次だ。五兩か十兩つかんで追拂はれて堪るものか。」

もつれる舌に力を入れて、これも負けない氣でぞんざいな口をきいた。懷から財布を出すと、

中から小切手をつまみ出して松永の眼の前につきつけた。

「五十兩か。とても凄いなあ。どうだい、今夜は吉原へ繰込まうぢやないか。」

松永はすつかり有頂天になつて大きな聲を出したが、靜枝の方を盜み見て、

「失言々々。」

と云つて頭を搔いた。

「あたし失禮して歸らして頂きますわ。子供に御飯を喰べさせてやらなくては。」

半分は松永に聞えるやうに云つて素早く體を浮かしたが、健次は承知しなかつた。

「待て待て。もう一本でこつちも飯にするから。」

「もう一本もう一本てきりがないぢやありませんか。隨分醉つていらつしやるくせに。」

あらん限りの勇氣を振つて止めなくてはならないと思つて、二の腕に手をかけて意見して見た。

「うるさい。」

かけられた手を横に拂ふ積りだつたのが、靜枝の眼から頰へかけて平手打を喰はせてしまつた。

「あなた。」

その亂暴を咎めようとしたが、脣が震へて何も云へなかつた。

「歸れ。貴様の面を見て居ると酒がまづい。良妻賢母づらしやあがつて目ざはりだ。なあ松永。今夜はつきあつてくれ。二人で飲みあかさうぢやないか。」

健次は酒癖を出して、蒼ざめた顔に癇癪筋を立てながら怒鳴りつゞけた。

「それでは歸ります。」

あぶなく涙の出さうな目を一生懸命こらへて、言葉は健次にいひながら、わざと叮嚀に松永の方へ頭を下げた。もうもうこんな處に居るものかと云ふ勢で立上ると、

「待て。」

と健次が呼止めた。

「財布を置いて行つてくれ。俺は小切手しか持つてゐないんだ。」

見榮も外聞も無く、人前で斯う云はれると、靜枝は財布を出さないわけには行かなかつた。それをやらなければ、無錢飲食になるに違ひ無かつた。大事に帶の間にしまつて置いたのを出さなければならなかつた。今朝うちを出る時はからつぽだつたのが、今は月給が手つかずに入つて居る。

健次はひつたくつて、中から拾圓札二枚をつまみ出して自分のポケツトに入れた。

「勝手にしろい。」
なかみの減つたのを食臺の上にはふり出した。靜枝は默つてそれを取ると、暖簾をくぐつておもてに出た。うすい靄のかゝつた春の夜の空に高く、星が涙ぐんで目ばたきしてゐた。
間も無く、靜枝の姿は暗い川岸にしよんぼり佇んで居た。涙で濡れた顏をして大通は歩けないので、知らず識らず反對の方角へ來てしまつた。泥の深い水の臭が微かに浮動して居た。自分の力ではどうする事も出來ない女の一生をはかなむ心か、泣いた後の寂しさの中に冴えてゐた。
長い間水のほとりにしやがんで居たが、やうやく氣を取直して立上つた。此の世の中でたつた一人、我身とも思ふ詮一が俄かに戀しくなつた。まばゆく燈火のかゞやく大通の方へ引返して來ると、四辻の花賣を取圍んで一群の人が黑くたかつてゐる。たゞならぬ景色に足をとめて延上つて見ると、人の輪の眞中に花賣の女を相手に喋つて居る醉漢があつた。
「わかつたかい。わからねえんだらう。ユウ露西亞人、ミイ日本人――ヂヤパンはははは……」
長い髮をお河童のやうに切つて、わざと帽子はかぶらない、ルパシユカのやうな服を着た若い男が、ひどく皺嗄れた聲で云つて居る。
「いゝかい。國は違つても、お互に人間だ。兄弟だ。人類はみんな仲よくしなくちやあならねえ

んだ。それが吾々の使命だ。いゝかい。それだつてえのに、なんでえ畜生。」

職工らしい酔漢は花賣をかせにつかつて、あたりを取巻いて居る人間に、自分の雄辯をほこるかの如く續けた。

「貴族、金持、こいつらが威張つてゐやあがるもんだから、全人類の幸福は邪魔されてるんだ。いゝかい。それでだね。俺のいひたいのは此の花だよ。」

何を云はれてもよくはわからないらしく、當惑した顔に無理に笑を湛へて、背後(うしろ)に脅(おび)えて居る娘をかばつてゐる花賣の手の花束を指差した。

「この花は綺麗だ。匂ひもいゝや。貧乏人の俺にだつてそいつあわかつてら。しかし、こいつが食へるか。食へねえだらう。」

酔漢は力をこめた拳骨を空(くう)に振つて叫んだ。花賣は矢張微笑してゐる。

「食へねえものを賣つてどうするんだ。不生産的だ。ブルヂョア的だ。今日幾千萬の人間が食へねえで泣いてゐるのに、誰だ、こんな食へねえものを買やあがるのは。」

いきたり花賣の手の花束をひつたくると、めちやくちやに毟(むし)つて大道に叩きつけ、靴をあげて踏躙(ふみにじ)つた。取巻いて居る人達の顔にはさまざまの感情があらはれたけれど、誰一人割つて入らう

とする者は無かつた。花賣は泣きさうな顔をして救を求めたが無駄だつた。
醉漢はしつつこく花の死骸を侮辱したあげくに、ズボンのかくしからちひさい銀貨を出して花賣に突つけた。
「いゝかい。俺の心持はわかつてくれたらう。花なんか賣つちやあいけねえよ。パンでも納豆でも賣つてくれ。お前さんも貧乏人なんだ。だからこれをやるよ。」
さう云つて、びくびくして手を出さず、しりごみする花賣の手に無理に銀貨を握らせた。
「俺あどろ棒ぢやあねえんだ。代は拂つたよ。」
溜飲のさがつたやうないゝ氣持で、あたりの意氣地の無い人間を睥睨しながら、拳骨でとんと胸を叩いて、大手を振つて立去つた。
靜枝は、無責任な見物の散り盡す迄、哀れな親子の姿に心をひかれて立つて居た。どんなむしやくしやを肚に持つて居るのか知らないが、あまりといへば傍若無人の醉漢の振舞を見て、義憤に堪へられなかつた。さんざつぱら勝手な熱を吐いて商賣の邪魔をし、衆人環視の中で差しいおもひをさせて置きながら、金さへ拂へば濟むと思つて居るのか。誰か素晴しく腕力の強い人が出て、あの醉漢を大地に叩きつけてくれゝばいゝと念じた甲斐の無かつたのも口惜かつた。靜枝は、

先刻自分がひどいめに合はされた事と一緒にして、我が身の上の事のやうに殘念がつた。
「その花頂きます。おいくらですか。」
醉漢の騷ぎで脅えてしまつた娘を一心にさとしてゐる花賣の傍へつかつか寄つて、聲をかけた。出來る事ならば殘らず買つてやりたかつた。花賣を慰める爲めと、もうひとつには今は其の場にゐないけれど、彼の醉漢への復讐の心のあらはれとしたかつた。
言葉をかけられた花賣は、靜枝の顏を見上て習慣的の微笑を浮べた。
腕にかけてゐる竹籠から花束を取出して見せた。
「これ拾錢。これ參拾錢。」
靜枝は僅かな給料の大部分を拔取られてしまつた財布の底をはたいて親子の者に與へ度い衝動に惱まされたが、往來の人足をとめて見てゐるのに氣が付いて、自棄のはしたなさを反省した。
「雨方頂きませう。」
五十錢銀貨を渡して、花賣の笑顏に滿足しながら、花束を傘に持添へて逃るやうに電車へ急いだ。
空いてゐる電車の腰かけに腰を下すと、靜枝にほつと溜息をした。體も心も疲れてゐた。づき

んづきん頭痛がして、額には熱があるやうだつた。車體の動搖には、輕い目まひさへ感じた。目を閉ぢて、傘の頭に重ねた手に持つ花束に顏を埋めると、薔薇、チユウリツプ、ヒヤシンス、水仙などの入りまじつた強い香が氣を遠くさせるやうに匂つた。花粉に噎るやうだつた。何もまとまつては考へられない忘我の境に近く運ばれて行つたが、靜枝の閉ぢた目のうちにありありと浮ぶのは、先刻醉漢に踏躙られた花の姿だつた。瞼のうらが熱くなつて顏をあげる事が出來なかつた。（大正十五年三月十五日）

十年

十年ぶりで生れた國に歸つて來た寛は、地震の後の銀座を歩いて居た。東京の全部が灰になつてしまつたやうな新聞記事に驚かされた爲、其の後の報道で左程の事は無かつたと知つても、最初に想像した慘憺たる光景は腦裡から消えてなくならなかつた。丸太を組んだ小屋がけの蔀戸をあけて出入する人間の姿ばかりが目に浮んだ。それは子供の頃に見た乞食の生活だつた。いかにも日本らしい柳の並木を風情とした大通も、一夜にして灰になつたといふ事は、人間の營む世界に、一種悲壯な刺戟である。二度と故國の土を踏まないでもいゝと考へて居たのに、俄かに故鄉をなつかしく思はせたのは此の天變だつた。

半年の賜暇を貰つて歸つて來た。父は留守の間に死んでしまつた。神戸に出迎へたのは、大阪に住む妹と、その家に引取られて居る母だつた。煤烟と下駄の音と、商賣と飲食と、饒舌と無秩序の都會に一月を過ごした。老いたる母の情愛には胸がせまつたが、妹夫婦が大事にしてくれゝばくれる程、その家にはゐたたまれなくなつた。自分が、生れ、育ち、捨て去つた東京が戀しかつた。

銀座の町そのものは存外變つて居なかつた。實質的に重味は缺いて居ても、丸太を組んだ薩小屋などは見つからなかつた。バラック普請といつても、一見華麗な店つきの商店が軒を並べ、夥しい人數が兩側の人道を押合つて歩いて居た。その人間は全く昔と違つて居た。地震と火事に蒼くなつて悲鳴をあげた人間とは思はれなかつた。男も女も、寛の知つて居る同胞よりも遙かに派手だつた。たつた十年の間に斯うも違ふものかと思ふ程違つて居た。男は、寛が日頃親しんだ佛蘭西人などとは比べものにならないお洒落だつた。巴里で幅をきかせながら馬鹿にされてゐる亞米利加人のやうに、なまなましい變り色の服を身につけて居る。女は、和服のも洋裝のも、殖民地の賣女のやうな化粧をして居る。歩き方迄變つてしまつた。ちよつと口笛を吹けば、直ぐにホテル迄ついて來はしないかと思はれる位だつた。

一番あざやかに記憶に殘つて居る柳の並木はなくなつた。彼が我國のものだと思つてゐた風俗も、それと共になくなつたのだ。しかし、目の前をゆきちがふ男も女も、未だ完全に新しい服裝や、新しい身振りに馴れて居ない。一生懸命に、歩調正しく、大跨に歩かうとしても、それが自分の姿になつて居ない。さういふ不調和が目に立つた。日本人には珍しく胴に比して脚の長い自分の姿に、寛はひそかに優越を感じた。けれども、昔の記憶に遠くなつた銀座は寂しかつた。

「あの、あなた……」

自分か、自分ではないのか、不意に聲を聞いて立ちどまつた。

「失禮ですが、あなたは柳さんではいらつしやいませんか。」

脊の低い肥つた女が、追ひかけて來て云つた。微笑を浮べて居る口元の黒子(ほくろ)に見覺えがあつたが、ちよつと思ひ出せなかつた。

「あたくし矢崎で御座います。」

寛も女も、いろいろの回想が一時にこみあげて來て顔が紅くなつた。

「せい子さんですね。」

「隨分しばらくで御座いましたわねえ。」

心持出齒(そつぱ)の口に手巾(ハンケチ)をあてゝ、首をかしげて笑顔を見せる癖は、娘時代のまゝだつた。それがうちとけた心を誘つた。

けれども、何から話をしていゝか絲口が無かつた。聲をかけられなかつたら、誰とも知らずに行き過ぎたに違ひ無い程月日はたつて居た。

「よく私だとわかりましたねえ。」

「お歸りになつた事を存じませんものですから、擦れ違つて五六間行つてから、たしかにあなただと思ひましたの。あなたあたくしを完全に忘れていらつしやつたのでしよ。」

寛の苦笑がそれを肯定した。

「無理もありませんわねえ、こんなお婆さんになつてしまつたんですもの。何年でせう。」

「十年です。恰度。」

「あちらの御話がうかゞひ度いわ。」

往來の人がみんな二人を見て行く。寛は無遠慮な視線から逃れたかつた。

「何處かで休みませうか。御差支が無かつたら。」

「えゝ、夕方迄に歸ればいゝんです。今日は他所へ廻ると云つて出ましたから。」

自然と、人妻の身の上が會話の中に浮んで來た。それは當然の事だけれど、十八九の娘の頃しか知らない寛には、その人とその言葉とがぴつたりと一致しなかつた。

「あたし、もう三人のお母さんなんですよ。」

寛の心持を見逃さずに、せい子は自分を辯解するやうにつけ加へて、首をかしげながら半巾を口へ持つて行つた。

二人は並んで歩き出した。長身の寛は、背の低いせい子をいたはるやうにゆるゆる歩いた。

「お宿は。」

「ホテルです。」

町筋の向ふの方を指して答へた。

果物を賣る家の二階に上つた。街上を見下す窓の側で、冷い飲料をとつた。晴れた五月の空と、卓上の苺の色がはつきり季節を示して居た。

「ほんとにしばらくでしたわねえ。」

もう一度最初からの會話を繰返して、せい子は感慨を深くした。

二人の話はなかなか出あはなかつた。寛が聞きたいと思ふ事をせい子は口にしたかつた。せい子にしてみれば、寛が聞き度いと思ふ事を話し度いとは考へながら話せなかつたのだ。何時迄も差障りの無い事を話題にした。

せい子は、自分が大森に住んで居る事、今は野澤せい子である事、夫は丸の内の會社に勤めて居る事、決して手腕家では無いが遊蕩などはしないので安心だといふ事、上の子供は學校に通つて居る事などを、それからそれと話した。見た事も無い人の事なんか寛には何の興味も無かつた

が、むかしに變らぬせい子の人のよさが、久々の日本をなつかしくした。

問はれるまゝに、寛も其の後の身の上の事を話さなくてはならなかつたが、日本人と佛蘭西人とが共同で經營する銀行の支店に、たつた一人の日本人の書記として勤務して居る事の外には、進んでいふ可き事は何も無かつた。それよりも、人に話せない事の方が多かつた。

「まあ、それでは又あちらへ行つておしまひになるんですか。それではお母様がお可哀さうですわ。」

せい子は仰山に驚いて見せた。

「でも、もう日本では通用しませんもの。」

寛はこゝろよく笑はうと思つたが笑へなかつた。自分の言葉が捨鉢に聞えて、不意に心持が暗くなつた。何となく自分の弱味を見られてしまつたやうな不愉快な氣持で、日ざしの弱くなつた空に目をそらした。

寛は停車場までせい子を送つて行つた。

「柳さん、あたしまだお話したりないのよ。もう一度御目にかゝり度いわ。」

差出した寛の手を握つて、さう云つて別れた。

水氣を含んだ夕方の空は靜かだつた。高架線を遠ざかる電車を町角で見ながら、寛の心は柔いで居た。

油のやうに重くこまやかな回想が、泉の盛上る力で湧いて來た。十數年前、はり切れるやうな人生の希望を、人一倍強壯な肉體と共にもつて居た時代の生活が、現在の事の如くいきいきとよみがへつて來た。

彼は日本の庭球選手權を爭ふ花形だつた。長身を利用したアメリカン・サアヴィスの威力をもつて鳴らした。何等の小細工を弄さないフオア・ストロオクの、強靱をもつて鳴らした。白皙の面は日に曝されて、こんがり焦げた麵麭のやうな頰をしてゐた。太い腕のうち側は日に燒けずに、眞靑な靜脈が素直に強くうねつて居た。

恰も女學生の庭球の盛んになり始めた時代だ。何處かに脆いところはあつたが、それ丈綺麗さつぱりとした寛の試合振は、若い女の運動家の胸を躍らせた。その競技振を讃へる言葉のうちには、男らしく美しい容貌と姿體とに引かれる心があらはだつた。その頃の女學生の情熱の對象となつたプリンスに劣らない人氣だつた。一方は願つてもかなはない望みだが、此方は望んで望めない事では無かつた。それ丈一方は幼い憧憬に過ぎなかつたが、片々は現實の問題だつた。

寛にとつて、せい子は當時の女友の一人である。脊の低い、運動家らしくない體つきだつたが、その時代の女の中には餘り數の多くなかつた前衛專門で、なりふりもかまはない熱心な練習と相俟つて、ダブルの第一位となつた事もあつた。せい子は美しくなかつた。男の學生ともへだて無く口をきゝ、善良な性質は誰とも親しくなつたが、自分でも自分を知つて居たし、又性格的にも何等の問題を身邊に捲かなかつた。彼女の存在は、ともすれば變にぎごちなくなるか、それでなければ親密になり過ぎる若い男と女との間にあつて、何の衒りも無くみんなが信頼し、親愛する位地にあつた。

寛が戀したのはせい子の友達で、シングルの女子選手權を數年間續けて保持した緋紗子であつた。四肢の完全に發育した、近代的の容貌の持主で、女子共通の弱點とされて居る走力に於て群を拔いて居たのが緋紗子だ。顏だけの美しさならば、せい子と組んでねばり強い後衛として聞えた涼子に及ばなかつたが、涼子の美しさは餘りに均齊がとれ過ぎて寂しかつた。思つた事を奧深くしまつて置くたちの涼子は、男から見て近寄り難い氣がした。話がしにくかつた。うつかりした事を云ふとたしなめられさうな氣がした。深踏みをする怖さを誰も冒さなかつた。それよりも、有名な富豪を父とし、社交界でもてはやされて居る緋紗子は、遙かに強い魅力を持つて居た。心

ひそかに戀したものは寛ばかりでは無かつた。

　寛には自惚もあつた。自分の容貌と、運動家ばなれのした學績と、男性的な競技振りと、多くの女性が好意を寄せて居る事と。そして自分の身邊に集まる女ならば、誰でも容易に雙腕の中に抱締める事が出來ると思つて居た。その中から、寛は緋紗子を選んだのである。大勢の中で必ず中心となり、誰よりもはつきり目立つ緋紗子が、とりわけ自分には熱意を持つて居ると思つた。しかし、彼は自重して居た。何時かは女の方から積極的に自分を求めて來るといふ期待に信賴して居た。だが、その期待は長く期待に止まつた。疑へば、他に多くの競爭者もあつた。寛は自惚もほこりも捨てなければならなくなつた。眞劍になつた。あせつた。餘りに社交的な相手の態度が不安になつた。學校の卒業期を半年の向ふに控へて、勇を鼓して將來の誓を求めた。そして、はつきりと斷られたのである。緋紗子は既に或貴族との婚約が成立つて居た。

　寛は自分自身に對して憤つた。自惚を、不明を、輕率を、いくら罵つても罵り足りなかつた。彼は長い間自分の熱情を抑へて居た。その間に相手の本心を探る爲めには手も盡した。二人きりで郊外へ行つた事もある。夏は、緋紗子の家の別莊のある輕井澤へ行つた。野を山を、共に歩いた時のいろいろの景色は、どうしても戀人同志の姿だつた。誘つて拒まれた事は無かつた。それ

がすべて幻影か。青年期に入つてから、年中衆人環視の中で、勝れた運動家としての存在をもつて來た寛だ。むざんに弄ばれた自分を、さりげなく見る事は出來なかつた。彼が緋紗子に戀を求めて得なかつた事は、忽ちの中に噂となつた。新聞は寫眞を掲げてうたつた。學生生活の最後を飾る積りでゐた秋のシイズンに、彼は出場する事を欲しなかつたが、いやがる自分を強ひて出た。いふ迄も無く慘敗した。あらゆる點に於て嫉視の的だつた寛の失敗は、他の者の痛快とする所だつた。それも寛には堪へ難かつた。たゞ、前よりも一層親しく同情を寄せて來たのはせい子と涼子だつた。それさへ弱者に對する憐憫として彼は不快だつた。露骨な同情は嘲笑にひとしかつたのだ。數ケ月の後には卒業する學校と、母親のなげきを振捨てゝ、外交官の叔父を頼りにして佛蘭西へ渡つてしまつた。

巴里へ着いて間も無く、寛を驚かしたのは涼子の手紙だつた。無口で、感情をおもてにあらはさない人が、筆には熱情の籠つた文字を托した。海を距てゝ居るといふ事も、涼子の型の女にとつては、目の當り見るよりも容易に心をうちあける事が出來たのであらう。かねて寛をなつかしく思つて居たが、寛の心が緋紗子に向つて居るのを知つて忍んで居たと書いて來た。純情は詩のやうに男の心を動かした。日本からの便船の度毎に、涼子のおもひはセイヌ河畔の寛の旅舍まで

屆いた。

寛も嬉しく思つた。何故初めから涼子を選ばなかつたかを悔いた。二人の間の手紙の往復は續いた。あれ程親しくして居ながら、一度も此の人に戀を感じなかつたといふ事が、寛の胸には切なかつた。

遠く離れて、初めて心をうちあける事の出來たのを、せめてもの喜びとすると女は云つて來た。それを寛がわだかまりなく受けた事が涼子を一層大膽にした。御歸りの日を待ちます、それが何年先の事でも待ちます、變らぬ自分を守つて待ちますといふ言葉が、常に手紙の最後を結んで居た。旅はたゞさへ人の心を弱くする。寛は屢々涼子の眞心に動かされて感激の涙を湛へた。

それは一年續いた。突然涼子からの消息が絶えた。寛は心配して訊ねてやつたが、なかなか返事は無かつた。最後に受取つたのは、涼子が父母の爲めに嫁に行かなければならなくなつた、と云ふのであつた。相手は父の恩人の息子である、自分の心が弱いと思ふ、しかし如何しても老いたる兩親に背ききれなくなつた、家の內情、兄の社會的地位に迄自分の意志一つで重大な影響が及ぶ、自分は犧牲となつて死屍の如き體を嫁がせる、心は永久に想つて居る、たゞたゞ許して頂き度いと云ふ言葉が繰返して並べてあつた。

同時にせい子からの手紙があつた。涼子がすべての事情をうちあけて相談した。自分は涼子の心を知つて居る。何も云はないで同情してやつてくれと云ふ意味であつた。

寛はその二通の手紙を寸斷して床に叩きつけた。一家の事情とはなんだ。恩人がどうしたと云ふのだ。兄の立身出世がなんだ。家の爲め親の爲めとはなんだ。家や親の事ならば最初から考慮に入れてある筈では無いか。忌はしい手紙の芝居の雪のやうに散つた床を踏んで、あまりに容易に心を許した愚かさを憤つた。

何といつても再び弄ばれたといふ口惜しさは消えなかつた。その日以後、巴里の裏面のあらゆる汚濁の中に沈んで身を瀆した。

寛の追想は、昔を顧みて何等の興奮を感じない程靜かだつた。彼の經て來た試煉は、ひたむきな情熱を奪つてしまつたが、容易に他人に動かされない冷かさをまじへたおちつきを與へた。彼は或る百貨店の賣子の監督をしてゐる巴里生れの女と同棲して、中年の世俗人の生活に馴染んでゐた。半年の休暇の日が終りに近づけば、又遠く巴里へ歸る自分なのだと思ふと、せい子に逢つた事も夢のやうに思はれた。暮れ切つて細かい星のきらめき始めた空の下に、緋紗子も涼子も今はむかしの事などは忘れて、それぞれの平凡な生活をしてゐるのであらうと思つた。寛は濠端の

道を歩いて旅舍に歸つた。

次の日、せい子から電話がかゝつた。又銀座に來て居るが、逢ひ度い、若し差支の無いものならホテルへたづねて行つて見度いと云ふのである。寬は快諾した。昔に變らず人なつつこいのが愉快だつた。きりやうの惡いと云ふ事を、何のひがみも無く承知して居て、又きりやうがよくない爲めに何の警戒も必要が無かつたのだらうが、わけへだてなく男の學生の家を訪問したり、下宿に遊びに行つたりするせい子だつた。寬のところへも、涼子とつれ立つて遊びに來た事も度々あつたが、それはいふ迄も無くせい子の發意だつた。三人の母親になつたと云ふ今も、せい子が女學生時代のさくい氣持を失はないのがこゝろよく思はれた。

せい子は一人では無かつた。日本人好みの、色どりの多過ぎる洋裝の女の子を連れて來た。寸の短い、まるまると肥つた健康な子供は、齒並の尋常でないところ迄母親にそつくりだつた。

「あたくし、昨日あんまり思ひがけなかつたものですから、何の御話も出來ないでお別れしたでせう、それが忌々しくて爲方が無いものですから、宅にすつかり話しましたの。さうしたら、さういふ昔の御友達が久々で歸つていらしつたのなら、せいぜい歡待してあげなくてはいけないつていふんでしよ、歡待なんて出來るわけが無いから、そんならあたしの方から遊びに行つてあげ

るわつて……」

せい子は出齒の口に半巾をあてゝ笑つた。

紅茶とお菓子の卓を挾んで、せい子はいかにも面白さうに話した。女學生時代よりも一層血色も肉附もよくなり、三人の母親になつても、かへつて若々しさを加へたやうに思はれた。

「あなた今でもテニスしていらつしやつて。」

「いゝえ。あなたは。」

寛は庭球にまつはる記憶を一人で想ひ返す事はあつても、他人に問ひかけられるのはいゝ氣持がしなかつた。

「あたしはやつて見度いとは思ふの。ですけれど人手のない吾々の所では子供の世話丈でも大變ですからねえ。それよりもあの子が大きくなつたらナンバア・ワンにして見せますわ。」

最初のうちこそ見知らない大人の男に、疑ひ深い眼(まな)ざしを向けて居たが、女の子は忽ちホテルの內部の珍しさに夢中になつて、母親の側を離れて勝手に活動し始めた。せい子は一層氣輕に、脂肪(あぶら)の乘つた話しぶりになつた。

「柳さん、今朝(けさ)の新聞御覧になつたでしよ。」

「今朝の新聞。」

別段痛手に觸られたといふわけではなかつたが、どきつとした。彼は相手の質問が何であるかを知つて居た。

「もう昔の事だから、氣持を惡くなさる事はないでしよ。」

せい子は首をかしげて、のぞき込むやうに相手を見上げた。寛は他意無く苦笑した。

「緋紗子さんの寫眞が出てゐたでしよ。あの方は實に御さかんだわ。」

その寫眞は寛も見た。女子庭球選手權を爭ふ人々の中のたゞ一人の既婚者として、子爵夫人の寫眞が出て居た。白い鉢卷をした、豐かな肉體と、あくどい程表情のはつきりした大うつしの寫眞を、流石に輕い、ねたみをもつて見た。努めて平靜な心を持ち度いと思ひながら、夕凪の海にうねる浪のやうな感慨を止めかねた。緋紗子も二人の子供の母親であるが、里は有數の富豪だし、內政の豐かな貴族の家に嫁ぎ、愈々社交界の花形としてうたはれてゐる一方には、女子庭球選手の先輩として晴の競技に參加し、強壯な肉體と得意の走力は、未だに追隨を許さないのだとせい子は話した。

寛にとつては、その後日本の雜誌や新聞の寫眞版に屢々あらはれた緋紗子の事は珍しくなかつ

た。青年時の純情を弄ばれたといふ恨みはあつたが、今になつてみると、その後涼子に對しておもひを寄せた心程深くはなかつたやうに思はれる。さうでないとしても、どうなつたのか何の消息もきかない丈、涼子の事が知り度かつた。

「あなたはほんとに緋紗子さんが御好きだつたのねえ。」

その人の事を話した後で、話の効果がどうあらはれるかと寛を見守つて居たせい子は、相手の態度に何の動揺もないのを見定めると氣が樂になつた。もつと深く其の頃の事にはひつて行つても差支ないと思つた。

「あたしなら初めから涼子さんの方を選ぶわ。」

涼子の名前を出すのが、せい子の最初からの願ひだつた。

あまりに惠まれた境遇に在つて、誰をも憚らぬ緋紗子に對して、その仲間の女性が無條件で好感を寄せるわけが無い。持前の磊落な性質から距てなくつきあつてはゐたものゝ、心から親しんだ友達では無かつた。それにひきかへて、前衛と後衛と、多年組んで居た涼子には、何から何まで互にうちあけて居た。せい子は、寛が緋紗子に戀し、涼子が寛におもひを寄せてゐる事は、事の破滅に到る前からわかつて居た。やけになつて巴里へ行つてしまつた寛に對して、涼子が始め

て心の中をうち割つて見せ、二人が熱烈な文字を手紙に托して取りかはせた一年間を、せい子に後見役として見守つて居た。涼子が心弱く、嫁がなければならなくなつた時も、誰よりも親身に賴つたのはせい子だ。學校を出て嫁に行くと、昨日迄は互に戀愛の飯事をして姉妹のやうに仲好くした者も、忽ち疎遠になるのが女のならひだが、二人は今も變らずつきあつて居た。

「涼子さんも不幸な方ですわ。」

とせい子は嘆息した。夫は病的の酒のみで、且つひどい不身持だつた。長男が死に、次の御産から引續いて涼子の健康が衰へてからは、夫は家に歸るよりも、他所へ泊る事の方が多くたつた。

「あの方は今でもあなたに濟まないと思つていらつしやるんですよ。みんな罰ですと御自分の罪にしていらつしやるんですもの。」

默然として寛は煙草をふかして居た。若し緋紗子が自分の戀を容れたとしたらどうなつた自分だらう。若し涼子が他所へ嫁がずに、自分と一緒になつたとしたらどうなつた自分だらう。寛は自分自身を中心とした出來事としてよりも、此の複雑な人生の一面として其處に登場する人々の姿を想ひ描いた。

二日續けてせい子に逢つてから、寛は心の底に何か期待をいだくやうになつた。何とまとまつ

た事では無い。久々で故國を訪れる時、其處に住む人間にはかゝはりのない日本の靜止した山河の姿が胸にあつた。其處に生を營む人の姿は影繪のはかなさしか持つて居なかつた。次第にそれが色彩を濃く、活潑な動作で身邊を取卷いて來るやうに感じられた。此の儘、二度と海の向ふへ渡らない自分さへ、無責任に考へてみる事もあつた。

寛は東京に多くの興味を見出さなかつた。せい子に逢つた外、昔の人には一人も逢はなかつた。逢ひ度くもなかつた。十年の歳月は、故國との連鎖を早くも絕たんとするものゝやうであつた。曾て歐羅巴へ赴く時、南洋の殖民地を物珍しく思つたと同じ無關心を以つて、市街を歩くばかりだつた。友達として、彼の心の傍にゐたのはせい子だけだつた。食事の時もお茶の時も、食卓の向側にせい子にゐて貰ひ度かつた。長い一生から考へると、燃えるやうな戀情を一度でもいだいた相手よりも、其處迄立ち入らないでつきあふ人の方が尊いのではないかと考へた事もあつた。

せい子から手紙を受取つた時、寛は喜んで招きに應じた。夫のある人の所に、その夫とは未見の者が、留守中招かれて行くのは變だつたが、相手がせい子ならば差支ないと思ひ返した。

電車を降りて、手紙に書いてある略圖をあてに行くと直ぐわかつた。和洋折衷の家だ。門のところで遊んで居た此の間の女の子が、寛を見るとおじぎをして、直ぐさま庭口へ姿を消した。次

關の呼鈴を鳴らす迄も無く、せい子が扉を開いて迎へた。

洋風の應接間へ案内された寛は、目の前に自分を凝視する女を見た。涼子だつた。

涼子は漸く一人歩きの出來る位の男の子を膝に抱いて居た。その子供を抱いて居る事で、僅かに自分の臆した態度をかくさうと努めるのは明かだつた。

「驚いたでしよ。」

せい子は自分の計畫が當を得てゐたか、ゐないかに迷つて居た。何とかして明るい室(へや)にしたかつた。

寛もせい子に不滿を與へまいとは思ふのだが、矢張り言葉は滑かには出なかつた。産後引續いて病弱だとは聞いて居たが、涼子の衰へはいたいたしかつた。十八九の頃の姿しか記憶にない寛にとつて、痩せてとげとげした感じの強くなつた中年の女を見る事は意外だつた。せい子のやうにいきいきしたところが無く、此の美しかつた人には衰へが早く來た。眼や鼻を取卷いて、そばかすのやうなしみがいちめんに滲(にじ)んでゐた。哀れと思ふよりも不快だつた。曾ては眞劍になつて想つた事のある人が、斯う迄衰へたのは他人事(ひとごと)では無かつた。自分自身がおとしめられたやうな氣がした。

あけ放した窓から、海の遠くない事の感じられる風が通つて來た。果物の香も高い五月だ。透明なレモンの一片が紅茶の茶碗に浮んでゐた。
せい子の自慢の子供が馳け込んで來て菓子をねだつた。涼子の子供も母親の膝からおりて、よちよちした足取りで椅子や卓子の間を縫つて廻つた。三人の大人は、どうしてもわたかまりのとれない心持に惱みながら、無邪氣に遊ぶ子供を見て居た。
「さ、みんなお三時が濟んだらお庭で遊ぶんですよ。光さんも一緒にいらつしやい。」
せい子は涼子の子供の手を引いて、先に立つて出て行つた。
「御子さんは御一人ですか。」
寛は相手の所在なさを救ふおもひやりをもつて言葉をかけた。
「はあ、もう一人居りましたけれど、なくなりました。あなた樣は。」
「僕ですか。ありませんとも。」
寛はつとめて氣輕に答へた。
「それでもあちらで御結婚遊ばしたんでしよ。」
靜かな口のきゝ方をして、言葉が切れると微かながら口元を引締める癖がむかしのまゝだつた。

それに氣の附いた時、寛は自分の動悸を感じた。
「結婚なんかするもんですか。」
「濟みません。」
涼子ははつきり云つて、痩せた爲めに以前よりも大きくなつたやうに見える目を伏せた。
寛は自分を恥ぢた。結婚しないといへばしないと云つても差支無いかもしれない。けれども、その後幾人の女と同棲した自分であらう。現に、彼の歸りを待つてゐる者がある。二人はめいめい違ふ心持で默した。
せい子が、泣き叫ぶ子供を抱いて戻つて來た。
「いけません、いけません、いけませんねえ。さ、お母さまのところへ行きませう。」
涼子の子供は、あらん限りの聲を張りあげて泣きながら、無闇に手足を動かしてあばれた。
「ちよいと目を放してゐる間に、宅の腕白が手を出したものですから。」
「とんだ御世話樣でした。」
涼子は我が子を抱き取つて、室内をすかしながら歩いた。子供は間も無く泣き止んだ。が、今度は母の懷に手をさし込んで乳を求めるのであつた。

「いけ、ませせん。今御菓子を頂いたばかりぢやありませんか。」
たしなめても幼いものはきかなかつた。
「いけませんたら。」
さういはれると、子供は又聲を張りあげて泣出した。一念を通さなければ承知しない決心を示して、片手は懐に深く差入れ、片手では母の頬を打つた。寛は舌打ちしたい心持で見て居た。
「ちよつとおあげなさいな。」
「だつて。」
「かまはないぢやありませんか。どうせ吾々は日本人なんですもの。」
せい子が笑ひながら云つた。
涼子は顔を染めて躊躇しながら、窓際の長椅子に行つて、寛の方に斜に背中を向けて胸を開いた。子供は泣叫ぶ口に乳房をあてがはれて、我意を通した滿足と共に舌打ちして吸つた。
十年前、自分を慕つて來た女が、今目の前で子供に乳をのませて居る。その姿には批判を超えた母親の情愛があつた。不意と、さまざまの感慨が盛り上つて來て抑へ切れなくなつた。寛は鼻をつまらせて目をそらした。

巴里へ歸らう、一日も早く歸らう。おもひがけない心の脆さを自分のうちに見出した氣がして、それを振り拂ふやうに心でつぶやいた。（大正十五年五月六日）

紉友會

格子が開いた。

子供のスウヱタアを編んでゐた環は、長い象牙の編棒の運動を止めて耳をすませた。そら耳かしらと思ひかへして、又忙しく手を動かさうとした時、たしかに人の聲がした。又物貰ひかゆすりかもしれない――つい此の間、しつつこくねだられた孤兒院の子の恨みがましい顏と、此の頃近所を横行して、刑務所にゐる友達に差入物をするのだから同情してくれと強請して廻る長髮の若者の姿を想つて眉をひそめた。

「まあ。」

障子をあけた時、感動の聲が雙方から出た。

「どうしておわかりになつて。」

「あたくし御近所に越して參りましたの。」

齒並の惡い口の醜さをかくさうとして、ものを言つた後で必ずきつく結ぶ癖が、不意と昔なつかしさを呼んだ。人のいゝ人だつた。きさくな人だつた。歩き癖か著しく、いつも靴の踵のひど、

く傾いて減つたのを穿いて、薄い髮をマアガレツトに結んでゐた。誰とも距てなく、その癖誰からも重くは見られなかつた春代だつた。思ひもかけない舊友の姿に、貧しいくらしを顧みて顏が紅くなつた。

「失禮ですけど、ほんとにあたし御宅の御主人の御名前を忘れてゐたんですの。それが、おもてで遊んでいらつしやる御子さんが、あんまりあなたに似ていらつしやるものですから、あゝあなたの御家(おうち)だつた、あなたの御子さんに違ひ無いと思つて伺つて見ると、矢張りさうだつたんですわ。」

春代さんの聲は半音階(はんおんかい)高いわ——と級の者が蔭口をきいたその聲だつた。わだかまりの無い心持を、言葉にも顏色にも容易にあらはし得る性質だつた。年をとつても變らなかつた。久し振りで逢つた嬉しさを全身に見せてゐる相手に對して、環は胸がいつぱいになつた。

みすぼらしい住居(すまひ)、往來で遊ぶ子供達、自分のみなり——いろんな事が人を迎へる心を阻(はゞ)むのであつた。けれども、春代がいかにもなつかしさうに話しかけるので、環も親しさを示さなければ濟まない氣がした。

「おあがり遊ばせな。汚いところですけれど。」

さういふと、春代は遠慮なくあがつた。昔の名殘りで、二室つゞきの室をしきる襖は未だはづしてあつて、家の中の全部が客の眼前にむき出しだつた。

「ほんとにしばらくでしたわねえ。」

「十年、もつとでせうか。」

「十二三年になりますわ。」

學校時代の言葉しかとりかはした事の無い二人だつた。三十になる今、お互にどういふ口をきいていゝのか一寸迷ふところがあつたが、春代の善良な性質は、わけもなく氷解した。

春代は多く話した。環はうけ答への外は話す事を好まなかつた。みんなに高く評價されてゐた自分の過去と、今の實際との餘りに相違してゐる事が、どうしても心を柔かにしなかつた。

春代とても、人にほこる身の上では無かつたが、何から何迄さらけ出す性質だつた。陸軍將校の夫と共に各地を歩いた。仙臺にもゐた。小倉にもゐた、支那にもゐた。それが軍縮で現役を退いたので、やうやく東京に戻つて來た。むかし軍人肌と稱した氣合の夫は、人に勸められても、何の仕事もしようとはしない。朝から晩迄習字をして暮らしてゐた。一種の靜座法だつた。

「ほんとに呑氣な人でしてねえ。」

夫を物語る春代の口吻には、羨しい程不平が無かつた。

「御子様は。」

五人の子供を持つてゐる環は、子供の多いといふ事さへ身の恥のやうに思つた。つまらない事を訊かなければよかつたと思つた。

「一人しか御座いませんの。御宅は。」

それよりも、夫の勤務先を訊かれた時は、環は肉體に恥辱を受けた感じがした。

小學校へ通つてゐる女の子と男の子が歸つた。それに誘はれて、往來で遊んでゐた下の二人も家の中へ戻つて來た。四人は次の間との境の閾のところに頭を揃へて客に挨拶した。

「お可愛らしいこと。」

春代は、母親似の整つた顏つきの子供達を、目を細くして見たが、環は子供が四人も揃つてあらはれたのが、何か自分の弱點をあばかれたやうな不快を伴つた。

「もう御一方いらつしやるのですか。」

「えゝ、今年中學にはひりましたのが居ります。」

「お樂しみですわねえ。」

二人の子供は、次の室に並べてある机に坐つて、めいめい復習を始めた。學校から歸つて來ると直ぐに復習させるのが、母親の定めた掟だつた。

子供は客の存在を意識してゐた。一年生の男の子は、客の方に時々視線を投げながら、ふだんよりも聲高く讀本を朗讀した。女の子は洋服の膝子を揃へてきちんと坐つて、わき見もせずに算術をしてゐた。

ちひさい二人は母親の左右から寄添つて來た。

「お母さん、何か。」

客の前にある菓子器にすつかり心を吸ひつけられて、鼻を鳴らし始めた。

「いけません。あとでみんなの御さらひが濟んでから。」

言葉にも目にも、叱る意味をふくませて云つても、子供は母の背にからだ全體の重みをもたせかけていふ事をきかなかつた。

「ほんとに爲方が無いんで御座いますよ。どうして斯うも行儀が惡いのかと思ふのですが。」

「いゝえ、どちらでも御子さん方は同じですわ。」

春代は子供の行儀などに拘泥する性質では無かつた。

「ひとつあげませうか。いらつしやい。」

菓子を挾んで差出すと、子供は一文字に馳けて行つた。

「いけません。」

環はきつく子供をたしなめた。

「春代さん、頂かせないで頂戴な。宅では出來る丈時間をきめてやらうとして居るのですから。」

「あなたは昔からその流儀ね。何でも規律正しくなさらなくては氣の濟まない方だつたわ。」

二人とも、教室や運動場に群がる生徒だつた頃の姿をはつきりと想ひ出した。春代には、それが樂しい回想だつた。

「あなたは同窓會に御出かけになつて。」

「いゝえ、ちつとも。」

「この秋には是非御一緒に參りませうよ、久し振りでみなさんに御目にかゝると矢張りなつかしいものよ。」

むかしの友達の誰彼の噂をして、その誰に對してもなつかしくて堪らないといふ風だつた。環には、舊友のみんながみんな、自分などとは比べものにならない程幸福らしく想像された。誰に

も逢ひ度くは無かつた。中でも春代が最近逢つたと云つて、特別に力を入れて新子の事を話した時は、胸を打つ動悸をおさへる事が出來なかつた。

「ほんとに思ひがけなく御目にかゝれて、こんな嬉しい事はありませんでした。又寄せて頂きますから、あたくし共へも御遊びに御出で下さい。」

何時迄も話してゐたい樣子だつたが、家の事を思ひ出して春代は立つた。

次の室の子供達は、そろそろ復習にあきてゐたが、客が歸ると見て、又氣を取り直して机にむかつて居た。

「みなさんおえらいのね。小母さんとこの子供は勉強が嫌ひで仕方がないのよ。」

春代はうしろから一人々々の肩に手を置いてほめた。

「お父さんもお母さんもよく御出來になつたのですから、御子さん方も勉強家でいらつしやるのね。」

「いゝえ、駄目なんですよ。」

環はひどく侮辱されたやうに思つた。つい此の間、自分が反對したにも拘らず、並河が古い書類の間から見つけた小學卒業免狀が、子供達の机の上の壁に、額になつてかけてあるのも羞しい

事だつた。

春代の歸つたあとしばらく、環はぼんやり考へてゐた。何の屈託も無く、晴やかに笑つて過ごした學校時代の事が、根深い悔いとともに再現して來た。初めからしまひ迄首席で通したほこりに加へて、環はみづから美貌を許してゐた。全校の誰からも尊敬と羨望をもつて見られた。男に對してこそ危險を感じ、怖れをいだいてゐるが、既に一人では寂しさに堪へられない心持のおのづから湧いて來る時代の事だ。上級生からも下級生からも、特に親しいまじはりを求めて來るものが多かつた。

環が一番仲よくしたのは同級の新子だつた。二人の父は同じ役所に勤めてゐた關係もあつた。父親の地位も、自分の才能も、容姿も、すべて一段上にある事を忘れない環に對して、何のわだかまりも無く自分の方が遙かに劣つてゐると知つてゐる新子だつた。親しみなつかしむ心と共に、環をうやまひ、賴りにした。世の中の萬事に對して、正義感から來る批判を持つてのぞむのが環だつた。新子にはさういふ頭腦が無かつた。何でも長上の敎へる事に疑ひをさしはさまず、素直にうけ入れる美質を持つてゐた。二人の生涯は其の性格によつてわかれた。

卒業間際に、父が收賄の嫌疑をうけて免官になつた事は、環が此の世に生れてから最初の深い

打擊だつた。その父は嚴格で、家庭に於ても常に人の道を說いた。環の性格は父の敎によつて築かれてゐた。

女流敎育家として有名な母校の校主の勸める結婚を斷つたのも、ひとつは家にうけた汚名を恥ぢた爲めだつた。しかし、一方には環一流の理想も働いた。世馴れない少女らしい思想に過ぎないのだが、親讓りの財產で安逸をむさぼつてゐるやうな男と生涯を共にするのは恥だといふ考を持つてゐた。學校時代に、前例の無い優秀な成績を收めた自覺も手傳つてゐた。自分のよしとする道を踏んで行けば、何事もよき果實を結ぶといふ確信があつたのだ。

當の男は、いろいろの機會に環を見て、すつかり乘氣になつてゐた。有名な富豪だつたが、明治初年に名を成した先代といふのは漁色家で、息子も娘も異腹の子だつた。さういふ事も環の潔癖にさはつた。おまけに、當の相手も遊蕩兒として聞えてゐた。家と結婚はしない、財產と結婚はしないといふ處女の理想に環は信賴してゐた。校主の勸めで、父母の希望でもあつたが、環はその緣談を拒否した。そして、兄と同窓の素寒貧の並河と結婚した。

斷つた相手は、矢張り校主の橋渡しで、新子を娶つた。

並河は兄の推奬した男だつた。學校切つての秀才だつた。それが世の中へ出ては、何から何迄

運が悪く、どうしても芽を吹かなかつた。同僚の背任罪の卷添へをくつた。盟作の主謀者と誤認されて馘首の憂目も見た。あせればあせる程よくなくなり、仕事の變る度に地位は下つて行つた。結局、長い間の苦艱の後に、しかたなしに縋つた保險會社の仕事で、今は僅かに一家を支へて行くのであつた。十餘年の生活を顧みて、環はいつも口惜しく思ふ。女と生れた賴りなさを、痛感するのであつた。

夕方、夫は疲れて歸つて來た。

「どうも不景氣で駄目だ。先月の成績も惡かつたから、今月こそはと思つて奮鬪してゐるのだが。」

一日歩き廻つたので、投げ出した足の尖(さき)には靴下をもれて指があらはれて居た。しばらくぼんやりしてゐたが、

「腹もへつてしまつたが風呂にでも行つて來るかな。」

臺所にゐる妻に聞えるやうに云つて、間も無く出て行つた。環は、秋刀魚(さんま)を燒きながら、涙ぐまれてしかたが無かつた。

自分も不運だが、夫も不運なのだ。何をしてもつまづいたが、原因は不測の事が多かつた。今

の職業に對して、生命保險の勸誘は恥づ可き事ではない、事業の性質から云つて寧ろ立派な仕事なのだと、並河は自分をも妻をも慰めたが、環の内心には納得出來ないものがあつた。最初は意外の上出來で、月給の外にコムミツションを貰つて來た。無資本の人間にとつて、これ程有利な仕事は無いと云つて喜んだが、それは一時の事だつた。不時の收入があるかはりに、出來の悪い時は仕方が無かつた。收入があると、ふだんの乏しい生活をとりかへす氣で、同僚と飲んで來る事もあつた。收入が無いと、家に歸つて不機嫌で、子供にも口汚く當つた。環は充分夫の心持に同情は持ちながら、わづかのコムミツションに左右される意氣地なさを口惜しく思ふのであつた。

運が悪いのだ、運が悪いのだと、自分を慰めはしても、何よりもなさけないのは、並河が永い間の浮ばない生活に馴染んで、全く向上心を失ひ盡した事だつた。いくら貧乏はしても、心持は高く持つてゐたい、いつかは上げ潮に乘る日が來るのだと、一縷の望みをつないでゐる環にとつて、その日その日の收入の多少以外には何の興味をも持たない夫がなさけなかつた。境遇次第で、斯う迄人間が變るのかと思ふと、さういふ夫の妻として一生を終る自分自身に對しても腹が立つた。

春代はその後も、ちよいちよいたづねて來た。わだかまりの無い性分なので、直ぐに子供達も

馴染み、小母さん小母さんとなついた。自分の子供も連れて來た。母親にそつくりの、齒並の惡い子供で、環は我子と比べて心の底から滿足した。子供が立派になつてくれる――それが此の頃の望みになつて來た。

自分の弱みをさらけ出す事の出來ない環も、おもはず愚痴つぽい本心を開いて見せる事もあるやうになつた。

「女の一生つて、ほんとにつまらないものね。」

それは、未だ自分の力をたのむ心の消え無い環の根深い悔恨であつた。何故男に生れなかつたのだらう、自分が男だつたら――さういふ心だ。

「ほんとですわねえ。」

調子は合せるものゝ、言葉には實感が無かつた。どんな環境に身を置いても、無批判に笑つてゐられる春代を、環は時に憎らしいと思ふ事もあつた。子供が何をしても、理の通つたさとし方をしないのもあきたらぬところだつた。秩序正しく勉強させて、同輩に拔んでた子供にする、やがては世に聞えた人物にするといふ樂しみが環にはあつた。夫に望んで得られず、自分は――自分は女でなければと思ふのだが、それはまゝにならなかつた。せめて子供はといふ一縷の望みだ

つた。

春代と並河と顏を合せた時は、環のほこりはすくなからず傷つけられた。夫の長身がいけなかつた。皺くちやの洋服がいけなかつた。粗髯もいけなかつた。殊に、わざとらしく叮嚀な言葉づかひや腰の低さがいけなかつた。環の知らないうちに習得した職業的技能だつた。

「御主人にも一度御目にかゝりまして、是非とも一口御加入を願はなくては。」

いかに自分の從事してゐる仕事が困難であるかを話した後で、そんな事を云つて揉手をしてゐる夫を、環は憤りをもつて見た。心迄腐つたといふ感じが、その所作に伴つて胸を壓して迫つて來た。

「あなた春代さんの御主人に契約を御勸めになるの。」

環は春代の歸つた後でも、その事が胸につかへてゐた。

「いゝぢやあないか、惡い事では無いんだ。春代さんや子供の將來の爲めに、一家の主人として當然爲す可き義務だよ。」

「それだけはよして下さい。」

環は眞劍になつて詰め寄つた。

「理窟は理窟ですけれど、あなたが商賣の事であたしのお友達の所に行くのはよして下さい。」
「何をいつてるんだ。富籤を買へとか、馬券を買へとかいふんぢやあないんだ。人間の免れない不幸に對して、家族の爲めに準備させようといふんだ。何が羞しいんだい。」
並河は、環がいつも高く評價してゐるほこりを面憎く思つてゐた。舊式な囚はれた思想と形式から脫しないで、自分ばかり優秀な人間だと考へてゐるのが、いやだつた。自分が何時迄浮上らないで、やうやく此の世の中の複雜な持味に心が浸潤されて來たたけ、野中の樫の木の如くたつた一本聳えた心持でゐる妻の愚かさが馬鹿々々しかつた。
「あたしは何もいひません。たゞあたしの、御友達のところにいらつしやる事だけはやめて下さい。」
同じ言葉を繰返すのだが、語氣(ごき)は次第に強くなつた。つとめて平靜を裝ひながら、顏色も蒼ざめて、きつく結んだ口尻が痙攣してゐた。
春代が、同級會を催す相談を持つて來た。誰とでも深入りしないかはりに疎遠にもならない春代は、同級中一番多く昔の友達を失はなかつた。呑氣な性質と、比較的に閑(ひま)なので、誰彼となく手紙を出したり、たづねたりするのであつた。同級會を發起(ほつき)したのも勿論春代だつた。

「會場は新子さんの御うちを拜借する事にして、會費丈は壹圓でも五拾錢でも集め度いと思つたのですけれど、それもいらないとおつしやるの。此の次から兎に角、今度丈はさうして下さいつて、新子さんむきになつて主張なさるのよ。まあいゝや、あちらはお金持なんだからと思つてね……」

些かの拘りも無く、面白さうに笑つて話した。同級生のうち、現在東京にゐるのは幾人で、それは殘らず出席させて見せるといふやうな事を、春代は一人で樂しんでゐた。

環は春代の歸つた後迄不愉快だつた。同級會ならば同級會らしく、相當の會費をとつて、適當の場所を借りてするがいゝ、場所も飲食物の代迄も同級生中の金持だといふ理由で、新子に出して貰ふといふのは、自分達を奴隷の位置に置くものだ、何といふ不見識な事だらう、あく迄も罵つて、その催しを拒否してやり度かつた。その忿懣は並河にも訴へて見た。共々におちめの幾年を過ごした夫なのに、並河はかへつて環のかたくなを笑つた。

「いゝぢやあないか、いゝ場所を持つてゐる人がそれを提供しようといふのだもの。それに茶話會のお茶と菓子位どうだつていゝやね。負擔し度いといふなら負擔させて、何もこだはる程の事は無いぢやあないか。」

そんな事にこだはるなといふ夫の言葉をきくと、些細な事に苛立つた自分のはしたなさはわかつたが、同時に並河に自らを高しとする心持のちつとも無いのをなさけなくも思つた。

同級會なんかに出てやるのよしませうと、肚の中で意地の惡い事を考へてもみた。その日になつて病氣だといつて斷らうとも思つた。けれども、さうするのが敵に後を見せる卑怯と同じだと思ふと、何ものをも怖れない自分であり度かつた。人々にまじつておちつきを保ち、いかに貧しく暮らしてゐても、人としての力は強いといふ印象を殘し度かつた。

會の當日は、春代が迎ひに來た。ふだん着の儘といふ申合せであるが、そのふだん着にさへ流行のある事はどうにも爲方が無かつた。久しく人を訪問した事も無く、化粧らしい眞似もした事は無いのだが、流石に薄く刷毛で顏をはいた。

新子の家の門をはひる時、環は不意と、若しも自分があの時承諾してゐたら、今は此の家に同級會を催す女主人公だつたのだと思つた。直ぐに、さういふ事を考へた自分を咎めた。春代と並んで玄關に立つても、心は進んでゐなかつた。あれ程仲よくしてゐた新子なのに、自分の方から強ひて避けてしまつたのだ。さういふ弱みに對して、ひけめを見せずに應對しようと努める心持のある丈、自分の姿態に無理のある事を感じた。

應接間には先着の人とむかひあつて新子がゐた。

「まあ環さん、よくいらつしやつて下さいました。」

椅子から立上ると、いそいそ迎へた。何よりも先に環のうけた印象は、新子が妊娠してゐる事だつた。年齢には若過ぎる被布の下に、それを認める事が出來た。

環は、かたくなな自分の態度を反省しながら椅子にかけた。椅子を選ぶにも、隅つこに行くのは卑屈であるといふやうな心持が働いた。そして、誰とも昔の親しさを失はないで談笑してゐる春代のおひとよしを羨しく思つた。

段々人が集まつた。主人の新子を加へて十二人を數へた。みんな、學校を出て以來、一度も顔を合せた事の無い人だつた。

「大河内さんはちつとも御變りになりませんねえ。」

と生家の名前を呼んで環に聲をかけるものもあつた。誰も變らない、誰はいつも若いと、斯ういふ會合におきまりの會話が入りまじつた。環には、みんなが自分を變らないといふのが嘘としか考へられなかつた。誰よりも自分こそ年をとつた。年齢からいへば未だ人生のなかばにしかならないのだが、既に自分は下り坂だといふ氣持の衰へを消す事が出來なかつた。みんな當世風の

髮を結つてゐるのに、自分丈が、一昔前のかみかたちをしてゐる事も、はつきりと此の氣持を助けた。それに比べて、新子の若々しさはどうだらう――環は、自分などは氣はづかしくて到底身につけられない柄の衣類を着てゐるのをとかめてやり度い氣がした。

いろいろ昔話が出た。最初は、學校時代のクヰンだつた環にみんなが話しかけたが、次第に今日の主人の新子の方へ中心が移つて行つた。人馴れた新子の態度に、環は及び難く思つた。

小間使が來て何かさゝやくと、新子はあわてゝ出て行つたが、直ぐに老刀自の手を引いてあらはれた。母校の校主だつた。

「先生。」

みんなが驚きの聲を發した。

「みなさんに申上げずに、こつそり先生に御出でを願ひましたの。」

勝ちほこつた色を見せて、新子は自分と同じ長椅子に老刀自をかけさせた。

「おゝ、大河内さんかいな。」

上方訛のある甲高い聲で、校主は環の姿をじろじろ眺めた。七十を夙に越したといふのに、眼鏡もかけないのが自慢だつた。

「あんた、まあおかけ。あんたにはとんと御目にかゝらなんだが、おたつしやで結構々々。」
さういひながら席をずつて、環の爲めに座をあけた。
「先生こそいつも御丈夫でいらつしやいますねえ。」
環はなつかしさに、一寸子供つぽい心持になつて寄添つた。
「おかげでなあ、何のわづらひも知りませんわ。學校の方も盛大でなあ、校舍もえらう立派になりましたよ。それそれ、校舍といへば、こちらの御主人の御寄附で、又建增が出來る事にもなつて居ます……」
一座に聞えるやうに云つて、老刀自は新子の方にむかつて一寸頭を下げた。
飲食のものが運ばれて、卓子の上が賑かになつた。
「みなさんが立派におくらしで何よりも嬉しい。」
老刀自は心から自分の生涯の成功を祝するやうに、幾度も感慨の言葉を繰返した。
「うちも昨年は曾孫が生れてなあ。それはそれは賑かになりましたが、みなさん御子達は。」
いひながら一巡顏を見廻した。
「それでは順々に子供の數を申上げる事に致しませう。」

世話役の春代が、校主の質問をひきとつて、
「どなたか、一人も御子さんの無い方は御手を御あげ下さい。」
半音階高い聲を張つた。片隅の一人が羞しさうに手をあげた。
「あら、久保さんは御一人もおありにならないんですか。」
「はあ、意氣地が御座いませんの。」
その一人はすつかり顏を染めてうつむいてしまつた。
「次は一人の方。」
いひながら、春代は自分が先に手をあげた。
「まあ、あなたもお一人つきり。」
さういつて向あつて坐つて居る一人と握手した。
「二人の方は。」
あつちこつちに手をあげるものがあつた。
「新子さんも御二人でせう。」
「いゝえ。」

新子は輕く頭をふつた。

「だつて男の御子さんと女の御子さんとお一人づゝでいらつしやるんでせう。」

「いゝえ、あたくし二人半。」

新子はさういつて兩手をあげた。一座は急に賑かさを増した。

「三人の方は。」

「えらいえらい。」

老刀自は一人、二人、三人と數へて滿足さうにうなづいた。

「四人の方は。」

誰も手をあげるものは無かつた。

「五人の方は。」

環はさつきから、自分丈が一人殘るのではないかと不安に思つてゐたが、果してそれが廻つて來た。

「環さんが一等よ。」

春代はすつかりはしやいで、友達の心持をかへりみるゆとりは無かつた。

「大河内さんは學校もよう出來たが、御子達の方も優等や。」
老刀自は氣輕な諧謔の意味で云つてみんなを笑はせた。
環は笑へなかつた。顔面の筋肉がこはばつて自由にならなかつた。
お茶の後で、庭へ出る事になつた。西洋風の廣い芝生の端に四阿（あづまや）があつた。十月の末の靜かな空がくつきりと晴れて、崖の下の木立の中から小鳥の聲が鋭く聞えて來た。
新子の二人の子供が、めいめい女中が附添つて出て來た。客馴れてゐて、おめずおくせず大人と應對してゐるのが、小憎らしい程可愛らしかつた。環は我家の狹い室の中では遊び切れないで、自分の大嫌ひな往來に出て行く我が子の姿を想つて、一層我が子がいとしかつた。
曾て、殆んど自分とは、あらゆる能力に於て比べものにならなかつた同級生から、敬愛された自分の姿は何處にも見出す事が出來なかつた。自分の腰巾着（こしぎんちやく）のやうにくつついて居た新子が、今では一番すこやかに發達した人のやうだつた。みんなから尊敬されてゐるのが無理でなく思はれた。かういふけぢめのついたのも、たゞ結婚した相手によるのかと考へると寂しかつた。金持の馬鹿息子、道樂息子と見くびつてゐた人が、何時の間にか實業界の大立ものとして、地位と金力ばかりで無く、さまざまの難局に當つて手腕を振（ふる）つてゐるのも環は知つてゐた。親讓りの運丈で

持上げられてゐるものとばかりは云へない氣がした。

「ほんとに女の一生程つまらないものはない。」

輕い眩暈(めまひ)を感じた。高い空の下に、さういふはかない女の姿が無數にあつた。

「環さん。」

、後に來て肩に手を置いたのは新子だつた。外(ほか)には誰もゐなかつた。

「昨日ね、御宅の御主人が御出でになつたのよ。」

環はびつくりして立上つた。

「只今保險會社に勤めていらつしやるんですつてね。宅にも是非契約して貰ひ度いつておつしやつてね……」

環は耳の中から熱つぽくなつて、足で立つてゐるといふ意識が薄くなつて行つた。

もう一度家の中でお茶が出たが、環は一刻も早く辭去し度かつた。たゞ、老刀自より先に歸るのが禮を失するやうな心とがめがした。

「今日はどうぞ御ゆつくり遊ばして下さいまし。主人も、みなさまの御ゆるしが出たら、御挨拶に丈でも出度いと申して居りましたから、早目に歸宅する事と思ひます。」

新子は心から今日の集りを喜んで、何時迄も引き止め度がつてゐた。幾月になるのか、大きいおなかをしてゐても、それも樂しみのひとつとしか見えなかつた。大きなおなかを抱へて錢湯にも行かなければならず、市場にも出かけなければならない自分達とは違ふ、一人生れると忽ち家計の苦しさを增すのとは違ふのだと、環は意地の惡い事迄考へた。我家の景色がはつきりと目に見えて來た。子供達は學校から歸つて復習も濟んだであらう、夫も間も無く歸るであらう……

「あたし、お先に失禮していゝでせう。」

何の耐性も無く、環は春代の耳に囁いた。

「あら、まだ早いぢやないの。歸る時も御一緒に行きませうよ。」

大勢の集りの好きな春代は、一寸いぶかしさうに環を見た。

「でも、うちは女中もゐませんから。」

「環さん、まだおよろしいぢやありませんか。」

素早く樣子をけどつて、新子が立つて來た。

「子供達も待つてゐますし、あたくしが居りませんと御夕飯の支度も出來ませんですから。」

それは事實には違ひ無いのだが、何となく自嘲の響のある事を、環自身で氣附いた。

「では御免かうむります。」

老刀自にも、みんなにも、叮嚀に頭をさげて、一人扉の外に出た。

「環さん。」

うしろから新子が來て、玄關迄見送つた。

「ちつと御遊びに御出で下さいましな。」

二人きりで近々と顔を見あふと、むかし姉妹のやうに親しくした頃のなごやかな友情が目を霞ませた。環はそれを振拂ふやうに、他人行儀な挨拶をして別れた。

門を出る迄、新子が自分を見送つてゐるのだと背中に感じながら、環は決して振りかへらなかつた。

往來に出ると、ほつとした。とたんに、眞一文字に來た自動車が、大きい曲線を描いて門内にはひつた。車中の人は主人に違ひ無かつた。環は自分を認められたときめて赤面した。

「女の一生程つまらないものはない。」

といふ考が、又してもしつつこく浮んで來た。

我家の格子をあけると、五人の子供が、みんなあがり口に出迎へた。夕飯には何か特別に御馳走しなければ濟まない氣がした。

「みんな勉強に濟みましたか。」

「濟んだ。」

「お父樣は。」

「まだ。」

ちひさい子供が取り繕つて答へた。

子供達の部屋を通ると、壁にかけてある夫の優等卒業證書の額と並んで、子供達の圖畫や習字が貼りつけてあつた。環は歸つて來たら詰責してやらうと思ふ夫よりも、子供に對する情あいの方に心をひかれた。

「僕達ね、今日展覽會したんですよ。」

「そりやあ面白かつたのね。」

環は子供の愛で涙ぐましくなつた。

「みんなよく勉強してね、えらくなるんですよ。」

胸がいつぱいになつて、一番ちひさい子供を抱上げると、強く強く頬ずりした。（大正十五年十月二十五日）

# 後記

本卷所收の小説十二篇は、大正十二年一月以降大正十五年十二月までに發表された作品で、作者三十七歳より四十歳に至る、四箇年間の業績に屬する。島崎藤村氏が「現代サラリイ・マンの活寫に至つては、もとより君の獨擅場で、同情と理解とに富むその筆致は長く後世まで殘るであらう」と云はれた、その勤人ものを以て殆んど全部を占めてゐる點、全集中特異の一卷を成すものである。

「勤人」――「三田文學」の大正十二年一、二、三、四、五、六、七、八月號及び翌十三年一、三、四月號と、十一回に亙つて連載。その「十三」は十二年九月號一度印刷に附されたが、雜誌は大震災のため製本中燒亡し、更に十、十一、十二月と休刊したので、四月後稿を續けた「十四」と共に、再び翌新年號に發表された。猶精勵な作者にして二月號に休載を見たのは、締切間際に夫人が病氣入院されたためである。

本全集はプラトン社刊の單行本「勤人」(大正十三年九月)を底本となし、所載雜誌及び家藏の「十一」以下の原稿に據つて校訂を行つた。

「晩年」――大正十三年五月號「女性」に發表。
「罹災者」――大正十三年七月號「新潮」に發表。
「女事務員」――大正十三年十月號「女性」に發表。
「兇刃」――大正十四年一月號「女性」に發表。
「鳩」――大正十四年五月、「新小說」臨時增刊「天才泉鏡花」に發表。
「素人小說家の經驗」――大正十四年八月號「新潮」に發表。
「果樹」――大正十四年十二月號「中央公論」に發表。
「命の親」――大正十五年四月號「三田文學」に發表。「三田文學」は前年三月號を以て休刊されたが、名實ともに作者を主幹として復活され、これは新しき第一卷第一號であつた。
「花束」――大正十五年四月號「中央公論」に發表。この時女主人公の名は珠枝となつてゐる。
以上九篇を收めて刊行した、改造社版「果樹」(昭和四年五月)を底本とし、それぞれの掲載誌を原據として校訂に當つた。
「十年」――大正十五年六月號「三田文學」に發表。この號にはすでに戲曲「武士と町人と狼」(第八卷所載)

を寄せたにも拘らず、豫定原稿の破約に遭つたために、主幹たる作者は更に幾晩かの徹宵を續けてこの作を成した。

「級友會」――大正十五年十二月號「三田文學」に發表。

右の二作は大岡山書店版「月光集」（昭和四年十一月）所收のものを底本に、掲載誌を原據として採つて校訂した。

それらの校訂に當つてゐるうちに、單行本ことに「果樹」に於て、作者の慣用を無視した指字假名遣の訂正の夥しきを發見した。そこで出來るだけ原據を採り、ルビに至つては雜誌刊本いづれの例をも追はず、所信に從つて施したものである。

由來送り假名の少い文章を書いた作者も、漸くルビなしで讀み易からしめんとする意向が見られるが、校訂に際しては敢て全卷を統一しようとはしなかつた。編纂規約に從つて、作品個々に就いてのみ之を試み、用法の多いものを採つた。それが年代の下るにつれて、送り假名の多くなる結果を來してゐる。

最後にこの卷の校訂校合には、平松幹夫の有力な援助を得たことを附記する。（水木京太）

昭和十六年一月十五日印刷
昭和十六年一月二十日發行

水上瀧太郎全集　五卷

著者　阿部章藏
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄
東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎

發行所　岩波書店
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

精興社印刷　長澤製本



